ちくま学芸文庫

原典訳 マハーバーラタ 3

第3巻(1-178章)

上村勝彦 訳

筑摩書房

目次

原典訳

マハーバーラタ3

[家系図]

太陽神—タパティー
バラターサンヴァラナ
クル
プラティーパ
スバラ
ガンガー女神
シャンタヌ
サテイヤヴァティー
バラーシャラ
ビーシュマ
チトラーンガダ
ヴィチトラヴィーリヤ
アンバー
アンビカー
アンバーリカー
ヴィヤーサ
ドリタラーシトラ
マードリー
パーンドゥ
ヴィドゥラ
ヤドゥ—ヴリシュニ……シューラ
クンティー
ヴァスデーヴァ
ドルパダ
クリピー
ドローナ
太陽神
ガーンダーリー
シャクニ
アシュヴァッターマン
カルナ
ドゥルヨーダナ
ドゥフシャーサナ
（百王子）
ヴィカルナ
ナクラ
サハデーヴァ
ユディシティラ
ビーマセーナ
アルジュナ
（マツヤ国王）
ヴィラータ
スバドラー
クリシュナ
バララーマ
ドラウパディー
（クリシュナー）
ドリシタデュムナ
シカンディン
ウッタラー
アビマニユ
パリクシット—ジャナメージャヤ

パーンダヴァ　　カウラヴァ

主要登場人物

アルジュナ　パーンドゥの五王子のうちの三男。母クンティーがインドラ神より授かった息子。あらゆる武芸に秀でた勇士。妻スバドラーとの間に息子アビマニユが生まれる。

アビマニユ　アルジュナとスバドラーの息子。

アンバー　カーシ国王の長女。アンビカーとアンバーリカーの姉。ビーシュマに復讐を誓い、後にシカンディンという男性になる。

アンバーリカー　カーシ国王の三女。ヴィチトラヴィーリヤの妻。パーンドゥの母。

アンビカー　カーシ国王の次女。ヴィチトラヴィーリヤの妻。ドリタラーシトラの母。

ヴァイシャンパーヤナ　聖仙。ヴィヤーサの弟子。蛇の供犠祭を催すジャナメージャヤ王の前で、ヴィヤーサから聞いた『マハーバーラタ』を吟誦する。

ヴァスデーヴァ　ヤドゥ族の長シューラの息子。クンティーの兄。バララーマ、クリシュナ、スバドラーの父。

ヴァースデーヴァ→クリシュナ

ヴィチトラヴィーリヤ　シャンタヌとサティヤヴァティーの次男。カーシ国王の娘アンビカーとアンバーリカーを妃に迎える。

ヴィドゥラ　ヴィヤーサとアンバーリカーの召使女の息子。ドリタラーシトラとパーンドゥの異母弟。

ヴィヤーサ（クリシュナ・ドゥヴァイパーヤナ）　聖仙。『マハーバーラタ』の作者。サティヤヴァティーと聖仙パラーシャラとの間に生まれる。ドリタラーシトラ、パーンドゥ、ヴィドゥラの実父。

ウグラシュラヴァス　吟誦詩人。ローマハルシャナの息子。ヴァイシャンパーヤナが語った『マハーバーラタ』をナイミシャの森で聖仙たちに語る。

カルナ　クンティーが太陽神より授かった息子。生まれつき甲冑と耳環をつけた勇士。

ガンガー　ガンジス川の女神。シャンタヌ王との間に息子ビーシュマを産む。

ガーンダーリー　ガーンダーラ国王スバラの娘。ドリタラーシトラの妻。百王子の母。

クリシュナ　ヤドゥ族の長ヴァスデーヴァの息子。バララーマの弟。ヴィシュヌ神の化身とみなされる。

クンティー（プリター）　ヤドゥ族の長シューラの娘。太陽神よりカルナを授かる。パーンドゥの妻。ユディシティラ、アルジュナ、ビーマの母。

サティヤヴァティー　漁師の長の娘。聖仙パラーシャラとの間にヴィヤーサをもうける。シャンタヌの妻となり、チトラーンガダ、ヴィチトラヴィーリヤを産む。

サハデーヴァ　パーンドゥの五王子のうちの五男。マードリーの息子。ナクラとは双子の兄弟。

サーティヤキ　ヴリシュニ族の勇士。ユユダーナとも呼ばれる。シニの孫。

サンジャヤ　ドリタラーシトラの吟誦者。『マハーバーラタ』の戦争の語り手。

シカンディン　ドルパダの次男。アンバーの生まれ変わり。

シャウナカ　聖仙。十二年におよぶ祭祀を行うナイミシャの森の祭場で、様々な神聖な物

語をウグラシュラヴァスから聞く。

シャクニ　ガンダーラ国王スバラの長男。ドゥルヨーダナ兄弟の叔父。

ジャナメージャヤ　パーンダヴァ族の後裔。パリクシットの息子。ヴィヤーサの弟子ヴァイシャンパーヤナの物語る『マハーバーラタ』の聞き手。

シャンタヌ　クル族の王プラティーパの息子。ガンガー女神との間に息子ビーシュマを、サティヤヴァティーとの間にチトラーンガダとヴィチトラヴィーリヤをもうける。

スバドラー　ヤドゥ族の長ヴァスデーヴァの娘。バララーマとクリシュナの妹。夫アルジュナとの間にアビマニユをもうける。

チトラーンガダ　シャンタヌとサティヤヴァティーの長男。

ドゥフシャーサナ　ドリタラーシトラの次男。

ドゥルヨーダナ　ドリタラーシトラの長男。邪悪な性格で、パーンダヴァ兄弟を苦しめる。

ドラウパディー（クリシュナー）　パーンチャーラ国王の娘。パーンドゥの五王子の共通の妻。

ドリシタデュムナ　ドルパダの長男。

ドリタラーシトラ　ヴィヤーサとアンビカーの盲目の息子。ガーンダーラ国王の娘ガーンダーリーを妃とする。百王子の父。

ドルパダ　パーンチャーラ国王プリシャタの息子。祭火よりドラウパディー、ドリシタデュムナ、シカンディンの三人の子を授かる。

ドローナ　聖仙バラドゥヴァージャの息子。クリピーを妻とする。アシュヴァッターマンの父。パーンドゥの五王子とドリタラーシトラの百王子に武術を教授する。

ナクラ　パーンドゥの五王子のうちの四男。マードリーの息子。サハデーヴァとは双子の兄弟。

パラーシャラ　聖仙。ヴィヤーサの父。

バララーマ　ヴァスデーヴァの長男。クリシュナの兄。

パリクシット　アビマニユとウッタラーの息子。ジャナメージャヤの父。

パーンドゥ　ヴィヤーサとアンバーリカーの息子。ドリタラーシトラの異母弟。五王子の父。

ビーシュマ（デーヴァヴラタ）　シャンタヌ王とガンガー女神の息子。パーンドゥとドリタラーシトラの伯父。

ビーマ（ビーマセーナ）　パーンドゥの五王子のうちの次男。クンティーが風神より授かった息子。

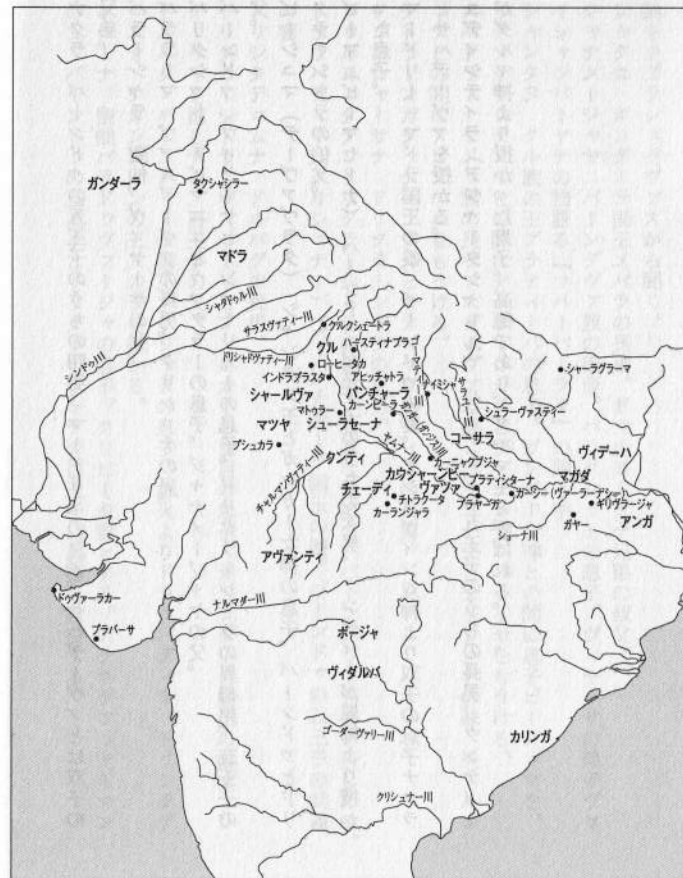
マードリー　マドラ国王の娘。パーンドゥの妻。アシュヴィン双神より双子の息子ナクラとサハデーヴァを授かる。

ユディシティラ（アジャータシャトル）　パーンドゥの五王子のうちの長男。クンティーがダルマ神より授かった息子。高徳であり、ダルマ王と呼ばれる。

第3巻　森林の巻（ヴァナ・パルヴァン）

第一章―第百七十八章

マハーバーラタ関連地図

(29) 森林の教え（第一章―第十一章）

シャウナカの教え

ジャナメージャヤは言った。

「最高のバラモンよ、パーンダヴァたちは、このように邪悪なドリタラーシトラの息子たちとその一味にいかさま賭博で敗れて怒った。(一)私の先祖であるクルの英雄(パーンダヴァ)たちは、この上ない敵意を生み出した徒党によって暴言を浴びせられてから、その後どのように行動したか。(二)インドラのような威光をそなえたパーンダヴァたちは、突然に権力の座からすべり落ちて苦しんで、どのように森で暮らしたのか。(三)また、彼らが最高の災いに陥った時、誰が彼らに従ったのか。そして、偉大な者たちは、何を食べ、どのように生活し、どこに住んだのか。(四)また、その偉大な勇士たちは、どのようにして森で十二年間を過ごしたか。(五)そして、すべての女性の中で最高である、夫に忠実な王女(ドラウパディー)、栄光に満ち常に真実を述べる王女は、苦労に慣れていないのに、どのようにして恐ろしい森の生活に耐えたのか。(六)苦行者よ、これらすべてのことを、私に詳細に語ってくれ。バラモンよ、武勲と威光に満ちた彼らの行動をあなたが語るのを聞きたい。私はこの上なく興味があるのだ。(七)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

パーンダヴァたちは、このように邪悪なドリタラーシトラの息子たちとその一味にいかさま賭博で敗れて怒り、象の都(ハースティナプラ)から立ち去った。(八)彼らは武器を持ち、クリシュナー(ドラウパディー)を連れ、ヴァルダマーナ門から出て、北方へ向かった。(九)インドラセーナなどの計十四名(または十五名)の臣下が、みな妻を連れ、戦車に乗って、速やかに彼らの後に従った。(一〇)市民たちは彼らが出発することを知って、悲嘆に暮れ、何度もビーシュマとヴィドゥラとドローナとクリパを非難して集まり、恐れることもなくお互いに言い合った。(一一)

「サウバラ(シャクニ)やカルナやドゥフシャーサナに守られた邪悪なドゥルヨーダナが王国を求める時は、このすべての一族も我々も我々の家も存立しない。(一二)あの悪者に助けられた邪悪な男が王国を享受する時、一族も存立せず、正しい慣習もなくなり、法(ダルマ)も実利(アルタ)もなくなれば、どこに幸せがあろうか。(一三)ドゥルヨーダナは目上(グル)を憎み、正しい慣習と親しい人々を捨て、物欲があり、高慢で、卑しく、その性冷酷である。(一四)ドゥルヨーダナが王である時、この全地上は存立しない。我々はみな、パーンダヴァたちの行くところに行った方がよい。(一五)彼らは慈悲深く、偉大で、感官と敵を克服し、謙虚であり、名声があり、法と慣習に通達している。(一六)」

彼らはこのように言って、こぞってパーンダヴァたちの後に従った。彼らはみな合掌して、クンティーとマードリーの息子たちに告げた。(一七)

「あなた方に幸あれ。あなた方は不幸な我々を捨ててどこへ行かれるのですか。我々もあなた方の行かれるところにお伴します。(一八)あなた方が冷酷な敵どもに、法にもとるやり方

で敗れたと聞いて、我々一同はひどく悲しんでいます。今、我々を捨てることはよろしくありません。(一九)我々は献身的にあなた方を愛し、親しく、常に好ましいこと、有益なことに専念しているのですから(異本に従う)。悪しき王に支配される王国において、我々がみな滅びることのないように……。(二〇)(二一―二九略)あなた方には諸々の美点が集合して、あるいは別個に存在します。我々は至福を求め、徳高い人々の間に住むことを望みます。(三〇)」

ユディシティラは言った。

「我々は幸せである。バラモンをはじめとする民が、愛情と同情に満ちて、ありもしない美点をあげてくれるのだから。(三一)そこで私は、弟たちとともに、あなた方にすべてを告げる。我々に対する愛情と同情から、誤って行動しないようにしてくれ。(三二)祖父のビーシュマや王やヴィドゥラや私の母や私の親しい人々は、ほとんどこの象の都にいる。(三三)我々によかれと願うなら、あなた方はみなで団結して、悲嘆に暮れる彼らを努力して守ってあげてくれ。(三四)引き返しなさい。あなた方は遠くまで来てしまった。あなた方と再会することを誓う。私は親族をあなた方に託する。彼らのことを愛情をもって考えてくれ。(三五)というのは、このことは私の心に存する最高の義務である。そうすることにより、私は完全に満足し、私に対して好意を示したことになる。(三六)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ダルマ王(ユディシティラ)にこのように説諭された民たちは悲嘆に暮れて、「ああ、王よ」と恐ろしい嘆声をあげた。(三七)彼らはユディシティラの美質を思い出して、悲嘆に暮れ、この上なく苦しんだが、やがてパーンダヴァたちに別れを告げ、嫌々ながら引き返して行った。(三八)

市民たちが引き返した時、パーンダヴァたちは車に乗り、ガンガー(ガンジス)河岸のプラマーナと呼ばれるバニヤンの大樹の方へ進んで行った。(三九)パーンダヴァの勇士たちはその日が終わるまでにそのバニヤンに着き、清浄な水を浴び、その夜を過ごした。彼らは苦悩でやつれ、水だけを飲んでその夜を送った。(四〇)

何人かのバラモンたちが、弟子と縁者を連れ、愛情から彼らに従って来ていた。聖火を奉じる者(家住期のバラモン)も、聖火を奉じないバラモンもいた。王は彼らヴェーダを唱える人々に取り巻かれて輝いていた。(四一)快くまた恐ろしい時刻(夕暮れ)に、彼らは赤々と火を燃やし、まずヴェーダを朗唱してから色々と会話を交わした。(四二)最上のバラモンたちは、ハンサ鳥(鵞鳥)のような甘い声で、クルの長である王を慰めながらその夜を明かした。(四三)

(第一章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

夜が明けた時、行乞で生活するバラモンたちは、森へ出発しようとする汚れなき行為の勇士たちの前に立った。クンティーの息子ユディシティラ王は彼らに告げた。(一)

「我々は全財産を奪われ、王国を奪われ、富貴を奪われ、苦しみ、森へ行って木の実と根と肉を食べて生活する。(二) その森は危険に満ち、猛獣や蛇にあふれている。そこでは必ずやあなた方に苦難が待ち受けていると思う。(三) バラモンの苦難は、神々をも滅ぼす。どうして私を滅ぼさないだろうか。バラモンたちよ、ここから思い思いに引き返すがよい。(四)」

バラモンたちは言った。

「王よ、我々はあなたの行く道に従うべく努めます。正しい法(ダルマ)を守り、あなたを敬愛する我々を捨ててはなりませぬ。(五) 神々も信者たちに憐れみをかけます。特に、善行にいそしむバラモンたちに対しては……。(六)」

ユディシティラは言った。

「バラモンたちよ、私もまたバラモンに対して常に最高の敬愛を捧げている。しかし、私の仲間の苦難は私を滅ぼす。(七) 私の弟たちは、木の実や根や獣を食べることになろう。彼らは今、悲嘆に暮れて当惑している。(八) ドラウパディーが引きまわされたことにより、また王国を奪われたことにより苦しんでいる彼らを、今また苦しめることはできない。(九)」

バラモンたちは言った。

「王よ、我々を養う心配なら無用です。我々は自分たちで森に産するものを採りながら、お伴いたします。(一〇) 祈念することにより、祈禱により、あなたの吉祥をもたらします。私たちは快い物語により森で楽しみましょう。(一一)」

ユディシティラは言った。

「その通りである。疑う余地はない。私はバラモンたちと楽しみたいものだ。しかしこのようにひどい状態になっては、自分自身を非難するのみである。(一二) あなた方が私への愛のために不当にも苦しんで、自分で食物を集めるのをどうして見ていられよう。これもドリタラーシトラの邪悪な息子たちのせいだ。(一三)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

そのように言ってから、王は悲しんで地面に座った。その時、真我(アートマン)に関することに専念する賢者で、ヨーガ(実践)とサーンキヤ(論理)に通じた、シャウナカというバラモンが王に告げた。(一四)

「千という悲しみの原因、百という恐怖の原因が、日々、愚者に入りこむ。しかし賢者には入りこまない。(一五) あなたのような知者は、知識に反し、過失に満ち、至福を損ねる行為には走らないものである。(一六) すべての災いを滅する、天啓聖典(シュルティ)と聖伝書(スムリティ)に確定された、八支よりなる知性(三・二・七一と関係するか)と呼ばれるものが、王よ、あなたのうちに存する。(一七) 金銭的困難において、苦難において、親族の災難において、あなたのような人々は、肉体的精神的な苦しみによりうちひしがれないものである。(一八) 聞きなさい。かつて偉大なジャナカが歌った、自己を確固たるものにする詩を申しあげるから。(一九)

『この世界は、心と身体より生ずる苦しみによって苦しんでいる。その二種の苦を滅する方法を、詳細にかつ簡潔に説くから聞きなさい。(二〇) 病気、好ましくないものに接すること、

疲労、好ましいものと別れること、以上の四種の原因により、身体の苦しみが生ずる。（二一）精神的肉体的な悩みを滅することは、速やかな対処により、常にそれを考えないようにすることにより、以上二種の方法によりもたらされる。（二二）まことに、有能な医師は、まず第一に優しい会話により、また好むものを与えることにより、人々の心の苦しみを鎮める。（二三）というのは、心の苦しみにより身体も苦しむのである。熱した鉄の球により瓶の中の水が熱せられるように。（二四）それ故、水により火を鎮めるように、知識によって心の苦しみを鎮めるべきである。心の苦しみが鎮まった時、身体の苦しみも鎮まる。（二五）しかるに、愛着(スネーハ)が心の苦しみの根であると知られる。人々は愛着から執着し、苦しみと結びつく。（二六）諸々の苦は愛着に基づく。諸々の恐れは愛着より生ずる。悲しみと喜び、また苦労は、すべて愛着より生ずる。（二七）愛着により原因となる貪欲(ラーガ)と対象についての貪欲が生ずる（テクスト疑問）。それらは両方とも災いをもたらすが、前者の方が重大であるとされる。（二八）樹の穴(うろ)の火が、根にいたるまで残りなく樹木を燃やすように、わずかな貪欲という過失でも、法(ダルマ)を求める者を滅ぼす。（二九）対象から離れても捨離者(ティヤーギン)とはいえない。接することによりその過失を見て欲を離れ、憎悪を捨て、所有を離れた人こそ、捨離者である。（三〇）それ故、自己の味方から、友から、蓄財から、知識によって自己の身体より生じた愛着を遠ざけるべきである。（三一）知識をそなえ、聖典を知り、自己を制御した優れた人に、愛着がつきまとうことはない。蓮の葉に水がつかぬように。（三二）貪欲に支配された人は、欲望(カーマ)に引きつけられる。彼に願望が生じ、それから渇愛(トリシュナー)が生ずる。（三三）まことに渇愛はあらゆるもののうちで最悪

であり、常に人間をかき乱し、非法(アダルマ)に満ち、恐ろしく、罪悪と結びつく。（三四）それは愚者にとっては捨てられがたい。人が老いてもそれは老いる（消滅する）ことはない。それは生命を滅ぼす病である。その渇愛を捨てる者には幸福がある。（三五）この渇愛は始まりなく終わりなく、人間の心に存し、原因のない火のように、生ずるや人を滅ぼす。（三六）薪が自分から生じた火によって滅びるように、自己を制御しない者は、ともに生まれた貪欲によって滅びる。（三七）

生き物が死を恐れるように、富める者は常に、王、水、火、盗賊、親族を恐れる。（三八）鳥が空中において餌を食べ、猛獣が地上において餌を食べ、魚が水中で餌を食べるように、すべてのものが富者を食う。（三九）ある人々にとっては、財物(アルタ)が不利益(アナルタ)をもたらす。物質的幸福に執着する人は幸福を見出せない。それ故、財物の獲得はすべて、心の迷いを増大させる。（四〇）貧困、尊大さと慢心、恐怖、不安。賢者たちは、これらが人間の財物より生ずる苦しみであると知っている。（四一）財物を得ることは苦である。財物を守ることは苦である。財物が減少することは苦である。失えば苦、消費すれば苦であるのに、人々は財物が原因で他者を害する。（四二）財物を捨てることは難しい。また、それを守ることも難しい。人々は苦労してそれを獲得し、それを失うことを考えない。（四三）愚者はいつも不満であり、賢者は満ち足りる。渇望が尽きることはない。満足は最高の幸福である。それ故、賢者は満足こそが財産であると見る。（四四）若さ、容色、寿命、蓄財、権力、愛しいものとの交際は無常である。賢者はそれらを切望しない。（四五）それ故、蓄えを捨てよ。それから生ずる苦しみ

に誰が耐えられよう。蓄えある者で不幸でない者は誰もいない。（四六）そこで法（ダルマ）を知る人々は財欲のない人を讃える。泥に触れないことが、泥を払うことよりも遙かに優れている。（四七）』

ユディシティラよ、このように財物に望みを抱いてはならぬ。もしあなたが法に従いたいのなら、財物を望まないようにしなさい。（四八）」

ユディシティラは言った。

「私は財物を享受したいと欲して財物を望むのではありません。バラモンよ、バラモンたちを扶養するために望むのであり、貪欲からではありません。（四九）というのは、バラモンよ、私のようなものが家住期にありながら、どうしてつき従う人々を扶養し守護しないでしょうか。（五〇）すべての生類は分かち合えと教えられています。同様に、家住期の人は、調理しない人々（苦行者、梵行者）に与えるべきです。（五一）草（座るため）、土地（休息のため）、水、親切な言葉。善き人々の家において、決してこれらのものを切らすことはありません。（五二）苦しむ人に寝床を、立って疲れた人に座席を、渇いた人に水を、飢えた人に食物を与えるべきです。（五三）訪問者に対し、親切に見て、心をこめて、親切に語るべきです。出迎えて、作法に従って敬意を表すべきです。（五四）」（五五—五九略）

シャウナカは言った。

「ああ、実に残念なことだ。この世界はあべこべである。悪人は善人が恥じることに満足する。（六〇）愚者は男根と腹のために、迷妄と貪欲に支配され、感官の対象に支配され、大食をする。（六一）目覚めかけた人も、心を奪う感官によって誘惑される。意識を失った御者が興奮した悪馬によって引きずられるように。（六二）（六三—六八略）

以上は無知の者たちの道である。知者たちの道についても私の言うことを聞きなさい。法（ダルマ）と至福に専念し、解脱（げだつ）に専念する人々の道について……。（六九）『祭式をなせ。そして捨てよ』というのがヴェーダの言葉である。それ故、すべての法を自尊心から行なうべきではない。（七〇）祭祀、ヴェーダの学習、布施、苦行、真実、忍耐、自制、無欲——以上が法の八種の道であると伝えられている。（七一）そのうち、前の四種は、祖道（ピトリヤーナ）（死後、一般の善人のたどるコース。輪廻を繰り返す）の道に属する。実行されるべきであるからそれを行なうべきであるが、自尊心から行なってはならぬ。（七二）一方、後の四は神道（デーヴァヤーナ）（ブラフマンに合一する）であって、善き人々により常に行なわれる。心清らかな人は、まさに八支の道を実践すべきである。（七三）正しい意向に結びつくこと、正しく感官を制御すること、特別の誓戒を正しく守ること、正しく目上（グル）に仕えること、正しく食事すること、正しい学習、正しく行為を捨てること、正しく心を止滅すること。輪廻を征服したいと欲する人々は、以上のようにして行動すべきである。（七四—七五）ルドラ神群、サーディヤ神群、アーディティヤ神群、ヴァス神群、アシュヴィン双神などの神々は、貪欲と憎悪から離れて、至上の力を得、ヨーガの力をそなえてこの生類を維持するのである。（七六）同様にユディシティラよ、あなたもまた完全な静寂に寄る辺を求めて、苦行により成就とヨーガの完成を探求しなさい。（七七）あなたは、父母よりなる成就（真意不明。「祖霊に対する義務の成就」か）と行為（祭式）よりなる成就を獲得した。バラモンたちを養うために、苦行により成就を探求し

なさい。(七八)というのは、成就した人々は、苦行の恩寵により、望むことを何でも行なうのである。それ故、苦行に依存して、自分の望むことを実現しなさい。(七九)」(第二章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

シャウナカにこのように告げられて、クンティーの息子ユディシティラは、司祭に近づいて、弟たちの中で言った。(一)

「これらのヴェーダに通達したバラモンたちは、出発した私につき従った。しかし私は多くの苦悩のために守護することができない。私は彼らを捨てることもできないし、布施する力もない。私はどのようにしたらよいのか。(二)聖者よ、私に教えて下さい。(三)」

法を守る人々の最上者ダウミヤは少しの間考えてから、法によって道を探して、ユディシティラに次のように告げた。(四)

「かつて生類は創造された時、ひどく飢えに苦しんだ。そこで太陽は彼らを哀れんで父親のように行動した。(五)太陽は北回帰路(太陽が北行する半年)に行き、その光線で熱の液(水)を吸い上げてから、南回帰路(南行する半年)に帰って、大地に帰入した。(六)それから、彼が田地となった時、植物の主(月)は天から熱を集め、水によって植物を生じさせた。(七)かくて大地に帰入した太陽は、月の熱を注がれ、六味を有する神聖な草として生じ、地上において生物の食物となった。(八)このように、生あるものの食物は太陽からなるのである。彼は一切の生類の父親である。それ故、彼に庇護を求めなさい。(九)清らかな生まれと行動の、偉大な王たちは、大いなる苦行を行なって臣民を救う。(一〇)ビーマ、カールタヴィーリヤ、ヴァイニヤ、ナフシャたちは、苦行とヨーガと三昧によって、人々を災禍から救出した。(一一)徳性ある人よ、あなたもまた、行為によって清浄となり、苦行を行ない、法に従ってバラモンたちを養いなさい。(一二)」

このようにダウミヤがその時にふさわしい言葉を告げると、心の清いダルマ王(ユディシティラ)は、最高の苦行を企てた。(一三)徳性ある彼は、花を供え、供養により太陽を崇拝して、ヨーガに専念し、風を食べ(断食して)、感官を制御し、ガンガー(ガンジス)の水に触れ、呼吸を整えていた。(一四)

ジャナメージャヤはたずねた。――

「クル族の雄牛ユディシティラ王は、バラモンのために、どのようにして、驚異的な力を有する太陽を満足させたのか。(一五)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

王よ、清浄になり精神を集中して注意深く聞きなさい。王中の王よ、少し時間を下さい。私はすべてを残らず語るでしょう。(一六)ダウミヤは偉大なユディシティラに、太陽の神聖なる百八の名を告げたが、叡知にあふれた人よ、それを聞きなさい。(一七)

〔一八―一二八で太陽の百八の名があげられているが、省略する〕

以上が、偉大なシャクラ（インドラ）が告げた、讃えらるべき偉大な太陽の百八の神聖な名称である。(二九)ナーラダがシャクラからそれを聞き、その後でダウミヤが聞いた。ユディシティラはダウミヤから聞き、すべての願望を得た。(三〇)

神々と祖霊の群や夜叉（ヤクシャ）に仕えられ、阿修羅（アスラ）、夜行のもの、シッダ（半神族）に崇拝され、最上の黄金や火にも似た太陽。その太陽を、あなたもまた心で唱えよ。(三一)

日の出に一心に唱える人は、息子を得、多くの財宝を得るであろう。常に前生を思い出し、記憶と最高の叡知を見出すであろう。(三二)

この最高の神の讃歌を、清らかな心で一心に唱える人は、海のよう（に大きい）悲しみという森火事から解放され、心で望むすべての願望をかなえられるであろう。(三三)

（第三章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

それから、喜んだ太陽は、その体で燃える火のように輝きつつ、ユディシティラの前に姿を現わした。(一)

「王よ、汝は望むものをすべて獲得するであろう。私は汝に十二年間、食物を授けるであろう。(二)台所で調理される、四種の食物――果実、根、肉、野菜などが、汝にとって無尽に存するであろう。そして種々の財物も汝のものになるであろう。」

そう告げて太陽は姿を消した。(三)法（ダルマ）を知るユディシティラは恩寵を受けた後で水から立ち上がり、ダウミヤの両足をつかんで（平伏し）、弟たちを抱きしめた。(四)ユディシティラ王はドラウパディーに会い、彼女の見ている前で台所に行き、食物を作り出した。(五)森でとれる四種の食物は、調理されると増大し、無尽になった。それによって彼はバラモンたちに食事をさせた。(六)バラモンたちが食べ終わった時、ユディシティラは弟たちにも食べさせてから、その後で「残食（ヴィガサ）」と呼ばれる残りを食べた。ドラウパディーはまずユディシティラに食べさせてからそのまた残りを食べた。(七)このようにして、太陽のように輝く王は、太陽から望みをかなえられて、望みのままのものをバラモンたちに与えた。(八)それから、適切な日と星宿と月相の変わり目に、彼らは司祭に先導され、儀軌と聖句を依り所として祭祀を行なった（異本に基づく）。(九)祝福の式を終えてから、パーンダヴァたちはダウミヤとともに、バラモンの集団に囲まれて、カーミヤカの森へ出発した。(一〇)

（第四章）

ヴィドゥラの忠告

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

パーンダヴァたちが森に入った時、智慧の眼を有する（盲目の）、アンビカーの息子である王（ドリタラーシトラ）は安楽に座していたが、悩んで、徳性あり思慮深いヴィドゥラに言った。(一)

「お前の叡知はブリグ族の英雄（パラシュラーマ）のそれのように清らかである。そしてお前は、最高の法（ダルマ）と微妙な法とを知っている。お前は公平であって、クル族の人々に尊敬されている。彼らと私にとって道にかなったことを告げてくれ。（二）このようになった今、ヴィドゥラよ、なすべきことを告げよ。どうしたら市民が我々を愛してくれるか。彼らが我々を根こぎにしないように。私はまた、彼らが滅亡することも望まない。（三）」

　ヴィドゥラは告げた。

「王よ、人間の三目的（法、実利（アルタ）、享楽（カーマ））は法に基づいている。そして王国は法に基づくと言われる。王よ、可能な限り法に従ってすべての息子とクンティーの息子たちとを守りなさい。（四）その法はあの集会場で、邪悪なシャクニをはじめとする者たちによって損なわれた。あなたの息子は、約束に忠実なクンティーの息子を呼んで、骰子賭博においてうち負かした。（五）王よ、あなたは悪しく導かれたが、私は善後策をわきまえている。あなたの息子が悪から解放され、この世において確固たる地位を築けますように。（六）あなたが譲渡したすべてのものを、パーンドゥの息子たちが取りもどしますように。王は自分の持物で満足し、他人のものを貪るべきでない、というのが最高の法である。（七）これがあなたの最も重要な仕事である。彼らを満足させ、シャクニを軽蔑しなさい。このように、もしあなたの息子たちが災いからまぬかれるように望むなら、急いで以上のようにしなさい。（八）しかし、このようにしないならば、王よ、クル族は必ずや滅亡する。というのは、怒ったビーマセーナやアルジュナは、戦闘において敵を全滅させるであろう。（九）彼らには、武術を修得し、ガーンディーヴァを持つ戦士アルジュナと、大力の戦士ビーマがいる。この世において彼らに征服されないものはない。（一〇）かつてあなたの息子が生まれたての頃、私はその時、あなたのためになることを申し上げた。『一族のためにならぬこの息子を捨てなさい』と。王よ、あなたはそれを実行しなかった。そして今、あなたがまた有益な言葉を行なわないのなら、後悔することになるであろう。（一一）もしあなたの息子がパーンダヴァと王国を分かち合うことを喜んで受け入れたら、あなたは喜びに結びつき苦しむことはないであろう。さもなければ、幸福のために息子を抑止しなさい。ためにならぬドゥルヨーダナを抑止して、パーンドゥの息子を王位につけなさい（異本による）。（一二）王よ、欲を離れたアジャータシャトル（ユディシティラ）が、法（ダルマ）に従ってこの地上を治めるようにしなさい。そうすれば、一切の王が平民（ヴァイシャ）のように即座に我々に奉仕するでしょう。（一三）ドゥルヨーダナとシャクニとカルナが、喜んでパーンドゥの息子たちを愛するように。ドゥフシャーサナが集会場の中で、ビーマセーナとドラウパディーに許しを請うようにして下さい。（一四）あなたはユディシティラをなだめなさい。彼に敬意を払い、王位につけなさい。あなたにたずねられて、私はどうして他のことを言うでしょうか。王よ、このようにすれば、あなたは義務を果たしたことになります。（一五）」

　ドリタラーシトラは言った。

「ヴィドゥラよ、この集会場でパーンダヴァと私についてお前が言ったことは、彼らにとっては有益であるが、私の息子たちにとっては有益でない。私の心はそれらすべてを承知するわけには行かぬ。（一六）パーンダヴァのためにそのようなことを言うとは、今、どうしてそ

んな結論を出すのか。今、お前は私に好意的ではないと思う。パーンダヴァのためにどうして息子を捨てられようか。(一七) 確かに彼らも私の息子同然である。しかしドゥルヨーダナは私の体から生まれた息子だ。他人のために自分の体を捨てるなどと、公平さを求めて誰が言うことができるか。(一八) ヴィドゥラよ、今お前が言ったことはすべて曲っている。しかし私はお前を非常に尊敬している。好きな所へ行くなりとどまるなりせよ。いくらなだめても悪い女は捨て去るものだから。(一九)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ドリタラーシトラはこのように言うと、突然立ち上がり、居間に入った。ヴィドゥラは、「そうではない」(または、「この一族は存続しない」)と言いながら、パーンダヴァのいる所へ急いで行った。(二〇) (第五章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

一方、バラタ族の雄牛パーンダヴァたちは、森での生活を求めて、従者とともにガンガー(ガンジス)の岸を離れ、クルクシェートラに行った。(一) 彼らはサラスヴァティー川とドリシャドヴァティー川とヤムナー川を訪れ、常に西方へ向かって、森から森へと進んで行った。(二) そして彼らは、サラスヴァティーの岸の、平坦な砂漠において、隠者たちに愛されたカ

ーミヤカという森を見出した。(三) 勇士たちは、多くの鳥獣のいるその森で、隠者たちに囲まれて慰められながら暮らした。(四) その時ヴィドゥラも、パーンダヴァたちに会いたいと願い、一つの車に乗り、繁栄に満ちたカーミヤカの森へ行った。(五)

ヴィドゥラは駿馬にひかれた車でその森へ行って、寂しい場所で、ドラウパディーや弟たちやバラモンたちとともに座っているダルマ王(ユディシティラ)に会った。(六) 真実を守る王は、ヴィドゥラが遠方から急いでやって来たのを見て、弟のビーマセーナに言った。

「ヴィドゥラは我々に会って何を言うのであろうか。(七) サウバラ(シャクニ)の言葉により、賭博に招待しようとして近づいて来たのではないか。卑劣なシャクニは、また賭博において我々の武器を勝ち取ろうとしているのではないか。(八) ビーマセーナよ、誰によって『来たれ』と招待されても、私はしりごみすることはできない。だが、もしもガーンディーヴァ弓の安全が疑わしくなれば、我々が王国を得るということも疑わしくなるであろう。(九)」

それからパーンドゥの息子たちはみな立ち上がり、ヴィドゥラを歓迎した。ヴィドゥラは彼らにもてなされて、適切な作法により彼らと会見した。(一〇) ヴィドゥラが休息した時、人中の雄牛たちは、ヴィドゥラに来訪の理由をたずねた。そこで彼は彼らに、ドリタラーシトラのとった行動を詳しく告げた。(一一)(一二―一七略)

ヴィドゥラは言った。

「そこで私はドリタラーシトラに捨てられ、お前に忠告するために急いでやって来たのである。あの集会場で私が言ったことをすべて、私は再び繰り返して言うから、それを心にとど

めておきなさい。(二八) 競争相手によりひどい苦しみに陥っても、忍耐して時節を待ち、わずかな火を増大させるように、必ずやただ一人大地を享受することになる。(二九) ある人が仲間たちと財産を分かち合えば、仲間たちは彼の苦境においても苦しみを分かち合ってくれるであろう。これが仲間を獲得する方法である。仲間を得た時に地上を獲得すると言われる。(三〇) 無益な言葉をともなわない真実が最高である。等しい食物を仲間たちとともに食べよ。そして自分は決して彼らの先頭に抜きんでようとしてはならぬ。このように行動する王は繁栄するであろう。(三一)」

ユディシティラは答えた。

「あなたの言われた通りにします。怠ることなく最高の知性に寄る辺を求めて……。そしてまた、場所と時に応じて言われた他のことをも、すべて実行いたします。(三二)」(第六章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ヴィドゥラがパーンダヴァの隠棲所へ行った時、大知者ドリタラーシトラは悩んだ。(一) 彼は集会場の入口に行き、ヴィドゥラのことを思い出して取り乱し、諸王の見ている前で気を失って倒れた。(二) やがて王は意識を取りもどして地面から立ち上がり、側にひかえているサンジャヤに言った。(三)

「私の兄弟であり友でもある彼は、法(ダルマ)の化身のようである。彼のことを思うと私の心は張り裂けそうだ。(四) あの法を知る私の兄弟を速やかに連れて来てくれ。」

王はこのように言って悲嘆に暮れた。(五) 王はヴィドゥラを思ってやつれ、後悔にさいなまれ、兄弟に対する愛情から、サンジャヤに告げた。(六)

「サンジャヤよ、行け。ヴィドゥラの消息を調べてくれ。私が邪にも怒って追放した彼が生きているかどうか。(七) 無量の知性を有する賢者である私の弟は、いまだかつて、ごくわずかでも不快なことをしたことがなかった。(八) その最高の知性を有する男が、どうして私から不快な目に逢わされたのか。賢者が生命を捨てるようなことがあってはならぬ。サンジャヤよ、行って彼を連れて来てくれ。(九)」

サンジャヤは王の言葉を聞くと承知して「かしこまりました」と言うと、カーミヤカの森に急いで行った。(一〇) 彼はまもなくパーンダヴァたちのいる森に着いて、ルル鹿の皮を着たユディシティラに会った。(一一) 彼はヴィドゥラや大勢のバラモンたちに取り巻かれ、兄弟たちに守られて、あたかも神々に守られたインドラのようであった。(一二) そこでサンジャヤは、ユディシティラに近づいて敬意を表してから、ビーマ、アルジュナ、ナクラとサハデーヴァに対し、ふさわしく挨拶した。(一三) 王は安楽に座ったサンジャヤに元気でいるかとたずねた。サンジャヤは来訪の理由を告げ、更に次のように言った。(一四)

「ヴィドゥラよ、ドリタラーシトラ王があなたのことを思っておられます。すぐに帰って王を元気づけてあげて下さい。(一五) 最高の人々、クルの王子、パーンダヴァたちにいとまご

いしてから、獅子王（ドリタラーシトラ）の命により帰られるがよい。（二六）」
親族を愛する賢者ヴィドゥラはこのように言われて、ユディシティラにいとまごいして、再び象の都（ハースティナプラ）に帰った。（二七）栄光あるドリタラーシトラは賢者ヴィドゥラに言った。
「法（ダルマ）を知る者よ、よくぞ帰ってくれた。非の打ち所がない者よ、よくぞ私を思い出してくれた。（二八）夜も昼もお前のために眠れないで、自分の体を不思議な（注釈「輝きの失せた」）ものと見ていたところだ。（二九）」
彼はヴィドゥラの体を抱き、その頭に接吻して、「私が怒って言ったことを許してくれ」と言った。（三〇）
ヴィドゥラは答えた。
「王よ、私は許します。あなたは我々の最高の目上です。私はあなたに会いたい一心で、すぐにもどって来ました。（三一）人中の虎よ、徳性ある人々は苦しむ人を急いで助けるものです。王よ、そのことについてぐずぐずしてはなりません。（三二）私にとって、あなたの息子たちはパーンドゥの息子たちと同じように可愛いのです。しかし今、パーンダヴァたちは苦しんでいますから、私は彼らをひいきするのです。（三三）」
ヴァイシャンパーヤナは語った。——
ヴィドゥラとドリタラーシトラの、輝かしい兄弟は、お互いに和解して、最高に幸せであった。（三四）

（第七章）

動揺するドゥルヨーダナ

ヴァイシャンパーヤナは語った。——
ドリタラーシトラの息子の邪悪な王子（ドゥルヨーダナ）は、ヴィドゥラが帰り、王になだめられたことを聞いて苦しんだ。（一）王子はシャクニとカルナとドゥフシャーサナを呼び、無知より生じた闇に入って言った。（二）
「ドリタラーシトラに敬愛されている顧問のヴィドゥラがもどってきた。彼は賢者であり、パーンドゥの息子たちの友であり、彼らに有益なことに専心している。（三）ヴィドゥラがまた王を説得して、パーンダヴァを呼びもどそうという気にさせないうちに、私に有利なように図ってくれ。（四）もしパーンダヴァたちが何とかしてここにもどってくるのを見たら、私は再びやつれ、生気が失せ、一文無しになるであろう（テクスト疑問）。（五）毒を飲むか、首を吊るか、武器を用いて死ぬか、火に入るであろう。彼らが再び繁栄するのを見るのは我慢できないから。（六）」
シャクニは言った。
「王子よ、どうして子供じみた考えを起こすのか。彼らは約定を取り決めて去ったのであるから、そのようにはならないであろう。（七）パーンダヴァたちはみな約束を守る。わが子よ、彼らは決してお前の父の言葉を受けいれないであろう。（八）またもし彼らが受けいれて、約

定に背いて再び都にもどったら、我々はまた次のように行動すべきである。（九）我々はみな中立を保ち、王（ドリタラーシトラ）の望みに従う〔ふりをして〕、密かにパーンダヴァたちの大きな弱点を見つけよう。（一〇）」

ドゥフシャーサナは言った。

「偉大な賢者である叔父上、その通りです。いつもながらあなたの分別あるお言葉には感心いたします。（一一）」

カルナは言った。

「ドゥルヨーダナよ、我々はみなあなたの希望を考慮する。王子よ、我々はすべて同意見であるように見える。（一二）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

カルナがそのように告げても、ドゥルヨーダナ王子はすぐに顔を背け、心から喜ばなかった。（一三）カルナはそれを知って、美しい両眼を見開き、怒ってドゥフシャーサナとシャクニに向かい、この上なく激して立ち上がり、次のように述べた。

「諸侯、私の意見を聞いてくれ。（一四—一五）我々はみな召使のように手を合わせて王子の気に入ることをしようと望んでいる。しかし我々はみな、孜々として彼の気に入るように行なうことができない。（一六）我々は武器をとり、戦車に乗り、甲冑に身を固めて、うちそろって行こう。森に住むパーンダヴァたちを殺すために。（一七）彼らみなが静まり、行方も知れぬ

旅へ出れば（すなわち、死ねば）、ドリタラーシトラの息子たちや我々は平和になれるであろう。（一八）彼らが惨めで、悲しみに満ち、友がいない限り、彼らを滅ぼすことができるというのが私の意見だ。（一九）」

カルナの言葉を聞くと、一同は何度も敬意を表して、「その通りだ」と彼に答えた。（二〇）みなはそのように言って、猛り立ち、それぞれ戦車に乗って、決意も固く一団となって、パーンダヴァを殺すために出発した。（二一）

その時、心浄らかなクリシュナ・ドゥヴァイパーヤナ（ヴィヤーサ）は、彼らが出発したことを天眼により知り、やって来た。（二二）世界の人々に尊敬される聖者は、彼ら一同を制止して、座っている智慧の眼を有する（盲目の）王に急いで近づいて告げた。（二三）（第八章）

ヴィヤーサは告げた。

「大知者ドリタラーシトラよ、私の言葉を聞きなさい。私はすべてのクル族にとって最高に有益なことを告げる。（一）勇士よ、パーンダヴァたちが森へ行ったこと、そして彼らがドゥルヨーダナの一味によって詐術により敗れたことは、私にとって嬉しいことではない。（二）十三年が満了したら、彼らは辛苦を思い出して、怒ってクル族に毒を放つであろう。（三）そなたのあの邪悪で愚かな息子は、何故に常に怒り狂い、王国を求めてパーンダヴァたちを殺そうと望むのか。（四）どうか愚かなことは止めてもらいたい。そなたの息子たちが静まるよ

うに。もし森に住む彼らを殺そうとすれば、彼は生命を失うであろう。（五）どうか賢者ヴィドゥラやビーシュマや、私やクリパやドローナが言うように実行してもらいたい。（六）大知者である王よ、親族と戦うことは非難される。王よ、法にもとること、不名誉なことを受け入れてはならぬ。（七）そなたの息子はパーンダヴァに対してあのような意趣を抱いている。王よ、それを見過ごしておけば、大なる災いをもたらすであろう。（八）あるいは王よ、そなたの愚かな息子は森へ行き、仲間なしで一人きりで、パーンダヴァたちとともに暮らすべきである。（九）そして、もしそなたの息子が、パーンダヴァと交際して愛情を抱けば、そなたの目的は成就する。（一〇）あるいは、〔それは無理かも知れない。〕大王よ、人が生まれる時に性質もいっしょに生まれ、それは人が死ぬまで消えることはないと言われるから。（一一）ビーシュマやドローナやヴィドゥラやそなたは、この場合どのように考えるか。手遅れにならぬうちに適切なことを行なうべきである。（一二）」（第九章）

ドリタラーシトラは言った。

「尊者よ、私もあの賭博の件（テクスト疑問）を喜ばしく思わなかった。聖者よ、運命に支配されてやらされたものと思う。（一）ビーシュマもドローナもヴィドゥラも喜ばなかった。ガーンダーリーもまた、迷妄により始められた賭博を喜ばなかった。（二）しかし尊者よ、私は知っていながら、息子への愛情のために、あの思慮のないドゥルヨーダナを捨てることができない

のです。（三）」

ヴィヤーサは言った。

「ヴィチトラヴィーリヤの息子である王よ、そなたは真実を述べた。私はよく知っている。息子は最高であり、息子よりよいものはない。（四）インドラ（帝釈天）といえども涙を流すスラビ（天上の牝牛、如意牛）によって目覚めさせられた。他の豊かな財物と比べても、息子よりもよいものはないということを。（五）王よ、ここでそなたに最高に偉大な物語を語ろう。スラビとインドラとの対話を……。（六）

王よ、かつて牛たちの母スラビは天界にいて、ひどく泣いていたという。インドラは彼女を憐れんだ。（七）

インドラは言った。

『美しい牝牛よ、お前は何故泣いているのか。天に住むものたちは息災か。人間においても牛たちにおいても、このことは些細なことではなかろう。（八）』

スラビは答えた。

『神々の王よ、あなた方には何も不幸なことはありません。カウシカ（インドラ）よ、私は息子のことを悲しんで泣いているのです。（九）あの恐ろしい農夫をご覧なさい。彼は犂を引いて苦しむ私の無力な息子を鞭で打っています。（一〇）神々の王よ、ひどく疲れて殺されそうな彼を見て不憫に思い、私の心は苦しむのです。（一一）あそこには力強い一頭の牛がより大きな重荷を担っています。こちらでは、無力で生気のない、痩せて筋だらけになった息子がやっ

とのことで重荷を担っています。ヴァーサヴァ（インドラ）よ、彼のことを悲しんでいるのです。(二二) 彼は鞭で殺されそうに打たれ、何度も突かれ、しかも重荷を担うことができません。ヴァーサヴァよ、御覧なさい。(二三) そこで私は悩みひどく苦しんで泣き叫ぶのです。憐れんで、両眼から涙を流して。(二四)』

インドラはたずねた。

『美しい牝牛よ、お前の千頭もの息子が苦しんでいるのに、どうして一頭の息子が殺されそうになっただけで憐れむのか（異本による）。(二五)』

スラビは答えた。

『私の千頭の息子は、あらゆる場合、私にとって同じように可愛いのです。しかしインドラよ、惨めな息子のことをより一層不憫に思うのです。(二六)』」

ヴィヤーサは続けた。

「インドラはスラビの言葉を聞いて非常に驚いて、息子というものは生命よりも大切なものなのだなと考えた。(二七) そして聖なるインドラは、突然、その場所に大雨を降らせて、農夫の仕事を妨害した。(二八)

王よ、スラビが言ったように、そなたにとって彼らは同じように可愛いのだが、惨めな息子たちのことを、より一層不憫に思うのである。(二九) わが子よ、パーンドゥが私の息子であるように、そなたも私の息子である。聡明なヴィドゥラも同様である。私は愛情によって告げる。(三〇) 王よ、そなたの百一人の息子たちが長寿であることを。しかし、パーンドゥにも五人の息子がいて、彼らも不幸で非常に苦しんでいる。(三一) 彼らはどのようにして天寿を全うするか、どのようにして繁栄するかと、惨めなパーンダヴァたちについて私の心は苦しむのである。(三二) 王よ、もしクル族が生きながらえることを望むなら、そなたの息子のドゥルヨーダナがパーンダヴァと和解するようにしなさい。(三三)」　（第十章）

ドリタラーシトラは言った。

「聡明なる聖者よ、あなたのおっしゃる通りです。私もよくわかっています。ここにいるすべての王たちもまた……。(一) クル族の幸福についてあなたが考えられるのと全く同じことを、ヴィドゥラやビーシュマやドローナも私に言っています。(二) もし私が好意に値し、またクル族を憐れんで下さるのなら、私の邪悪な息子ドゥルヨーダナを教導して下さい。(三)」

ヴィヤーサは答えた。

「王よ、聖仙マイトレーヤが、パーンダヴァ兄弟につき従った後に、我々に会うためにここに来る。(四) 王よ、その大仙が、そなたの一族を平和にするために、そなたの息子ドゥルヨーダナに適切な教えを説くであろう。(五) 王中の王よ、彼が言うことは何でも、躊躇することなく実行せよ。もしなすべきことを行なわない時は、彼は怒ってそなたの息子を呪うであろう。(六)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

そのように告げるとヴィヤーサは立ち去った。それからマイトレーヤが現われた。王は息子たちとともに、あつく彼をもてなした。(七)接客用の品を出すなどすべての作法を行なってから、アンビカーの息子ドリタラーシトラ王は、休息した聖者の雄牛に恭しく言った。(八)

「尊者よ、クルの地方における旅は快適でしたか。パーンダヴァの勇猛な五人の兄弟は元気ですか。(九)あの人中の雄牛たちは約定に従うことを望んでいますか。クル一族の同胞愛は不滅でしょうか。(一〇)」

マイトレーヤは答えた。

「聖地を巡礼しているうちに、クルの地方に到着し、たまたまカーミヤカの森でダルマ王（ユディシティラ）にお会いした。(一一)王よ、その髪を編み鹿皮を着て苦行林に住む偉大な人に会うために、聖者の群が集まって来ていた。(一二)大王よ、そこで私は、あなたの息子たちの犯した過失を聞いた。賭博の形をとった不正を、大なる災禍が近づいたということを……。(一三)そこで私は、クル族のためを思って、あなたのもとに来ました。王よ、というのは、私は常々あなたに対して非常な愛情と喜びを抱いているから。(一四)王よ、あなたとビーシユマが生きているのに、あなたの息子たちが互いに争うのは適切ではない。(一五)王よ、あなた御自身は処罰と恩寵の基柱である。恐ろしい不正が起きているのに、どうして見過ごすのか。(一六)集会場で行なわれたあの盗賊の所業のような行為により、王よ、あなたは苦行者たちの集まりにおいて輝くことはない。(一七)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

聖仙マイトレーヤは、それから憤然としているドゥルヨーダナ王子の方を向いて、優しい声で言った。(一八)

「勇士ドゥルヨーダナよ、最も雄弁な人よ、大知者よ、私はあなたに有益な言葉を申し上げるから聞きなさい。(一九)王子よ、パーンダヴァたちを憎んではいけない。自分にとって、またパーンダヴァとクル族と世界にとって有益なことを行ないなさい。人中の雄牛よ。(二〇)彼らはみな、勇猛に戦う人中の虎で、すべて一万の象ほどの力を持ち、金剛のように堅固である。(二一)彼らはみな誓約を守り、男らしさを誇りにしており、神々の敵ども、欲するがままの姿をとる羅刹たちを殺す。例えば、ヒディンバやバカをはじめとする羅刹や、羅刹のキルミーラを殺した。(二二)彼ら偉大な者たちが、夜中、ここから退去した時に、その恐ろしいキルミーラは、道をふさいで、動かざる山のように立っていた。(二三)戦いにかけて誇り高い、最強のビーマは、獣を殺すように彼を殺した。虎が小さな動物を殺すように。(二四)王子よ、あの世界制覇で、ビーマが戦いにおいて、一万の象ほどの力を持つ勇士ジャラーサンダを倒したやり方を思い出しなさい。(二五)ヴァースデーヴァ（クリシュナ）が彼らの親類であり、パールシャタ（ドリシタデュムナ）が義理の兄弟である。老いて死ぬ人間のうちで誰が、戦いにおいて彼らに対抗できるか。(二六)バラタの雄牛よ、そこであなたはパーンダヴァたちと和解しなさい。王子よ、私の言葉に従いなさい。死神に支配されてはいけません。(二七)」

マイトレーヤがこのように告げている間、ドゥルヨーダナは象の鼻のような腿を手でたたいた。(二八)そして彼は笑いを浮べて、足で地面をひっかきながら、何も言わずに、少しうつ向いていた。(二九)ドゥルヨーダナが従おうと考えておらず、地面を足でひっかいているのを見て、マイトレーヤに怒りが入り込んだ。(三〇)最高の聖者マイトレーヤは、怒りにかられ、また運命にかりたてられて、呪いをかける決意をした。(三一)そこで彼は怒りで眼を赤くして、水に触れてから、邪悪なドゥルヨーダナを呪った。(三二)

「あなたは私を無視して忠告に従おうとしなかったから、すぐにその高慢の報いを受けろ。(三三)あなたの悪事により大戦争が勃発し、そこで強力なビーマは棍棒の一撃によりあなたの腿を砕くであろう。(三四)」

このような言葉が発せられた時、ドリタラーシトラ王は、「そのようにならぬように」と言って聖者をなだめた。(三五)

マイトレーヤは告げた。

「王よ、もしあなたの息子が和解するなら、呪詛は実現しないであろう。さもなければ実現するであろう。(三六)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ドリタラーシトラは当惑したが、(話題を変えて)マイトレーヤにたずねた。

「ビーマはどのようにしてキルミーラを倒したのですか。(三七)」

マイトレーヤは答えた。

「私は話すつもりはありません。あなたは不満らしいし、あなたの息子は聞こうとしない。私が去ったら、このヴィドゥラがあなたにすべてを語るでしょう。(三八)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

そう言ってマイトレーヤは来た道を引き返した。キルミーラの殺害の件を聞いて動揺して、ドゥルヨーダナは外へ出て行った。(三九)

(第十一章)

(30) キルミーラの殺害（第十二章）

ビーマ、羅刹を殺す

ドリタラーシトラは言った。

「ヴィドゥラよ、キルミーラの殺害について聞きたい。話してくれ。羅刹とビーマとはどのようにして遭遇したのか。（一）」

ヴィドゥラは語った。——

超人的な業をなすビーマの手柄を聞きなさい。以前、会話の間に、私が何度も聞いたことを。（二）偉大な王よ、パーンダヴァたちは賭博に敗れてここを発ち、三日後に、カーミヤカという森に到着した。（三）夜も半ば過ぎた恐ろしい真夜中、人を喰うおぞましい羅刹がうろつくころ、苦行者やその他の森に住む者たちは、いつも、食人鬼を恐れてその森から遠く離れるのであった。（四—五）

彼らはその森に入った時、ぎらぎらした眼の恐ろしい羅刹が松明を持って道をふさいでいるのを見た。（六）彼は腕を大きく広げて、恐ろしい顔をして、クルの王子たちの行く道に立ちふさがった。（七）彼は牙で唇を噛みしめ、赤い眼をして、その毛髪は逆立って燃え上がるかのようであった。それは日光（怒髪）と稲光（牙）に囲まれ、バラーカ鳥（眼）をともなう雨雲（雷雲）のようであった。（八）彼は大声で叫び、羅刹の幻力（マーヤー）を放ち、水を含んだ雲のように大音

響を立てていた。（九）その音に驚いた鳥や、陸上と水中の動物たちは、鳴き声をあげながら、すべての方角へ逃げ散った。（一〇）その森は彼のたてる音により、逃げる鹿や象や水牛や熊の群でごったがえし、森全体が動き出したかのようであった。（一一）彼の腿がたてる風に打たれて、遠方に生えている蔓草も、その赤い若枝の腕で、樹々に抱きついた。（一二）その瞬間、猛烈な風が吹き、そのほこりでおおわれて、空には星が見えなくなった。（一三）パーンドゥの五王子にとって、その知られざる大敵は、あたかも五つの感官（眼、耳など）にとっての激しい悲しみのようであった。（一四）彼は遠くから、黒鹿の皮をまとったパーンダヴァたちを見て、マイナーカ山のように、森を行く彼らの道に立ちふさがった。（一五）

蓮の眼をしたクリシュナー（ドラウパディー）は、いまだかつて見たこともない彼に会って戦慄し、恐怖からその眼を閉じた。（一六）彼女の髪はあの時ドゥフシャーサナの手で解かれたままで乱れていた。彼女は五つの山の中央を流れる川のように動揺した。（一七）五人のパーンダヴァは、気の遠くなった彼女を抱いた。対象に執着した五官が快楽を捕えるように。（一八）

その時、強力なダウミヤは、パーンドゥの息子たちの見ている前で、羅刹を調伏する種々の呪句（マントラ）を適切に用いて、見るも恐ろしい羅刹の幻力を消失させた。（一九）すると、欲するがままの姿をとれる非常に強力で残忍な羅刹は、幻力を失って、怒りで眼を見開き、あたかもカーラ（破壊神）のように見えた。（二〇）そこで聡明なユディシティラ王は彼にたずねた。（二一）

「お前は何者で、誰の縁者か。お前のために何をしたらよいのか。言ってくれ。（二二）」

するとその羅刹は、ダルマ王ユディシティラに答えた。

「俺はバカの兄弟で、キルミーラという有名な羅刹だ。(二二)この人気(ひとけ)のないカーミヤカの森で安楽に暮らし、いつも戦って男たちをうち負かし、食べているのだ。(二三)食物として俺のところに来たお前たちは何者か。戦ってお前たちを破って、全員を安らかに食べてやろう。(二四)」

ユディシティラはその悪鬼の言葉を聞くと、族姓(ゴートラ)や名前などすべてを告げた。(二五)

「私はパーンドゥの息子のダルマ王である。お前も聞いたことがあろう。ビーマセーナ、アルジュナなど、すべての弟たちといっしょだ。(二六)王国を奪われ、森に住む決意をした。そこでお前の住みつくこの恐ろしい森にやって来たのだ。(二七)」

キルミーラは言った。

「幸せなことに、今日、運命の神は久しぶりで俺の願望をかなえてくれた。(二八)というのは、俺はビーマセーナを殺すために、いつも武器を用意して全地上を遍歴したが、彼を見つけられないでいたのだ。(二九)あの兄弟を殺した彼、長いこと探し求めていた彼が、今、幸いなことに見つかった。あいつはバラモンに変装し、ヴェートラキーヤの住居で、俺の愛しい兄弟であるバカを殺した。奴は何かの術を使ったに違いない。奴にはそんな腕力はないから。(三〇―三一)以前あの悪党は、森に住む俺の親友であるヒディンバを殺し、彼の妹を奪った。(三二)まさにそいつが愚かにも俺の住む深い森に、我々のうろつく真夜中にやって来たのだ。(三三)今日こそ積年の恨みを晴らしてやろう。そして彼の多量の血を供えてバカを満足させてやろう。(三四)今日、俺は兄弟や友人に対する負債を返し、羅刹の棘(敵)を殺して、この上ない平安を得よう。(三五)以前、あのバカはビーマセーナを取り逃したが、ユディシティラよ、今日、俺はお前の見ている前で奴を食ってやる。(三六)あの活力に満ちた狼腹(ビーマ)を今日殺して食べ、アガスティヤ仙が巨大な阿修羅(アスラ)(ヴァータピ)を消化したように消化してしまう。(三七)」

そのように言われて、真実を守る徳性あるユディシティラは怒り、「そんなことはできない」と言って羅刹を叱りつけた。(三八)すると大力のビーマは、十尋(ヴィヤーマ)ほどもある樹木を力まかせに引き抜いて折り、葉を取り除いた。(三九)またアルジュナも、瞬時のうちに、金剛杵(ヴァジュラ)のような破壊力を持つガーンディーヴァ弓に弦を張った。(四〇)ビーマは彼を制止して、恐ろしい姿の羅刹に駆け寄り、「待て、待て」と告げた。(四一)強力なビーマは彼にそう言ってから、怒って帯を固くしめなおし、両手をこすりあわせ、唇を嚙みしめ、樹木を武器として速やかに彼の方へ駆けて行った。(四二)それからビーマは、ヤマ(閻魔)の杖にも似たその樹を、彼の頭に激しく振り下ろした。インドラが雷電を投ずるように。(四三)しかしその羅刹は、戦いにおいて少しもひるまなかった。彼は燃える雷光のような松明を投げつけた。(四四)ところが最強の戦士ビーマは、その投げられた灯明をその左足で蹴ったので、それは再び羅刹の方へもどった。(四五)キルミーラも急いで樹を引き抜き、杖を持つ神(ヤマ)のように怒り狂い、ビーマに対抗して戦った。(四六)かくて、樹々を滅ぼす樹木戦が始まった。かつて女を望む(異本の読みに従う)ヴァーリンとスグリーヴァ(『ラーマーヤナ』に登場する猿の兄弟)の兄弟の間で行なわれたような。(四七)両者の頭に落下する樹はばらばらに砕けた。それはちょうど、興奮した二頭の象の頭

に落ちる蓮花のようであった。(四八)その大森林の多くの樹々はムンジャ草のように裂け、ぼろぼろが散乱しているように見えた。(四九)

その羅刹の首領と人間の最上者との間の樹木戦はしばらくの間続いた。(五〇)それから羅刹は怒り狂って、岩を持ち上げ、戦場に立つビーマに投げつけた。ビーマセーナはよろめいた。(五一)羅刹は岩にあたってしびれたビーマに突進した。ラーフ(日食・月食を引き起す悪魔)がその腕で光線を押しのけて太陽に突進するように。(五二)両者は互いに組み合って引きずり合い、戦う二頭の雄牛のように見えた。(五三)両者の戦闘は大音響をたて非常に凄まじいものであった。爪と牙を武器とする猛々しい二頭の虎の戦闘のように。(五四)狼腹(ビーマ)はドゥルヨーダナの侮辱を思い出し、また自分の腕の力を誇り、またクリシュナー(ドラウパディー)の眼に見られて、その気力を増大させた。(五五)彼は羅刹に飛びかかり、怒り狂ってその両腕で相手をつかんだ。こめかみの裂けた(発情して分泌液を流す)象が他の象につかみかかるように。(五六)それから、最高の強者である大力のビーマは羅刹をつかむと、力まかせに投げつけた。(五七)(五八―六二略)ビーマは羅刹が弱ったのを知って、両腕で強くつかんで、獣を殺すように殺した。(六三)狼腹は膝でその卑しい羅刹の尻のところに乗り、両腕でその首を絞めた。(六四)それから全身の力が抜け、眼の輝きを失った彼を地面に投げ捨て、次のように言った。(六五)「悪党、お前はヒディンバとバカの涙を拭えないだろう。お前もヤマ(閻魔)の住居へ行ったから。(六六)」

その勇士は怒りで眼を見開いてそのように告げると、衣服と装身具がずり落ち、意識を失ない呼吸が止まったが、まだピクピク動いている羅刹を投げ出した。(六七)雲のような姿の彼が殺された時、クリシュナーを先頭として、王子たちは、多くの長所に満足してビーマを称讃した。それから、彼らはドゥヴァイタの森へ行った。(六八)

王よ、キルミーラはこのようにして、あのダルマ王の命により、戦闘においてビーマに殺されました。(六九)そしてその森を棘(険危)のないものにしてから、その法(ダルマ)を知る無敵の王は、ドラウパディーとともに森に住みました。(七〇)すべてのバラタの雄牛たちは、ドラウパディーを慰め、心から喜んで狼腹を讃えました。(七一)羅刹がビーマの腕力に粉砕されて死んだ時、勇士たちは棘が除かれて安全になったその森に入りました。(七二)その時、私は旅の途中、ビーマにより殺されたその邪悪で恐ろしい羅刹が、大森林の中で体を投げ出しているのを見ました。(七三)私はそこで、集まっているバラモンたちがビーマの行為を語り合っているのを聞いたのです。(七四)

このように最強の羅刹キルミーラが戦闘で殺されたのを聞いて、王は考えこみ、悩んでため息をついた。(七五)

(第十二章)

(31) 山岳民（キラータ）（第十三章—第四十二章）

クリシュナの慰撫

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ボージャ族、ヴリシュニ族、アンダカ族の人々は、パーンダヴァが亡命して苦しんでいるのを聞いて、大森林にやって来た。(一)パーンチャーラ王の後継者たち、チェーディ王ドリシタケートゥ、世に名高い強力なケーカヤ兄弟たちは憤慨して、森に住むパーンダヴァのところへ行った。彼らはドリタラーシトラの息子たちを非難して、「我々にできることはあるか」とたずねた。(二―三)ヴァースデーヴァ（クリシュナ）を先頭にして、王族（クシャトリヤ）の雄牛たちは、ダルマ王ユディシティラを囲んで座った。(四)

ヴァースデーヴァは言った。

「大地はドゥルヨーダナ、カルナ、邪悪なシャクニ、ドゥフシャーサナの血を飲むがよい。(五)それから我々一同は、ダルマ王ユディシティラを即位させよう。詐術により行動するものは殺されるべきだ。これは永遠の法（ダルマ）である。(六)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

パーンダヴァの災難により、クリシュナが生類を焼き尽くさんばかりに怒った時、アルジュナは彼を鎮めた。(七)アルジュナはクリシュナが怒ったのを見て、その真実の誉れ高い偉大なクリシュナの、前生における諸々の行為を讃えた。(八)神人（プルシャ）であり、計り知れず、真実（サティヤ）であり、無量の威光を持ち、造物主であり、世界の主であり、叡知に満ちたヴィシュヌの……。(九)(一〇―三六略)

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

クリシュナと同体（アートマン）であるアルジュナは、彼自身（即ちクリシュナ）を〔讃える言葉を〕述べてから沈黙した。クリシュナはアルジュナに告げた。(三七)

「あなたは私に属し、私はあなたに属する。私のものはすべてあなたのものに他ならない。あなたを憎む者は私を憎む者だ。あなたに従う者は私に従う者である。(三八)あなたはナラで、私はハリ・ナーラーヤナである。ナラとナーラーヤナという聖仙（リシ）が、あの世界からこの世界にやって来たのである。(三九)アルジュナよ、あなたは私と異ならず、私はあなたと異ならない。バラタの雄牛よ、我々の間には相違は見出されないのだ。(四〇)」

その勇士たちの集会において、王たちが激している時、ドリシタデュムナをはじめとする勇ましい兄弟たちに囲まれた、パーンチャーラの王女クリシュナー（ドラウパディー）は、ヤーダヴァ族たちとともに座っている蓮の眼をした庇護者（クリシュナ）に近づいて、庇護を求めて言った。(四一―四二)

「かつて生類の創造の際、あなたは唯一の造物主であると言われました。アシタ・デーヴァラは、あなたのことを一切の生類の創造者であると述べました。(四三)あなたはヴィシュヌ

であり、不可侵であり、祭祀（ヤジュニャ）であり、マドゥスーダナであり、祭主であり、犠牲にされるべきもの（プルシャの犠牲による宇宙創造を指すと思われる）であり、ジャーマダグニヤであると述べました。（四四）（四五―五一略）マドゥスーダナよ、私は今、愛情から私の苦しみを申し上げます。神的なものにせよ、人間にせよ、あなたはすべての生類の主です。（五二）主クリシュナよ、パールタ（パーンダヴァ）たちの妻であり、あなたの友であり、ドリシタデュムナの妹である私のような女が、どうして集会場に引きずりこまれたのでしょう。（五三）生理の時期で、血にまみれ、ふるえながら、一枚の衣のみで、苦しみつつ、私はクル族の集会で引きずられたのです。（五四）邪悪なドリタラーシトラの息子たちは、諸王の中で、集会場において、生理でおののく私を見て笑いました。（五五）マドゥスーダナよ、彼らは私を奴隷として所有しようと望んだのです。パーンドゥの息子たちや、パーンチャーラの一族や、ヴリシュニ族が生きているというのに。（五六）クリシュナよ、私はビーシュマとドリタラーシトラの正当な嫁ではないのですか。その私が力ずくで奴隷にされたのです。（五七）しかし、戦闘においては最強のパーンダヴァたちを私は非難します。誉れ高い正式の妻が苦しんでいるのに傍観していたのですから。（五八）ビーマセーナの大力はどうしたのです。アルジュナの弓術はどうしたのです。クリシュナよ、その二人は、私が卑しい人々に辱しめられているのに許容していたのです。（五九）夫はいかに微力でも妻を守るものというのが、常に立派な人々が践（ふ）む永遠の法（ダルマ）の道ではないでしょうか。（六〇）妻が守られる時、子孫も守られます。子孫が守られる時、自己が守られるものです。（六一）というのは、自己は妻のうちに生まれる（ジャーヤテー）から、だから妻（ジャーヤー）と言うのでは

ないですか。そして夫は妻に守られます。何故かというと、私の腹に生まれるからです。（六二）パーンダヴァたちは救いを求めた人々を捨てたことがあるでしょうか。なのに彼らは、救いを求める私を助けなかったのです。（六三）（六四―一〇八略）」

そのように言って、優しく語るクリシュナーは、蓮の萼（がく）のように繊細な手で顔をおおって泣いた。（一〇九）パーンチャーラの王女は、美しく隆起し瑞相をそなえた大きい乳房の上に、嘆きより生ずる涙を雨降らせた。（一一〇）彼女は両眼をぬぐい、何度もため息をついて、涙で喉をつまらせ、怒ってこう言った。（一一一）

「クリシュナよ、私には夫たちはいません。息子たちもいません。兄弟も父も、あなたも、縁者もいません。（一一二）私が卑しい人々に苦しめられているのに、彼らは悲しまないかのように傍観しているのですから。あの時カルナがあざ笑ったことの苦しみは、私にとって静まることはありませんから。（一一三）」

その時クリシュナは、勇士たちの集会において、彼女に告げた。

「美しい女よ、あなたが怒っている人々の妻たちも嘆くことになろう。（一一四）アルジュナの矢におおわれ、血の洪水にまみれ、殺され生命を捨てて大地に横たわっている彼らについて……。（一一五）パーンダヴァのためにできることは何でもやるつもりだ。悲しむな。私は約束する。あなたは王たちの王妃となるであろう。（一一六）天が落ち、ヒマーラヤが裂け、大地が砕け、海が干涸びようとも、クリシュナーよ、私の言葉は偽りにはならぬであろう。（一一七）」

ドリシタデュムナは言った。

「私はドローナを殺すであろう。シカンディンは祖父（ビーシュマ）を殺すであろう。ビーマセーナはドゥルヨーダナを、アルジュナはカルナを殺すであろう。（二八）美しい微笑の女よ、ラーマ（バララーマ）とクリシュナに寄る辺を求めれば、我々は戦いにおいて、インドラにも敗れることはなかろう。いわんやドリタラーシトラの息子たちなどに。（二九）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

そのように言われた時、勇士たちはヴァースデーヴァ（クリシュナ）の近くに集まり、彼の方を見た。偉丈夫クリシュナは彼らの中で、次のように告げた。（三〇）

（第十三章）

ヴァースデーヴァは告げた。

「王よ、もし私があの時ドゥヴァーラカーにいたとしたら、あなたはこの災難を蒙らなかったであろう。（一）無敵の者よ、クル族の人々に招待されないでも、ドリタラーシトラ王やドゥルヨーダナに招待されないでも、私は賭博に参列したであろう。（二）多くの過誤を指摘して、賭博を止めさせたであろう。ビーシュマ、ドローナ、クリパ、バーフリーカといっしょになって。（三）あなたのために、ドリタラーシトラ王に告げたであろう。『クルの王よ、王中の王よ、あなたの息子たちの賭博はやめなさい』と。（四）そしてそれが原因であなたが王位を失ったところの賭博の害を説いたであろう。かつてヴィーラセーナの息子（ナラ王）がそれに

よって王国を失ったところの賭博の。（五）王よ、賭博により消費しないのに失うこと、それへの執着は切りがないことを、如実に説いたであろう。（六）女、賭博、狩猟、飲酒、以上が欲望（カーマ）より生ずる四大悪徳であると言われる。王よ、それらにより富貴が失われる。（七）論書に通じた人々は、それらのすべてが非難さるべきであると考える。そして、それを知る人々は、賭博が特に非難さるべきであると見る。（八）そこにおいては、一日で財産を失い、確実に災いのみがある。財産を享受しないうちに失い、ただ荒々しい言葉のみが存する。（九）賭博における、そのような、またその他の付随して生ずる不快なことを、ドリタラーシトラのところへ行って告げたことであろう。（一〇）もし私がそのように告げたなら、彼は私の言葉を受け入れ、クル族の法（ダルマ）は恙無かったであろう。（一一）もし彼が私の穏やかで道にかなった言葉を受け入れなかったら、私は力ずくで彼を止めたであろう。（一二）そして友人と称するあの敵どもを摘発して（原文疑問）、集会場にいたあの賭博者どもをすべて滅ぼしたであろう。（一三）あの時、私がアーナルタ（国名。ドゥヴァーラカーはその首都）にいなかったために、あなたが賭博をするという災いが訪れたのだ。（一四）私がドゥヴァーラカーにもどった時、あなたが災難にあった次第をサーティヤキから聞いたのである。（一五）私は聞くやいなや非常に失望して、王よ、急いであなたに会いたいと思ってやって来たのである。（一六）ああ、バラタの雄牛よ、我々はみな苦悩している。あなたが弟たちとともに災難に陥ったのを見て。（一七）」

（第十四章）

空飛ぶ都市サウバ

ユディシティラはたずねた。

「クリシュナよ、あなたはどうして不在であったのか。またどこで滞在していたのか。またその他国で何をしていたのか。(二)」

クリシュナは答えた。

「バラタの雄牛よ、私はシャールヴァ王の都城であるサウバを破壊しに行っていたのだ。最高の人よ、その理由を聞きなさい。(三)バラタの長よ、威光に満ちた強力で高名な王、ダマゴーシャの息子であるあの勇士シシュパーラは、あなたの皇帝即位式(ラージャスーヤ)に際し、私に殺された。あの邪悪な男は、私の受けた名誉の贈物に対し、怒りにかられて、我慢することができなかったのである。(三—四)彼が殺されたことを聞いて、シャールヴァ王は激しい怒りにかられて、私があなたのもとにいる間に、留守になったドゥヴァーラカーに侵入した。(五)王よ、若いヴリシュニ族の雄牛たちはそこで彼と戦った。残酷で邪悪な彼は、意のままに進むサウバ(サウバは空中を飛行するようである)に乗って来て、多くの若いヴリシュニの勇士たちを殺し、すべての都の御苑を破壊した。(六—七)そして勇士よ、彼は言った。

『あのヴリシュニの一族のろくでなし、ヴァスデーヴァの馬鹿息子のヴァースデーヴァ(クリシュナ)はどこへ行った。(八)俺は戦いにおいて、あの戦いを求める男の高慢をくじいてやる。

アーナルタの住民たちよ、真実を告げよ。彼のいるところへ行くであろう。(九)カンサとケーシンを殺した彼を殺したら俺は引き上げる。殺さぬうちは引き上げはしない。俺は真実にかけて武器を執る(剣にかけて誓う)。(一〇)彼はどこだ、彼はどこだ。』

サウバの王はそう言って、戦場で私と戦おうと望み、あちこち駆けまわった。(一一)

『シシュパーラ殺しに対する怒りから、俺は今日、あの信頼を裏切った卑しい悪党をヤマ(閻魔)の国へ送ってやる。(一二)俺の兄弟のシシュパーラ王は、あの邪悪な奴に殺された。俺は奴を殺して地に倒してやる。(一三)若い王であった兄弟は、合戦のさなかに殺されたのではない。あの勇士は油断しているところを殺されたのだ。俺はクリシュナを殺してやる。(一四)』

大王よ、彼はこのように告げると、私を非難して、意のままに進むサウバによって空に飛び上がった。(一五)

私は帰国してから、その邪悪なマールッティカーヴァタ(国名)の王が私に対してどのようにふるまったかを聞いた。(一六)そこで私も、怒りにかられた眼をして、彼を殺す決意をした。(一七)その悪党のアーナルタにおける破壊行為、私に対する侮辱、その増上慢に対して。(一八)

そこで王よ、私はサウバの王を殺すために出陣した。私は彼を探しているうちに、大海の島で彼を見つけた。(一九)私はパーンチャジャニヤという法螺貝を吹いて、シャールヴァに宣戦布告し、戦闘の準備をした。(二〇)そこで私はしばし悪魔たちと戦った。そして私は彼

らをすべて征服して、地に倒したのである。（三二）勇士よ、あの時、私が作法にもとる賭博のことを聞いて、すぐにハースティナプラに行けなかった理由は以上のようである。（三三）」

（三三―四二略）　（第十五章）

〔第十六章から第二十三章の第四十一詩節まで、シャールヴァ殺害の詳細が説かれているが、ここでは省略する。〕

ドゥヴァイタヴァナ湖の隠棲所

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ユディシティラにこのように語ってから、その強力な最高の人物、英邁なるマドゥスーダナ（クリシュナ）はパーンダヴァたちに別れを告げて出発した。（四二）その勇士はダルマ王ユディシティラに挨拶した。王とビーマは彼の頭に接吻した。（四三）クリシュナは、スバドラーとアビマニユを黄金の戦車に乗せてから、自らもパーンダヴァたちに敬意を表されながら車に乗った。（四四）クリシュナはユディシティラを元気づけてから、サイニヤとスグリーヴァ（馬の名）につながれた、太陽のように輝く戦車に乗って、ドゥヴァーラカーに向かって発った。（四五）クリシュナが去った時、ドリシタデュムナも〔妹の〕ドラウパディーの息子たちを連れて自分の都へ発った。（四六）チェーディ国王ドリシタケートゥも妹を連れて、パーンダヴァに会った後、美しいシュクティマティーの都へ帰った。（四七）ケーカヤの人々も、無量の光輝

を持つクンティーの息子（ユディシティラ）と別れ、すべてのパーンダヴァに別れを告げて出発した。（四八）しかし、その地域に滞在するバラモンや平民たちは、帰るように強く勧められてもパーンダヴァを捨てようとしなかった。（四九）王中の王であるバラタの雄牛よ、彼ら偉大な人々のカーミヤカの森における集結は、まことに驚くべき光景であった。（五〇）気高い心のユディシティラは、彼らバラモンたちを敬ってから、やがて「車に馬をつなげ」と従者たちに命じた。（五一）

（第二十三章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ダシャールハ（ヤーダヴァ族）の長（クリシュナ）が去った時、ユディシティラとビーマセーナとアルジュナと双子（ナクラとサハデーヴァ）とクリシュナー（ドラウパディー）と彼らの司祭は、最高の馬をつないだ高価な車に乗った。そしてそのシヴァ神のような勇士たちはそろって森へ発った。彼らは黄金や金貨や衣服や牛を、ヴェーダに通じたバラモンたちに布施してから行った。（一―二）そして武装した二十名の従者たちが、すべて弓、鎧、火矢（異本に従うも疑問）、弓弦、兵器、矢を持って、前後を進んだ。（三）その後をインドラセーナ（ユディシティラの御者）が、王女（ドラウパディー）の衣類や乳母や召使女や装身具を運んで、急いで車に乗って殿（しんがり）を行った。（四）それから、市民たちはクル族の長のもとに行き、元気にそのまわりを右まわりにまわって敬意を表した。そしてバラモンたちも静かに挨拶した。それから、クルの地方のすべての長たちも挨拶した。（五）偉大な君主であるダ

ルマ王は弟たちとともに、静かに彼らに挨拶をし、クルの地方の群集を見て立っていた。偉大なクルの雄牛は、彼らに対して、父親が子供たちに対して感じるような気持を抱いた。(六) 彼らもまた、そのバラタの長に対して、子供たちが父親に対して感じるような気持を抱いていた。(七) それから大衆は、クルの英雄のところに行って取り巻いて立った。そしてみなは、「ああ主君よ、ああダルマよ」と言いながら、慚愧のあまりすべて泣き顔になった。(八)

「クル族の長であり、臣民の主君であるダルマ王は、父親が息子たちを捨てるように、我々、市民や地方民すべてを捨て、いったいどこへ発たれるのですか。(九) 残虐なドリタラーシトラの息子たち、シャクニ、悪意あるカルナたちはなんとひどいことか。王よ、あの邪悪で残酷な人々は、常に法（ダルマ）を守るあなたに害をなそうと望むのだから。(一〇) 空しい行為をしない偉大なダルマ王は、自ら神々の都のような偉大な都インドラプラスタを建設しながら、それを捨ててどこへ発たれるのですか。(一一) 偉大なマヤが、あの神々の集会場のような無比の集会場を作りました。ダルマ王は、その神々に守られた神々の幻影（マーヤー）のような集会場を捨てて、どこへ発たれるのですか。(一二)」

法と実利（アルタ）と享楽（カーマ）を知る、最高の威光を有するアルジュナは、集まった彼らに高らかに告げた。

「王は森に住み、敵たちの名声を奪うであろう。(一三) あなた方は、法と実利を知る、主立ったバラモンや苦行者たちにお願いして、こぞって、また別々に、告げてもらって欲しい。我々の目的がこの上なく成就するようにと。(一四)」

アルジュナがこのように言った時、バラモンたちや一切の種姓（ヴァルナ）の人々は、こぞって歓喜して、法を守る人々の最上者（ユディシティラ）の周囲を右まわりにまわった。(一五) 彼らはユディシティラ、狼腹（ビーマ）、アルジュナ、ドラウパディー、双子（ナクラとサハデーヴァ）に別れを告げ、ユディシティラの許しを得て、失望してそれぞれ自分の国へ帰って行った。(一六)（第二十四章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

彼らが去った時、約束に忠実で徳性あるユディシティラは、弟たちすべてに告げた。(一)

「我々は十二年間、人のいない森に住まなければならぬ。大森林の中で、多くの鳥獣のいる場所を探してくれ。(二) 多くの花や木の実のある、快適で吉祥で、清らかな人々に適した場所を。そこでそれらすべての年を幸せに送れるような場所を。(三)」

そのように言われた時、ダナンジャヤ（アルジュナ）は、思慮深い兄を師のように尊敬して告げた。(四)

アルジュナは言った。

「あなたは長老の大仙たちに仕えた。人の世であなたが知らないことは何もない。(五) バラタの雄牛よ、あなたは常にドゥヴァイパーヤナなどのバラモンや、偉大な苦行者ナーラダに仕えた。(六) 彼は自己を制御し、常にすべての世界の門を訪れ、神々の世界から梵界へ行き、ガンダルヴァや天女（アプサラス）の世界へも行く。(七) 疑いもなくあなたはバラモンたちのすべての帰趨

を知っている。王よ、そしてあなたはすべての人々の力を知っている。(八)あなた御自身が、至福へ至る原因を知っておられる。大王よ、あなたの望む場所に我々は住みます。(九)例のドゥヴァイタヴァナという、清らかな人々にふさわしい湖があります。そこには多くの花や木の実があり、心地よく、様々な鳥が住んでいます。(二〇)王よ、もし同意されるなら、そこで十二年間過ごしたいと思います。他に何かお考えがありますか。(二一)」

ユディシティラは言った。

「アルジュナよ、お前の言ったことに私も同意する。あの清浄で大きい、有名なドゥヴァイタヴァナ湖へ行こう。(二二)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

そこで徳性あるすべてのパーンダヴァたちは、多くのバラモンとともに、清浄なるドゥヴァイタヴァナ湖へ行った。(二三)火供(アグニホートラ)を行なうバラモンとそれを行なわないバラモンと、ヴェーダの学習者と、比丘(行乞をする者)と、祈禱を行なう者と、林住者たちがいた。(二四)常に真実を守り、誓戒を厳守する苦行者が何百人もいた。このような多くのバラモンたちがユディシティラを取り巻いていた。(二五)バラタ族の雄牛であるパーンダヴァたちは、多くのバラモンたちとともに、清浄で心地よいドゥヴァイタヴァナに入った。(二六)

夏の終わり(雨季の始め)に、王は、シャーラ、棕櫚、マンゴー、マドゥーカ、ニーパ、カダンバ、サルジャ、アルジュナ、カルニカーラなどの多くの花々に満ちた大森林を見た。(二七)

その森で、孔雀、ダーティユーハ、チャコーラの群、森のコーキラたちは、大樹の先端に止まり、魅力的な鳴き声をたてていた。(二八)王はその森で、分泌液(マダ)を滴らせて山のように立っている群の長である巨象たちの大群が雌象の群とともにいるのを見た。(二九)彼はボーガヴァティー(サラスヴァティー)川に近づき、その森の中で、自己を制しぼろをまとい髪を編み法(ダルマ)を守る人々の住処において、多くのシッダ(半神族)や聖仙(リシ)の群を見た。(三〇)それから、徳性ある人々のうちの最高者である王は、車から降りて、弟たちと従者を連れてその森に入った。無量の威光を持つシャクラ(インドラ)が天界に入るように。(三一)チャーラナ(天上の歌手)やシッダの群や、森に住む者たちは、真実を守る彼を見ようとしてこぞって集まって来た。そして、その思慮深い獅子のような王を囲んで立っていた。(三二)

その法(ダルマ)を守る人々の最高者は、そこですべてのシッダたちに挨拶して、そして王にふさわしく、神のように答礼されて、すべての主立ったバラモンを連れて、合掌してそこに入った。(三三)法に専念する苦行者たちは、父に対するように、清い性質の偉大な王に近づいて挨拶した。彼は花をつけた大樹のそばに座った。(三四)ビーマとクリシュナー(ドラウパディー)とダナンジャヤ(アルジュナ)と双子(ナクラとサハデーヴァ)たち、バラタ族の主立った人々もみな、彼に従って車を降り、そのそばに立った。(三五)偉大な五人の勇士たちがその下に住んだ、蔓草がからんでたわむ大樹は、象の群の長たちが住みついた大山のようであった。(三六)(第二十五章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

かつて快適な生活に慣れていた、インドラのような王子たちは、その森に着いて、難儀な生活をすることとなったが、吉祥なるサラスヴァティー川のシャーラ樹の森で日々を送った。（一）威厳に満ちたクル族の雄牛である王は、すべての苦行者たちや隠者たちや主立ったバラモンたちを、その森で、上等の根や果実を出して満足させた。（二）その大森林に住むパーンダヴァたちの司祭であり、クル族の父のような、一切の威光に満ちたダウミヤは、主要な祭祀や祖霊祭を行なった。（三）栄光あるパーンダヴァたちが国を離れ、そこに住んでいる間に、威厳に満ちた古の聖仙マールカンデーヤが、彼らの客人としてその隠棲所を訪れた。（四）無量の威光に満ち、一切を知る偉大な聖者は、ドラウパディーとユディシティラとビーマセーナとアルジュナを見て、ラーマのことを思い出して、苦行者たちの間で微笑した。（五）ダルマ王は失望したかのように彼に告げた。

「ここにいる苦行者たちはみな遺憾に思っています。あなたは苦行者たちの見ている前で、私を見て、何故喜ぶかのように微笑されるのですか。（六）」

マールカンデーヤは言った。

「わが子よ、私は喜んでも笑ってもいない。歓喜より生じた慢心が私を捕えたわけでもない。しかし今日、あなたの不幸を見て、誓いに忠実なダシャラタの息子ラーマを思い出したのだ。（七）あの王も、まさに父の命令により、〔弟の〕ラクシュマナとともに森に住んだ。かつてリシュヤムーカ山の頂において、弓を持って歩いて行くところを私は見た。（八）ラーマは偉大で、千眼者（インドラ）に匹敵し、マヤの勝利者、ナムチの殺害者とも言うべきであるが、父の命令により、罪なくして自己の義務に従い、森に住むこととなった。（九）インドラに等しい力を持ち、威厳に満ち、戦いにおいて無敵である彼は、諸楽を捨てて森をさまよった。私は力を有するからといって、非法を行なうべきではない。（一〇）ナーバーガ、バギーラタなどの王は、海にいたるまでの地上を征服した。だがわが子よ、彼らは真実によって諸世界を獲得したのである。私は力を有するからといって、非法を行なうべきではない。（一一）最上の人よ、誓いに忠実なカーシとカールシャの王は、王国と領土を捨て、アラカ（王名、または「狂犬」の意）と呼ばれた。私は力を有するからといって、非法を行なうべきではない。（一二）最上の人よ、創造者に定められた古の規定を尊重して、七仙（北斗七星）は天空において輝いている。私は力を有するからといって、非法を行なうべきではない。（一三）王よ、最上の人よ、強力で山の峰のような象たちが、創造者の命令に従っているのを見よ。私には力が有るからといって、非法を行なうべきではない。（一四）王よ、一切の生類が、創造者に定められた通りに、その生まれに応じて力の限り行動するのを見よ。私は力を有するからといって、非法を行なうべきではない。（一五）真実と法と適切な行為と廉恥心により、一切の生類を凌駕して、プリターの息子よ、あなたの名声と威光が太陽のように輝くように。（一六）威厳に満ちた者よ、約束したように、この森において困難な生活を送ってから、王よ、自己の威光によってクル族から輝かしい富貴を取りもどしなさい。（一七）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——
大仙は苦行者たちの中で彼と親しい人々にこのように告げてから、ダウミヤとパーンダヴァ一同に別れを告げて、北の方角へ去って行った。(一八)（第二十六章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。——
偉大なパーンダヴァたちがドゥヴァイタヴァナに住んでいる間に、その大森林はバラモンたちでいっぱいになった。(一)ドゥヴァイタヴァナ湖は、いたるところ常に梵音が唱えられ、梵界のように清浄であった。(二)いたるところで唱えられる祭詞(ヤジュス)、讃歌(リチュ)、歌詠(サーマン)、章句の心にしみる音が響いていた。(三)パーンダヴァたちの弓弦の音と賢者たちの梵音は、バラモンと混った王族(クシャトラ)をいっそう輝かせた。(四)

ある時、ダールビヤ・バカは、黄昏に、聖仙たちに囲まれて座っているダルマ王ユディシティラに告げた。(五)

「クルの長ユディシティラよ、見なさい。ドゥヴァイタヴァナにおいて、苦行を積んだバラモンたちは火を燃え上がらせ、護摩(ホーマ)の時が来た。(六)この清浄なる場所であなたに守られた、誓戒を守るブリグの一族、アンギラスの一族、ヴァシシタの一族、カーシャパの一族、聖なるアガスティヤの一族、最高の誓戒を持するアトリの一族は、法(ダルマ)を行なっている。全世界の優れたバラモンたちがあなたといっしょにいる。(七―八)クンティーの息子よ、私がこれから言う言葉を、弟たちとともに、注意深く聞きなさい。(九)

王族と混ったバラモン、バラモンと混った王族は、高まり、敵を燃やす。火と風が森を燃やすように。(一〇)わが子よ、この世界とかの世界を勝ち得ようと望むなら、バラモンなしで支配しようとしてはならぬ。法と実利(アルタ)を修得し、迷妄を離れたバラモンを得れば、王は競争者たちを排除することができる。(一一)バリ（有名な魔王の名）は臣民を守ることにより至福に至る法を行ない、この世でバラモン以外の拠り所を持たなかった。(一二)ヴィローチャナの息子である阿修羅(アスラ)（バリ）は諸楽をすべて享受し、その繁栄は不滅であった。彼はバラモンと交際することにより大地を獲得したが、彼らに悪事をなすことにより滅びた。(一三)バラモンなしでは王族を、この繁栄ある大地（の女神）は長く愛することはない。海に囲まれた大地は、政策に通じたバラモンの教えを受ける王族を敬う。(一四)戦場において御者のいない象の力のように、バラモンを欠いた王族の力は滅する。(一五)バラモンには無比の眼（洞察）がある。王族には無比の力がある。その両者がともに歩む時、世界は静まる。(一六)大火が風に助けられて草を焼くように、王族もバラモンといっしょになって敵を焼く。(一七)知者は、まだ得ていないものを獲得するため、またすでに得たものを増大させるため、バラモンたちに知恵を求めるべきである。(一八)得ていないものを獲得するため、得たものを増大させるため、また適切な拠り所を得るために、名声あり、ヴェーダを知る、聡明な、博識のバラモンを住まわせるべきである。(一九)ユディシティラよ、あなたのバラモンに対するふるまいは常に最高である。それ故、あなたの名声は広く、全世界において輝く。(二〇)」

ユディシティラが讃えられた時、すべてのバラモンはダールビヤ・バカを称讃し、更にいっそう喜んだ。(二二)ドゥヴァイパーヤナ、ナーラダ、ジャーマダグニヤ、プリトゥシュラヴァス、インドラデュムナ、バールキ、クリタチェータス、サハスラパード、カルナシュラヴァス、ムンジャ、ラヴァナーシュヴァ、カシャパ、ハーリータ、ストゥーナカルナ、アグニヴェーシャ、シャウナカ、リタヴァーク、ブリハダシュヴァ、リタヴァス、ウールドゥヴァレータス、ヴリシャーミトラ、スホートラ、ホートラヴァーハナ、その他の誓戒を厳守するバラモンたちは、聖仙たちがインドラを讃えるように、ユディシティラを讃えた。(二二—二五)

(第二十七章)

幸不幸は怒りにもとづく

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

森に住むパーンダヴァたちは、夕方、クリシュナー（ドラウパディー）とともに座って、悩み悲嘆に暮れて会話を交していた。(一)その時、愛らしく賢明で夫に貞節な美しいクリシュナーは、ダルマ王に次のように言った。(二)

「あの邪悪で残忍なドリタラーシトラの息子は、私たちに対して何の呵責の気持も抱いていないに違いありません。(三)私やすべての弟たちとともにあなたを、鹿皮を着るようにしむけて森へ追放しながら、あの邪悪な男は後悔せず、何も言わなかったでしょう。(四)きっとあの悪党の心は鉄でできているのです。あの時、法（ダルマ）に専念する最上のあなたに対して、乱暴なことを言ったのですから。(五)あの悪人は仲間とともに、快適な生活に慣れて苦しみにふさわしくないあなたを、このような苦しみに陥れて喜んでいます。(六)あなたが鹿皮を着て森へ追放された時、四人の悪党だけが涙を流しませんでした。(七)ドゥルヨーダナとカルナと、邪なシャクニと、残忍な悪い弟のドゥフシャーサナとが……。(八)その他のすべてのクル族の人々は、悲嘆に暮れ、眼から涙を流したのです。(九)(一〇—三一略)何故あなたの怒りは増大しないのですか。(三二)きっとあなたには怒りが存在しないのでしょう。弟たちや私がこのようになったのを見ても、あなたの心は苦しまないのですから。(三三)ドルパダの家に生まれ、偉大なパーンドゥの義理の娘である私が森に入ったのを見て、何故あなたの怒りは増大しないのですか。この世に怒らない王族（クシャトリヤ）はいないと言い伝えられております。今、王族であるあなたに、それと逆の例を見ます。(三四)時が来ても王族が威光（怒り）を発揮しないなら、一切の生類が常に彼を軽蔑するでしょう。(三五)ですから、敵どもに対して決して忍耐してはなりませぬ。威光によってあなたは疑いもなく彼らを滅ぼすことができましょう。(三六)ただし、忍耐すべき時に静まらない王族は、一切の生類に嫌われ、この世とかの世において身を滅ぼすでしょう。(三七)」

(第二十八章)

ドラウパディーは続けた。

「この点に関し、プラフラーダとヴィローチャナの息子バリとの対話という、古い物語が例としてあげられます。(一)

　バリは祖父である魔王プラフラーダにたずねた。この祖父は、阿修羅(アスラ)の王であり、非常に聡明で、法(ダルマ)の理論に通じていた。(二)

『御祖父さん、忍耐(クシャマー)と威光(テージャス)とのうち、どちらが優れているでしょうか。私のこの疑問に適切に答えて下さい。(三) 法を知る人よ、どちらが優れているか、疑問のないように教えて下さい。私はあなたの御命令をすべてその通りに実行いたします。(四)』

　このように問われて、一切の疑問を解決する知者である祖父は、疑惑について問う彼にすべてを語った。(五)

　プラフラーダは言った。

『威光は常に優れているとは限らない。忍耐も常に優れているとは限らない。それ故、孫よ、確実にその二つを学べ。(六) 孫よ、いつも忍耐する者は多くの災いを見る。従者も中立の者たちも彼を軽蔑する。(七) すべての者たちも決して彼に敬意を表しない。それ故、孫よ、常に忍耐することは賢者らに非難される。(八) というのは、従者たちは彼を軽蔑して、多くの過失を犯す。心無き者たちは、彼の財物を奪おうと欲する。(九) 車、衣類、装飾品、寝具、座具、飲食物、一切の資具を……。(一〇) 心ない役人は、主人がある品を与えるように命じた相手にその品を与えないで、好きなように横領するであろう。(一一) 彼は決して主人をふさわしく尊敬しないであろう。実にこの世において、軽蔑は死よりも非難されるものである。

(一二) 孫よ、そのようなあまりにも忍耐する人に対しては、召使いや息子や従者や無関係の人々まで、ひどいことを言う。(一三) 彼らは忍耐しすぎる人を軽蔑し、彼の妻をも要求する。心ない彼の妻も、好き勝手にふるまう。(一四) もし常に喜んでいる彼らがほんの少しでも主人から罰を受ければ、彼らは反逆して害をなす。(一五) 忍耐しすぎる人々には、常に、以上のような多くの災いがある。ヴィローチャナの息子よ、次は短気な人々の災いを知りなさい。(一六)

　怒るべき理由がある時もない時も、常に激質(ラジャス)におおわれて怒り、その力（威光）にまかせて種々の暴力を行使する者は、友人と不和になり、世人と自己の一族から憎まれるものとなろう。(一七―一八) そういう人は、他者を軽んずることにより、利益を失い、非難され、軽蔑され、苦しみと憎しみと迷妄に陥り、敵を作る。(一九) 怒りにかられ、人々に種々の暴力をふるう人は、権力と生命と自己の一族を失う。(二〇) 害をなす者にも、益をなす者にも、同じように力をもって臨めば、世人は彼を嫌悪する。家に来た蛇を恐れるように。(二一) 世人に嫌悪された人にとって、どうして繁栄があろうか。彼の弱点を見るやいなや、世人は必ずや彼を害する。それ故、あまりにも威光を行使すべきでもないし、またいつも柔和であるべきでもない。(二二) 適切な時に柔和で適切な時に厳しくする人は、この世とかの世における幸福を得る。(二三)(二四―三二略)』

　ドラウパディーは続けた。

「王よ、それ故、常に害をなす貪欲なドリタラーシトラの息子たちに対し、威光(怒り)を行使すべき時であると私は思います。(三三) 今やクル族に対し、何ら忍耐すべき時ではありませんから。威光を行使すべき時が来たら、威光を行使すべきなのです。(三四) 軟弱な者は軽蔑されます。また、人々は厳しさを恐れます。その時が来たら、その両方を知っている人が王者なのです。(三五)」

(第二十九章)

ユディシティラは言った。

「怒りは人を殺す。また、怒りは人を栄えさせる。聡明な者よ、そのように知れ。幸不幸は怒りにもとづく。(一) 美しい女よ、怒りを抑える人は幸福を得るが、常に怒りを抑えられぬ人にとって、この上なく恐ろしい怒りは彼の不幸をもたらす。(二) まことに、この世で、人々の滅亡は怒りにもとづく。それ故、私のようなものが、どうして、世界を滅ぼす怒りに身をまかせようか。(三) 怒った人は悪をなす。怒った人は目上の人々をも殺すであろう。怒った人は粗暴な言葉により、優れた人々をも軽蔑するであろう。(四) 実際、怒った人は言うべきこととそうでないことを全く識別しない。怒った人は何でもやり、何でも言ってしまう。(五) 怒りにより殺されるべきでない者を殺し、殺されるべき者を敬うであろう。怒れる者は自分自身をもヤマ(閻魔)の住居に送るであろう。(六) 賢者はこの世とかの世における最高の至福を望み、以上を考慮して怒りを克服すべきである。(七) 私のような者が、どうして、賢者

の捨て去る怒りにかられようか。ドラウパディーよ、このように考えて、私には怨みが起こらないのである。(八) 怒った相手に対して怒り返さない人は、自他の災いを癒すものであり、自分と相手を大なる危険から救い出す。(九) もし無力の人が迷妄に陥り、苦しめられた時、より強力な人々に対して怒れば、しまいには身を滅ぼす。(一〇) 彼が身を滅ぼせば、その自己を制御しない人に〔続いて〕世の人々も滅びる。それ故ドラウパディーよ、無力の人は怒りを抑制すべきであると伝えられる。(一一) 力あるものも、賢明であって、苦しめられても怒らないならば、彼は苦しめた者を滅ぼして、他の世界において喜ぶ。(一二) それ故、力ある人も無力な人も、常にこのことをよく理解して、災禍にあっても堪え忍ぶべきであると言われる。(一三) クリシュナーよ、この世で善き人々は怒りの克服を讃える。この世で、忍耐する善き人は常に勝利する、というのが賢者の説である。(一四) 真実は虚偽に勝る。優しさは残酷さに勝る。私のような者が、どうして、善き人々の捨て去る、多くの災いをともなう怒りにかられようか。たといスヨーダナ(ドゥルヨーダナ)を殺すためであっても。(一五)(一六—五〇略)」

(第三十章)

ドラウパディーの愚痴

ドラウパディーは言った。

「あなたの迷妄を作った配置者(ダートリ)と制定者(ヴィダートリ)とに敬礼します。父祖の流儀を担うべきであるのに、

あなたは別のことを考えています。(一)この世では、法(ダルマ)や優しさや忍耐や正直や思いやりによっては、人は決して幸福を得ることはできない〔ということになってしまいます。〕(二)バーラタよ、もしあなたやあなたの威厳に満ちた弟たちにふさわしくない、堪えがたいこの災難があなたにふりかかるとしたら……。(三)以前も今も、あなたにとって、生命よりも愛しいものはあっても、法よりも愛しいものは何も見出されません。(四)あなたの王国は法のためにのみありました。あなたの生命も法のためにのみあります。バラモンたちも、目上の人々も、神々も、それをよく知っています。(五)あなたはたといビーマセーナやアルジュナやナクラとサハデーヴァや私を捨てても、法を捨てないと私は思います。(六)

法というものは、守られたら、法を守護する王を守ると、高貴な人々から聞いております。しかし、それはあなたを守らないと私は思います。(七)人中の虎よ、あなたの知性は常に変わることなく法のみを追います。人の影が常にその人を追うように。(八)あなたは同等の人々をも、劣った人々をも軽んじません。いわんやより優れた人々を決して軽んじません。全地上を得た後も、あなたの角(誇り)は増大しませんでした。(九)あなたはスヴァーハーと唱えスヴァダーと唱えて〔供物を供え〕、供養により、バラモンや神々や祖霊たちに常に奉仕します。(一〇)バラモンや苦行者や解脱(げだつ)を求める者や家住者たちは、常に、あなたにすべての望みをかなえられて満足しています。(一一)あなたは林住者たちに銅の器を与えます。あなたの家には、バラモンたちに与えられないものは何もありません。(一二)王よ、朝夕、ヴァイシュヴァデーヴァ(一切諸神に対する供養)の終わりに、供物をまず客人と従者に与えてから、あなた

はその残りで生活します。(一三)(一四―一六略)

王よ、〔ところが〕あなたは理性を失って、不正な賭博に敗れ、王国と土地と武器と弟たちと私とを取られました。(一七)あなたは正直で柔和で寛大であり、慎ましく、真実を語るのに、どうして賭博をやろうなどという気になったのですか。(一八)あなたのこの苦しみ、このような不幸を見て、私の心は錯乱し、悩むのです。(一九)世の人々は主宰神(イーシュヴァラ)の力に依存し、自己の力に依存するのではないという点についても、次のような古い言い伝えが例としてあげられます。(二〇)

主である創造者(ダートリ)のみが実に、生類の苦楽、幸不幸に関して、すべてを配置する(ダー)のである。前もって種子を放って……。(二一)木製の人形が操られて手足を動かすように、これらの生類も〔創造者に操られて〕手足を動かす。(二二)主宰神は虚空(気霊)のようにすべての生類を遍く満たして、この世の善と悪とを定める。(二三)この世の人は糸につながれた鳥のように抑制されている。主宰神の支配下にあって、他人の主(あるじ)でもないし自分の主でもない。(二四)紐に通された宝玉のように、鼻綱を通された雄牛のように、創造者の命令に従い、それよりなり、それに委ねられる。(二五)人間は少しの間も自己に依存しない。岸から落ちて流れの中に達した樹木のように。(二六)人間は無知であり、自分の幸不幸をも支配することはできない。主宰神にうながされて、天界や地獄へ行く。(二七)草の先が強風の力になびくように、一切の生類は創造者の支配下に帰する。(二八)主宰神は気高い行為と悪とに結びつき、生類を遍く満たして遍歴するが、しかもそれと認識され得ない。(二九)土地(クシェートラ)と呼ばれる

この身体は、創造者にとって手段にすぎない。その身体により、神は、善悪の果報をもたらす。業(カルマン)を作らせるのである。(三〇)見よ、主宰神がどのように幻影(マーヤー)の力を行使するか。彼はその幻力により迷わせて、生類により生類を殺すのである。(三一)ヴェーダを知る聖者(ムニ)たちが観察した時、疾風がそれと別様に吹くように、人々が色々と考える時、神はそれらを別様にし、変化させる。(三二─三三)木材によって木材を、石によって石を、鉄によって鉄を、非精神的なものによって非精神的なものを断つように、聖なる神、自存者、曾祖父は、幻力を用いて、生類によって生類を滅ぼす。(三四─三五)聖なる神は欲するがままに、結びつけたり離したりして、子供が玩具で遊ぶように、生類を用いて遊んでいる。(三六)創造者は生類に対し、父母のようにふるまうものではない。普通の人のように、怒りにかられて行動するかのようです。(三七)気高くて徳性の高い謙虚な人々が生活に苦しみ、卑しい人々が幸福なのを見ると、考えこんで当惑してしまいます。(三八)あなたのこのような不幸と、スヨーダナの繁栄を見るにつけ、プリターの息子よ、この不正を見逃している創造者を私は非難します。(三九)気高い聖典から逸脱し、残酷で貪欲で、法(ダルマ)を滅ぼす者であるドリタラーシトラの息子に富貴を与えて、創造者はいかなる果報を得るというのでしょう。(四〇)もしなされた業がその行為者に従い、他のものに行かないなら、必ずや主宰神は、彼がなした悪業で汚れるでしょう。(四一)また、もしなされた悪しき業がその行為者に行かないなら、この世で力のみが拠り所となる。私は無力な人々を哀れみます。(四二)」

(第三十一章)

ユディシティラは言った。

「ヤジュニャセーニー(ドラウパディー)よ、お前の言った言葉は魅力的であり、驚異的であり、繊細である。しかと承った。しかし、お前は無信仰なことを言っているのだ。(一)王女よ、私は法(ダルマ)の果報を欲して行動しているのではない。与えらるべきであるから与えるのである。祭祀を行なうべきであるから行なうのである。(二)クリシュナーよ、果報があろうとなかろうと、家に住む人がなすべきことを、力の限り行なうのである。(三)美しい尻の女よ、私は法の果報のために法を行なうのではない。伝統(聖典)を逸脱しないため、善き人々の行為を考慮して行なうのである。クリシュナーよ、私の心は本性からして法のみに専念している。(四)法を乳しぼろうとする者は、法の果報を得ない。また、それを行なっても疑う不心得者は、無信仰の故に、果報を得ない。(五)批判により、また迷いにより、法を疑ってはならぬ。法を疑う人は畜生道に堕ちる。(六)法や聖仙の語(ヴェーダ)を疑う愚者は、従僕(シュードラ)がヴェーダを得られぬように、不老不死の世界を得られないであろう。(七)誉れ高い女よ、良家に生まれ、ヴェーダを学習し、法に専念する人は、法を行なう王たちにより、長老のうちに数えあげらるべきである。(八)聖典に背き、法を疑う愚者は、従僕や盗賊よりも悪い。(九)お前は現に、苦行を積み限りなく高邁な聖仙マールカンデーヤが、法によって長寿に達したのを見たであろう。(一〇)ヴィヤーサ、ヴァシシタ、マイトレーヤ、ナーラダ、ローマシャ、シュカ、及

びその他の思慮深い聖仙たちは、まさに法によって目的を成就した。(一一) お前は現に、彼らが神聖なヨーガをそなえ、呪詛と恩寵の能力を持ち、神々よりも優れているのを見ている。(一二) 現に聖典に説かれた知性をそなえた、神にも等しい彼らは、まず法のみが実行されるべきであると常に私に語っている。(一三) それ故、美しい女よ、激情に心を迷わせて、創造者や法を非難したり疑ったりしてはならぬ。(一四)」（第三十二章）

ドラウパディーは言った。

「ユディシティラよ、私は決して法を軽んじたり非難しているのではありません。どうして私が、造物主である創造者を軽んずるでしょうか。(一) バーラタ（バラタ族の王）よ、私は悩んでこのように愚痴を言っているのです。私はもう少し愚痴を言いますので、どうか聞いて下さい。(二)

敵を滅ぼす人よ、この世に生まれた者は行動しなければなりませぬ。動かぬものは行動をしないで暮らせますが、他のものたちはそうはできません。(三) ユディシティラよ、母の乳を飲んでから〔死の〕床に入るまで、動物は行為によって生活します。(四) 動物のうちでも特に人間は、この世においても死後においても、行為によって生活します。(五) 一切の生類は前生の行為の余力を記憶（体験）します。そして世界の見ている前で、現にその諸行為の果報を享受します。(六) 生類は自己の行為の余力に従って生きると私は見ます。配置者(ダートリ)や制定者(ヴィダートリ)といえども、あの水中の鶴(バカ)と同じく、それに従って生きます。(七) 自己の行為（仕事）を行ないなさい。意気消沈してはいけません。行為で武装しなさい。実際、なすべきことを知っている人は、千人のうちに一人いるかいないかです。(八) そして、〔利益を〕増大し守るように行為を行なうべきです。種をまかずに食いつぶして行けば、ヒマーラヤ山ほどのものでも滅してしまいます。(九) もし行為を行なわなければ、すべての生類は滅びるでしょう。実りのない行為を行なっている人々を見かけることもありますが、行為を行なわないでは、この世で生活することは決してできません。(一〇) この世で、運命論者と日和見主義者（努力無用論者）との両者は最低です。行為に専念する人が讃えられるのです。(一一) 運命に従い、何もしないで安らかに眠っている愚者は、焼かれていない瓶が水中で沈むように沈むでしょう。(一二) 同様に、その能力があるのに行為しない日和見主義者も、身寄りのない弱者のように、長く座れず、長く生きられないでしょう。(一三)」(一四―五八略)（第三十三章）

ビーマセーナの怒り

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ドラウパディーの言葉を聞いて、短気なビーマセーナは怒ってため息をつき、王に近づいて告げた。(一)

「立派な人にふさわしい、法(ダルマ)にかなった王権への道を進みなさい。我々が法と享楽(カーマ)と実利(アルタ)

を失い、苦行林に住んで何になりましょう。(二) ドゥルヨーダナは合法的に、あるいは正直に、あるいは力によって我々の王国を奪ったのではありません。いかさま賭博を用いて奪ったのです。(三) 残飯をあさる弱いジャッカルがより強力な獅子の肉を奪うように、我々の王国を奪ったのです。(四) 王よ、あなたは一片の法におおわれて、法と享楽のもとである実利を投げ捨てて、どうして難所において苦しむのですか。(五) あなたに従って我々が見ているうちに、我々の王国は奪われました。それはガーンディーヴァ弓に守られて、シャクラ(インドラ)によっても奪われないのに。(六) 我々が生きているのに、あなたのために、我々から権力は奪われました。手のない人からビルヴァの実が、足の悪い人から牝牛が奪われるように。(七) バーラタよ、法の喜びを確信するあなたによかれと思って、我々はこのような大なる災いに達したのです。(八) バラタの雄牛よ、我々はあなたの命令のもとに自制した結果、自分の友人を苦しめ敵どもを喜ばせているのです。(九) あの時、あなたの命令を聞いて、あのドリタラーシトラの息子たちを殺さなかったのは間違いで、それが我々を苦しめています。(一〇) 自分が獣のような生活を送っているのを見なさい。王よ、それは勇士でない者の生活であり、力ある者の送る生活ではありません。(一一) クリシュナもアルジュナも、アビマニユもスリンジャヤ(ドリシタデュムナ?)も、私も、マードリーの双子も、そのような生活を喜びません。(一二) あなたは『法、法』と言って、常に誓戒でやつれています。王よ、絶望のあまり不能者のように生きるつもりではないでしょうな。(一三) というのは、劣った人々のみが、自分の富貴を取りもどすことができない場合に、実りのない、すべてを滅ぼす絶望を愛好するの

であるから。(二四) 王よ、あなたは洞察力があり、能力があって、自己の内に雄々しさを見るが、柔和さに専念するあまり、不利益に気づかないのです。(二五)

我々は忍耐しているのに、ドリタラーシトラの息子たちは、我々のことを無能力であると考えています。それは戦闘で死ぬよりもつらいことです。(二六) 我々は正々堂々と、不退転に戦って、全滅したほうがましです。死んでから〔天の〕諸世界を得ることができましょう。(二七) あるいは、バラタの雄牛よ、我々の方が彼らを殺して、すべての土地を取りもどすことができたら、我々にとっては更によいことです。(二八) あらゆる場合、次のことは我々の義務である。――自己の本務(ダルマ)を遂行すべきである。大きな名声を望むべきである。敵意に対しては報復すべきである。(二九) 他人によって王国が奪われ、なすべきことの性格が知られた時、自己のために戦う人々は、称讃されるのみで、非難されることはない。(三〇) 友人たちと自己とを苦しめるための法は災いです。王よ、それは法ではなく悪法です。(三一) 常に〔過度に〕法を守る人は法により無力となり、兄上、法と実利はそのような人を捨て去ります。苦楽が死者を捨て去るように。(三二) 法が法のためにその人を苦しめるなら、その人は賢者ではありません。その人は法の目的を知らないのです。盲人が太陽の光を知らないように。(三三)(三四—四三略)

あなたは法を知り、常に実行している。親しい人々は、あなたのうちに行為をうながす教令を知って称えている。(四四) 布施、祭祀、善き人々の供養、ヴェーダ聖典の受持、廉直。王よ、以上が最高の法であり、この世においても死後も実りあるものである。(四五) しかし

王よ、これは財産のない者には実行できないものである。人中の虎よ、もし他のすべての美質があったとしても……。（四六）王よ、世界は法に基づいている。法よりも優れたものは他にない。そしてその法は、多大な財産により実行可能である。（四七）そして財産は、乞食生活や臆病なことによっては決して得られない。常に法（務義）に専念することにより得られる。（四八）実際、バラモンがそれにより目的を成就する行乞は、あなたには禁じられている。人中の雄牛よ、威光により実利の追求に努力しなさい。（四九）乞食生活は〔王族にふさわしいと〕定められていない。また、実業者と従僕の生活も同様である。王族にとっては、特に武力が法である。（五〇）賢者たちは、法は高貴なものであると説く。高貴なものを得ようと努力しなさい。低きに甘んじてはいけない。（五一）

王中の王よ、目覚めなさい。あなたは永遠の法を知っている。あなたは人々が恐れる苛酷な行為をなすべく生まれたのだ。（五二）臣民を守ることによりあなたに生じた果報は非難されない。王よ、これが創造者によりあなたに定められた永遠の法である。（五三）ユディシティラよ、それから逸脱したら、世の笑い者となるであろう。というのは、人が自己の法（務義）からそれることは称讃されないから。（五四）心を王族にふさわしくして、その弱い心を捨てて気力を奮い起こし、荷を運搬する動物のように重荷を担いなさい。（五五）単に徳性あるだけの王が地上を征服したことはないし、繁栄や富貴を勝ち得たこともない。（五六）多くの貪欲な卑しい者たちに餌を与えて、猟師が食物を得るように、詐術を用いて王国を得るのである。（五七）パーンダヴァの雄牛よ、阿修羅たちは神々の兄であり、あらゆる点で栄えていたが、神々は詐術を用いて彼らを征服した。（五八）強力な王よ、このように力を有するものにすべてが帰すると知って、最高の詐術により敵を滅ぼしなさい。（五九）（六〇—七九略）

そこであなたはすべての装備をそなえた戦車に乗り、最高のバラモンたちに目的を成就させる祈禱を長く唱えさせて、まさに今日、急いで象の都（ハースティナプラ）へ行きなさい。武術に長けた屈強の弓取りである弟たち、毒蛇のような勇士たちに囲まれて。マルト神群に囲まれたインドラのように。（八〇—八一）強力なクンティーの長子よ、インドラが阿修羅に対するように、威光により敵どもを粉砕して、ドリタラーシトラの息子たちから富貴を奪いなさい。（八二）いかなる人間も、ガーンディーヴァ弓から放たれた、禿鷲の羽根のついた、毒蛇にも似た矢の接触に耐えることはできない。（八三）また、いかなる勇士も、象も良馬も、戦いにおいて怒った私の棍棒の衝撃に耐えることはできない。（八四）スリンジャヤとカイケーヤとヴリシュニの雄牛（クリシュナ）の援助により、我々が戦いにおいて王国を奪えないということがありましょうか。（八五）」　（第三十四章）

ユディシティラは言った。

「お前は私を悩ませる言葉の矢により私を傷つけるが、それは疑いもなく真実である。私はお前の無礼を非難しない。私の賭博によりお前たちに災難がふりかかったのだから。（一）私はドリタラーシトラの息子から王権と国土を奪いたいと望んで賭博をした。ところがあの邪

悪な博徒、スバラの息子（シャクニ）が、スヨーダナ（ドゥルヨーダナ）のために、私に挑戦した。(二)山地出身のシャクニは詐術（マーヤー）に長け、常に賭博場で多くの骰子を投じ、詐術によって詐術を知らない私に挑戦した。ビーマセーナよ、そこで私は憂き目を見た。(三)シャクニの望み通りになる奇数と偶数の骰子を見ても、私は自制することができるであろう。しかし、怒りは人の冷静さを滅ぼすものだ。(四)弟よ、雄々しさ（蛮勇）と高慢さと力量に囲まれていたら、自制することはできない。ビーマセーナよ、私はお前の言葉に怒らないが、すべてああなるべき運命であったと思う。(五)あのドリタラーシトラの息子である王子は、王国を望んで我々を不幸に陥らせた。ビーマセーナよ、そして我々を奴隷の状態に陥らせた。ドラウパディーが我々の寄る辺であった。(六)お前もアルジュナもよく知っている。再び賭博をするために我々が集会場に行った時、ドリタラーシトラの息子が、バラタ族の人々の見ている前で、賭けの条件として私に言ったことを。(七)

『アジャータシャトル王子よ、お前は十二年間、人に知られて、好きなように森に住み、更にもう一年間、人に知られず、弟たちとともに変装して隠れて暮らさねばならぬ。(八)もしバラタ族のスパイたちが、お前について聞き、どのように暮らしているかを知ったら、それからまた同じだけの年を過ごさなければならぬ。ユディシティラよ、決意してこのことを約束せよ。(九)王よ、もしうまく私の手のものを欺いて、その期間、スパイたちにより発見されなかったら、あの五河地方（パンジャーブ）はお前のものになろう。私はクル族の集会においてこのことを約束する。(一〇)そして、もし我々が敗れたら、私と弟たちはみな、諸楽を捨てて

〔同じようにその〕期間を過ごすであろう。』

以前、あの王子は、クル族の集会の中でこのように告げた。私は『承知した』と彼に答えた。(一一)我々にとっては最悪の賭博が行なわれ、敗れた我々はみなして亡命した。我々は惨めな姿で、このように国々や難儀な森をさまよっている。(一二)スヨーダナは平和を望まず、なおも怒りに支配されている。彼はクルの人々と、その支配下にある人々すべてをかりたてている。(一三)立派な人々のもとで条約を定めたのに、誰が王国のためにそれを破ることができようか。法（ダルマ）を無視して地上を支配するなど、貴人（アーリヤ）にとっては、死ぬことよりもひどいことだと思う。(一四)あの賭博において、お前が私の両腕を焼こうとしてアルジュナに止められて棍棒を握りしめた時、もし勇猛な行為を行なっていたとしたら、あの悪しき行為はあったであろうか。(一五)あの約定を交わす前に、知っていながら何故このように雄々しい言葉を言わなかったのか。適切な時を得ながら、何故後になって、今、時機を失してそのように言うのか。(一六)ビーマセーナよ、毒液を飲んで焼かれるように、私の苦しみは更にひどくなった。というのは、ドラウパディーが引きずられるのを見ても、それを容認したのだから。(一七)今は何もできない。クルの勇士たちの間で約束したことを果たして、幸福の訪れる時を待て。種まく人が実の熟するのを待つように。(一八)以前に詐術により欺かれた人が、敵意が花と実をつけるのを知って、雄々しい行為により最高の成果を収めれば、そのような勇士は人間界において真に生きることになる。(一九)そういう人はこの世界においてすべての繁栄を手に入れる。敵といえども彼に頭を下げると思う。友人は愛情をこめて彼を

愛する。そして神々がインドラに依存して生きるように、彼らは彼に依存して生きる。(二〇)私の約束は真実であると知れ。私は不老や生命よりも法を選ぶ。王国、息子、名声、財産はすべて、真実の十六分の一にも価しない。(二一)」(第三十五章)

ビーマセーナは言った。

「あなたは死の神カーラ（時間、破壊神）と条約を結んでいる。カーラは矢のように過ぎ（生命を奪い）、終わることなく計り知れず、すべてを運び去る激流である。(一)大王よ、死すべきもの（人間）であるあなたは、カーラに支配され、水泡のごときものであり、果実のようなもの（すぐに落ちて滅びるもの）であって、カーラが現前していることを知っている。(二)クンティーの息子よ、アイシャドーの粉末が針（アイシャドーを塗る筆）によって減少するように、その寿命が一瞬一瞬減少する人が、どうして待つ必要があろう。(三)無量の寿命を持つ人か、またはその量を知る人なら、すべてを直接に見ることができ、時を待つことができよう。(四)王よ、我々が十三年間待っているうちに、カーラは我々の寿命を減少させ、我々を死にいざなうであろう。(五)というのは、体を持つものたちの体には、常に死が宿っているから。それ故、我々は死ぬ前に王国を求めて努力しよう。(六)恨みを晴らさないで、名声に達することなく、影が薄く、単に大地の肥やしのような人は、牛のように（泥に）沈み込む。(七)気力も努力もなく、恨みを晴らさぬ人は、生まれ損ないで、彼の生は不毛であると私は思う。(八)王よ、あなたの両腕は

黄金でできている。名声もある。合戦において敵を殺し、腕で勝ち得た富を享受せよ。(九)敵を制する王よ、もし男が詐術を行なった者を殺して、すぐに地獄へ行ったとしても、そこは彼にとって天国に等しい。(一〇)

実に怒りから生じた苦熱は火よりも輝く。私はそれに燃やされて、夜も昼も眠れない。(一一)ここにいる最高の弓取りであるアルジュナも、きっとその寝所でこの上なく燃えているのだ。(一二)彼は一人で、この世におけるすべての弓取りを滅ぼすことができるが、その彼が、巨象のように、心に生ずる熱を抑えているのだ。(一三)ナクラとサハデーヴァと、勇士の母である老母は、あなたの幸福のみを願って、聾唖者のように座っている。(一四)すべての親族も、スリンジャヤの人々も、みながあなたの幸福を望んでいる。ただ私とプラティヴィンディヤの母（ドラウパディー）だけが怒っている。(一五)しかし、私が言うことはすべての人にとって好ましいことである。すべての人が不幸に陥り、戦いを望んでいるから。(一六)王よ、これ以上悪いことがあろうか。卑しくて力の弱い者たちが我々の王国を奪い、享受していることほど。(一七)王よ、あなたは徳性を損なうこと（約束を破ること）を恥じて、優しさから苦悩に耐えている。だが他の人は誰も讃えはしない。(一八)あなたは慈悲深く、バラモンのようである。どうして王族（クシャトラ）に生まれたのか。実にこの（王族の）胎内には、大概の場合、苛酷な気性の人々が生まれるものだ。(一九)あなたは、王法（ラージャダルマ）は苛酷で詐術に満ち、静寂な性質のものではないと、マヌが語ったのを聞いたはずだ。(二〇)人中の虎よ、行動すべきであるのに、どうして足の悪い人のように座っているのか。あなたは知性と気力と学識と生まれにめぐま

れているのに。(二一) 我々を隠そうと望むなどということは、一握りの草でヒマーラヤを隠そうと望むようなことだ。(二二) 地上において高名なあなたは、天空における太陽のように、隠れて人に知られず生活するなどということはできない。(二三) またアルジュナも、湿地における枝と花と葉のある巨大なシャーラ樹のように、また白象のように、どうして人に知られず生活することができよう。(二四) また、この獅子のような双子の兄弟ナクラとサハデーヴァも、どうして隠れて生活できよう。(二五) また、清らかな名声を持つ王女ドラウパディー、勇士たちの母である高名なクリシュナーも、どうして人に知られず生活できよう。(二六) そして王よ、これらの臣民は子供に至るまで私のことを知っている。私が人に知られず生活するなど、メール山を隠そうとするようなものだ。(二七)

それに、我々が国土から追い払った大勢の王や王子たちは、ドリタラーシトラに忠誠を誓っている。(二八) 追い払われた彼らは、恨みを忘れることなく、彼を喜ばせるために必ずや我々に害をなそうとするであろう。(二九) 彼らは隠れた我々に対して、大勢のスパイを用いるであろう。そして我々を発見して報告するであろう。それは我々にとって非常に危険なことだ。(三〇) 我々は森でまる三カ月間過ごした。それだけの月をそれだけの年とみなしなさい。(三一) 賢者たちは、月は〔年の〕代用になると説く。プーティカー草がソーマの代用になるように。(三二) あるいは王よ、よい荷物を運ぶよい雄牛に十分な食物を与えることによって、一つの罪（約定を破るという罪）から逃れることができる。(三三) それ故、王よ、敵を殺す決意をしなさい。すべての王族にとって、戦闘の他に法(ダルマ)はない。(三四)」

（第三十六章）

聖者ヴィヤーサの教え

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

ビーマセーナの言葉を聞くと、クンティーの息子であり、敵を苦しめる人中の虎ユディシティラは、ため息をついて考えこんだ。(一) 彼は少しの間考えてから、なすべきことを決断して、すぐにビーマセーナに告げた。(二)

「バラタ族の勇士よ、お前の言う通りだ。だが、雄弁なる者よ、私の言葉もわかって欲しい。(三) ビーマセーナよ、単なる無謀さから企てられた悪しき行為は苦をもたらす。(四) よく協議され、よく努力され、よく行なわれ、よく考慮された時、ものごとは成就する。そしてこの場合、運命は好意的である。(五) しかるに、お前は単なる軽はずみから、自ら力に慢心して増長し、そのような行動を企てるべきだと考えている。しかし、私の言うことを聞きなさい。(六)

プーリシュラヴァス、シャラ、強力なジャラサンダ、ビーシュマ、ドローナ、カルナ、強力なドローナの息子、ドゥルヨーダナをはじめとする不屈のドリタラーシトラの息子たち、彼らはみな、いつも武器の準備をして身構えている。(七―八) 我々に苦しめられた諸王や諸侯は、カウラヴァの味方になって、今や彼らに愛着を抱いている。(九) 彼らは我々にではなく、ドゥルヨーダナのためになることに専念し、彼らの宝庫は満ちあふれ、力をそなえ、守るこ

とに努力するであろう。（一〇）カウラヴァ軍のすべての勇士たちは、息子や郎党や兵士たちとともに、いたるところで配当や特典を分ち与えられている。（一一）ドゥルヨーダナはそれらの勇士たちを特別に尊重しているので、彼らは合戦において進んで生命を捨てるであろうと確信する。（一二）ビーシュマやドローナやクリパが我々と彼らに対して公平であるとしても、必ずや王から受けた禄に対して恩を返さねばならぬと思う。それ故、彼らは合戦において、捨てがたい生命をも捨てることであろう。（一三―一四）彼らはみな神的な武器に通じ、法（ダルマ）に通達していて、インドラに率いられる神々にすら敗れることはないと思う。（一五）彼らのうちの勇士カルナは、猛々しく、常に勇み立ち、すべての武器に通じ、無敵で、貫くことのできない鎧におおわれている。（一六）これらの最高の人々を戦いにおいてすべて破らなければ、盟友のいないお前はドゥルヨーダナを殺すことはできない。（一七）狼腹よ、すべての弓取りを凌駕する御者（スータ）の息子（カルナ）の手練の業を考えていると、ろくに眠ることもできないのだ。（一八）」

この言葉を聞いて、ビーマセーナは大いに怒り、失望してふるえ、何も言わなかった。（一九）パーンドゥの二人の息子がこのように論争していた時、サティヤヴァティーの息子である偉大なヨーギンのヴィヤーサが訪れた。（二〇）彼が近づくと、パーンダヴァたちは作法通りに敬意を表した。雄弁なヴィヤーサは、ユディシティラに次のように告げた。（二一）

「勇士ユディシティラよ、私は洞察力によりお前が心に思うところを知って、急いでやって来たのだ。（二二）お前の心には、ビーシュマ、ドローナ、クリパ、カルナ、ドローナの息子に対する恐怖が存するが、私は儀軌に見られる方法によりそれをなくしてやろう。それを聞いて平静さを取りもどし、行為により〔目的を〕実現しなさい。（二三―二四）」

それから、雄弁なパラーシャラの息子（ヴィヤーサ）はユディシティラを一隅に連れて行き、次のような意味深いことを述べた。（二五）

「バラタ族の最上者よ、お前に最高の時が訪れるであろう。アルジュナは戦闘において敵を征服するであろう。（二六）私の告げる、成就が体現したかのような明呪（ヴィディヤー）を受け取れ。私に寄る辺を求めるお前に「想起（プラティスムリティ）」という明呪を告げる。〔お前から〕それを受けて、勇士アルジュナは、目的を達成するであろう。（二七）武器を求めて、彼は、大インドラ、ルドラ（シヴァ）、ヴァルナ、財主（クベーラ）、ダルマ・ラージャのもとに行くべきである。実に彼は苦行と勇武により神々に会うことができる。（二八）彼はナーラーヤナと並ぶ、威光に満ちた古の聖仙（リシ）で、永遠の神であり、恒常なるヴィシュヌの部分である。（二九）

勇士アルジュナは、インドラとルドラと世界守護神たちから武器を受け取って、偉大な業績をあげるであろう。（三〇）クンティーの息子である王よ、この森から出て、他の住むにふさわしい森を探しなさい。（三一）というのは、一カ所に長く住むことは喜ばしいことではなかろう。また、寂静なる苦行者を不安がらせることであろう。（三二）それは獣を消費し、蔓草や植物を滅ぼすことだ。あなたはヴェーダとヴェーダの補助学に通じた多くのバラモンを養っているから。（三三）」

ヨーガの真実を知る聖者は、寄る辺を求める清浄なユディシティラにこのように告げて、

最高の秘法の明呪(ヨーガヴィディヤー)を教示した。(三四) それから、サティヤヴァティーの息子である賢者ヴィヤーサは、ユディシティラに別れを告げ、その場で姿を消した。(三五)

徳性ある聡明なユディシティラは心を抑制し、何度も実修してその聖句(ブラフマン)を記憶した。(三六) 彼はヴィヤーサの言葉に喜び、ドゥヴァイタヴァナの森を出て、サラスヴァティー河畔のカーミヤカという森へ行った。(三七) ヴェーダの発声法を知る、苦行を積んだバラモンたちが彼に従って行った。聖仙たちが神々の王(インドラ)に従うように。(三八) それから偉大なバラタの雄牛たちは、カーミヤカに着くと、仲間と従者たちとともにそこに住んだ。(三九) 弓のヴェーダ(兵学)に通じた思慮深い勇士たちは、最高のヴェーダを聞きながら少しの間そこに滞在した。(四〇) 彼らはいつも狩猟をして、清浄なる矢で鹿を求め、規定のごとく、祖霊、神々、バラモンたちを供養した。(四一)　(第三十七章)

アルジュナ、インドラ神に会う

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

しばらくして、ユディシティラは聖者(ヴィヤーサ)の教えを思い出して、人のいないところで、聡明なアルジュナに敬意を払い、微笑し、手に触れて、次のように告げた。(一―二) すなわち、敵を制するダルマ王は、少しの間森の生活について考えてから、密かにアルジュナに言った。(三)

「ビーシュマ、ドローナ、クリパ、カルナ、ドローナの息子たちには、四足(しそく)(四部)よりなる弓のヴェーダが確立している。(四) 彼らは梵天の武器(ブラフマー)、神々と阿修羅(アスラ)の武器の使用法と対処法を、またその他のすべての武器の使用法をすべて知悉している。(五) ドリタラーシトラの息子は、彼らすべてにおもねり、配当を出し、満足させて、彼らを師匠(グル)と仰いでいる。(六) すべての兵士たちに対する彼の行動は、常に最高である。彼らは尊敬され、時至ればその力を発揮するであろう。(七) 今やこの全大地はドゥルヨーダナの支配下に帰した。我々はお前が頼りである。お前に重責がかかっている。敵を制する者よ、今やなすべきことをやる時が来たと思う。(八) 弟よ、私はクリシュナ・ドゥヴァイパーヤナ(ヴィヤーサ)から秘説を伝授された。その秘説を用いれば、全世界がまさに顕現するであろう。(九) 弟よ、その聖句(ブラフマン)を身につけ、よく精神を統一し、ふさわしい時に神々の恩寵を受けなさい。(一〇) バラタの雄牛よ、激しい苦行に専念せよ。弓を持ち鎧を着て剣を持ち、隠者(ムニ)(のように)(沈黙して?)、剛毅に、誰にも道を譲ることなく、北方へ行きなさい。(一一) アルジュナよ、すべての神聖な武器はインドラのもとにある。あの時、ヴリトラを恐れた神々は力をインドラに与えた。一カ所にあるそれらすべての武器をお前は得るであろう。(一二) シャクラ(インドラ)のもとに行きなさい。お前に武器を授けてくれるだろう。まさに今日、潔斎して、インドラ神に会いに行きなさい。(一三)」

ダルマ王(ユディシティラ)はこのように言ってから、潔斎して言葉と身体と心を制御した彼に明呪を教示した。そして、兄は勇敢な弟に別れを告げた。(一四) 勇士アルジュナは、ダルマ王

の命により、ガーンディーヴァ弓と無尽の矢の入った大箙［えびら］を持ち、鎧を着て、弓籠手［ゆごて］と弓懸［ゆがけ］をつけ、火に供物を投じ、金貨を布施してバラモンから祝福の言葉をもらって、インドラ神に会うために出発した。（一五―一六）勇士は弓をとって息を吐き、上方を見て、ドリタラーシトラの息子を殺すために出発した。（一七）アルジュナが弓をとったのを見て、バラモンやシッダ（半神の一種）や姿の見えない霊たちは言った。

「クンティーの息子よ、あなたは速やかに心願を達成するであろう。（一八）」

アルジュナがシャーラ樹の幹のような腿をして、獅子のように進んで行く時、クリシュナー（ドラウパディー）は、みなの心を受けて、次のように告げた。（一九）

「勇士アルジュナよ、あなたが生まれた時クンティーが望んだことと、あなたが自ら望んだことが、すべてその通りになりますように。（二〇）我々のうちの誰も、再び王族［クシャトリヤ］の家に生まれませんように。戦いを生業［なりわい］としないバラモンたちに常に敬礼します。（二一）あなたのすべての兄弟たちは、必ずや、あなたのことを語って夜を徹して楽しむでしょう。勇猛な行為を繰り返し称讃して。（二二）しかしアルジュナよ、あなたが長らく不在であれば、私たちは享楽にも、財産にも、生命にも、満足を感じることはないでしょう。（二三）我々みんなのすべての苦楽、生と死、王国と権力はあなたにかかっています。アルジュナよ、さようなら。御機嫌よう。（二四）配置者［ダートリ］と制定者［ヴィダートリ］に敬礼します。幸せに、息災で行かれますよう。空中と地上と天に住む鬼霊たち、またその他の道中を妨げるものたちから無事でありますように。（二五）」

それから、勇士アルジュナは、兄弟たちとダウミヤの周囲を右まわりにまわって敬礼し、輝かしい弓を持って出発した。（二六）インドラに至るヨーガ（秘法）をそなえた、勇猛で強力な彼が進む時、すべての生類はその道から退去した。（二七）誇り高いアルジュナは、聖なる山にたった一日で到達した。ヨーガに専心した彼は、風のように、思考のように速く進むことができたのである。（二八）彼はヒマーラヤとガンダマーダナ山を越え、昼も夜も怠ることなく、諸々の難所を越えて行った。（二九）アルジュナはインドラキーラに着いて立ち止まった。「止まれ」という言葉が虚空から聞こえてきたからである。（三〇）それからアルジュナは、樹の根もとに、一人の苦行者を見出した。その男は、バラモンの光輝で輝き、黄色で、髪を編み、やせ細っていた。（三一）偉大な苦行者はそこに立っているアルジュナを見て言った。

「ここに来たお前は何者か。わが子よ、お前は弓矢を持ち、鎧を着て、剣と弓籠手［ゆごて］を帯び、王族［クシャトラ］の法［ダルマ］に専念している。（三二）ここでは武器は必要ない。ここは、怒りと喜びを離れた、寂静なるバラモンの苦行者の住処である。（三三）ここでは弓は必要ない。また戦闘の必要は全くない。わが子よ、その弓を捨てなさい。お前は最高の帰趨に達した。（三四）」

バラモンは無限の力を持つ勇士に対して、あたかも他の一般の人に対するように、このように繰り返し告げた。しかし、固く決意している彼の平静さを乱すことはできなかった。（三五）するとそのバラモンは、笑って彼に言った。

「どうか願いごとを選ぶがよい。敵を殺す勇士よ、私はシャクラ（インドラ）である。（三六）」

このように言われて、クル族の勇士アルジュナは、合掌し礼拝して千眼者（インドラ）に答えた。

「私は次のような願望を抱いています。私の願いをかなえて下さい。神よ、今日、私はあなたからすべての武器を学びたいのです。(三七)(三八)」
　大インドラは満足し、笑って彼に答えた。
「アルジュナよ、ここに到達したお前にとって、どうして武器が必要であるのか。諸々の享楽と諸々の世界（天界）を選べ。お前は最高の帰趣に達した。(三九)」
　そう言われて、アルジュナは千眼者に答えた。
「神々の主よ、私は諸々の世界や諸々の享楽や神の位を望みません。どうして快楽を望みましょう。また、一切のものたちに対する主権も望みません。あの兄弟たちを森の中に捨て、恨みを晴らさなければ、私は永遠に、一切の世界において悪名を得ることになるでしょう。(四〇—四一)」
　そう言われて、全世界で敬礼されるインドラは、優しい言葉でパーンドゥの息子を慰めて、次のように告げた。(四二)
「わが子よ、もしお前が三眼の鬼霊（ブータ）の主（または「生類の主」）、三叉の槍を持つシヴァを見たら、その時、神的な武器をすべてお前に授けるであろう。(四三)あの最高の神に会えるよう努力せよ。クンティーの息子よ、彼に会えばお前は目的を成就し、天界へ行くであろう。(四四)」
　インドラはアルジュナにそう告げると、姿を消した。アルジュナの方は、ヨーガに専念して、その場にとどまっていた。(四五)　（第三十八章）

アルジュナとシヴァ神の戦い

　ユディシティラの命令により、無量の勇猛さをそなえたアルジュナは、神々の主シャクラ（インドラ）と、神のうちの神であるシャンカラ（シヴァ）に会いに出かけた。（一―九略）(一〇)人中の雄牛である強力な勇士アルジュナは、目的を成就するために、弓と剣を持ち、北方、ヒマーラヤの峰をめざして行った。(一一)全世界に並ぶものなき偉大な戦士である、この意志強固なインドラの息子は、決意も堅く、苦行に専心し、たった一人、大急ぎで恐ろしい茨の森に入った。(一二)その森には種々の花と果実があり、種々の鳥が住み、種々の獣に満ち、シッダやチャーラナ（いずれも半神族）が住んでいた。(一三)アルジュナが人気（ひとけ）のない森に入った時、法螺貝と太鼓の音が天空に鳴り響いた。(一四)大量の花の雨が大地に降った。雲の群が広く、いたるところをおおった。(一五)アルジュナは大山の付近の森や難所を越えて、ヒマーラヤの峰に住んで輝いていた。(一六)彼はそこで、花咲き鳥が甘美にさえずる樹々を見た。また、激しく渦巻く青い瑠璃に似た川を見た。(一七)その川では、ハンサ（鵞鳥の一種）やカーランダヴァ鳥の鳴き声が響き、サーラサ鳥、雄のコーキラ鳥、クラウンチャ鳥、孔雀が鳴いていた。(一八)勇士アルジュナは、魅力的な森をともない、清浄で冷い水をたたえたその川を見て、心から満足した。(一九)その時、激しい威光を持つ誇り高いアルジュナは、その心地よい森の場所で楽しみつつ、激しい苦行を行なった。(二〇)彼はダルバ草の衣をまとい、杖と鹿皮に飾ら

れ、三夜が過ぎるごとに（四夜ごとに）木の実を食べて、一カ月を過ごした。そして、六夜が過ぎるごとにそれを食べて、第二カ月目を過ごした。（二一）それから、十四日目ごとに食事をして、第三カ月目を過ごした。地に落ちて朽ちた葉を食べながら……。（二二）それから満四カ月目になった時、勇猛なパーンドゥの息子は、風を食べ（断食して）、上方に腕をあげ、何の支えもなく、足の親指の先で立ったままでいた。（二三）無量の力を持つ偉大な彼の、稲妻か蓮のような編髪が、常に彼に触れていた。（二四）

そこですべての大仙たちはシヴァ神のところへ行き、その青黒い頸をした聖なる神に対して平伏し、その恩寵を求めて、アルジュナの行為を報告した。（二五）

「あの大威光を有するプリターの息子は、ヒマーラヤの頂に住み、諸方を煙らせて、激しい難行苦行を行なっています。（二六）神々の主よ、我々は誰も彼の意図を知りません。彼は我々すべてを悩ませます。どうか制止して下さい。（二七）」

偉大な主は告げた。

「満足して急いで引き返しなさい。私は彼の心中の願望を知っている。（二八）彼は天界へ行く望みもまったくないし、権力や長寿の望みもない。まさに今日、私は彼の望みをすべてかなえてやろう。（二九）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

真実を語る聖仙たちは、シヴァの言葉を聞くと、心から喜んで、再び自分たちの隠棲所へ

帰って行った。（三〇）

（第三十九章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

すべての偉大な聖仙たちが去った時、ピナーカ槍を持ち一切の罪悪を除去するハラ（シヴァ）神は、黄金の樹にも似たキラータ（狩猟などで生活する部族民）の身なりをして、メール山のように、その体によって輝いていた。（一・二）彼は輝かしい弓と毒蛇のような矢を持って、大いに光り輝いて、草を燃やす火のようにその森に降下して来た。（三）輝かしい彼は、同じ生業（キラータ）の身なりをした妃のウマーと、様々な身なりをした鬼霊たちをともなっていた。（四）キラータの衣装に身を包み、幾千となく女たちを連れて、その神はこよなく輝いていた。（五）その時、その森全体は、即座に静寂に包まれた。流れの音と鳥たちの声がやんだ。（六）彼は汚れなき行為のアルジュナのそばに行くと、驚くべき姿をしたムーカという名のディティの息子（ダイティヤ・悪魔）がいるのを見つけた。（七）その悪魔は、猪の姿をとって、アルジュナを殺そうと望んでいるようであった。心正しいアルジュナはその敵に告げた。（八）ガーンディーヴァ弓と毒蛇のような矢をとり、そのすばらしい弓に弦を張り、弦の音を響かせつつ……。（九）

「お前はここに来た罪もない私を殺そうと望んだから、先にお前をヤマ（閻魔）の住処に送ってやろう。（一〇）」

キラータの姿をしたシヴァは、剛弓を持つアルジュナが矢を射ろうとしているのを見て、

突然彼を制止した。（一一）

「この黒雲のような奴を、俺が先に射ろうとしたのだ。」

アルジュナはその言葉を無視して矢を射た。（一二）光輝に満ちたキラータも、同時に、雷か火炎のような矢をその同じ的に放った。（一三）両者の放った矢は、山のように堅固で大きなムーカの体に、同時に命中した。（一四）両者の矢は、雷と金剛杵（ヴァジュラ）が山を砕くように、同時に的に落ちた。（一五）猪は蛇のような燃える口を持つ多くの矢に射貫かれ、もとの恐ろしい羅刹の姿をとって死んだ。（一六）

それからアルジュナは、その金色に輝く男を見た。彼はキラータの身なりをし、女たちを連れていた。アルジュナは心中喜んで、笑って彼に言った。（一七）

「女性の群に囲まれて人気（ひとけ）のない森を歩きまわっているあなたは誰か。金色に輝く方よ、あなたはこの恐ろしい森で怖くないのか。（一八）あなたは何故、私のものであるこの獣を射たのか。私が先にここに来たこの羅刹を獲物としたのに。（一九）それが気まぐれからであるにせよ、私を軽蔑するためであるにせよ、私から生きて逃れることはできない。あなたが今、私に対してしたことは狩猟の法（ダルマ）に反することだ。山に住む者よ、それ故、私はあなたの生命を奪う。（二〇）」

アルジュナにそう言われると、キラータは笑って、優しい声でアルジュナに告げた。（二一）

「この獲物は俺が先に的とした。そして、俺の射撃によって死んだ。（二二）お前は自己の力に自惚れて、自分の過失を他人のせいにしてはいけない。俺は侮辱された。愚か者、お前は私から生きて逃れることはできない。（二三）覚悟せよ。俺は雷のような矢を放つから。全力をあげて努力せよ。お前も矢を放て。（二四）」

そこで両者は激して何度も叫び声をあげ、毒蛇のような矢によって攻撃し合った。（二五）アルジュナはキラータに矢の雨を注いだ。シヴァはそれを平静に受け止めた。（二六）シヴァは少しの間矢の雨を受けたが、不動の山のように、無傷の体で立っていた。（二七）アルジュナは矢の雨が無駄になったのを見て、最高に驚嘆して、「見事だ、見事だ」と告げた。（二八）

「ああ、このヒマーラヤの峰に住む非常に華奢な体つきの男が、ガーンディーヴァから放たれた矢を受けても平然としているとは。（二九）彼は何者なのか。神であろうか。ルドラ（シヴァ）自身であろうか。夜叉（ヤクシャ）であろうか。神々の王であろうか。この最高の山には、実際に神々が集まって来るものであるから。（三〇）私が放った幾千の矢の勢いに耐えることができるものは、ピナーカ槍を持つ神（シヴァ）を除いて他にいない。（三一）もしここに立っているのが、ルドラ以外の神か夜叉であるなら、私は鋭い矢で彼をヤマ（閻魔）の住処に送ることができる。（三二）」

そこでアルジュナは勇み立って、急所に矢を幾百と放った。太陽が光線を放つように。（三三）世界を栄えさせる聖なる神は、満足してそれらの矢を受け止めた。山が石の雨を受けるように。（三四）あっという間に矢は尽きてしまった。アルジュナは矢が尽きたのを見て戦慄した。（三五）彼は以前あのカーンダヴァの森において彼に無尽の箙（えびら）を与えた火の神のこと

を思い浮べた。(三六)「私は弓で何を射ろうか。私の矢は尽きてしまった。ここにいる何者とも知れぬ男は、矢をすべて呑んでしまった。(三七) 私は槍の先端で象を攻撃するように、弓筈(ゆはず)で彼を攻撃して、杖(ダンダ)を持つヤマの住処に送ってやろう。(三八)」

勇猛なアルジュナは弓筈によって戦ったが、山の住人はその神聖な弓をつかまえた。(三九) 弓を取られたアルジュナは、刀を手にして立った。彼は戦闘の決着をつけたいと思い、激しくその男を攻撃した。(四〇) クルの王子は突進して、腕力にまかせて、山にあたっても鈍ることのないような鋭い刀を、彼の頭に打ち下ろした。その最高の刀は、彼の頭に当たると砕け散った。(四一) そこでアルジュナは樹木と岩石によって戦った。しかしその巨大な体の、キラータの姿をした聖なる神は、樹や岩石を受け止めた。(四二) それから、大力のアルジュナは、口から煙を吐きながら、金剛のような（異本による）拳により、キラータの姿をした不屈の神を打った。(四三) それから、キラータの姿をした神も、インドラの雷電のような非常に恐ろしい拳でアルジュナを打った。(四四) 戦うアルジュナとキラータの拳が衝突して凄まじい音が生じた。(四五) しばらくの間、身の毛のよだつような激しい拳闘が続いた。ちょうどヴリトラとインドラとの戦闘のような……。(四六) 大力のアルジュナはキラータの胸を打った（異本による）。キラータの方も動きまわるアルジュナを力まかせに打った。(四七) 両者が腕をぶつけあい、胸をぶつけあうと、彼らの身体に、赤い煙をともなう火炎が生じた。(四八) それから偉大な神は、彼の体をしっかりと握りしめ、怒って力をこめて攻撃し、彼の気を失わせた。

(四九) アルジュナは神の中の神であるシヴァにより体を握りしめられ、身動きできなくなり、団子のようにされてしまった。(五〇) 彼は偉大な神に抑えつけられ、息がつまり、気絶して倒れた。シヴァは満足した。(五一)

聖なる神は言った。

「おい、おい、アルジュナよ、私はお前の比類なき行為に満足した。勇猛さと堅忍さにかけて、お前に匹敵する王族(クシャトリヤ)は存在しない。(五二) 非の打ち所のない者よ、お前の威光と威力は私のそれに匹敵する。勇士よ、私はお前に満足した。人中の雄牛よ、私を見よ。(五三) 広大な眼を持つ者よ、私はお前に眼（天眼）を与えるべきだ。汝は古の聖仙(リシ)（ナラ）である。汝は戦闘においてすべての敵を征服するであろう。たとい相手が天人であっても……。(五四)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

こうしてアルジュナはそこに、槍を持つ山の主、光輝に満ちた偉大な神（マハーデーヴァ）、すなわちシヴァ神を、その妃とともに見た。(五五) 勇士アルジュナは大地にひざまずき、頭を地につけて平伏し、ハラ（シヴァ）に許しを乞うた。(五六)

アルジュナは言った。

「髪を結った者（カパルディン）よ、一切生類の主よ、バガの眼を奪った神よ、シャンカラよ、私の罪をお許し下さい。(五七) 神々の主よ、私は主にお会いしたいと願って、あなたの愛するこの最高の苦行者の住処である大山にやって来たのです。(五八) 一切生類に礼拝される神よ、

どうかお許し下さい。偉大な神よ、この非常に無謀な行為のために、私に罪がかかりませんように。(五九) シャンカラよ、庇護を求める私を許して下さい。(六〇)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

雄牛を旗標とする、威光に満ちた神は、笑ってアルジュナを許し、その輝かしい腕を取って告げた。(六一)

(第四十章)

アルジュナ、神々から武器を授けられる

シヴァ神は告げた。

「汝は前世の身体においてナラであり、ナーラーヤナを友としていた。汝はバダリーにおいて、何万年の間、激しい苦行を行なった。(一) 汝には、最高の神人ヴィシュヌにおけるように、最高の威光が存する。最高の神人である汝ら両名は、威光によって世界を維持する。(二) シャクラ(インドラ)の即位式において、汝は雷雲のように轟く大弓を持って、クリシュナとともに悪魔たちを退治した。(三) 最高の人物よ、私が幻力を用いて取ったこの弓が、汝の手にふさわしい、あれと同じガーンディーヴァである。プリターの息子よ、そしてこの汝にふさわしい無尽の箙を汝に返そう。(四) 不屈の勇者よ、私は汝に満足した。人中の雄牛よ、願いごとをかなえてやろう。(五) 誇り高き者よ、汝に匹敵する人物は人間のうちにはいない。

また天界にも存在しない。王族は汝を最上者とする。(六)」

アルジュナは言った。

「雄牛を旗標とする神よ、もし私に満足し、願望をかなえて下さるなら、主よ、私はあの恐ろしいシヴァの(パーシュパタ)神聖な武器を望みます。(七) それはブラフマシラス(梵頭)という凄まじい威光を持つ武器で、恐ろしい宇宙紀の終末が到来した時、全世界を滅亡させるものです。(八) それを用いて、戦闘において、私は悪魔、羅刹、鬼霊、ピシャーチャ鬼、ガンダルヴァ、蛇たちを焼き尽くします。(九) それが加持される時(異本による)、千の槍、恐ろしい形の棍棒、毒蛇のような矢が生じます。(一〇) 私はそれにより、ビーシュマ、ドローナ、クリパ、及び、常に粗暴に語るカルナと、戦場において戦うことができます。(一一) バガの眼を奪った神よ、これが私の第一の願いです。あなたの恩寵により目的を成就することができます。(一二)」

シヴァ神は告げた。

「私は愛用の偉大なシヴァの武器を汝に授けるであろう。パーンダヴァよ、汝はそれを保持し、放ち、回収することができる。(一三) 大インドラやヤマや夜叉王(クベーラ)やヴァルナやヴァーユ(風神)といえども、それを知らない。いわんや人間はどうして知ろうか。(一四) しかしプリターの息子よ、決して性急にこれを人間に対して放ってはならぬ。わずかの威光しか持たない者に落ちれば、それは全世界を燃やすであろう。(一五) 動不動のものよりなる三界において、これにより殺されないものはいない。それは、意向と眼と言葉と弓とにより発射される。(一六)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

それを聞いて、プリターの息子が速やかに身を浄め、心を統一して宇宙の主に対して平伏すると、神は「学べ」と告げた。（一七）それから神は、最高のパーンダヴァに、死神が体現したかのようなその武器と、その秘法とそれの回収法を学ばせた。（一八）その武器は、三眼のシヴァに奉仕するように、かの偉大な勇士に奉仕するようになった。アルジュナは喜んでそれを受け入れた。（一九）山、森、樹々、海、森の地域、村、都市、鉱山とともに大地は震動した。（二〇）その時が訪れた時、法螺貝や種々の太鼓の音が幾千となく響きわたり、大地震が起こった。（二一）その時、神々や悪魔たちは、その燃え上がる恐ろしい武器が、無量の力に満ちたアルジュナのかたわらに、体をとって立っているのを見出した。（二二）シヴァがアルジュナに触れると、身体の中にある汚れはすべて消滅した。（二三）その時シヴァは、「天界へ行け」と言ってアルジュナに別れを告げた。アルジュナは合掌し、敬礼して、神を見つめていた。（二四）

それから、神々の支配者、大慧者、山の主、ウマーの夫、シヴァ、バヴァは、大弓ガーンディーヴァを、悪魔とピシャーチャ鬼の殺戮者である最高の人物に返した。（二五）それからシヴァは、ウマーとともに、白い山腹と尾根と峡谷のある、鳥や偉大な聖仙たちの住む美しい聖山を発って、アルジュナが見ているうちに天界へ去って行った。（二六）

（第四十一章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

ピナーカ槍を持ち、雄牛の旗標を持つ神は、彼の見ている前で消失した。太陽が世人の見ている前で沈むように。（一）勇士アルジュナは、「私は直々に偉大な神（マハーデーヴァ）を見た」と、この上なく驚嘆した。（二）「私は幸運だ。有難いことだ。私は直々に偉大な神を見た。私は望みをかなえる、ピナーカ槍を持つ三眼の神ハラの姿を拝み、手で触れたのであるから。（三）私は自ら自分が最高に目的を達成し、敵どもをすべて征服したも同然だと思う。私の意図は成就した。（四）」

それから、栄光に満ちた水の主ヴァルナ（水天）が訪れた。ヴァルナは瑠璃色をし、一切の方角を照らし、ヤーダス（海獣）の群に囲まれていた。（五）ヤーダスの主ヴァルナは、竜（蛇）や男女の河神や悪魔やサーディヤや神々に囲まれてその場を訪れた。（六）それから、光輝に満ちた天車に乗って、金色の体をして、夜叉たちを従えたクベーラ神（毘沙門天）が訪れた。（七）その非常に驚異的な姿をした栄光ある財富の主は、虚空を輝かせつつ、アルジュナに会うためにやって来た。（八）同様に、世界の滅亡をもたらす、栄光あるヤマ（閻魔）が、世界を栄えさせる、体を持つ、あるいは持たない祖霊（ピトリ）たちとともに、直々に訪れた。（九）杖（ダンダ）を持ち、不可思議な本性をして、一切の生類を消滅させる、そのヴィヴァスヴァット（太陽神）の息子ダルマ王は、天車に乗って三界とグヒヤカ（夜叉）とガンダルヴァと竜（蛇）たちを輝かせつつ、宇宙紀（ユガ）の終末の太陽のように近づいてきた。（一〇—一一）

それらの神々は、多彩に光り輝く大山の峰に到着して、そこで苦行を積んでいるアルジュナを見た。（一二）それからすぐに、アイラーヴァタ象の頭に乗った聖なるシャクラ（インドラ）が、

インドラーニー（インドラの妃）とともに、神々の群に囲まれてやって来た。（一三）その頭のところで支えられている白い傘により、彼はあたかも白雲におおわれた月のように輝いていた。（一四）彼はガンダルヴァや聖仙や苦行者たちに讃えられつつ、山の頂に到達して、昇る太陽のように立っていた。（一五）

その時、最高の法（ダルマ）を知る聡明なるヤマが、南の方角に位置を占め、雷雲のような音を出して、次のようなめでたい言葉を述べた。（一六）

「アルジュナ、アルジュナ、我々を見よ。世界守護神たちが集まって来たのだ。我々は今、汝に視力を授けよう。汝は我々を見るにふさわしいから。（一七）汝は限りなく高邁で強力なナラという古の聖仙である。わが子よ、汝は梵天の指令により気力と勇武にあふれた人間となり、インドラから生まれたのである。（一八）クルの王子よ、バーラドゥヴァージャ（ドローナ）に守られた、触れると火のように熱い王族、人間となった強力な悪魔たち、またニヴァータカヴァチャ族たちは、汝に征服されるであろう。（一九）ダナンジャヤよ、全世界を熱する、私の父である神（太陽）の部分である、非常に強力なカルナは、汝に殺されるであろう。（二〇）クンティーの息子よ、敵を滅ぼす者よ。地上に到達した、神やガンダルヴァや羅刹たちの部分は、戦闘において汝に殺されて、自己の業の結果として得た、それぞれの帰趨に赴くであろう。（二一）アルジュナよ、汝の不滅の名声が世界に確立するであろう。汝は現に激しい戦いにおいてシヴァを満足させたのであるから。そして汝は、ヴィシュヌとともに、大地の重荷を軽減させるべきである。（二二）勇士よ、抗しがたい武器である私の杖を受け取りなさい。

この武器により汝は偉大な行為をなすであろう。（二三）」

クルの王子アルジュナは、作法に従い、うやうやしくその武器と呪句とを受け取り、それを放ちまた回収する方法を習得した。（二四）それから、ヤーダスたちの主、雲のように黒いヴァルナ神は、西方に位置を占め、次のように告げた。（二五）

「プリターの息子よ、汝は最上の王族（クシャトリヤ）であり、王族の法（ダルマ）に専念している。広くて赤い眼をした者よ、私を見よ。私は水の主ヴァルナである。（二六）クンティーの息子よ、私は抗しがたいヴァルナの輪縄と、その秘法とそれの回収法を授けるから、受け取れ。（二七）私はこれにより、かつてターラカ（悪魔の名）を滅ぼす戦いにおいて、幾千の偉大な悪魔を縛った。（二八）それ故、気力に満ちた者よ、私の好意により贈られたこれらの武器を受け取れ。汝がそれで戦えば、死の神といえども逃れることはできない。（二九）汝がこの武器を持って戦場を歩きまわれば、疑いもなく地上には王族がいなくなるであろう。（三〇）」

ヴァルナとヤマが神聖な武器を授けた時、カイラーサ山に住む財富の主（クベーラ）は告げた。（三一）

「勇士アルジュナよ。永遠なる古の神よ。汝は前の劫（カルパ）において、常に我々とともに努力した。（三二）私からも、私の愛用のアンタルダーナという武器を受け取れ。敵を殺す者よ、それは敵の威力と威光と光輝を奪い、眠らせる。（三三）」

そこで、勇猛で強力なクルの王子アルジュナは、作法に従って、クベーラの神聖な武器を受け取った。（三四）それから、神々の王（インドラ）は、汚れなき行為のアルジュナに告げた。雷雲

のように轟く穏やかな声でねぎらいながら。(三五)

「勇猛なるクンティーの息子よ。お前は古の主であり、最高の成就に達し、現に神の道に達した。(三六) 敵を制する者よ、お前は非常に大きな神々の仕事をなさなければならぬ。輝きに満ちた者よ、お前は天界へ昇るべきである。準備しなさい。(三七) お前のためにマータリの操縦する戦車がやって来るであろう。そこで私は、お前に神々の武器を与えるであろう。(三八)」

クンティーの英邁な息子アルジュナは、山の頂に集合した世界守護神たちを見て驚嘆した。(三九) それから、威光に満ちたアルジュナは、集まった世界守護神たちを、言葉と水と果実によって、作法に従って供養した。(四〇) それから、すべての神々はアルジュナに答礼して、欲望や思考のように速く、来た道を引き返して行った。(四一) そして人中の雄牛アルジュナは、武器を入手して喜び、満足して、自己の目的は成就したと考えた。(四二) (第四十二章)

(32) アルジュナ、インドラの世界へ行く (第四十三章―第七十九章)

インドラの戦車に乗る

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

世界守護神たちが去った時、敵を滅ぼすアルジュナは、神々の王の戦車が来ることについて考えた。(一)英邁なアルジュナが考えているうちに、マータリに操縦される光輝に満ちた戦車がやって来た。(二)それは空の闇を払いつつ、雲を裂くかのようであり、大きな雷雲のような音響により諸方を満たした。(三)それには剣、恐ろしい槍、ぞっとする形の棍棒、神的な力をそなえた飛道具、輝きわたる稲妻が搭載されていた。(四)また、雷電、車輪のついた破城槌(疑問)、孔雀や雷雲のような音をたてる、突風を起こす送風器を搭載していた。(五)そこにはまた、燃える口をした、非常に恐ろしい、白雲の群のような、岩石のように堅固な、巨大な体をした竜たちがいた。(六)一万頭の風のように速い馬たちが、その眼を魅了する神聖な幻力よりなる戦車をひいていた。(七)そこに、輝きに満ちた、青蓮のように黒い濃紺のヴァイジャヤンタ旗と、黄金で飾られた旗竿が見られた。(八)

勇士アルジュナは、その戦車に立つ純金で飾られた御者を見て、まさしく神であると考えた。(九)アルジュナがそのように考えていると、マータリは礼儀正しくおじぎをして、彼に告げた。(一〇)

「おお、シャクラ(インドラ)の息子よ、栄光あるシャクラがあなたに会いたいと望んでいる。あなたは速やかに、このインドラ愛用の戦車に乗りなさい。(一一)あなたの父である神々の王インドラは私に言いました。『クンティーの息子をここに連れて来て、神々は彼と会うべきである』と。(一二)シャクラは神々や聖仙の群、ガンダルヴァや天女(アプサラス)たちに囲まれて、あなたに会いたいと待っている。(一三)あなたはインドラの命により、私とともにこの世界から神の世界に昇り、武器を得て再びもどって来なさい。(一四)」

アルジュナは言った。

「マータリよ、速やかに行け。幾百の皇帝即位式(ラージャスーヤ)や馬祀(アシュヴァメーダ)によっても容易には得られがたい、最上の戦車に乗れ。(一五)多くの謝礼を払って祭祀を催す、栄光に満ちた王たちも、神々も、悪魔たちも、この最高の戦車に乗ることはできぬ。(一六)苦行を行なわない者は、この神聖な偉大なる戦車を見ることも、それに触れることもできない。いわんや、どうして乗ることができよう。(一七)善き者よ、あなたが戦車に乗ってしっかりと立ち、馬たちが静まったら、その後で私が乗ろう。善行を積んだ人が善人の道に昇るように。(一八)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

彼の言葉を聞くと、シャクラの御者マータリは速やかに戦車に乗り、手綱で馬たちを制御した。(一九)それからクルの王子アルジュナは心から満足して、ガンガー川で沐浴して身を浄め、作法通りに祈禱を唱えた。(二〇)そして適切に作法通りに祖霊たちを満足させてから、山の王マンダラに別れを告げた。(二一)(二二―二五略)

それからアルジュナは、太陽のように照らしつつ、神聖な戦車に乗った。(二六) 聡明なクルの王子は喜んで、その太陽のような、神聖で驚嘆すべき戦車に乗って上方に昇って行った。(二七) 彼は地上を動く人間たちに見えない道を進み、驚嘆すべき天車（飛行体）を幾千と見た。(二八) そこでは太陽も月も火も輝いていなかったが、それらは功徳で得たそれら自身の輝きで輝いていた。(二九) それらは星々のように輝いていた。遠方にあるので、それらは灯火のように小さく見えたが、実は非常に大きいのであった。(三〇) アルジュナは、それらが輝かしく美しく、各自の場所で、自分の光によって輝いているのを見た。(三一) そこには目的を成就した王仙たち、戦いで殺された勇士たちがいた。彼らは苦行（功徳）により天界を獲得し、幾百の群をなして集まっていた。(三二) また、太陽や火のように輝くガンダルヴァたちや、グヒヤカ（いずれも半神）や聖仙や天女たちの群がいた。(三三) アルジュナはこれらの自ら輝く世界を見て驚嘆し、喜んでマータリに質問した。御者は彼に答えた。(三四)

「プリターの息子よ、これは善行を積んだ人々がそれぞれの場所に位置しているものです。地上では、あなたは彼らを星であると見ていたのです。(三五)」

それから彼は、門のところに、勝利の白象が立っているのを見た。それはアイラーヴァタ象であり、四牙をそなえ、カイラーサ山のようであった。(三六) クル・パーンダヴァの英雄アルジュナは、シッダ（成就者、または半神）の道に到達して、古の最高の王マーンダートリのように輝いた。(三七) 蓮のような眼をしたアルジュナは、諸王の世界を過ぎて、あのシャクラの都アマラーヴァティーを見た。(三八)（第四十三章）

インドラの都市

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

彼はシッダやチャーラナ（いずれも半神族）の住む美しい都を見た。それは、すべての季節に花をつける清浄な樹々で飾られていた。(一) そこで彼は、サウガンディカ（白睡蓮）と清らかな香りの樹々と交った、清浄な香りのする風に扇がれていた。(二) 彼は天女の群の住むナンダナ（歓喜園）の森を見た。それは神々しい花をつけた樹々で彼を呼んでいるかのようであった。(三) この善行の人々の世界は、苦行をしない人、聖火を祭らない人、戦いから顔を背ける人々によっては見られることができない。(四) また、祭主でない人々、真実を言わない人々、ヴェーダの学習を行なわない人々、聖場で沐浴しない人々、祭祀や布施を行なわない人々によっても見られることができない。(五) また、祭祀を破壊する卑しい人々、酒を飲んだり、師の床（妻）を犯したり、肉を食べたりする邪悪な人々によっては、決して見られることができない。(六) 勇士は神々しい歌の響くその神の森を見つつ、シャクラ（インドラ）の愛する都に入った。(七) そこで彼は、自由に飛行できる神々の天車が、幾千幾万と発着するのを見た。(八)

アルジュナはガンダルヴァや天女たちに讃えられつつ、花々の香りを運ぶ清らかな風によって扇がれた。(九) それから、神々とガンダルヴァたち、シッダや最高の聖仙たちは喜んで、汚れなき行為のアルジュナを歓待した。(一〇) 勇士は祝福の言葉と天上の楽器の音に讃えら

れつつ、法螺貝や太鼓の鳴り響く星宿の道に入った。アルジュナはいたるところで讃えられつつ、インドラの指示により、神々の道として有名なその広大な道を進んだ。（一一―一二）そこにはサーディヤ神群、一切諸神、マルト神群、アシュヴィン双神、アーディティヤ神群、ヴァス神群、ルドラ神群、清浄な梵仙（バラモンの聖者）たちがいた。（一三）また、多くの王仙たち、ディリーパをはじめとする王たち、トゥンブル（ガンダルヴァの名）、ナーラダ、ハハーとフフーという二名のガンダルヴァがいた。（一四）クルの王子は彼らすべてに礼儀正しく会った後に、神々の王インドラを見た。（一五）

そこで勇士アルジュナは最高の車を降りて、父である神々の王インドラと直々に対面した。（一六）その神は、金の柄のついた美しい白い傘を〔さしかけられ〕、神々しい香で芳わしい扇で扇がれていた。（一七）ヴィシュヴァーヴァスなどのガンダルヴァは讃歌や礼拝により彼を讃え、最上のバラモンたちは讃詞（リチュ）、祭詞（ヤジュス）、歌詠（サーマン）の讃歌により彼を讃えていた。（一八）強力なクンティーの息子は近づいて、頭を下げて敬礼した。インドラは太い両腕で彼を抱きしめた。（一九）そしてシャクラ（インドラ）は、彼の両腕をとって、神々と王仙に敬われた神聖なシャクラの座に座り、その傍らに彼を座らせた。（二〇）敵の勇士を殺す神々の王は、彼の頭に接吻し、恭しく頭を下げている彼を膝に乗せた。（二一）千眼者（インドラ）の命により、限りなく高邁なアルジュナはシャクラの座に登った。第二のインドラのように。（二二）ヴリトラの敵（インドラ）は愛情をこめて、その芳香のする手で、ねぎらいつつアルジュナの美しい顔に触れた。（二三）そして静かに、弓弦や矢があたって固くなった、黄金でできた柱のような、彼の美しく長い両腕をさすった。（二四）金剛杵（ヴァジュラ）を持つインドラは、金剛杵を握って肉刺（まめ）のできた手で、何度もゆっくりと彼の両腕を揺った。（二五）千眼者インドラは微笑してアルジュナを見て、歓喜のあまり眼を見開き、飽くことがなかった。（二六）両者は一つ座席に座って、集会場を輝かせていた。第十四日目に、月と太陽が天空に昇ったかのように。（二七）歌と朗詠に長けた、トゥンブラを長とするガンダルヴァたちは、最高に美しい声で詩節を吟じた。（二八）グリターチー、メーナカー、ランバー、プールヴァチッティ、スヴァヤンプラバー、ウルヴァシー、ミシュラケーシー、ドゥンドゥ、ガウリー、ヴァルーティニー、ゴーパーリー、サハジャニヤー、クンバヨーニ、プラジャーガラー、チトラセーナー、チトラレーカー、サハー、マドゥラスヴァラー、及びその他の天女たちがそこここで踊っていた。蓮花のような眼をした彼女たちは、大きな腰と尻をし、揺れる乳房で、ながしめと媚態と甘美さで心と理性を奪い、シッダたちの心をかき乱していた。（二九―三二）

（第四十四章）

インドラの武器を授かる

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

それから神々とガンダルヴァは、シャクラ（インドラ）の意向を知り、最上の接客の品を出していそいそとアルジュナを歓待した。（一）彼らは王子に足を洗う水と口をゆすぐ水を出してから、彼をインドラの宮殿に案内した。（二）アルジュナはこのようにもてなされて、父の宮殿

に滞在した。偉大な武器とそれを回収する方法を学びながら。(三)彼はシャクラの手から、その愛用の、抗しがたい武器である金剛杵と、大音響をたてる、雲と孔雀の印のついた雷電とを受けた。(四)アルジュナは武器を受け取ると兄弟たちを思い出したが、インドラの命により、そこで幸福に五年間を過ごした。(五)

やがて時至って、シャクラは武器に通達したアルジュナに告げた。

「クンティーの息子よ、人間の世界に見出されない、神に作られた舞踊と歌と器楽を、チトラセーナから学べ。それを習得すればお前に至福が訪れるであろう。(六―七)」

インドラは友人のチトラセーナをアルジュナに紹介した。アルジュナは彼と交際して楽しく過ごした。(八)ある時、大仙ローマシャが遍歴しているうちに、インドラに会おうと望んで、シャクラの宮殿を訪れた。(九)大仙は神々の王に会って敬礼し、インドラの座の半分を占めているアルジュナを見た。(一〇)それから、シャクラの許しを得て、最高のバラモンは、大仙たちに敬意を表されつつ、最上の席に座った。(一一)インドラの座に座っているアルジュナを見て、彼は思った。

「どうして王族(クシャトリヤ)であるアルジュナがシャクラの座に座るようになったのか。(一二)彼はどのような善行を積んだのか。どのような諸世界を獲得したのか。このような神々に敬礼される位置に到達したとは……。(一三)」

シャチーの夫シャクラは、ローマシャの考えを知り、笑いながら彼に告げた。(一四)

「梵仙よ、あなたが心で考えていることに答えるから聞きなさい。彼は王族として生まれた

が、ただの人間ではない。(一五)大仙よ、この勇士は、クンティーに生まれた私の息子である。ある特別の理由があって、彼は武器を求めてここに来たのである。(一六)ああ、あなたがこの古の最高の聖仙を知らないとは! バラモンよ、彼が何者であり、いかなる理由があるのか言うから、聞きなさい。(一七)

古の最高の聖仙であるナラとナーラーヤナが、このダナンジャヤ(アルジュナ)とクリシュナであると知りなさい。(一八)神々や偉大な聖仙たちによっても見ることのできない、バダリーという神聖な隠棲所がある。(一九)バラモンよ、それがヴィシュヌとジシュヌ(アルジュナ)の住処であった。シッダやチャーラナ(いずれも半神族)の住むガンガー(ガンジス)はその地から発している。(二〇)梵仙よ、栄光に満ち力に満ちた両者は、私の命令により地上に生まれた。彼らは大地の重荷を取り除くであろう。(二一)というのは、ニヴァータカヴァチャという高慢な阿修羅(アスラ)たちがいる。彼らは恩寵を受けて迷妄に陥り、我々によからぬことをしている。(二二)彼らは強力で慢心し、神々を殺そうと計画している。彼らは恩寵を得たので、神々をものともしないのだ。(二三)その地底界(パーターラ)に住むダヌの息子たちは強力で、すべての神々の群は彼らと戦うことができない。(二四)

マドゥの殺害者、聖なるヴィシュヌ神、無敵のハリは、地上に降りてカピラ仙となった。(二五)かつてラサータラ(地底界の一)を掘っていた偉大なサガラ王の息子たちは、その聖仙が見ただけで殺されてしまった。(二六)最高のバラモンよ、そのヴィシュヌとアルジュナとが一体になって、大戦争において、疑いもなく我々のために偉大な任務を行なうことができる。

(二七) 彼（アルジュナ）は悪魔たちすべてに対抗する能力をそなえている。勇士は戦いにおいて彼らを殺してから、再び人間界にもどるであろう。(二八) あなたは私の命令により、すぐに地上界に行きなさい。そして、カーミヤカに住む勇士ユディシティラに会いなさい。(二九) その徳性ある真実を守る男に、私の伝言として言ってもらいたい。

『パルグナ（アルジュナ）を待ちわびることはない。武器を修得してすぐに帰るであろう。(三〇) 清浄な腕の力を身につけ、また武器を修得することなくして、彼は戦闘において、ビーシュマとドローナなどに対抗することはできない。(三一) 偉大な勇士アルジュナは武器を獲得し、神的な舞踊と器楽と歌の奥義を極めた。(三二) 王よ、そなたも他のすべての弟たちとともに、各地の聖場を見てまわるがよい。敵を制する者よ。(三三) 王中の王よ、神聖な聖場で沐浴すれば、そなたは罪悪を離れ、苦熱を離れ、汚れを離れて、幸福に王国を享受するであろう。(三四)』

最高のバラモンよ、苦行の力をそなえたあなたも、地上を遍歴する彼を守ってあげてくれ。(三五) というのは、山の難所や平坦でない場所には、常に恐ろしい羅刹たちが住んでいるから、あなたはいつも彼らから彼を守るべきである。(三六)」

大苦行者ローマシャは、「かしこまりました」と約束して地上を行き、カーミヤカの森の方へ向かった。(三七) そこで彼は、苦行者や弟たちにぐるりと取り囲まれているダルマ王ユディシティラを見た。(三八)

（第四十五章）／（第四十六章〜第四十八章略）

地上に私より不幸な王がいるのか

ジャナメージャヤはたずねた。

「偉大なアルジュナが武器を得るためにシャクラの世界へ行った時、ユディシティラをはじめとするパーンダヴァたちはどうしていたのですか。(一)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

偉大なアルジュナが武器を得るためにシャクラの世界へ行った時、人中の雄牛たちは、クリシュナー（ドラウパディー）とともにカーミヤカの森に滞在していた。(二) ある日、最高のバラタ族の人々は、とある寂しい草地で、クリシュナーとともに、アルジュナのことを悲しみ、涙で喉をつまらせ、非常に悩んで座っていた。(三) 彼との別離のために悲しみが彼らすべてを圧倒していた。彼らはアルジュナとの別離の故に、また王国を失ったことから悲嘆に暮れていた。(四) その時、勇士ビーマはユディシティラに言った。

「大王よ、あの人中の雄牛、パーンドゥの息子たちの生命の拠り所であるアルジュナは、あなたの命令により出かけた。(五) もし彼が死ねば、パーンチャーラの人々とその息子たちも、我々も、サーティヤキとヴァースデーヴァ（クリシュナ）も、疑いもなく死ぬであろう。(六) あの威光に満ちたアルジュナがあなたの命令により、多くの苦労をものともせずに出かけたことほ

ど悲しいことがあろうか。(七)我々は偉大な彼の両腕に依存して、敵どもは征服され大地は獲得され得ると考えているのであるから。(八)あの弓取りの力のお蔭で、私は集会場の中で、すべてのドリタラーシトラの息子たちとシャクニとをあの世に送らずにすんだのである。(九)今や強力な我々は、ヴァースデーヴァに守られて、自らのうちに起こる、あなたが原因である怒りに堪えている。(一〇)というのは、もし我々がクリシュナとともに、カルナをはじめとする敵を殺せば、我々自身の腕で獲得した全大地を支配することができよう。(一一)あなたの賭博のせいで、我々はみな苦しんでいる。王よ、我々は勇気に満ち、強力な者たちよりもずっと強力であるのに。(一二)大王よ、王族（武士）の法（ダルマ）を追求すべきです。森に住むことは王族の法ではない。王権のみが王族の最高の法であると賢者たちは知っている。(一三)王よ、王族の法を知るあなたは、法にかなった道を失ってはならぬ。十二年が終了しない前に、ドリタラーシトラの息子たちを滅ぼそう。(一四)大王よ、森から引き返し、アルジュナとクリシュナを呼び寄せ、大戦争において、陣形を整えたドリタラーシトラの息子たちを、私は速やかにあの世に送る。(一五)私はドリタラーシトラの息子たちとシャクニをみな殺しにするであろう。たとえ、ドゥルヨーダナやカルナや、その他の者が抵抗するとしても。(一六)私が彼らを平定したら、その後であなたは森からもどって下さい。王よ、このようにすれば、あなたには過失はないことになるでしょう。(一七)兄上、敵を征服する者よ、なされた罪悪を種々の祭祀によって取り除いて、大王よ、最高の天界へ行きましょう。(一八)王よ、もし王が愚かでなかったら、このようにすべきです。あなたが法に専念していれば、

我々は遅れてしまうでしょう。(一九)ずる賢い奴は詐術によって殺すべきだと定められています。詐術を用いる者を詐術によって殺しても、罪悪とは言われません。(二〇)また、バラタ族の大王よ、法（ダルマ）を知る人々は法のうちに、一昼夜は一年に等しいということを認めております。(二一)また大王よ、『緊急時には一年は完了する』と常にヴェーダにも言われています。(二二)もしヴェーダがあなたの根拠なら、不屈の人よ、一日後に十三年間が完了すると考えられます。(二三)敵を征服する人よ、今がドゥルヨーダナとその一味を殺す時です。彼がすべての地上を一つの心にまとめる前に……。(二四)」

ビーマがこのように言うと、ダルマ王ユディシティラ王は彼の頭に接吻して、なだめながら答えた。(二五)

「勇士よ、疑いもなくお前はスヨーダナを殺すであろう。ただし、十三年後に、ガーンディーヴァ弓を持つアルジュナとともに。(二六)またお前は、『時が来た』と私に言ったが、私は虚偽を語ることができない。虚偽は私の中には存在しないから。(二七)ビーマよ、邪悪な詐術なしでも、お前はスヨーダナとその一味を殺すことができよう。(二八)」

ダルマ王ユディシティラがビーマにこのように告げた時、栄光に満ちた大仙ブリハダシュヴァが訪れた。(二九)徳性あるダルマ王は、法を実践する大仙が訪れたのを見て、聖典にのっとってマドゥパルカ（接客用の飲食物）を出して彼をもてなした。(三〇)彼が休息して座った時、勇士ユディシティラはそのそばに座って彼を見て、色々と悩みを訴えた。(三一)

「聖者よ、私は賭博という悪徳によって財産と王国を奪われました。ずる賢い、賭博に巧み

な博奕打ちたちに挑戦されたのです。(三二) 私は賭博を心得ていなかったので、邪悪な人々は詐術を用いて（私を負かして）、私の生命よりも大切な妻を集会場に引きずって来ました。(三三) 地上にこの私よりも不幸な王はいるでしょうか。あなたは以前にそんな王のことを見たり聞いたりしたことがありますか。私よりも不幸な男はいないと思います。(三四)」

ブリハダシュヴァは告げた。

「大王よ、自分よりも不幸な者はどこにもいないと言われるのか。(三五) もし聞きたいと望まれるなら、お話ししよう。あなたよりも不幸な王がいたことを。(三六)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

そこで王は彼に言った。

「聖者よ、語って下さい。このような状態に陥った王のことを聞きたいのです。(三七)」

ブリハダシュヴァは告げた。

「王よ、弟たちとともに注意深く聞きなさい。あなたより不幸な王がいたことを。(三八) ニシャダ国にヴィーラセーナという王がいました。彼には、法(ダルマ)と実利(アルタ)に明るいナラという息子がいました。(三九) 彼はプシュカラのために、詐術によってうち負かされたと聞いております。苦労を知らなかった彼は、妻とともに森に住みました。(四〇) 王よ、森に住んでいる間、彼には、馬も戦車も、兄弟も縁者も、決して残っていませんでした。(四一) ところがあなたは、神のような勇猛な弟たちや、梵天にも似た最高のバラモンたちに取り巻かれているから、嘆くには及びません。(四二)」

ユディシティラはたずねた。

「私は偉大なナラの物語を詳しく聞きたいと思います。この上なく雄弁な方よ、どうかそれを私に語って下さい。(四三)」 (第四十九章)

ナラ王物語

〔注記――『ナラ王物語』は特に有名で、初級、中級用の読本として用いられることがある。プーナ批判本の読みはかなり異なるから、注意する必要がある。この訳の原稿を完成した後、鎧淳訳『ナラ王物語』（岩波文庫）、北川秀則・菱田邦男訳『ナラ王物語とサーヴィトリー姫物語』（山喜房仏書林）が出版された。〕

ダマヤンティーの婿選び式

ブリハダシュヴァは語った。――

ヴィーラセーナの息子で、ナラという強力な王がいた。彼は望ましい諸々の美質をそなえ、容姿端麗で馬術に長けていた。（一）神々の王（インドラ）のように人の王たちの頭に立ち、その威光により、すべてのもののはるか上方に、太陽のように君臨していた。（二）このニシャダ国の王はバラモンに親切で、ヴェーダを知り、勇敢で、賭博を好み、真実を語り、偉大な軍団

の長であった。（三）彼は美女たちに愛され、高貴で、感官を制御していた。守護者であり、弓取りたちの最上者で、マヌ自身がこの世に現われたかのようだった。（四）同様に、ヴィダルバ国に、ビーマ王という恐ろしく勇猛な、すべての美質をそなえた勇士がいた。彼は子孫を欲していたが、子供ができなかった。（五）彼は子孫を求めて、一心不乱にこの上ない努力をしていた。その時、ダマナという梵仙（バラモン出身の聖者）が彼のもとにやって来た。（六）子孫を望み法（ダルマ）をわきまえたビーマは、王妃とともに、栄光に満ちた聖者をもてなして満足させた。（七）誉れ高いダマナは喜んで、彼と王妃の願いをかなえ、宝石のような娘と三人の高貴な息子を授けた。（八）すなわち、ダマヤンティーと、ダマとダーンタと、栄光に満ちたダマナ（聖者と同名）とである。息子たちはすべての美質をそなえ、猛烈で、恐ろしく勇猛であった。（九）一方、美しい胴のダマヤンティーは、その容姿、威光、誉れ、光輝、優美さによって、世間において名声を得た。（一〇）

さて、彼女が妙齢になった時、飾りたてられた百人の召使女と百人の女友達が、あたかもシャチー（インドラの妃）に仕えるように彼女にかしずいていた。（一一）あらゆる装飾に飾られた、非の打ち所のない体をしたビーマの娘は、女友達の中央で、雨雲に囲まれた稲妻のように輝いていた。切れ長の眼をし、こよなく美しく、シュリー（ヴィシュヌの妃）のように。（一二）神々のうちにも夜叉たちのうちにも、そのような美しい女はどこにもいない。また人間界にも、その他の所にも、いまだかつて見たことも聞いたこともなかった。その美しい少女は、神々の心をもかき乱すほどであった。（一三）

一方、人中の虎であるナラは、その容姿にかけて地上に並ぶものなく、身体を持ったカンダルパ（愛の神カーマ）自身のような姿をしていた。（一四）人々はダマヤンティーのそばで、熱心にナラを称讃した。また、ナラのそばで、ダマヤンティーのことを何度も称讃した。（一五）いつもお互いの美質を聞いている二人のうちに、まだ見ぬ相手に対する愛が生じた。そして、その恋心は大きくなって行った。（一六）

その頃、ナラは愛を心のうちに抑えることができず、宮中のそばにある森に密かに行っていた。（一七）その時、彼は、全身金色のハンサ（鵞鳥の一種）たちを見出した。そして、その森を歩きまわっている鳥たちのうちの一羽をつかまえた。（一八）すると、その鳥はナラに話しかけた。

「王よ、私を殺してはいけません。あなたのためになることをしますから。（一九）ナイシャダよ、ダマヤンティーのもとで、あなたについて話します。あなた以外の男を、彼女が決して考えることのないように。（二〇）」

そう言われて、王はハンサを放してやった。そこでハンサたちは飛び上がって、ヴィダルバ国に行った。（二一）鳥たちはヴィダルバの都に行くと、ダマヤンティーのそばに降りた。彼女はその鳥たちを見た。（二二）友たちの群に囲まれた彼女は、驚嘆すべき姿をした鳥たちを見て、喜んで、急いで捕えようとして近づいた。（二三）ハンサたちは、遊園の中のいたるところに散っていたので、少女たちは各々、ハンサたちを追って駆けまわった。（二四）

ところが、ダマヤンティーがあるハンサのそばに近寄ると、その鳥は人間の声を出して彼

女に告げた。（二五）

「ダマヤンティーよ、ナラというニシャダ国の王がいます。彼はその容姿の点でアシュヴィン双神のようで、彼に匹敵する人間はおりません。（二六）美しい顔色のひとよ、もしあなたが彼の妻になるなら、あなたの生とこの容姿は実りあることでしょう。美しい胴のひとよ。（二七）我々は神やガンダルヴァや人間や蛇や羅刹を見て来ましたが、彼のような人はかつて見たことがありません。（二八）あなたは女性のうちの宝石であり、ナラは男性の最上者です。優れた女が優れた男と結びつくことはすばらしいことです。（二九）」

ハンサの言葉を聞いて、ダマヤンティーはそのハンサに言った。

「ナラにも同じように告げて下さい。（三〇）」

鳥は「かしこまりました」とヴィダルバの王女に言って、再びニシャダに帰り、ナラにすべてを報告した。（三一）

（第五十章）

ブリハダシュヴァは語った。——

ダマヤンティーの方は、ハンサの言葉を聞いてからというもの、ナラのことについて平静でいられなくなった。（一）彼女は考えこみ、悲嘆に暮れ、青白い顔をし、痩せ、ため息をついてばかりいた。（二）彼女は上方を見て、ものおもいにふけり、狂気じみて見えた。寝ても、座っても、食事をしても、彼女は決して楽しみを見出すことはなかった。（三）夜も昼も眠る

ことなく、繰り返し「ああ、ああ」と嘆いてばかりいた。女友達は、彼女のそぶりによって、そのような異常な状態になっていることを知った。(四) そこで彼女の女友達の群は、ヴィダルバの王に、彼女がよくない状態にあることを告げた。(五) 彼女の友の女友達の群からそのことを聞き、ビーマ王は、自分の娘についてなすべき重大な仕事について考えた。(六) 王は自分の娘が適齢期に達したのを考慮して、ダマヤンティーの婿選び式（スヴァヤンヴァラ）を行なうべきだと思った。(七) 彼は諸王を招集した。

「勇士たちよ、この婿選び式に参加して下さい」と。(八) すべての王はダマヤンティーの婿選び式のことを聞いて、ビーマの要請により、ビーマのもとに集まって来た。(九) 象や馬や戦車の音により大地を鳴り響かせ、色とりどりの花輪や装飾をつけ、美々しく飾られた美しい軍隊を率いて。(一〇)

ちょうどその時、古（いにしえ）の最高の聖仙である、偉大なナーラダとパルヴァタとが、遍歴しているうちに、この世からインドラの世界へ行った。(一一) 大誓戒を守る二人の偉大な聖仙は、神々の王の宮殿に入り、手あつくもてなされた。(一二) 千眼者（インドラ）は二人に挨拶してから、「お変りないか」とか「あらゆる点で息災であるか」などとたずねた。(一三)

ナーラダは言った。

「主よ、我々はあらゆる点で息災です。マガヴァン（インドラ）よ、また全世界において、王たちは元気にやっております。(一四)」

ブリハダシュヴァは語った。——

インドラはナーラダの言葉を聞いてたずねた。

「生命を捨てて戦う、義務（ダルマ）を知る王たち。時いたれば顔を背けることなく武器をとって死に趣く王たち。この不滅の世界は、彼らのあらゆる願望をかなえる。ちょうど私の願望をかなえるように。(一五—一六) ところで、あれらの勇猛な王族（クシャトリヤ）たちはどこへ行ったのか。私の愛する客である彼ら王たちが来るのを見かけないが。(一七)」

シャクラ（インドラ）にそうたずねられて、ナーラダは答えた。(一八)

「主よ、あの王たちが見られないわけをお聞き下さい。ヴィダルバ国王の娘でダマヤンティーというものがいます。その容姿にかけて、地上におけるあらゆる女性を凌駕しております。(一九) シャクラよ、間もなく彼女の婿選び式があります。諸王や王子たちはすべてそこに行っています。(二〇) バラとヴリトラの殺害者（インドラ）よ、王たちは世の宝石である彼女を求め、殊の外に切望しております。(二一)」

このように語られていた時、アグニを含む最高の世界守護神たちが神々の王のもとにやって来た。(二二) 一同はナーラダの重大な言葉を聞いて、喜んで、「我々も行こう」と告げた。(二三) それから、一同は眷属を引き連れ、乗物に乗り、すべての王が集まっているヴィダルバめざして出発した。(二四)

ダマヤンティーに深く心を寄せるナラ王もまた、諸王が集まっていることを聞いて、意気消沈することなくそこへ向かって行った。(二五) その時、神々は地上に立っているナラを見

た。彼は、容姿にめぐまれていて、マンマタ（愛の神カーマ）が現に身体をもって立っているかのようであった。（二六）世界守護神たちは、太陽のように輝いている彼を見て、その容姿の見事さに驚嘆して、自分たちの意図も忘れて立ち尽くしていた。（二七）神々は空中に天車を止めて、空から降下し、ニシャダの王に告げた。（二八）

「やあやあ、ニシャダ国王、王中の王、ナラよ、あなたは真実の誓いを守る者だ。我々に協力してくれ。最高の人よ、使者となってくれ。（二九）」（第五十一章）

ブリハダシュヴァは語った。――

ナラは彼らに「いたします」と約束してから、合掌して立って彼らにたずねた。（一）

「あなた方は誰ですか。また、誰のもとに私を使いにやりたいのですか。また、そこで私は何をすればよいのですか。ありのままに話して下さい。（二）」

ニシャダ国王がこのようにたずねると、インドラは答えた。

「我々は神である。ダマヤンティーを求めてやって来たのだ。（三）私はインドラであり、これがアグニである。これが水の主（ヴァルナ）で、またこれが人間の身体を消滅させるヤマである。（四）お前は我々が来たことをダマヤンティーに知らせなさい。『インドラをはじめとする世界守護神たちが、あなたを見たいと望んでやって来た。（五）シャクラ、アグニ、ヴァルナ、ヤマという神々が、あなたを得たいと望んでいる。彼らのうちのいずれかの神を夫に選びなさい』と。（六）」

シャクラにそう言われると、ナラは合掌して答えた。

「同じ目的で来た私を遣わすことはできません。（七）」

神々は言った。

「先に『いたします』と我々に約束しながら、お前はどうしてそのようにしないのか。ニシャダ国王よ、すぐに行け。（八）」

ブリハダシュヴァは語った。――

神々にそう言われて、ニシャダ国王は再びたずねた。

「厳重に警護された王宮に、どうしたら入ることができるでしょう。（九）」

「お前は入れるであろう」と、シャクラは答えた。彼は「その通りにいたします」と告げて、ダマヤンティーの住居に行った。（一〇）彼はそこで、女友達に囲まれたヴィダルバ国の王女を見た。その美しい顔色の女は、美しい姿と光輝できらきら輝いていた。（一一）彼女は非常に繊細な身体で、胴はくびれ、美しい眼をしていた。自らの輝きにより月の輝きを凌駕するほどであった。（一二）その魅力的に笑う女を見るやいなや、彼の愛は増大したが、彼は約束を果たしたいと願い、その愛を抑制した。（一三）

最高の女たちは、ニシャダ国王を見て動揺し、彼の威光に圧倒されて座席から急いで立ち上がった。（一四）彼女たちは非常に喜びかつ驚嘆して、ナラを称讃したが、言葉に出すこと

はできず、心の中でこう考えた。(二五)
「ああ、この偉大な方の何という容姿、ああ、何という美々しさ、ああ、何という平静さ。彼は誰か。神であろうか、夜叉であろうか、ガンダルヴァであろうか。(二六)」
しかしすべての美しい女たちは、彼の威光に圧倒され、恥じらって、何も彼に言うことができなかった。(二七)その時、常に笑みをたたえて話すダマヤンティーは驚いて、勇士ナラに対して、ほほえみつつたずねた。(二八)
「全身非の打ち所のない方よ、私の愛をかきたてる方よ、あなたはどなたですか。勇士よ、あなたは神のようにやって来ました。欠点のない方よ、私はあなたのことを知りたく思います。(二九)どのようにしてここに来られたのです。人に見られることなく。私の住居はよく警護されており、王は命令に厳しいのに。(三〇)」
ヴィダルバの王女にそう問われて、ナラは彼女に答えた。
「美しいひとよ、私はナラです。神々の使者としてここに来たのです。(三一)シャクラ、アグニ、ヴァルナ、ヤマという神々があなたを得たいと望んでいます。彼らのうちのいずれかの神を夫に選びなさい。美しいひとよ。(三二)彼らの威力によって、私は見つかることなくここに入りました。私が入って来る時、誰も私を見なかったし、誰も私を止めませんでした。(三三)美しいひとよ、私はこのような目的のために、最高の神々によって派遣されたのです。これを聞いて、あなたの望みのままに心を決めて下さい。(三四)」

(第五十二章)

ブリハダシュヴァは語った。——
彼女は神々に対して敬礼すると、笑ってナラに言った。
「王よ、もしお望みなら、好意をかけて下さい。あなたのために何をすればよいのですか。王様、信頼して好意をかけて下さい。(一)私とその他の私の持物は何でも、すべてあなたのものです。勇士よ、私はあなたのために諸王を集めたのです。(二)王様、ハンサたちの言葉は私を燃やします。(三)誇りを与えてくれる方よ、もし愛している私を拒絶するなら、あなたのために、私は毒や火や水や縄で自殺します。(四)」
ヴィダルバの王女にそう言われて、ナラは彼女に答えた。
「世界守護神たちがいながら、どうしてあなたは私を望むのですか。(五)私などはあの世界を創造した偉大な神々の足のほこりにも価しません。彼らに心を寄せなさい。(六)というのは、人は神々に不愉快なことをして死に趣きます。非の打ち所のない体のひとよ、私を救って下さい。最高の神々を選びなさい。(七)」
すると美しい微笑のダマヤンティーは、涙声で静かにナラ王に告げた。(八)
「王よ、私は間違いのない方法を見つけました。そうすれば決してあなたの過失にならないような……。(九)最高の人よ、あなたと、アグニをはじめとする神々は、みなでこぞって、私の婿選び式の会場にいらして下さい。(一〇)それから王様、私は世界守護神たちの前であなたを選びましょう。人中の虎よ、そうすれば罪にはならないでしょう。(一一)」

ヴィダルバの王女にそのように言われたナラ王は、再び神々が集まっている場所にもどった。（一二）偉大な主である（異本による）世界守護神たちは、帰って来た彼を見て、一部始終を彼にたずねた。（一三）

神々は言った。

「王よ、お前は美しい微笑のダマヤンティーに会ったか。彼女は我々について何と言ったか。王よ、非の打ち所のない者よ、すべてを語れ。（一四）」

ナラは答えた。

「私はあなた方に命じられて、非常に大きな壁で仕切られた、屈強な番兵に囲まれた、ダマヤンティーの住居に入りました。（一五）あなた方の威光のおかげで、そこに入る私を、あの王女を除いて、誰も見ませんでした。（一六）私は彼女の女友達を見ました。彼女たちも私に気づきました。主神たちよ、みなは私を見て驚きました。（一七）最高の神々よ、私があなた方について述べると、美しい顔のひとは、無分別にも他ならぬ私を選んだのです。（一八）そしてその少女は私に言いました。

『最高の人よ、神々はこぞって、あなたとともに、私の婿選び式の会場にいらして下さい。（一九）最高の人よ、私は彼らの前であなたを選びましょう。勇士よ、このようにすればあなたは罪に陥らないでしょう。（二〇）』

神々よ、以上、起こったことを残らずありのままに申し上げました。主神たちよ、後はあなた方にお任せいたします。（二一）」

（第五十三章）

ブリハダシュヴァは語った。——

さて、吉祥の時節が訪れた時、縁起のよい日時に、ビーマ王は諸王を婿選び式に招待した。（一）それを聞いて、すべての王は愛に苦しめられて、ダマヤンティーを得たいと望み、急いで集まって来た。（二）諸王は、黄金の柱で輝く、アーチ門で輝きわたる大きな競技場に入った。獅子たちが山に入るように。（三）そこで王たちは、すべてよい香りの花輪をつけ、よく磨かれた宝玉の耳環をつけて、種々の座席に座っていた。（四）その王の集会は、人中の虎たちにより満ちていた。ボーガヴァティー（竜の世界）が竜（蛇）により、山の洞穴が虎により満ちているように（テクスト疑問）。（五）そこに、形のよい、なめらかな、五つの頭を持つ蛇のような、鉄棒のような太い腕が認められた。（六）王たちの、見事な髪を結った、立派な鼻を持つ美しく魅力的な顔は、天空における星々のように輝いていた。（七）

それから、美しい顔のダマヤンティーが競技場に入場した。その輝きにより諸王の眼と心を奪いつつ。（八）彼女を見ている偉大な王たちの視線は彼女の身体に落ち、それぞれの部分に釘づけになり動かなかった。（九）それから、諸王の名前が呼びあげられていた時、ビーマの娘は、等しい姿をした五人の男を見た。（一〇）すべて見分けのつかない姿をして立っている男たちを見た時、ビーマの娘は迷って、ナラ王を識別することができなかった。彼らのうちの一人一人を見ては、その一人一人がナラ王であると思えるのであった。（一一）美しい女

は考えて、理性的に考察した。「どうやって神々を識別しようか。どうやってナラ王を識別しようか。[二二]」

このように考えこんで、ヴィダルバの王女はひどく苦しみ、聞き知った神々の特徴について考えてみた。[二三]

「私が長老たちに聞いた神々の特徴を、この地上に立っている男たちのうちの誰にも認めることができない。[二四]」

彼女は何度も決定しては何度も思い迷って、神々に救いを求めるべき時が来たと考えた。[二五]彼女は言葉と心で神々に敬礼して、合掌し、ふるえながら言った。[二六]

「ハンサ鳥の言葉を聞いて私はニシャダ国王を夫に選びました。その真実にかけて（その通りになるよう）、神々は私に彼を指し示して下さい。[二七] 私は言葉と心により不実ではありません。その真実にかけて、神々は私に彼を指し示して下さい。[二八] 神々によりあのニシャダ王は私の夫と定められました。その真実にかけて、神々は私に彼を指し示して下さい。[二九] そして、偉大な主である（異本による）世界守護神たちは、御自身の姿を現わして下さい。私がプニヤシュローカ（ナラ）王を見分けられるように。[三〇]」

ダマヤンティーの悲しい嘆声を聞くと、また、彼女の最高の決意、ニシャダ国王に対する真実の愛、心の清らかさ、知性、献身、情念を知ると、神々は言われたように、全力を尽くしてその特徴を披露した。[三一―三二] 彼女は神々がすべて、汗をかかず、瞬きをせず、新鮮な花輪をつけ、ほこりがつかず、地上に触れないで立っているのを見出した。[三三] そしてニシャダ国王が、影をともない、しおれた花輪をつけ、ほこりと汗をともない、瞬きをして地上に立っているのが認められた。[二四] かくてビーマの娘は神々とプニヤシュローカを見分けることができ、法にのっとってニシャダ国王を選んだ。[二五] 切れ長の眼の女は、恥じらいつつ（彼の）衣服のへりをつかみ、彼の肩に花輪を投げかけた。このようにして、美しい顔色の女は、彼を夫に選んだ。[二六] すると王たちはすぐさま、「ああ、ああ」という嘆声を発した。神々や大仙たちは感嘆し、ナラ王を称讃して、「よきかな、よきかな」という言葉を発した。[二七]

ビーマの娘がニシャダ国王を選んだ時、威厳に満ちた世界守護神たちは、すべて満足して、ナラに八つの贈り物をした。[二八] シャチーの夫シャクラ（インドラ）は喜び、祭祀において直接に（神の）姿を見る能力と、最高のすばらしい歩行能力とをニシャダ国王に授けた。[二九] 供物を食べるアグニ（火の神）は、ニシャダ国王が望むところに姿を現わすことと、自身の輝きを有する世界を授けた。[三〇] ヤマは食物の味と、法にこの上なく決定することを授けた。水の主（ヴァルナ）は、ニシャダ国王が望むところで水が現われるようにした。[三一] それから、すべての神々は、最高の香りに満ちた花輪と双子とを二人に与えた。神々はこのように、贈り物を授けると、天界へ去って行った。[三二]

王たちはダマヤンティーの結婚を見て驚嘆し、喜んで、来た道を引き返して行った。[三三] ナラ王は宝石のような女性を得て、彼女とともに楽しんだ。バラとヴリトラの殺害者（インドラ）がシャチーと楽しむように。[三四] 勇猛な王はこよなく喜び、太陽のように輝き、法に

よって守護しつつ臣民を喜ばせた。(三五) 聡明な王は、ナフシャの息子ヤヤーティのように、馬祀(アシュヴァメーダ)やその他の多くの祭祀を行ない、十分な謝礼をバラモンに与えた。(三六) ナラ王はダマヤンティーとともに、心地よい森や園林で、神のように楽しく過ごした。(三七) このようにして、祭祀を行ない、かつ楽しんで、大地の主である王は、財宝に満ちた大地を守護した。(三八) (第五十四章)

賭博で王国を奪われる

ブリハダシュヴァは語った。——

ビーマの娘にニシャダ国王が選ばれた時、威光に満ちた世界守護神たちは、帰る途中で、カリ(末世、または最悪の賽の目を擬人化したもの)とドゥヴァーパラ(第二番目に悪い世、または賽の目)がやって来るのに出会った。(一) バラとヴリトラの殺害者シャクラ(インドラ)は、カリを見てたずねた。

「カリよ、言いなさい。ドゥヴァーパラとともにどこへ行くのか。(二)」

するとカリはシャクラに答えた。

「ダマヤンティーの婿選び式に行って彼女を選ぶつもりだ。私の心は彼女に引きつけられたから。(三)」

インドラは笑って彼に告げた。

「婿選び式は終わった。彼女は我々の前でナラ王を夫に選んだ。(四)」

シャクラにそう言われるとカリは怒りにかられ、神々すべてに向かって次のように言った。(五)

「彼女は神々がいるのに、人間を夫にしたから、彼女を厳罰に処すべきではないか。(六)」

しかし、カリにそう言われて神々は答えた。

「ダマヤンティーは我々に承認されてナラを選んだのだ。(七) 誰がすべての美質をそなえたナラ王に寄る辺を求めないだろうか。彼は誓戒を守り、すべての法(ダルマ)を正しく知っている。(八) その人中の虎である、世界守護神にも等しい王には、真実と堅固さと布施と苦行と清さと自制と静寂が確固として存する。(九) カリよ、そのような美質を有するナラを呪おうと望むような愚か者は、自分で自分を呪い、自分で自分を殺すことになろう。(一〇) そのような者は、苦しく深く広大で渡りがたい奈落に沈むであろう。(一一)」

神々はカリとドゥヴァーパラにこのように告げて、天界へ去った。(一二) 神々が去った時、カリはドゥヴァーパラに言った。

「ドゥヴァーパラよ、俺は怒りを押えることができない。俺はナラに住みついてやろう。(一三) 彼を王位から堕としてやろう。彼はビーマの娘と楽しめないであろう。お前も骰子に入りこんで協力してくれ。(一四)」 (第五十五章)

ブリハダシュヴァは語った。——

このように、カリはドゥヴァーパラと協定して、ニシャダ国の王のいるところへ行った。(一)彼は常に隙をうかがって、ニシャダ国に長らく滞在していた。そして十二年目に、カリはナラの隙を見出した。(二)ニシャダ国王は小用を足してから水に触れたが、両足を浄めないで薄明（サンディヤー）の儀式を行なった。そこでカリは彼にとりついた。(三)彼はナラにとりついてから、プシュカラ（ナラの弟）のもとに行ってこう言った。

「さあ、ナラと賭博をしなさい。(四)あなたは私とともに、賭博においてナラを破るでしょう。王よ、ナラ王を負かして、ニシャダ国を獲得しなさい。(五)」

カリにこのように言われて、プシュカラはナラのもとに行った。そしてカリは最高の骰子となってプシュカラのもとに行った。(六)勇猛な弟のプシュカラはナラに近づいて何度も「骰子で賭をしましょう」と言った。(七)気高い王は挑戦に黙っていられなくなり、ビーマの娘が見ているにもかかわらず、賭博をする時が来たと考えた。(八)ナラはカリがとりついているため、賭博において、金貨、黄金、車とそれをひく馬、衣類を失った。(九)彼は賭博に酔い痴れていて、正気を失っていたので、親しい人々のうちの誰も、賭をする彼を止めることはできなかった。(一〇)それから、すべての市民たちが、顧問官たちとともに、王を見るために、病気のようになった彼を止めるためにやって来た。(一一)それから御者がダマヤンティーのもとに行って告げた。

「全市民が用事があって門前に立っています。(一二)ニシャダ国王に申し上げて下さい。すべての臣民は、法（ダルマ）と実利（アルタ）をわきまえた王の災いにがまんできず立っています。(一三)」

するとビーマの娘は、苦悩し悲しみにうちひしがれて、涙声でニシャダ国王に言った。(一四)

「王さま、市民たちがすべての顧問官たちとともに、王に対する忠誠から、あなたに会うために門前に立っています。彼らに会ってあげて下さい。」

そのように何度も何度も告げた。(一五)だが、カリにとりつかれた王は、その美しい眼と胴の女が嘆いていても、彼女に何も答えなかった。(一六)そこですべての顧問官や市民たちは、「この人はもうだめだ」と悲嘆に暮れ、恥ずかしく思って、家に帰って行った。(一七)かくて、ナラとプシュカラの賭博は何カ月も続き、ナラは負け続けた。(一八)（第五十六章）

ブリハダシュヴァは語った。――

ビーマの娘ダマヤンティーは、ナラ王が賭博で正気を失って狂人のようになったのを見て、自身は正気を保っていたが、恐れ悲しみ、王のために大きな仕事をしなければならぬと考えた。(一―二)彼女はナラの不幸を恐れ、彼によかれと願い、彼がすべてを失ったことを知って〔乳母に〕言った。(三)

「ブリハトセーナーよ、行ってナラの命令により大臣たちを呼んで、奪われた財産と残った財産について告げなさい。(四)」

すべての大臣は、ナラの命令だと聞いて、「我々にとってよいことがあるだろうか」と言

って、再びやって来た。(五) しかし、ビーマの娘が「すべての臣民たちが再びやって来ました」と告げても、ナラは喜ばなかった。(六) ダマヤンティーは夫が自分の言葉に喜ばないのを知って、恥じて、再び家にひきこもった。(七) ナラが相変らず賭けで負け続けて、彼が全財産を失ってしまったことを聞いて、彼女は再び乳母に言った。(八)

「ブリハトセーナーよ、もう一度行っておくれ。ナラの命令により、御者のヴァールシュネーヤを連れて来て。よい女よ、すぐに大きな仕事をやらなければならない。(九)」

ブリハトセーナーはダマヤンティーの言葉を聞いて、信頼の置ける召使にヴァールシュネーヤを連れて来させた。(一〇) それから、時と場合をわきまえた、非の打ち所のないビーマの娘は、優しい言葉でヴァールシュネーヤをねぎらって、適切な時に告げた。(一一)

「あなたは王がいつもあなたに対して正しくふるまっていることを知っているでしょう。どうか苦境にある彼を助けてあげて下さい。(一二) 王はプシュカラに負ければ負けるほど、賭博に対するその執着は増大します。(一三) 骰子はプシュカラの意のままになり、ナラの骰子にはまったくつきがありません。(一四) そして彼は、親しい人々や親類の言葉を聞くべきなのに、聞きいれません。きっと偉大なニシャダ国王には何も残っていないと思います。(一五) 王は迷って私の言葉を喜ばないものですから、あなたに救いを求めたのです。御者よ、私の言うことを実行して下さい。彼が破滅するのではないかと、私の気持は晴れません。(一六) ナラの高速の愛馬たちを車につないで、この双子を乗せ、クンディナ(ビーマの都)へ行って下さい。(一七) 二人の子と車と馬を私の親類に託してから、あなたはそこにとどまるなり他へ行

くなり自由にして下さい。(一八)」

ナラの御者ヴァールシュネーヤは、ダマヤンティーの言葉を、ナラの主立った大臣たちに残らず報告した。(一九) 彼らは集まって、結論を出し、彼に許可を与えた。彼は双子を車に乗せ、その車でヴィダルバに行った。(二〇) 御者はそこに馬と最上の車と、王女インドラセーナーと王子インドラセーナを預け、悩み悲しみつつナラ王のことをビーマ王に報告してから、方々さすらって、アヨーディヤーの都へ行った。(二一—二二) 彼は非常に悩みつつも、リトゥパルナ王に仕えた。そして、その王の御者として禄を食むこととなった。(二三)

(第五十七章)

ナラ王、森に妻を捨て去る

ブリハダシュヴァは語った。——

ヴァールシュネーヤが出発した後も、ナラは賭博を続け、プシュカラに王国とその他の全財産を奪われた。(一) プシュカラは笑って王国を奪われたナラに言った。

「もっと賭博を続けよう。何か賭けるものがありますか。(二) あなたにはダマヤンティーが残っているだけだ。私は他のすべてを取ってしまった。もし異存がなければ、どうぞダマヤンティーを賭けなさい。(三)」

ナラがプシュカラにこのように言われた時、彼の心は怒りで裂けそうになったが、何も相

手に言わなかった。(四) それから誉れ高いナラは、この上なく怒ってプシュカラを見て、全身から装身具を投げ捨てた。(五) それから王は、ほとんど裸で一衣のみを着て、親しい人々の悲しみをつのらせつつ、絶大な富貴を捨てて出て行った。(六) ダマヤンティーも一衣のみをまとい、出て行く彼につき従った。ニシャダ国王は妻とともに城外で三夜を過ごした。(七)

一方プシュカラは都に布令を出した。

「誰でもナラに味方するものは、これを死刑に処す。(八)」

プシュカラの命令により、また彼がナラに対し抱いている敵意を考慮して、市民たちはナラを親切にもてなさなかった。(九) こうして王は都の近くで、もてなしに値するのにもてなされず、水だけで生活して、三夜を過ごした。(一〇)

幾日も過ぎた時、飢えに苦しむナラは、金色の翼をした何かの鳥たちを見た。(一一) その時、強力なニシャダ国王は考えた。

「これは今日、私の食物と財物になるであろう。(一二)」

そこで彼は下衣を鳥たちの上にかけた。ところが鳥たちはみな、彼の下衣を運んで、空に飛び去った。(一三) 鳥たちは飛び上がり、裸で地面に立ち失望してうつ向いているナラを見て言った。(一四)

「大馬鹿者、我々は骰子である。お前の衣を奪いたいと思って来たのだ。お前が衣を着ていては面白くないからね。(一五)」

骰子たちが去り、自分が衣を失ったのを見て、ナラ王はダマヤンティーに言った。(一六)

「非の打ち所ない女よ、彼らの怒りのために私は権力の座から落ち、悩み、飢えに苦しみ、生きる道を見出せない。(一七) 彼らのために、ニシャダの国民は私をもてなさなかった。その彼らが鳥となって、私の衣も奪ってしまった。(一八) 私はこの上ない苦境に陥り、正気を失って苦しんでいる。私はあなたの夫だ。あなたのためになることを言うから聞いてくれ。(一九) ここにある多くの道は、アヴァンティーとリクシャヴァット山を越えて、南部地方(ダクシナーパタ)に向かっている。(二〇) あれがヴィンディヤの大山脈だ。これが海に通じるパヨーシュニー川だ。それは大仙たちの隠棲所であり、花や果実にめぐまれている。(二一) これがヴィダルバに行く道だ。あの道でコーサラに行く。その彼方、南にある地方が、南部地方である。(二二)」

するとダマヤンティーは、涙声で、悲嘆に暮れ、ニシャダ国王に悲痛な言葉を述べた。(二三)

「王様、あなたの意図を何度も考えては、私の心はふるえ、全身が沈みこみます。(二四) あなたが王国を奪われ、財産を奪われ、着物もつけず、飢えて疲れている時、どうして私はあなたを無人の森に捨てて行けましょうか。(二五) あなたが恐ろしい森で疲れ、飢えに苦しみ、以前の幸福を考えている時、大王様、私はあなたの苦悩を鎮めてあげましょう。(二六) あらゆる苦悩において、妻に等しい薬は何もないと医師たちは説きます。私はこの真実をあなたに申し上げます。(二七)」

ナラは言った。
「美しい胴のダマヤンティーよ、あなたの言った通りだ。悩んでいる人にとって、妻に等しい友も薬もない。（二八）また、私はあなたを捨てようとは思わない。臆病な女よ。どうして恐れるのか。非の打ち所のない女よ、あなたを捨てるくらいなら、自分自身を捨てる。（二九）」
ダマヤンティーは答えた。
「大王様、もしあなたが私を捨てる気がないなら、どうしてヴィダルバに行く道を指示したのです。（三〇）王様、私はあなたが私を捨てるべきではないと思いますが、衰弱した心により私を捨てようとするでしょう。（三一）最高の人よ、神のような方よ、私に繰り返し道を教えるものですから、私の悲しみをかきたてます。（三二）王様、もし私が行くべきだと思われるなら、もしよろしければ二人でいっしょにヴィダルバに参りましょう。（三三）誇りを与える方よ、そこでヴィダルバ国王はあなたをもてなすでしょう。王様、あなたはもてなされて、私たちの家で幸福に暮らすでしょう。（三四）」
（第五十八章）
ナラは言った。
「あなたの父上の王国が私の王国同然であることは確かだ。しかし、苦境にある今、私は絶対にそこに行かないであろう。（一）かつて繁栄して、あなたの喜びを増す状態の時はそこに

行ったが、今、悲嘆に暮れ、あなたの悲しみを増すような時に、どうしてそこに行くであろうか。（二）」——
ブリハダシュヴァは語った。——
ナラ王はこのように言って、半分の衣でおおわれた美しいダマヤンティーを何度も慰めた。（三）彼らは二人して一枚の衣を身につけてあちこちさまよっているうちに、飢えと渇きに疲れ果て、ある小屋に行き着いた。（四）ニシャダ国王はその小屋に着いて、ヴィダルバの王女とともに地面に座りこんだ。（五）彼は裸で汚れ、頭を丸め（プーナ版の読み）、ほこりにまみれ、疲れて、ダマヤンティーとともに地面で眠った。（六）美しいダマヤンティーも急に苦悩にうちひしがれ、その華奢な女は哀れにも眠りこんでしまった。（七）ダマヤンティーが眠った時、ナラ王は悲しみに心が乱されて、前のようには眠れなくなった。（八）自分の王国が奪われたこと、親しい人々をすべて捨てたこと、森における苦難のことを考えては、もの思いに沈むのであった。（九）
「こうしたらどうなるだろう。しなければどうなるだろう。死ぬべきか、妻を捨てるべきか。（一〇）というのは、彼女は私を愛し、私のためにこのような苦しみに陥っている。しかし私がいなくなれば、彼女はいつか家族のもとにもどれるであろう。（一一）私といっしょにいれば、この最高の女は疑いもなく苦しむことになる。捨てれば危険はあるかも知れないが、もしかして幸福になれるかも知れない。（一二）

王は何度も決心しては、何度もためらったが、捨てることがダマヤンティーにとって最善であると考えた。(二三) 王は自分が衣を持たず、彼女が一枚の衣を着ていることを考慮して、衣の半分を切り取ることにした。(二四) ニシャダ国王は、「どうしたら私の妻を目覚めさせずに衣を切り取ることができようか」と考えて、小屋を歩きまわった。(二五) ナラはあちこち捜しまわっているうちに、たまたま小屋の片隅で、鞘に入っていないすばらしい剣を見つけた。(二六) それで衣の半分を切って身にまとい、正気を失った勇士は、眠っているダマヤンティーを捨てて走り去った。(二七) しかし心残りで、再びその小屋にもどって、ニシャダ国王はダマヤンティーを見て泣いた。(二八)

「以前には風も太陽も私の妻を(直接に)見ることはなかった(すなわち、「妻は風にも太陽にもさらされることはなかった」)のに、その彼女が、小屋の中で、地面に、身寄りもないかのように寝ている。(二九) この美しい尻の、魅力的に笑う女は、布切れをまとい、狂人のような状態でいる。目覚めたらどうなるのだろうか。(三〇) ビーマの美しい娘は、私に捨てられ、一人きりになり、野獣や蛇の住む恐ろしい森で、どのようにやって行くのだろうか。(三一)」

ナラは繰り返し立ち去ってはまた小屋にもどるのであった。カリに引っぱられては、また愛情に引きもどされて……。(三二) 苦しむ彼の心は二つに分かれ、ブランコのように、何度も行きかけては小屋にもどった。(三三) だがナラは、ついにカリに引っぱられ、迷妄にかられ、眠る妻を捨て、ひどく悲嘆に暮れて駆け去った。(三四) カリに触れられて正気を失い、あれこれと思い迷いつつ、苦しむ王は無人の森に妻を捨てて立ち去った。(三五)

(第五十九章)

ブリハダシュヴァは語った。――

ナラが立ち去った時、美しい尻のダマヤンティーは、疲れもとれ、目覚めたが、人気のない森の中でおののいた。(一) 彼女は夫を見なかったので、悲嘆に暮れて恐れ、「大王様」と大声でナラを呼んだ。(二)

「ああ旦那様、ああ大王様、ああ主人よ、どうして私を捨てたのですか。ああ、私はもうだめだ、おしまいだ。人のいない森の中で恐れています。(三) 大王様、あなたは法を知り、真実を語る方ではないのですか。どうしてあのように嘘を言って、眠っている私を捨てて去ったのですか。(四) どうして従順で献身的な妻を捨てて行くのですか。しかも私はあなたに、特に何も悪いことをしていないのに。他の人が悪いことをしたのに。(五) 王様、以前あなたが世界守護神たちの前で私におっしゃった言葉を真実のものにすることができますか。(六)

人中の雄牛よ、冗談はこれくらいでやめて下さい。侵しがたい方よ、私は恐れています。主人よ、自身を現わして下さい。(七) 王様、見つけたわ、見つけたわ。ニシャダの王よ、あなたはそこにいます。あなたは茂みに身を隠しています。どうして私に答えないのです。(八) ああ、意地悪なこと。王中の王よ。ここでこのように嘆いている私を抱いて慰めてくれないとは。(九) 私は自分のことやその他のことは何も悲しみません。ただあなた一人が、ど

うなるのだろうかと、王よ、あなたのことを悲しむのです。(一〇)王様、あなたは渇き、飢え、疲れ果て、夕暮れ時に木の根もとで、私なしでどうなるでしょうか。(一一)」
それから彼女は激しい悲しみに襲われ、燃えるように懊悩し、苦しみ泣き叫びながらあちこち駆けまわった。(一二)若い女は何度も立ち上がっては、何度も惑乱して倒れた。恐怖のあまり何度も失神しては、何度も泣き叫んだ。(一三)貞節なビーマの娘は激しい悲しみに襲われ、惑乱して何度もため息をつき、さまよい出て、泣きながら言った。(一四)
「ニシャダ国王を呪って苦しめている者に、王の苦しみに勝る苦しみがふりかかるように。(一五)善良な心のナラに対し、このようにした悪党は、彼よりも大きい苦を得て、不幸な生活を送るように。(一六)」
偉大な王の妃はこのように嘆きながら、野獣の住む森で、夫を捜しまわった。(一七)ビーマの娘は狂ったように「ああ、ああ、王様」と何度も泣き叫びながら、あちこち走りまわった。(一八)彼女はひどく悩みつつ、雌の鶚のように叫んで、何度も悲嘆に暮れ、繰り返し泣き叫んでいた。(一九)その時、飢えた巨大な蛇が、突然、近づいて来た彼女をつかまえた。(二〇)彼女は大蛇に呑まれ、悲嘆に暮れながらも、自分のことよりもむしろニシャダ国王のことを悲しんでいた。(二一)
「ああ、主人よ、私はこの深い森で、寄る辺のないもののように、大蛇に呑まれています。あなたはどうして私のもとに駆けつけて下さらないの。(二二)ニシャダ国王よ、あなたが再び災いから自由になって、知性と正気と財産を取りもどした時、私のことを思い出して、あ

なたはどうなるのでしょう。(二三)あなたが疲れ、飢えに苦しみ、憔悴した時、誰が疲れを取り除いてくれるかしら。(二四)」
その時、突然、一人の猟師が密林を歩きまわっているうちに、彼女が泣いているのを聞きつけて、急いで近寄って来た。(二五)猟師はその切れ長の眼の女が蛇に呑まれているのを見て、急いで駆け寄った。(二六)猟師は鋭い刀で、その蛇の口のところから切り裂いた。そして猟師は動かなくなった蛇を殺した。(二七)猟師は彼女を救出して水で洗い、慰め、食事を食べさせてから、彼女にたずねた。(二八)
「仔鹿の眼をした女よ、あなたは誰に属するか。どうして森に来たのか。また、どうしてこのようなひどい難儀なことになったのか。美しい女よ。(二九)」
ダマヤンティーは彼にこのようにたずねられて、すべてをありのまま彼に話した。(三〇)彼女は半分の衣をまとい、豊かな尻と乳房をしていた。華奢で非の打ち所のない身体をして、満月のような顔をしていた。(三一)その眼では、まつげが美しくカーヴしていた。彼女の言葉は甘美であった。猟師はそんな彼女を見て、愛欲の虜になった。(三二)猟師は愛に苦しみ、甘く優しい言葉で彼女にお世辞を言った。美しい女はそのことに気づいた。(三三)貞節なダマヤンティーは彼が悪い男だと知り、激しい怒りにかられ、憤怒で燃えるようになった。(三四)悪い考えを起こした卑しい男は、暴行したいとうずうずしたが、彼女は犯しがたく、燃える炎のようであると考えた。(三五)ところがダマヤンティーは、夫と王国を失って悲嘆に暮れ、口で制することのできる時が過ぎた時に、怒ってその男を呪った。(三六)

「私がニシャダ国王以外の男を心によってすら考えたことがないように、この卑しい猟師が命を失って倒れるように。(三七)」

彼女がそう告げるやいなや、その猟師は生命を失って、火に焼かれた樹のように大地に倒れた。(三八)

(第六十章)

苦行林でナラ王を捜す

ブリハダシュヴァは語った。——

蓮の眼をした女は、猟師を殺してから、コオロギの群の音が響く、恐ろしい無人の森に出発した。(一)その森には、獅子、虎、猪、熊、ルル鹿、豹が住んでいた。種々の鳥の群に満ち、蛮族や盗賊が住みついていた。(二)シャーラ、ヴェーヌ、ダヴァ、アシュヴァッタ、テインドゥカ、イングダ、キンシュカ、アルジュナ、アリシタ、チャンダナ、シャールマラの樹々が茂っていた。(三)ジャーンブー、アームラ、ロードラ、カディラ、シャーカ、ヴェートラに満ちていた。カーシュマリー、アーマラカ、プラクシャ、カダンバ、ウドゥンバラにおおわれていた。(四)バダリー、ビルヴァ、ニヤグローダが茂り、プリヤーラ、ターラ、カルジューラ、ハリータカ、ビビータカに満ちていた。(五)多様な鉱脈におおわれた種々の山々、鳥たちがさえずる木叢、驚異的な眺めの洞窟、川々、湖や池、種々の鳥獣を彼女は見た。(六)多くの恐ろしい姿のピシャーチャ鬼、蛇、羅刹を見た。沼や池や山の頂をいたると

ころに見た。驚異的な眺めの川や大湖（異本は「滝」）を見た。(七)ヴィダルバ国王の娘は、そこで、群なす水牛、猪、ジャッカル、熊、猿、蛇たちを見た。(八)威光と名声と落着きと最高の美しさをそなえたヴィダルバの王女は、ナラを捜して一人でさまよった。(九)夫の災いにより苦しむ彼女は、恐ろしい森に達しても、何も恐れなかった。(一〇)ヴィダルバの王女は非常に苦しみ、その身体は夫に対する悲しみで満ち、石の上に座って泣いた。(一一)

ダマヤンティーは言った。

「獅子のような胸をした勇士よ、ニシャダ国の王よ、この私を人のいない森に置き去りにして、あなたはどこへ行ったのか。(一二)勇士よ、手あつい謝礼をともなう馬祀(アシュヴァメーダ)などの祭祀を行なったのに、人中の虎よ、どうして私に偽って行動したのですか。(一三)人中の虎よ、偉大な輝きを持つ人よ、私の前でおっしゃったことを真実のものにして下さい。すばらしい方、王のうちの雄牛よ。(一四)王様、あなたの前でハンサ鳥が言ったこと、また私の前で彼らが言ったことを考慮して下さい。(一五)最高の人よ、四ヴェーダとその補助学(アンガ)とを詳細に学ぶことと、ただ一つの真実とが釣り合うと言われます。(一六)それ故、最高の人よ、敵を滅ぼす勇士よ、かつて私の前でおっしゃった言葉を真実のものにして下さい。(一七)ああ勇士よ、あなたはもう私を愛していないというのですか。罪のない人よ。この恐ろしい森の中で、どうしてあなたは私に答えて下さらないのですか。(一八)あそこに、飢えて口を開け、おぞましい姿の、恐ろしい森の王（「虎」を指す。三・六一・三〇参照）が私を脅しています。(一九)あの時あなたは、『可愛い人よ、あ

なたの他に愛しいひとはいない』と言った。すばらしい王よ、前に言った言葉を真実のものにして下さい。（二〇）王様、夫よ、狂ったような、嘆いている私に、相思相愛の愛妻に、なぜ答えて下さらないの。（二一）大地の主よ、私は痩せ、やつれ、あおざめ、汚れ、半分の衣をまとい、寄る辺のないように一人で嘆いている。（二二）目の大きい方よ、群からはぐれた雌鹿のように、一人で泣いている私をどうして慰めて下さらないの。敵を滅ぼす、敬うべき方よ。（二三）大王様、大森林で一人で呼びかけている貞節な私に、自分の妻に、どうして答えて下さらないの。（二四）最高の人よ、私は今日、高い家柄と徳性をそなえた、魅力的で全身美しいあなたを見ることができない。この山に、獅子や虎の住む非常に恐ろしい森に。（二五）ニシャダ国王よ、あなたは寝ているの。座っているの。立っているの。最高の人よ、それとも行ってしまったの。私の悲しみをつのらせる人よ。（二六）あなた故に、私は苦しみ、悲しみにやつれ、誰にたずねればよいの。『あなたはひょっとして、森でナラ王に会いませんでしたか』と。（二七）今日、この森の中にいる、美しく偉大で敵軍を滅ぼすナラについて、誰が私に話してくれるだろうか。（二八）お前の探している王、蓮のような眼をしたナラはここにいるという甘美な言葉を、誰が今日私に聞かせてくれるでしょうか。（二九）あそこに栄光ある森の王、四牙を持ち大きな顎をした虎がこちらの方へやって来る。恐れることなく、彼にたずねよう。（三〇）

『あなたは獣たちの王、この森の主。私をヴィダルバ国王の娘ダマヤンティーと知りなさい。（三一）ニシャダ国王、敵を滅ぼすナラの妻です。私は一人惨めに、悲しみにやつれ、夫を探しています。獣の王よ、私を元気づけて下さい。あなたはナラを見ましたか。（三二）森の王よ、もしナラについて語らないなら、私を食べて下さい。最高の獣よ、苦しんでいる私の悲しみを除いて下さい。（三三）』

森の王は森の中で私の嘆きを聞いてから、海に向かって流れる、水清い川の方へ行った。（三四）ここに聖なる山がある。多くの峰々がそびえ、輝き、天にも触れんばかりで、多彩な色をして、魅力的で……。（三五）その山は種々の鉱物におおわれ、種々の石に飾られ、この大森林の旗竿のようにそびえている。（三六）そこでは、獅子、虎、象、猪、熊、鹿がいて、多くの種類の鳥たちがいたるところでさえずっている。（三七）キンシュカ、アショーカ、バクラ、プンナーガの花々で飾られている。また、鳥たちに満ちた川や山により飾られている。この山の王に、王様のことをたずねてみよう。（三八）

『主よ、最高の山よ、神々しい姿の者よ、高名なる者よ、保護者よ、栄光に満ちた者よ、大地を支える者よ、あなたに敬礼します。（三九）私はあなたに近づいておじぎをいたします。私は王女、王の嫁、王の妻で、ダマヤンティーというものです。（四〇）勇猛なヴィダルバの国王、四姓の守護者であるビーマという王が私の父親です。（四一）彼は皇帝即位式（ラージャスーヤ）（世界制覇をなしとげた帝王の行なう祭祀）、馬祀（アシュヴァメーダ）など、多くの謝礼をともなう祭祀を開催する者であり、最高の王であり、大きく魅力的に曲った眼をしています。（四二）敬虔で、善行を積み、真実を語り、妬みがありません。徳性あり、適切にふるまい、広大な富を持ち、法（ダルマ）を知り、清らかです。（四三）ヴィダルバ国の真の守護者であり、敵の群を滅ぼす君主です。主よ、私は彼の娘です。あなた

に庇護を求めに来ました。(四四)
大山よ、私の舅は、ニシャダ国のヴィーラセーナという、その名もかしこき最高の王です。(四五)その王の息子は勇猛で、栄光に満ち、不屈の勇者で、父から継承した自己の王国を治めています。(四六)ナラという名で、プニャシュローカとも呼ばれています。敵を滅ぼし、敬虔で、ヴェーダを知り、雄弁で、功徳をなし、ソーマ酒に預（あず）かり、聖火を奉じます。(四七)彼は祭祀を行ない、布施し、戦い、正しく統治します。最高の山よ、ここに来た私は、その彼の妻です。(四八)私は富貴を失い、夫を失い、寄る辺なく、災いに陥り、最高の人である夫を探しています。(四九)最高の山よ、天空をこする(そびえる)これらの幾百の峰により、あなたはこの恐ろしい森でナラを見ましたか。(五〇)私の夫は象王のように勇猛であり、聡明で、腕が長く(武芸に秀で)、猛々しい。雄々しく、真実を語り、沈着であり、誉れ高い。あなたはそのニシャダ国王ナラを見ましたか。(五一)最高の山よ、私が一人で苦しんで嘆いているのに、今、自分の苦しむ娘のような私を、どうして言葉をかけて慰めて下さらないのですか。(五二)』

勇士よ、雄々しい方よ、法（ダルマ）を知る人よ、真実を守る人よ、大地の主よ、王よ、もしあなたがこの森におられるなら、自分から姿を現わして下さい。(五三)ニシャダ国王の言葉は愛情あふれ、深く、雷雲の音に似て、甘露のようです。その言葉を私はいつ聞くことができるでしょう。(五四)『ヴィダルバの王女よ』と語る、偉大な王の美しい言葉、ヴェーダに従う(敬虔な)豊かな言葉、私の悲しみを滅する言葉を。(五五)」

王女ダマヤンティーは最高の山にこのように言ってから、更に北方へ行った。(五六)最高の女は三昼夜歩いて、神々の森のような類い稀なる苦行林を見た。(五七)その苦行林は、ヴァシシタ、ブリグ、アトリのような苦行者、抑制し、食事を制御し、自制と清浄さをそなえた苦行者たちにより飾られていた。(五八)水のみを食べる、あるいは風のみを食べる、あるいは葉を食べる、感官を制御した、栄光に満ちた、天界への道を求める苦行者たち、樹皮や鹿皮をまとった、感官を制御した隠者（ムニ）たちにより飾られていた。彼女はそのような苦行者の住む、心地よい隠棲所を見た。(五九―六〇)その隠棲所には、種々の獣が住み、猿の群や苦行者が住んでいた。美しい眉、美しい髪、美しい尻、美しい乳房、美しい歯と口を持ち、威光に満ち、誉れ高く、美しい黒色で切れ長の眼を持つ(異本による)、ヴィーラセーナの息子の妻、女性の宝である栄光に満ちた思慮深いダマヤンティーは、その隠棲所を見て、そこに入った。(六一―六三)

彼女は苦行を積んだ苦行者たちに礼儀正しく挨拶した。すべての苦行者たちは、ようこそと彼女を歓迎した。(六四)そこで苦行者たちは、作法通りに彼女をもてなしてから、「座りなさい。我々は何をしたらよいか」と告げた。(六五)美しい尻の女は彼らにたずねた。

「非の打ち所のない、栄光に満ちた方々よ、ここで尊者らの苦行、聖火、法（ダルマ）、鳥獣、自己の義務の遂行において恙無いですか。栄光に満ちた人々よ。(六六)」

彼らは誉れ高い女に告げた。

「美しい女（ひと）よ、あらゆる面で恙無い。全身非の打ち所のない女よ、言いなさい。あなたは誰

か。あなたは何を求めているのか。（六七）今、あなたの最高の姿と最高の輝きを見て、我々は驚嘆しました。しっかりしなさい。悲しむことはない。（六八）あなたはこの森の、この山の、この川の大女神であるか。美しい女よ、非の打ち所のない女よ、真実を告げて下さい。（六九）」

彼女は聖仙たちに答えた。

「バラモンたちよ、私はこの森の女神ではありません。また、この山の女神でも、川の女神でもありません。（七〇）苦行者のみな様、私を人間であると知りなさい。私は詳しく申し上げますので、すべてお聞き下さい。（七一）

ヴィダルバ国に、ビーマという輝きに満ちた王がいます。最高のバラモンのみな様、私をその王の娘であると知りなさい。（七二）ニシャダ国王で聡明なナラという誉れ高い勇士、合戦において勝利する英邁な王が私の夫です。（七三）彼は神の崇拝に専念し、再生族と親しく、ニシャダの家系を守り、栄光に満ち、輝きにあふれている。（七四）彼は真実を語り、法（ダルマ）を知り、叡知あり、約束を守り、敵を滅ぼし、敬虔で、神を崇拝し、栄光あり、敵の都市を征服する。（七五）ナラという最高の王で、神々の王（インドラ）と等しい輝きを持ち、大きな眼と満月のような顔をした、敵を滅ぼす者が私の夫です。（七六）彼は主要なる祭祀の開催者であり、ヴェーダとその補助学の奥義を極め、戦いにおいてライバルたちを殺し、太陽や月のように輝いています。（七七）ある邪悪な最低の詐欺師たちが、その真実と法に専念する王に挑戦して、その賭博に巧みな悪党どもは王から王国と財産を奪いました。（七八）私はその王中の雄牛の

妻で、ダマヤンティーと呼ばれる者です。夫に会いたいと切望しています。（七九）私は、森や山や湖や川や心地よい池や森をいたるところ、戦いに長け、偉大で武芸に秀でた夫のナラを捜して、苦労してさまよっています。（八〇―八一）もしかして、尊者らの聖なる苦行林に、ナラというニシャダの国王がやって来ませんでしたか。（八二）バラモンたちよ、その王のために、私はこの非常に恐ろしい、虎や獣の住む危険な森にやって来たのです。（八三）もし数日のうちにナラ王に会えないなら、この身体を捨てて、自己を至福と結びつけましょう。（八四）あの人中の雄牛なくして、私の生命が何になりましょう。夫のことを憂えて苦しみ、私は今どうなり行くのでしょうか。（八五）」

森の中で一人きりになった、ビーマの娘ダマヤンティーが、このように嘆いていると、真実を語る苦行者たちは告げた。（八六）

「美しい女（ひと）よ、あなたの未来は幸せであろう。我々は苦行の力により見る。あなたは速やかにニシャダ国王に会えるであろう。（八七）ビーマの娘よ、敵を滅ぼす、法（ダルマ）を守る人々の最上者であるニシャダ国王に、熱が去ったナラに会えるであろう。（八八）一切の悪から解放され、一切の宝物をそなえ、あの最上の都を治める、敵を成敗する王に会えるであろう。（八九）美しい女よ、敵を恐れさせ、友たちの悲しみを無くさせる、高貴な家柄の王であるあなたの夫に会えるであろう。（九〇）」

苦行者たちは、ナラの愛しい妃である王女にこのように告げると、火供（アグニホートラ）の聖火と隠棲所もろとも消え失せた。（九一）ヴィーラセーナ王の嫁（義理の娘）である、非の打ち所のない体をし

たダマヤンティーは、この大いなる奇蹟を見て驚嘆した。（九二）

「私は夢を見たのか。これはどうしたことだ。あの苦行者たちはみなどこへ行ったのか。あの隠棲所はどこへ行ったのか。（九三）あの種々の鳥の住む、清らかな水をたたえた快い川と、果実と花に飾られた心地よい山々はどこへ行ったのか。（九四）」

美しい微笑のビーマの娘ダマヤンティーは、長らく考えこんで、夫のことをひたすら悲しみ嘆き、蒼白い顔をしていた。（九五）それから彼女は他の場所に行き、眼にいっぱい涙をため、涙声で嘆いた。それから、彼女はアショーカ樹を見た。（九六）彼女はその花をつけた最高の木アショーカに近づいた。それは若葉の重みでたわみ、心地よく、鳥たちがさえずっていた。（九七）

「ああ、何と、このような森の中に美しい木がある。それは多くの飾りで輝き、栄光あるドラミダの王（異本「山の王」）のようだ。（九八）アショーカ（無憂樹）よ、見目よいものよ、速やかに私の憂いを除いて（ヴィショーカ）下さい。あなたは悲しみと恐れと苦しみを離れた王を見ましたか。（九九）ナラという名の、敵を成敗する、ダマヤンティーの愛しい夫を、私の愛するニシャダ国の王を見ましたか。（一〇〇）半分の衣をまとい、繊細な身体と皮膚をし、災いに苦しみ、この森に来た勇士を。（一〇一）アショーカ樹よ、私が憂いを離れて行けるようにして下さい。アショーカよ、私の憂いを除いて、その名の通りのものになりなさい。（一〇二）」

このようにして、苦しむビーマの美しい娘は、アショーカ樹を三度まわってから、この上なく恐ろしい場所へ行った。（一〇三）彼女は多くの樹木や川を見た。多くの美しい山や多くの

鳥獣を見た。（一〇四）ビーマの娘は、夫を捜しているうちに、驚異的な眺めの渓谷や山麓や川を見た。（一〇五）

美しい微笑のダマヤンティーは、長い道のりを歩いて行くうちに、象や馬や車の群をともなう大きな隊商を見た。（一〇六）それは、澄んだ川の心地よい清流を渡るところであった。その川は広く深く、水は冷く、葦におおわれていた。（一〇七）クラウンチャ鳥や尾白鷲（クララ）の声が響き、チャクラヴァーカ鳥が鳴き声をたてていた。亀や鰐や魚に満ち、砂洲や島で飾られていた。（一〇八）

美しい尻をした、誉れ高いナラの妻は、大隊商を見るや、近づいて群集の中に入って行った。（一〇九）彼女は狂気のような姿をし、悲嘆に暮れ、半衣のみをまとい、痩せて蒼白く、汚れ、その髪はほこりだらけであった。（一一〇）彼女を見て、ある人々は恐れて逃げ去った。ある人々は考えこんでいた。ある人々はその場で叫び声をあげた。（一一一）またある人々は彼女のことをあざ笑った。また他の人々は非難した。またある人々は彼女を気の毒に思ってたずねた。（一一二）

「美しい女（ひと）よ、あなたは誰です。誰に属するのです。森で何を探しているのですか。あなたを見て、我々は当惑しています。あなたは人間なのですか。（一一三）真実を言って下さい。あなたはこの森の、この山の、この地方の女神なのですか。美しい女よ、我々はあなたに庇護を求めます。（一一四）美しい女であるあなたは夜叉女（ヤクシー）ですか、それとも羅刹女（ラークシャシー）ですか。いずれにせよ、我々を祝福して下さい。非の打ち所のない女よ、我々を守って下さい。（一一五）こ

の隊商がすべて無事ですぐにここから出て行かれるように計らって下さい。美しい女よ、我々はあなたに庇護を求めます。（一一六）」

隊商にそう問われて、夫の災いに苦しむ貞女ダマヤンティー王女は、隊商の長と隊商の人々に答えた。老いも若きも、幼い者も、隊商の案内人も、誰でもそこにいる人々すべてに。

「私は人間の女で、人の王の娘です。（ヴィーラセーナ）王の嫁で、（ナラ）王の妻です。夫に会いたいと切望しています。（一一七―一一八）ヴィダルバ国王が私の父です。ナラという栄光あるニシャダ国王が私の夫です。私はその無敵の王を探しています。（一一九）もしその王のことを御存知なら、速やかに私の夫について教えて下さい。王中の虎であるナラ、敵の群を成敗するナラについて。（一二〇）」

大隊商の長であるシュチというものは、非の打ち所のない体をした彼女に告げた。

「美しい女よ、私の言葉をお聞きなさい。（一二一）美しい微笑の女よ、私はシュチという名の隊商長です。誉れ高い女よ、私はナラという名の人に会ったことがありません。（一二二）私は人の住まぬこの恐ろしい森で、象、豹、水牛、虎、熊、鹿を見ましたが。我々に夜叉の王マニバドラ（隊商の守護神）の御加護がありますように。（一二三）」

そこで彼女はすべての商人たちと隊商長にたずねた。

「この隊商はどこへ行くのですか。教えて下さい。（一二四）」

隊商長は答えた。

「王女よ、この隊商は、真実を語るチェーディ王スバーフの領地へ、利得を求めて急いで行

くところです。（一二五）」

（第六十一章）

チェーディ国のダマヤンティー

ブリハダシュヴァは語った。――

非の打ち所のない体をした彼女は、隊商長の言葉を聞くと、夫に会いたいと切望して、彼とともに出発した。（一）さて、幾日も経って、商人たちは恐ろしい大森林で、どこから見てもすばらしい、蓮花の芳香がただよう大きな池を見出した。その池は心地よく、その周囲に多くの草と薪があった。（食用の）根と果実に満ち、種々の鳥の群にあふれていた。（二―三）水清く魅力的で快いその池を見て、馬なども非常に疲れていたので、彼らはそこで野営する決心をした。（四）隊商長の許可を得て、彼らはすばらしい森に入った。夕方になって、大隊商はそこで泊まった。（五）さて、真夜中、音もなく静まりかえり、疲れ切った隊商が眠った時、象の群が水を求めて山の川に近づいて来た。その川は、（象のこめかみから）したたり落ちる分泌液で汚れた。（六）大隊商は蓮池に行く道をふさいで眠っていた。象の群は突然、眠っている彼らを踏みつぶした。彼らは大地を逃げまわった。（七）隊商たちは「ああ、ああ」という叫び声をあげ、避難所を求めて、眠気まなこで、大いに恐れ、森の茂みに逃げこんだ。ある人々は牙により、あるいは鼻により、あるいは足により殺された。（八）多くの牛、驢馬、駱駝を含み、徒歩の人々に満ちた隊商は、恐れて走りまわり、お互いに殺し合うという有様

であった。(九) 彼らは恐ろしい叫び声をあげ、大地に倒れた。あわてて樹によじ登ったが（異本による）、荒い大地に落ちた。こうして、豊かな隊商はほとんど全滅した。(一〇)
さて朝になって、生き残りの人々は森の茂みから出て、行なわれた殺戮について嘆き、兄弟、父、息子、友人のことを悲しんだ。(一一) そこでヴィダルバの王女は悲嘆に暮れた。
「いったい私はどんな悪いことをしたのか。無人の森で、この人の群が私のもとに到来したが、それは私の不幸の故に、象の群によって殺された。(一二) 疑いもなく、私はよりいっそうの苦しみを経験するであろう。その時期が来ない人は死なないと古賢は教えている。(一三) 今日、この不幸な私が象の群につぶされなかったのだから。この世で人間にとって、運命により作られないものは何も存在しないから。(一四) そして私は子供の時でさえ、この不幸を招くような悪いことをしたことがない。行ないにより、心により、言葉により。(一五) 思うにあの時、私はナラのために、婿選び式（スヴァヤンヴァラ）に集まった世界守護神たちを拒絶したが、きっと彼らの威力によって別離する羽目になったのであろう。(一六)」
美しい女はこのように不幸を嘆きながら、生き残ったヴェーダに通じたバラモンたちとともに、悲嘆に暮れつつ歩いて行った。(一七) 進んで行くうちに、長い期間の後に、真実を語るチェーディ国王スバーフの大都市に到着し、夕方、半分の衣をまとって、その最高の都に入った。(一八) 都に住む人々は、蒼白く痩せ衰え、髪をふり乱し、汚れ、狂気のように歩いて行く彼女を見た。(一九) チェーディ国王の都に入って行く彼女を見て、村の子供たちは好奇心から彼女について行った。(二〇) 彼女は彼らに囲まれて王宮のそばに行った。楼閣にいる王母が群衆に囲まれている彼女を見た。(二一) 王母は群衆を制止させ、ダマヤンティーを最高の楼閣の上に登らせて、驚いて彼女にたずねた。(二二)
「このような不幸な目にあっても、あなたはすばらしい体をしている。雲間の稲妻のように輝く。私に言いなさい。あなたは誰で、誰に属するのか。(二三) あなたは装飾品をつけていないのに、人間離れした容姿をしている。神のように輝く女（ひと）よ、あなたは供を連れていないのに、人々を恐れない。(二四)」
ビーマの娘は彼女の言葉を聞くと、次のように言った。
「私は夫に忠実な人間の娘です。(二五) 私は氏素姓の正しい女中です。望むところに住める召使女です。一人で木の実や根を食べ、日暮れたらその場で寝るという生活をして来ました。(二六) 無数の美質を有する夫は、常に私に誠実であり、私もあの勇猛な夫に、影のようにいつもつき従っていました。(二七) 不幸にも彼はあまりにも賭博に熱中しました。彼は賭博で負けて、一人で森に行きました。(二八) その勇士は一衣をまとい、気が狂ったように取り乱していました。私はそんな夫を慰めながら、森について行きました。(二九) ある時、その勇士は森で、飢えに悩まされ、すっかり落ち込み、ある事情で一枚の衣をも失いました。(三〇) 私と一つ衣に包まれ、狂人のように正気を失った裸の彼にいつもつき従い、多くの夜、私は眠ることができませんでした。(三一) それから幾日か過ぎた時、ある所で私が眠っている間に、彼は衣の半分を断ち切り、罪もない私を捨て去りました。(三二) 昼も夜も夫を捜して身を焦がしていますが、いまだにその神のような最愛の主人に会うことができません。(三三)」

苦しむビーマの娘が眼にいっぱい涙を浮べて嘆き悲しんでいると、王母も非常に悲しんで、彼女に言った。(三四)

「美しい女よ、私のもとに住みなさい。私はあなたが好きになりました。奥様、私の従者たちがあなたの御主人を捜すでしょう。(三五) または、彼はあちこち歩きまわっているうちに、自らやってくるでしょう。ここに住んでいれば、御主人に再会できるでしょう。(三六)」

王母の言葉を聞いて、ダマヤンティーは言った。

「勇士の母上、私は条件づきであなたのもとに住みます。(三七) 私は食べ残しを食べません。人の足を洗いません。他の男とは決して話しません。(三八) もし誰か男が私を求めるなら、彼は処罰さるべきです。ただ、夫を捜すために、バラモンたちには会いたいです。(三九) もしそのようにして下さるなら、私は是非ここに住みたいです。さもなければ、決して住みたいとは思いません。(四〇)」

王母は心から喜んで彼女に告げた。

「すべてあなたの言うようにしましょう。あなたのそのような誓いはよいことです。(四一)」

王母はビーマの娘にそのように言って、スナンダーという娘に次のように告げた。(四二)

「スナンダーよ、この神のような姿の婦人を女中にしなさい。彼女といっしょに、自ら心置きなく楽しみなさい。(四三)」　（第六十二章）

ナラ王とカルコータカ竜

ブリハダシュヴァは語った。——

ナラ王はダマヤンティーを捨てた後、深い森林で大きな森火事を見た。(一) その時、彼は火の中で何ものかが大声で繰り返し叫んでいるのを聞いた。

「ナラよ、速く来て下さい。プニヤシュローカよ。(二)」

ナラは「恐れることはない」と言ってその火の中に入ると、竜王がとぐろを巻いて横たわっているのを見た。(三) その竜は合掌しふるえながらナラに告げた。

「王よ、私はカルコータカという竜です。(四) 私は苦行を積んだ何の罪もない梵仙（バラモンの聖仙）を欺きました。彼は怒りにかられて私を呪いました。人の王よ。(五) 彼の呪詛のために、私は一歩も動くことができません。あなたのためになることを教えてあげます。どうか私を救って下さい。(六) 私はあなたの友になります。私に匹敵するような蛇はおりません。あなたのために私は軽くなります。すぐに私を持って行って下さい。(七)」

そう言うと、竜王は親指ほどの大きさになった。ナラは彼を持って、火のとどかない場所へ行った。(八) 空地に行き、火から逃れ、竜を放そうとすると、カルコータカ竜は彼に告げた。(九)

「ニシャダの王よ、自分の歩数を数えながらもう少し進みなさい。大王よ、そうすれば、私

はあなたのためにすばらしいことをしてあげます。(二〇)」
そこでナラが歩数を数えはじめた時、蛇は第十歩目で彼を咬んだ。彼が咬まれた時、彼自身の姿は速やかに消失した。(二一)ナラは変形した自分自身を見て、驚いて立っていた。王は、自身の姿にもどった竜を見た。(二二)それから、カルコータカ竜はナラを慰めて言った。
「私は人々があなたに気づかないように、あなたの姿を変えたのです。(二三)そしてナラよ、そのためにあなたが大きな苦しみをこうむった者(カリ)は、あなたの中で、私の毒によって苦しみながら住むことになりましょう。(二四)大王よ、奴があなたを解放しない間は、彼の体は毒に満ちて、あなたの中で苦しみながら住むでしょう。(二五)彼は怒りから、罪もなくそれにふさわしくないあなたを騙しました。私は奴を苦しめて、あなたを守ってあげます。(二六)王中の虎よ、私の好意により、あなたには牙を持つものや敵やヴェーダ(呪文)を知る人々からの危険はないでしょう。(二七)王よ、あなたには毒による苦しみはないでしょう。王中の王よ、あなたは合戦において常に勝利を収めるでしょう。(二八)王よ、バーフカという御者であると称して、ここからリトゥパルナのところへ行きなさい。彼は賭博に巧妙であるから。ニシャダ国王よ、今すぐに美しいアヨーディヤーの都に行きなさい。(二九)彼はあなたの馬術と引き換えに、あなたに賭博の真髄を授けてくれるでしょう。そのイクシュヴァークの家系に生まれた、栄光ある王は、あなたの友になるでしょう。(三〇)あなたが賭博に通じたら、あなたは幸せになれるでしょう。そして奥様と二人の子供に再会でき、王国を取りもどすことができるでしょう。悲しむことはありません。私の言うことはその通りになり

ます。(三一)王よ、あなたが本来の姿を取りもどしたいと望む時は、私のことを思い出し、この衣を着て下さい。(三二)この衣を着れば、あなたは本来の姿を取りもどすでしょう。」
竜はそう告げて、ナラに神々しい一対の衣を与えた。(三三)このようにナラに指示し、衣を与えると、竜王はその場で消え失せた。(三四)(第六十三章)

リトゥパルナ王に仕える

ブリハダシュヴァは語った。——
その竜が消えた時、ニシャダ国王ナラは出発した。彼は十日後に、リトゥパルナの都に入った。(一)彼は王に近づいて言った。
「私はバーフカというものです。馬術の達人で、地上に私に匹敵するものはおりません。(二)困難な時とか、巧妙さを必要とする時には、私にたずねて下さい。また、私は他に優れて料理法を知っています。(三)この世にある諸々の技芸、またその他の行ないがたいこと、それらをすべてするよう努力します。リトゥパルナよ、私を雇って下さい。(四)」
リトゥパルナは言った。
「バーフカよ、滞在するがよい。どうかそのようにすべてをやって欲しい。とりわけ私は、常に車を疾駆するよう心がけてきた。(五)そこで、私の馬たちが速くなるように専念してくれ。あなたは馬長官になれ。あなたの俸給は一万〔金〕である。(六)このヴァールシュネー

ヤとジーヴァラとが常にあなたに仕えるであろう。彼らとともに楽しく暮らせ。バーフカよ、私のもとに住め。（七）」

ブリハダシュヴァは語った。——

このように言われて尊敬され、ナラはリトゥパルナの都で、ヴァールシュネーヤとジーヴァラとともに暮らした。（八）そこに住んでいる間、王はヴィダルバの王女のことを偲びながら、毎晩のように、いつも次のような詩節を唱えた。（九）

「あの哀れな女は飢えと渇きに苦しみ、疲れて、どこで寝ているだろう。あの愚かな夫を思い出しながら、今、誰に仕えているだろうか。（一〇）」

夜中このように唱えている王に、ジーヴァラはたずねた。

「あなたはいつもどの女性のことを嘆いているのですか。バーフカ様、お聞きしたいものです。（一一）」

ナラ王は彼に答えた。

「ある愚か者に最愛の妻がいた。彼女も彼をよりいっそう愛していた。（一二）ところがその愚か者は、ある事情のために、彼女と別れた。その愚か者は、別離して、不幸にうちひしがれてさまよった。（一三）彼は昼も夜も絶えず悲しみに焼かれ、夜中、彼女のことを思い出して一詩節を唱えるのである。（一四）彼はすべての地上をさまよって、あるところである職を得て、生きる資格もないのにそこに住んでいる。別離の苦しみを絶えず思い出しながら。

（一五）一方、その男について難儀な森に行った女は、徳少ない彼に捨てられ、生きている可能性は少ない。（一六）その若い女は一人で、道に迷い、そのようなことには慣れておらず、飢えと渇きに満ち、生きている可能性は少ない。（一七）彼女はその徳少ない愚か者によって、常に野獣のうろつく恐ろしい大森林に捨てられたのだ。貴公。（一八）」

このようにして、ニシャダ国王は、ダマヤンティーのことを偲びつつ、その王の居城において人に知られることなく暮らしたのである。（一九）（第六十四章）

発見されたダマヤンティー

ブリハダシュヴァは語った。——

ナラが王国を奪われ、妻とともに召使の境遇になったところ、ビーマはナラに会いたいと望んでバラモンたちを派遣した。（一）ビーマは彼らに多くの財物を与えて命じた。

「ナラと私の娘のダマヤンティーを探せ。（二）この任務が完了し、ニシャダ国王が発見されたら、あなた方のうちで二人を連れて来てくれた人に、千頭の牛と、下賜地として都市のように立派な村を与えるであろう。（三）ナラとダマヤンティーをここに連れて来ることができなくとも、発見するだけでも、千頭の牛を賞品として与える。（四）」

そう言われて喜んだバラモンたちは、ニシャダ国王と妻を求めて、都市や地方を探しながら、あらゆる方角へ向って行った。（五）

さて、スデーヴァというバラモンは、美しいチェーディの都を探していた時、王宮で王のための吉日を祝福する際に、スナンダーといっしょにいるヴィダルバの王女を見つけた。(六) その類いない容色はほとんど知られることはなく、彼女は煙の群におおわれた太陽の光のようであった。(七) その非常に汚れて痩せた大きい眼の女を見て、彼は種々の特徴からビーマの娘であると推理した。(八)

スデーヴァは言った。

「この女性は、私が以前見た人と同様の姿をしている。私は今日、目的を果たした。世の人々に愛される吉祥天（シュリー）のような人を見て。(九) 彼女は満月のような顔をして、美しい黒色で、魅力的で丸い乳房をしている。その輝きですべての方角の闇を払う女神のようである。(一〇) 美しい蓮花やパラーシャのような眼をし、愛の神の〔妻〕ラティのようである。全世界に愛される満月の光のようである。(一一) あのヴィダルバの湖から、あたかも運命のいたずらにより引き抜かれた、ほこりや泥にまみれた蓮によく似ている。(一二) 彼女はラーフ（日食、月食を起こす悪魔）が月を呑みこんだ満月の夜のようである。夫のことで悲嘆に暮れてやつれ、水流の涸れた川のようである。(一三) 葉の落ちた蓮のある、鳥たちが恐れた、象の鼻で荒され動揺した蓮池のようである。(一四) 非常に繊細で、生まれのよい身体で、宝物に満ちた家にふさわしい。すぐに抜かれて、熱に焼かれている蓮のようである。(一五) 彼女は容色と高貴さをそなえ、装飾にふさわしいのに装飾をつけず、大空で、黒雲におおわれた新月のようである。(一六) 諸々の享楽と親しい者たちもなく、親類もなく、やつれて、夫に会いたいという一念で彼女は生きながらえている。(一七) 女にとって、飾りがなくても、夫は最高の飾り。夫と別れたら、輝かしい女でも輝かない。(一八) ナラは彼女なしで、この上ない難儀な思いをしているだろう。生きながらえているだろうか。悲しみに沈んでいないだろうか。(一九) 黒い髪の、蓮のような眼をした、幸福にふさわしい彼女が苦しんでいるのを見て、私の心も苦しむ。(二〇) それにしても、あの美しい貞女はいつになったら、夫に巡り会って、苦しみの彼岸に行けるのか。ローヒニー（月宿の名、月の妻とされる）が月と会うように。(二一) 王位を失ったニシャダの王は、再び彼女と出会い、領地を取りもどして喜ぶであろう。(二二) 彼女は彼と同様の徳性と若さをそなえ、同様に高い生まれである。ニシャダ国王はヴィダルバの王女にふさわしく、その黒い瞳の王女は彼にふさわしい。(二三) 私はあの比類のない、精力と気力をそなえた王の、夫に会いたいと切望する妻を慰めるべきである。(二四) 私は今、満月のような顔をした彼女を慰めよう。いまだかつて苦しみを経験したことがないのに苦悩し、もの思いにふけっている彼女を。(二五)」

ブリハダシュヴァは語った。——

このように種々の要因と特徴によって考察してから、バラモンのスデーヴァはビーマの娘に近づいて告げた。(二六)

「ヴィダルバの王女よ、私はスデーヴァです。あなたの兄上の親友です。ビーマ王の命令により、あなたを探すためここに来ました。(二七) 王妃様、あなたの父上、母上、兄上たちは

お元気です。そこにいるあなたの二人のお子様たちもお元気です。しかしあなたのことを心配して、親類一同は気力を失ったかのような状態です。（二八）」
ダマヤンティーはスデーヴァを確認すると、自分の親しい人々すべてについて、順々に質問した。（二九）悲しみにやつれたヴィダルバの王女は、兄の親友である最高のバラモンのスデーヴァを突然見て、大いに泣いた。（三〇）それから、スナンダー姫は、悲しみにやつれた彼女が一隅でスデーヴァと語りながら泣いているのを見て、母に使いをやった。
「バラモンと会ってから、女中がひどく泣いています。もしよろしければ、彼女が誰であるか調べて下さい。（三一―三二）」
かくて、チェーディ王の母は、王宮から、若い女がバラモンといっしょにいる場所にやって来た。（三三）それから王母は、スデーヴァを呼び寄せてたずねた。
「この美しい女（ひと）は誰の妻で、誰の娘ですか。（三四）この美しい眼の女は、どうして親族や夫と別れたのですか。バラモンよ、あなたは知っているでしょう。どうして彼女はこのようなことになったのですか。（三五）あなたから一部始終を残らず聞きたいと思います。私は神のような姿をした彼女についておたずねします。ありのままに答えて下さい。（三六）」
最高のバラモンのスデーヴァは、彼女にこのようにたずねられて、安楽に座り、ダマヤンティーについてありのままに答えた。（三七）

（第六十五章）

スデーヴァは語った。
「ヴィダルバ国王のビーマは、徳性あり恐ろしく勇猛です。この方は彼の娘で、ダマヤンティーというお名前です。（一）ニシャダの国王で、ヴィーラセーナの息子のナラという方がいます。この方は、その聡明なプニヤシュローカ（ナラ）の奥様です。（二）そのナラ王は、賭博をして、弟に王国を奪われました。彼はダマヤンティーとともに去り、その行方はまったくわかりませんでした。（三）そこで我々はダマヤンティーを探して地上を遍歴し、今、王女様はあなたの御子息の王宮で見つかりました。（四）容色にかけて彼女に匹敵する人間の女は存在しません。この美しい黒色の女性の両眉の真中に、蓮の形をした、生まれつきの最高の印（ほくろ）が認められましたが、今は見えません。（五）月が雲におおわれるように、汚れにおおわれて。その印は、〔彼女の幸運を〕示現するために、創造者によってつけられたものです。（六）新月で暗い月の光のように、あまり輝いていませんが、しかも彼女の容色は失われていません。体はすっかり汚れ、飾られていませんが、容色は黄金のように明らかに輝くのです。（七）その体の美しさと、このほくろにより、私は王妃様を認識しました。隠された火が熱さにより認識されるように。（八）」
ブリハダシュヴァは語った。――
スナンダーはスデーヴァの言葉を聞くと、ほくろをおおっていた汚れを拭った。（九）ほこりを拭われたダマヤンティーのほくろは、雲のない空の月のように輝いた。（一〇）スナンダ

ーと王母はほくろを見て、泣きながら彼女を抱きしめ、しばし立ち尽くしていた。王母ははらはらと涙を流して言った。（二一）

「あなたは私の妹の娘です。そのほくろからわかりました。美しい顔の女よ、私とあなたの母は、偉大な王族、ダシャールナの王であるスダーマンの娘です。（二二）彼女はビーマ王に、私はヴィーラバーフ王に与えられたのです。あなたが生まれた時、私はダシャールナの父の家であなたを見ました。（二三）美しい女よ、ここはあなたの父の家も同然です。ダマヤンティーよ、私の富も力も、あなたのもの同然です。（二四）」

ダマヤンティーは心から喜んで伯母におじぎをして、次のように言った。（二五）

「私はここに素姓を知られないでいた時も、幸せに暮らしておりました。すべての望みをかなえられ、いつもあなたに保護されながら。（二六）これからは、私の滞在はよりいっそう幸せになることは疑いありません。しかしお母様、私は長いこと家に帰っておりません。どうかおいとまを下さい。（二七）私の幼い二人の子供たちがそこに連れて行かれて住んでいます。父親や私と別れて悲嘆に暮れ、どのように暮らしているでしょうか。（二八）もしあなたが今少し親切にして下さるなら、ヴィダルバに行きたいと思います。すぐに車を用意するよう御命令下さい。（二九）」

伯母である王母は喜んで、「わかりました」と彼女に答えてから、息子の許可を得て、彼女を大軍で守らせ、食物や飲物や衣類を持たせ、人のかつぐ美々しい車に乗せて出発させた。（三〇―三一）美しい女はほどなくしてヴィダルバに着いた。親類の人々はみな喜んで彼女を歓迎した。（三二）すべての親族、二人の子供、父母、すべての友人たちが元気なのを見て、誉れ高く美しいダマヤンティーは、最高の作法によって神々とバラモンを供養した。（三三―三四）王は娘を見て喜んで、千頭の牛、村、財産を与えてスデーヴァを満足させた。（三五）美しい女は父の家で夜を過ごして疲れを癒やしてから、母に次のように告げた。（三六）（第六十六章）

ダマヤンティーは言った。

「お母様、私はあなたに真実を言います。もし私が生きているようにと望まれるなら、勇士ナラを連れもどすよう努力して下さい。（一）」

ブリハダシュヴァは語った。――

ダマヤンティーにそう言われて、王妃はひどく苦しみ、涙に満ちて、何も答えなかった。（二）そのあり様を見て、すべての宮中の人々は、「ああ、ああ」と嘆いて、ひどく嘆いた。（三）それから、王妃はビーマに語った。

「あなたの娘のダマヤンティーが夫のことを嘆いています。（四）彼女は恥じらいを捨てて、自ら私に告げました。使者をやってプニヤシュローカ発見に努力して下さい。（五）」

彼女にせきたてられて、王は配下のバラモンたちをすべての方角に派遣した。「ナラ発見に努力せよ」と命じて。（六）ヴィダルバ国王の雄牛たちはダマヤンテ

イーに会って、「我々は出発します」と告げた。(七) するとビーマの娘は言った。
「あらゆる地方で、方々の人々の集会で、何度も次のようにたずねて下さい。(八) 賭博師よ、私の衣の半分を切って、あなたはどこへ行ったの。愛しい人よ、森で眠っている愛する妻を捨てて。(九) その若い女は、指示された通りの場所で、あなたを待っています。半衣をまとい、ひどく身を焦がしながら。(一〇) 王よ、絶えずその悲しみにより泣いている女に恵みをお与え下さい。勇士よ、答えて下さい。(一一) 彼が私を哀れと思うように、このようなことを告げて下さい。火は風に吹かれて森を燃やしますから。(一二)
夫は常に妻を扶養し保護しなければなりません。あなたは法(ダルマ)を知っているのに、どうしてその両方をないがしろにするのですか。(一三) あなたは名声あり、聡明で、名家の生まれで、常に慈悲深い。それが私の幸運が尽きたことにより、無慈悲になったのではないかと恐れます。(一四) 勇士よ、人中の雄牛よ、私に哀れみをかけて下さい。あなたが教えて下さったように、慈悲は最高の法です。(一五)
このように告げるあなた方に、もし誰かが答えるなら、その人が誰であるか、またどこに住んでいるかたずねて下さい。(一六) そして、その人があなた方の言葉を聞いて答えたなら、最高のバラモンたちよ、その言葉を速やかに私に伝えて下さい。(一七) あなた方がビーマの命により働いていることを彼がわからないように、注意してもどって来て下さい。(一八) 彼は富んでいるだろうか、無一物であろうか、財産を望んでいようかと、彼の意図を知るべきです。(一九)」

そのように言われて、バラモンたちは災いに陥ったナラを探すためにあらゆる方角に行った。(二〇) 彼らバラモンたちは諸々の都市と地方、村々、部落、隠棲所を探したが、ナラを見出さなかった。(二一) バラモンたちはすべて、ダマヤンティーに言われた通りの言葉を、あちこちで告げてまわった。(二二)（第六十七章）

二度目の婿選び式

ブリハダシュヴァは語った。——
さて長い時が過ぎて、パルナーダというバラモンが都に帰り、ビーマの娘に告げた。(一)
「ダマヤンティー様、私は昼夜ニシャダ国王を探しているうちに、アヨーディヤーの都に行き、バーンガスヴァリ（リトゥパルナ）に近づきました。(二) 美しい顔色の女(ひと)よ、私は大勢の人々の前で、あなたの言葉を、言われた通りに、栄光あるリトゥパルナに告げました。(三) 私が何度告げても、リトゥパルナ王も会衆も、何も言いませんでした。(四) ところが、私が王のもとを辞去した時、ある男が人のいない所で私に話しかけました。それはリトゥパルナの従者のバーフカという名前の者でした。(五) 彼は王の御者で、醜い容姿をし、短い腕を持ち、車を疾駆することに長け、料理に巧みでした。(六) 彼は何度もため息をつき、繰り返し嘆きつつ、私に息災かどうかたずねてから、次のように言いました。(七)
『良家の婦人というものは逆境に陥っても、自分で自分を守る。その貞女は、疑いもなく天

界を獲得する。夫に捨てられても、決して怒らないものだ。(八) 逆境に陥り幸せを失った愚者に捨てられても、彼女は怒ることはできない。(九) 彼が生命をつなぐことを望んで、鳥たちに衣を奪われ、苦悩に焼かれている時も、美しい黒色の女は怒ることはできない。(一〇) 夫に大事にされてもされなくても、夫があのように王国を失い、富貴を失ったのを見ても、美しい黒色の女は怒ることはできない。(一一)』

私はそのような彼の言葉を聞いて、急いでここにもどって来ました。お聞きになったら、後はあなたが判断して下さい。王様にもお知らせ下さい。(一二)」

ダマヤンティーは眼にいっぱい涙をためてパルナーダの言葉を聞き、密かに母に近づいて告げた。(一三)

「お母様、このことはビーマ王には知らせるべきではありません。あなたのいらっしゃるところで、最高のバラモンのスデーヴァに指示を与えます。(一四) もし私のためを思って下さるなら、ビーマ王が私の意図に気づかないように努力して下さい。(一五) お母様、スデーヴァは前に私を親族のもとにつれもどしましたが、まさにその強運をもって、スデーヴァはナラを連れもどすため、アヨーディヤーの都に速やかに行くべきです。(一六)」

美しいヴィダルバの王女は、休息をとった最高のバラモンのパルナーダに、財物を与えてこの上なく敬意を表した。(一七)

「バラモン様、ナラがここにもどったら、更に多くの財物をさし上げます。あなたは他の人ができなかったような多くのことを私のためにして下さったのですから。最高のバラモンよ、

おかげで私はすぐに夫と再会できそうですから。(一八)」

そう言われた偉大なバラモンは、非常にめでたい祝福の言葉によって彼女に敬意を表し、目的を成就して家に帰った。(一九) それから、ダマヤンティーはかのバラモン（スデーヴァ）を呼んで、悲嘆に暮れ、母の前で次のように言った。(二〇)

「スデーヴァよ、アヨーディヤーに住むリトゥパルナ王のもとに行って、こう告げて下さい。『ビーマの娘ダマヤンティーは他の夫を望み、再び婿選び式(スヴァヤンヴァラ)を行ないます。(二一) 諸王や王子たちはみなそこに行きます。日を数えますと、それは明日行なわれるはずです。(二二) もしよろしければ、速やかに行きなさい。敵を制する勇士よ。太陽の昇る時、彼女は第二の夫を選ぶでしょう。勇士ナラが生きているのか死んだのか不明ですから。(二三)』と。」

バラモンのスデーヴァは、リトゥパルナ王のもとに行って、彼女に言われた通りのことを告げた。(二四)　(第六十八章)

ブリハダシュヴァは語った。——

リトゥパルナ王はスデーヴァの言ったことを聞くと、優しい言葉でバーフカを口説きながら言った。(一)

「私はヴィダルバ国に、ダマヤンティーの婿選び式に行きたいのだ。バーフカよ、馬術の奥義を極めた者よ、もしあなたが承知してくれるなら一日のうちに。(二)」

王にこのように言われて、ナラの心は苦悩により張り裂けそうになった。そして気高い男は考えこんだ。(三)――

「ダマヤンティーは苦しみに迷ってそのようなことをするのだろう。あるいは、私のためにこのような大計画を考えついたものか。(四)ああ、あの哀れなヴィダルバの王女は、卑しく邪悪で無知な私によって騙されたので、意地悪をしようと望んだのだ。(五)世間では女の性は移り気で、しかも私の罪はひどいものだから、あの細い胴の女は、どうしようもなく、愛情も失せ、私のために嘆き悲しみ、絶望してそのようにするのであろう。(六)いや、決してそのようにするはずはない。特に子供がいっしょにいるのに。そこで、それが真実であるかどうか（異本による）行って確かめよう。自分のために、リトゥパルナの望み通りにしよう。(七)」

バーフカは落胆したが、このように決心して、合掌してリトゥパルナ王に答えた。(八)

「約束いたします。王中の虎よ、一日のうちにヴィダルバの都に着けるでしょう。(九)」

それからバーフカは、バーンガスヴァアリ（リトゥパルナ）の命によって馬屋に行き、馬を吟味した。(一〇)バーフカはリトゥパルナにひどくせきたてられて、遠路を疾走する能力のある痩せた駿馬たちを見出した。(一一)その馬たちは、威光と力をそなえ、血統よく、よい性質で、劣った特徴がなく、広い鼻孔と大きな顎をしていた。十の巻毛を完全にそなえ、シンドゥ産で、風のように速かった。(一二)その馬たちを見ると、王は少し憤然として言った。

「あなたは何をやろうというのか。余を欺いてはいけない。(一三)ろくに馬力も精力もなさそうなこの馬たちが、どうして私を運ぶことができるか。どうしてこのような馬たちで、遠

路を行くことができるか。(一四)」

バーフカは答えた。

「この馬たちは疑いもなくヴィダルバに行き着くでしょう。あるいは、他の馬たちがよいとお考えなら、王よ、どの馬をあなたの車につなぎましょうか。(一五)」

リトゥパルナは言った。

「バーフカよ、あなたのみが馬術の奥義を知り、それに巧みである。もしそれらが有能であると思うなら、すぐにそれらを車につなぎなさい。(一六)」

ブリハダシュヴァアは語った。――

馬に通じたナラは、それから、血統と性質のよい四頭のすばらしい駿馬を車につないだ。(一七)かくて王は準備された戦車に急いで乗った。その時、最高の馬たちは大地にひざまずいた。(一八)それから最高の人、栄光あるナラ王は、威光と馬力にあふれた馬たちを慰撫した。(一九)そして手綱で馬たちを制御して、御者のヴァールシュネーヤを車に乗せて、全速力で行こうとした。(二〇)最高の馬たちはバーフカ（ナラ）により適切にかりたてられて、車に乗る者をして、空を飛んでいるのではないかと迷わせるほどであった。(二一)風のように走る馬たちを見て、賢明なるアヨーディヤーの王は最高に驚いた。(二二)ヴァールシュネーヤもまた、車の響きを聞き、馬を御する術を見て、バーフカの馬術の知識について考えた。(二三)

「彼は神々の王の御者であるマータリであろうか。というのは、同様の偉大な特徴が勇士バーフカに認められるから。(二四) あるいは、馬の血統の真理を知るシャーリホートラ(馬学の権威)が、最高に醜い人間の体をとったものであろうか。(二五) あるいは、敵の都市を征服するナラ王がここに来たものであろうか。」
彼はこのように考えた。(二六)
「まてよ、ナラが知っている術を彼も知っている。バーフカとナラの知識は等しいと私は見る。(二七) それに、彼の年齢はナラと同じぐらいだと思う。彼はナラと同じ術を持っているが、力に満ちたナラではなかろう。(二八) しかし、偉大な人々は、神的な方法(または、「運命」)により、論書に説かれた醜い姿をとって(原文疑問)、隠れてこの地上をさまようものだ。(二九) 体の変容に関し、私の判断は二分される。私の判断は根拠を欠いているから。(三〇) 彼は年齢の点ではナラに似ているが、容姿が正反対である。ナラはすべての美質をそなえているが……、結局のところバーフカはナラであると私は思う。(三一)」
ナラの以前の御者であったヴァールシュネーヤは、このように何度も躊躇しては、心の中で考えこんだ。(三二) 一方リトゥパルナは、御者ヴァールシュネーヤとともに、バーフカの馬術を見て満足した。(三三) バーフカの力量、精力、気力、馬を御する巧みさ、最高の努力を見て、彼はこの上ない喜びに達した。(三四) (第六十九章)

カリの呪詛から解放されたナラ王

ブリハダシュヴァは語った。——
彼は空を飛ぶ鳥のように、川や山や森や湖を速やかに越えた。(一) 車がそのように進んで行く時、敵の都を征服するバーンガスヴァリ(リトゥパルナ)王は、上衣がずり落ちるのを見た。(二) 気高い王は、急いではいたが、衣が落ちた時、「あれを取ろう」とナラに言った。(三)
「知者よ、この凄い速さの馬たちを止めてくれ。ヴァールシュネーヤが私の衣を取りもどしてくれるまで。(四)」
その時、ナラは彼に答えた。
「あなたの衣は遠方で落ちました。もう数由旬(ヨージャナ)も過ぎました。取りもどすことはできません。(五)」
ナラがそう言った時、バーンガスヴァリ王は森の中で、実をつけたビビータカ樹を見た。(六) 王は急いでいたが、それを見てバーフカに言った。
「御者よ、見よ。私も計算にかけては最高の力がある。(七) すべての人が一切を知っていることはない。一切知者は決して存在しない。知識は決して一人の人に完全にそなわることはない。(八) バーフカよ、この樹にある葉と実と、ここに落ちた葉と実とでは、あちらの方が百一多い(原文疑問)。(九) それからこの二本の枝には五千万の葉がある。この二本の枝とその他

の小枝を集めれば、その両方から二千百九十五の実がとれる。(一〇)」
バーフカは車から飛び降りて王に言った。
「敵を苦しめる王よ、あなたは私の見ていないことを自慢しているようなものです。(一一)あなたは実際に見たかのように計算しているから、大王様、私はあなたの眼の前でビータカを数えましょう。(一二)あなたの言う通りであるかそうでないか、私にはわかりませんから。王よ、あなたの見ている前でその実を数えましょう。しばらくの間、ヴァールシュネーヤが馬の手綱をとるように。(一三)」
王は御者に、「今はぐずぐずする時ではない」と告げた。しかしバーフカは、最高の努力を払って王に言った。(一四)
「しばらくの間待って下さい。あるいは、あなた〔だけで〕急いで行って下さい。ここからは道は容易です。ヴァールシュネーヤに操縦させて行きなさい。(一五)」
リトゥパルナは彼をなだめながら言った。
「バーフカよ、あなたのみが御者だ。この地上に、あなた以外にいない。(一六)馬術に巧みな者よ、あなたがいるのでヴィダルバに行こうと望んだのだ。あなたが頼りだ。邪魔をしては困る。(一七)あなたの言う望みをかなえよう。もしヴィダルバに行って太陽を拝ませてくれれば。(一八)」
そこでバーフカは告げた。
「私はビビータカを数えたいと思います。それからヴィダルバに行きましょう。私の願いを

きいて下さい。(一九)」
王はしぶしぶ「数えなさい」と言った。バーフカは車から降りて速やかにその樹を切った。(二〇)彼は王が告げた通りの実を数えて、驚嘆して王に言った。(二一)
「王様、私は驚異的なあなたの力を見ました。それを知る術を知りたいと思います。(二二)」
王は早く行きたいと急いでいたが、彼に答えた。
「私は賭博の真髄を知っており、また算術に通達している。(二三)」
そこでバーフカは彼に言った。
「その術を私に授けて下さい。人中の雄牛よ、私からも馬術の真髄を受け取って下さい。(二四)」
リトゥパルナ王は、目下の仕事の重大性から、また、馬術の知識を欲していたから、「承知した」と答えた。(二五)
「望み通り最高の賭博の真髄を受けなさい。バーフカよ、私に馬術の真髄を教えることはしばらくお預けにしておく。」
このように言って、リトゥパルナはナラに術を授けた。(二六)彼が賭博の真髄を知った時、カリはその体から抜け出た。カルコータカの猛毒を口から常に吐き出しながら。(二七)その毒に苦しむカリの呪詛の火が抜け出た。それに苦しめられて、王は長いこと我を失っていたのであった。(二八)カリは毒から解放され、自分の姿を現わした。ニシャダ国王ナラは怒って、彼を呪おうとした。(二九)カリは恐れおののき、合掌して彼に言った。

「王よ、怒りを抑えて下さい。あなたに最高の名声をさし上げます。（三〇）前にインドラセーナの母（ダマヤンティー）は、あなたに捨てられた時、怒って私を呪いました。それ以来、私はひどく苦しめられました。（三一）無敵の王中の王よ、私は昼も夜も竜王の毒に焼かれながらあなたの中に住んでいました。（三二）この世において、倦むことなくあなたを讃える人々には、私のもたらす危険が決してないでしょう。（三三）」

そう言われて、ナラは自分の怒りを抑えた。それから、恐れたカリは速やかにビビータカ樹に入った。しかし、他の者は、ニシャダ国王と話しているカリを見なかった。（三四）木の実を数えた後、カリが消えた時、勇猛なニシャダ国王は苦熱から解放された。（三五）最高の喜びと最高の威力をそなえ、威光に満ちた彼は車に乗り、駿馬を御して出発した。それ以来、ビビータカ樹は、カリが宿ることから、評判が悪くなった。（三六）ナラは心から喜んで、鳥のように飛び上がる最高の馬たちを幾度もかりたてた。（三七）気高い王はヴィダルバをめざして進んで行った。ナラが去った時、カリも家へ行った。（三八）苦熱の去ったナラ王は、その姿こそ本来のものではなかったが、カリから解放された。（三九）

（第七十章）

ナラ王、妻と再会する

ブリハダシュヴァは語った。——

それから、不屈の勇者リトゥパルナは、夕方にヴィダルバに着いた。人々はビーマ王に彼の到着を報告した。（一）その王はビーマの言葉に従って、クンディナの都に入った。車の音によって、十方とその間の方角すべてを響かせながら。（二）

そこにいたナラの馬たちは戦車の響きを聞いた。そして、かつてナラの前にいた時のように喜んだ。（三）ダマヤンティーもナラの車の響きを聞いた。雨季の始まりにおける雷雲の音のような響きを。（四）ビーマの娘も馬たちも、かつてナラがナラの馬たちを操縦していた時と似た車の音であると考えた。（五）テラスにいる孔雀たちと小屋にいる象たちと馬たちは、王の戦車の音を聞いた。（六）孔雀や象たちは、戦車の音を聞いて、雨季の始まりを待ちこがれるかのように鳴いた。（七）

ダマヤンティーは言った。

「この戦車の音は、大地を満たすかのように、私の心を喜ばせるから、あれはナラ王に違いない。（八）もし今日、あの月光のような顔のナラを、数えきれない美質を持つ勇士を見ることができなければ、私は疑いもなく死ぬであろう。（九）もし今日、あの勇士の快い腕の中に入ることができなければ、私は疑いもなく死ぬであろう。（一〇）もし雷雲のような音をたてる、黄金にも似たニシャダ国王が、今日私のもとに来ないなら、私は疑いもなく死ぬであろう。（一一）もし獅子のように勇猛な、発情した象を抑止する王中の王がやって来ないなら、私は疑いもなく死ぬであろう。（一二）あの偉大な人が、不誠実であったり、害をなしたり、彼ふざけている時も間抜けなことを言ったりしたことを憶えていない。（一三）私の夫は忍耐強

く勇敢で、柔和で感官を制御している。私のニシャダ国王は、密かに卑しい行為に従うこともなく、〔他の女には〕不能者のようであった。（二四）私が彼の美質を思い出し、昼も夜も彼に専念している時、私のこの心は、愛しい人と別れて、悲しみにより引き裂かれる。（二五）」

ブリハダシュヴァは語った。――

このように嘆きながら、彼女はなかば意識を失って、ナラを見たいと思うあまり、高い宮殿の上に登った。（二六）彼女は前庭に、車に乗っているリトゥパルナ王と、ヴァールシュネーヤとバーフカを見た。（二七）それから、ヴァールシュネーヤとバーフカは最上の車から降りると、馬を解放して車を止めた。（二八）リトゥパルナ王は車の座席から降りて、恐ろしく勇猛なビーマに近づいた。（二九）

ビーマは女性の謀（はかりごと）とも知らず、突然訪れた彼を最高のもてなしで受け入れた。（二〇）

「ようこそ何のご用ですか。」

と王はたずねた。というのは、王は彼が娘のために来たことを知らなかったからである。（二一）不屈の勇者である賢明なリトゥパルナ王は、王や王子を一人も見出さなかった。婿選び式の話などなかったし、バラモンも集まっていなかった。（二二）そこでコーサラ王は心の中で推量して、「あなたにご挨拶に参りました」と告げた。（二三）ビーマ王の方も微笑して心の中で考えた。

「彼が多くの村々を越え、百ヨージャナの距離をやって来た原因は、もっと他にあるはずだ。

彼はそれをうまく達成することができなかった。そして、彼が来た原因として、僅かのことが告げられたのである。彼の言うようではなかろう。」

その王は彼をもてなしてから〔部屋に〕引き取らせた。「お疲れでしょう、休息して下さい」と何度も言いながら。（二四―二六）

喜んだビーマ王に歓待されて喜び、満足したリトゥパルナ王は、王の召使につき従われて、指示された部屋に入った。（二七）リトゥパルナがヴァールシュネーヤと立ち去った時、バーフカは車を車庫に入れた。（二八）彼は馬たちを自由に歩きまわらせ、〔馬の〕論書にもとづいて自らねぎらってから、車の座席に座った。（二九）

ダマヤンティーは、バーンガスヴァリ（リトゥパルナ）王と御者のヴァールシュネーヤとそのような状態のバーフカを見て、悲嘆に暮れて考えた。

「あの車の響きは誰のものであったのか。ナラのものであるかのような大音響であったが、ニシャダ国王を見出さない。（三〇―三二）きっとヴァールシュネーヤがその術を学んだものであろう。だからその車の響きはナラのそれのように大きかったのだ。（三二）あるいは、リトゥパルナもナラ王と同様に巧みなので、車の響きはナラのもののように思われたのか。（三三）」

ダマヤンティーはこのように考えこんでから、ニシャダ国王のことを探るために使いの女を派遣した。（三四）

（第七十一章）

ダマヤンティーは告げた。

「ケーシニーよ、行ってあの車の座席に座った、腕の短い醜い御者が誰であるかを調べて下さい。（一）非の打ち所のない女よ、あの男のもとに行って、優しく心をこめて息災かどうかたずね、ありのままに真実をたずねなさい。（二）私は彼がナラ王ではないかと大いに疑っています。私は満足し、心は幸せです。（三）話の合間に、あなたはパルナーダ（バラモンの名。三・六八参照）の言葉を告げるべきです。美しい尻の女よ、そして彼の答えに注意すべきです。（四）」

ブリハダシュヴァは語った。——

そこで使いの女は行って、注意深くバーフカに話しかけた。美しいダマヤンティーはテラスに立ってそれを見つめていた。（五）

ケーシニーは言った。

「インドラのような人よ、ようこそ。お元気ですか。人中の雄牛よ、どうかダマヤンティー様の言葉をお聞き下さい。（六）あなた方はいつ出発したのです。何のためにここに来たのです。ありのまま真実を告げて下さい。ヴィダルバの王女が聞きたいと願っています。（七）」

バーフカは答えた。

「美しい女(ひと)よ、コーサラの誉れ高い王は、明日ダマヤンティーの第二の婿選び式があると聞きました。（八）王はそれを聞いて、百由旬(ヨージャナ)を走る風のように速い駿馬たちにより出発しました。（九）」

ケーシニーは言った。

「御一行に三番目の人がいますが、彼は何者でどこから来たのですか。そしてあなたは誰に属し、またどうしてこの馬術があなたのものになったのですか。（一〇）」

バーフカは答えた。

「あれはプニヤシュローカ（ナラ）の御者で、ヴァールシュネーヤというものです。ナラが逃亡した時、バーンガスヴァリに仕えました。（一一）私もまた馬術に巧みで、料理にも通じています。リトゥパルナは自ら、御者及び料理人として私を選んだのです。（一二）」

ケーシニーは言った。

「ところでヴァールシュネーヤは、ナラ王がどこへ行かれたか知っていますか。バーフカさん、ひょっとして彼はあなたに話しませんでしたか。（一三）」

バーフカは答えた。

「彼はあの悪いナラの二人の子をここに預けてから、自分の望みのままに立ち去りました。彼はニシャダ国王の消息を知りません。（一四）また、その他の人も、誰もナラのことを知りません。誉れある女(ひと)よ。その王は姿を消して、密かにこの世界をさまよっています。（一五）ナラ自身だけがナラのことを知っています。そして、彼に最も近い女性が……。というのは、ナラであることを示す標識(しるし)は全くありませんから。（一六）」

ケーシニーは言った。

「先にアヨーディヤーに行ったバラモンは、何度も次のような婦人の言葉を唱えていました。

(一七)

『賭博師よ、私の衣の半分を切って、あなたはどこへ行ったの。愛しい人よ、森で眠っている愛する妻を捨てて。(一八)その若い女は、指示された通りの場所で、あなたを待っています。半衣をまとい、ひどく身を焦がしながら。(一九)王よ、絶えずその悲しみにより泣いている女に恵みをお与え下さい。勇士よ、答えて下さい。(二〇)』

賢者よ、優しい言葉を彼女に告げて下さい。非の打ち所のないヴィダルバの王女は、その同じ言葉を聞きたいと願っています。(二一)あなたはかつて、それを聞いてそのバラモンに返歌をしたと伝え聞いていますから。ヴィダルバの王女はそれを再びあなたから聞きたいと望んでいます。(二二)」

ブリハダシュヴァは語った。――

ケーシニーにこのように告げられた時、ナラの心はうずき、その両眼は涙でいっぱいになった。(二三)しかし、王は苦しみながらもその苦悩を抑え、涙にかきくれた声で、以前言ったことを繰り返した。(二四)

「良家の婦人というものは逆境に陥っても、自分で自分を守る。その貞女は、疑いもなく天界を獲得する。(二五)夫に捨てられても、決して怒らないものだ。善行の鎧により、善女たちはその生命を守る。(二六)彼が生命をつなぐことを望んで、鳥たちに衣を奪われ、苦悩に焼かれている時も、美しい黒色の女は怒ることはできない。(二七)夫に大事にされてもされなくても、夫があのように王国を失い、富貴を失い、飢え、災いに陥っても……。(二八)」

ナラはひどく苦しんでこのように言いながら、涙をこらえることができずに泣いた。(二九)そこでケーシニーはそこを去って、彼が語ったこと、彼の変化を、すべてダマヤンティーに報告した。(三〇)

(第七十二章)

ブリハダシュヴァは語った。――

ダマヤンティーはそれを聞いてひどく悲嘆に暮れ、彼がナラではないかと疑い、ケーシニーに言った。(一)

「ケーシニーよ、行きなさい。再びバーフカを調査しなさい。何も言わないでそばにいて、彼の行動を見張りなさい。(二)美しい女よ、彼が何かの行為をなしたら、それをしている時の彼の様子を観察しなさい。(三)妨害をして、彼に火を与えてはなりませぬ。彼が要求しても、ぐずぐず引きのばして、まともに水を与えてはなりませぬ。(四)すべてを見て、彼のふるまいを私に知らせて下さい。その他にも見たことを何でも、私に言って下さい。(五)」

ダマヤンティーにそう言われて、ケーシニーは急いで出かけた。そして馬の権威者の諸々の特徴を見てから、再びもどって来た。(六)彼女はすべてをありのままに、またその時バーフカに認めた神的人的な標識をダマヤンティーに報告した。(七)

ケーシニーは語った。

「ダマヤンティー様。彼は非常に清らかな行ないの人です。私はあのような人をいまだかつてどこにも見たことも聞いたこともありません。(八)彼は狭い入口に入る場合決して頭を下げません。入口の方が彼を見て、彼が触れそうになると、うまい具合に広がるのです。狭い穴も、彼のために非常に広くなるのです。(九)王様はリトゥパルナのために多くの食物と大量の畜肉を贈りました。(一〇)それを洗うために瓶がそこに用意されました。ところが彼がその瓶を見るやいなや、それは水でいっぱいになったのです。(一一)バーフカは肉を洗ってから、それを〔器に入れかまどの上に〕のせて、一握りの草をとって断ち切り、その下に置きました。(一二)すると、突然そこに火が燃え上がったのです。私はその奇蹟を見て、驚いてここにもどって来ました。(一三)私はまた、そこで別の非常に驚くべきことを見ました。彼が火に触れても、彼は焼かれることはありませんでした。美しい女(ひと)よ。(一四)彼が望むやいなや、水が噴出します。私は更に、別の非常に驚くべきことを見ました。(一五)彼は花々をとり、静かに両手でそれを揉みしだきました。花々は揉みしだかれても、再び芳わしく生き生きとするのです。このような奇蹟的なことを見て、私は急いでもどって来ました。(一六—一七)」

ブリハダシュヴァは語った。——

ダマヤンティーはプニヤシュローカ(ナラ)の行為を聞いて、ナラがもどったと考えた。その行為としぐさによってナラであることが示唆されたのである。(一八)彼女は夫のナラがバ

ーフカの姿をしているのだと思い、泣きながら、再び優しい声でケーシニーに言った。(一九)

「美しい女よ、また出かけて行き、バーフカが油断をした時、台所から彼が調理した肉を取ってもどって来なさい。(二〇)」

主人に忠実なケーシニーは、出かけて行って、バーフカが他のことにかまけている時に、急いでその熱い肉を取って、すぐにダマヤンティーに渡した。(二一)彼女は以前ナラの調理した肉に非常に慣れ親しんでいたから、それを食べるとナラが料理したと考えて、ひどく悲しんで泣いた。(二二)彼女はたいそう取り乱したが、やがて顔を洗うと、ケーシニーとともに双子を遣わした。(二三)

バーフカ実はナラ王は、インドラセーナーとその弟を認識し、駆け寄って抱きしめ、膝にのせた。(二四)バーフカは神の子のような子供たちと会って、ひどく悲しい気持になって、大声を出して泣いた。(二五)ニシャダ国王は何度もその気持の動揺を示してから、突然二人の子を離すと、ケーシニーに告げた。(二六)

「お女中、この双子たちは私の子供たちにとてもよく似ている。そこで、彼らを見るやいなや、私は涙を出してしまったのだ。(二七)あなたが何度もやって来るので、人々はあなたのことを疑うだろう。私たちはこの国の客です。美しい女(ひと)よ、お願いですから行って下さい。(二八)」

（第七十三章）

ブリハダシュヴァは語った。――

ケーシニーは聡明なプニヤシュローカのすべての感情の変化を見て、すぐにもどって、ダマヤンティーに報告した。(一)ダマヤンティーは彼がナラであろうと思い、切望して苦しみ、母のもとに再びケーシニーを派遣した。(二)

「私はバーフカがナラだと思って何度も調べました。しかし、姿についての疑問だけは残ります。私は自分で知りたいと思います。(三)お母様、彼をここに入れるか、私が行くことを許すか、どちらかにして下さい。父に知らせるか、または知らせないで、取り計らって下さい。(四)」

ヴィダルバの王女によってこのように言われた王妃は、ビーマに告げた。王は娘の計画に同意した。(五)そこで彼女は父母に同意されて、彼女の居間にナラを招き入れた。(六)美しい顔色のダマヤンティーは、そのようにして会ったナラを見て、激しい悲しみにかられた。(七)赤く染めた衣（カーシャーヤ）（寡婦が着る）をまとい、髪を結い、泥で汚れたダマヤンティーはバーフカに言った。(八)

「バーフカさん。あなたは眠っている妻を森に捨てて去ったある法（ダルマ）を知る男性を前に見たことがありますか。(九)罪もない、疲れ切った愛しい妻を、人気（ひとけ）のない場所に捨てて行く人などおりましょうか。プニヤシュローカ、ナラを除いては……。(一〇)私があの王に対してどんな罪を犯したのでしょう。眠りこけている私を森に捨てて去るとは。(一一)私は以前、みなの見ている前で神々を捨て、彼を選びました。貞節で、愛を抱き、彼の子を生んだ女を、どうして捨てたのでしょう。(一二)ハンサたちの言葉に従って、火の前で手をとられた女に対し、『私はあなたを扶養する』と真実を誓ったが、あの誓いはどこへ行ったのです。(一三)」

ダマヤンティーがこれらすべてのことを話しているうちに、その両眼から悲痛な涙が多量に流れ出た。(一四)黒目がちの、赤い端をした両眼からはなはだしく流れる涙を見て、悲嘆に暮れたナラはこう言った。(一五)

「私が王国を失ったのは、私自らがしたことではない。カリがしたことだ。おののく女よ、あなたを捨てたことも……。(一六)ところが、法（ダルマ）を守る者のうちで最高の女よ、かつてあなたが森で苦しみ、私が衣を失ったことを悲しんでいた時、あなたはカリを呪った。(一七)カリは私の体の中で、あなたの呪詛に焼かれながらとどまっていた。彼は火の中にいるかのように、常にあなたの呪詛に焼かれていた。(一八)彼は私の努力と苦行によって克服され、美しい女（ひと）よ、今やわれわれの苦しみも終わることだろう。(一九)あの悪者は私を捨てて去った。そこで私はあなたを求めてここに来たのだ。大きい尻の女よ、私には他の目当てはないから。(二〇)

ところでおののく女よ。いったいどうしてあなたのような婦人が、愛する忠実な夫を捨てて、他の男を選べるのか。(二一)王の命により、使者たちが全世界をまわっている。『ビーマの娘が自由意志で、望むままに、自分にふさわしい第二の夫を選ぶであろう』と言って。リトゥパルナはそう聞くやいなや、急いでやって来たのだ。(二二―二三)」

ダマヤンティーはナラの嘆きを聞くと、合掌してふるえ、恐れつつ次のように言った。（二四）

（第七十四章）

ダマヤンティーは言った。

「よき人よ、私を誤解しないで下さい。ニシャダの国王よ、私は神々を捨ててあなたを選んだではありませんか。（一）バラモンたちがいたるところで、詩句によって私の言葉を十方で唱えたのは、あなたを発見するためだったのです。（二）パルナーダという賢明なバラモンが、コーサラ国のリトゥパルナの王宮であなたに出会いました。（三）彼が私の言葉を伝え、それに対するあなたの答を正しく伝えた時、ニシャダ国王よ、私はあなたをここに来させる方法を見出しました。（四）というのは、王よ、この世であなた以外には、一日のうちに馬で百由旬を行くことができる人はいませんから。（五）私は心でさえも一度も悪いことをしたことがないように、王よ、私はあなたの両足に赴きます。（六）この世間を経巡る、生類を監視する風は、もし私が悪いことをしたら、私の生命を奪って下さい。（七）また、常に世界の上方を運行する太陽は、もし私が悪いことをしたら、私の生命を奪って下さい。（八）一切生類の間を動く、証人である月は、もし私が悪いことをしたら、私の生命を奪って下さい。（九）この三神は、三界全体を維持する。その神々は真実に従って証言するか、それとも今すぐ私を捨てて下さい。（一〇）」

ブリハダシュヴァは語った。――

彼女がそのように言うと、風神は虚空から告げた。

「ナラよ、彼女は悪いことをしていない。私はこの真実をそなたに告げる。（一一）王よ、ダマヤンティーは徳性の宝を完全に守っている。我々は三年の間、彼女を見守って来た。（一二）彼女があなたのために工夫した方便は無比のものである。あなた以外の男が、一日で百由旬進むことはないから。（一三）王よ、あなたはビーマの娘を得、ビーマの娘はあなたを得た。あなたは疑念を抱いてはならぬ。妻といっしょになりなさい。（一四）」

風神がそう告げた時、花の雨が降った。神々の太鼓が鳴り、吉祥の風が吹いた。（一五）

勇猛なナラ王はこの最高の奇蹟を見て、ダマヤンティーに対する疑いを解いた。（一六）そこで王は汚れのない衣服を身に着け、竜王のことを想起して、本来の姿にもどった。（一七）ビーマの娘は、もとの姿にもどった夫を見て、彼を抱きしめて大声で泣いた。（一八）ナラ王も前と同じように輝きつつ、ビーマの娘を抱きしめ、自分の子供たちをふさわしく受け入れた。（一九）それから、切れ長の眼の美しい顔の女は、彼の顔を自分の胸にあてて、悲しみのあまりため息をついた。（二〇）そして、ほこりまみれの体をした美しい微笑の女は、涙にかきくれて、長いこと人中の虎を抱きしめたままでいた。（二一）

ダマヤンティーの母は喜んで、娘とナラに起こったことをすべてビーマに語った。（二二）すると大王は言った。

「私は翌朝、安楽に夜を過ごし、身を浄めたナラとダマヤンティーに会うであろう。(二三)」
かくて二人はかつて森の中をさまよっていたことをすべて語り合いつつ、喜んでその夜を過ごした。(二四) 彼は四年目にして妻と再会し、すべて望み通りに成就して、最高の喜びを得た。(二五) ダマヤンティーの方も、夫を得て非常に満足した。半分穀物の生えた大地が水を得て喜ぶように。(二六) ビーマの娘は夫と再会して、その憂さも去り、苦熱も静まり、喜びで元気も増し、願望を成就して輝いた。夜が昇る月により輝くように。(二七)

（第七十五章）

大団円

ブリハダシュヴァは語った。――
さて、ナラ王はその夜を過ごしてから、朝、美しく身を飾り、ヴィダルバの王女とともに王に会った。(一) それからナラはうやうやしく舅に挨拶した。彼に続いて、美しいダマヤンティーも父におじぎをした。(二) ビーマは最高に喜んで、彼を息子として受けいれた。また王は、ナラとともに夫に貞節なダマヤンティーをふさわしく敬って慰労した。(三) ナラ王はそのもてなしを礼儀正しく受け、自分の敬意をふさわしく伝えた。(四) それから、もどって来たナラを見て喜んだ人々の大歓声が都中に轟いた。(五) そして、旗や幟の群で飾られた都は輝き、王道は水をまかれ、清掃され、花々に満ちていた。(六) 市民たちの門々に切花がま

かれ、すべての神殿が飾りつけられた。(七)
リトゥパルナ王も、バーフカに身を変えたナラがダマヤンティーと再会したことを聞いて喜んだ。(八) ナラ王はリトゥパルナ王を招いて許しを乞うた。知性に満ちたナラは、筋道を立てて彼の許しを乞うた。(九) 敬意を表された王は、驚嘆してニシャダ国王を祝福した。
「あなたはよくぞ奥方と再会された。(一〇) ニシャダ国王よ、あなたが正体を隠して私の家に住んでいた時、私は何かあなたに悪いことをしなかったかね。(一一) もし私が知りながら、または知らないで、何か不適切なことをしたら、どうか許して欲しい。(一二)」
ナラは言った。
「王よ、あなたはほんの少しでも私に悪いことをしたことはありません。もししたとしても、私は怒りません。私はあなたを許さないわけにはいきません。(一三) というのは、王よ、あなたはこれまで私の友であり縁者でしたが、これからもどうかいっそう親しくして下さい。(一四) 私はあなたのもとで、すべての願望をよくかなえられ、快適に住んでいました。王よ、自分の家においてさえ、いつもあなたの家におけるように快適ではありませんでした。(一五) そして王よ、もしお望みなら、私の持つ馬の知識をあなたに授けたいと思います。(一六)」
ブリハダシュヴァは語った。――
ニシャダ国王はこのように言って、リトゥパルナに馬術を授けた。王は作法にのっとってそれを受けた。(一七) 王は馬術の真髄を受けてから、他の御者をともなって自分の都に帰っ

た。(二八)リトゥパルナが帰国した時、ナラ王はクンディナの都に、しばらくの間滞在した。
(二九)　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（第七十六章）

ブリハダシュヴァは語った。——
ニシャダ国王は一カ月間滞在した後、ビーマに挨拶をして、わずかな従者を連れて都を発ち、ニシャダに帰った。(一)彼は一台の輝かしい戦車と、十六の象兵と、五十の騎兵と、六百人の歩兵を連れて帰った。(二)気高い王は大地を震動させるかのように急いで、非常に激して、速やかに入城した。(三)ヴィーラセーナの息子ナラは、プシュカラのもとに行って告げた。
「また賭博をやろう。私は多くの富を獲得した。(四)ダマヤンティーとその他の私が得たものを賭ける。プシュカラよ、お前は王国を賭けろ。(五)再び賭博を行なうべきだと私は決意した。一回だけの賭けで……。汝に幸あらんことを。我々の生命を賭けよう。(六)勝利して、王国であろうと財産であろうと、他者のものを奪い取ったら、もう一度再挑戦を受けるべきである。これが最高の掟(ダルマ)であると言われる（異本による）。(七)お前が賭博を望まないならば、戦闘の賭けを行なおう。戦車による一騎打ちで。お前か私に安息（死）が訪れるまで。(八)先祖伝来の王国はいかなる方法によっても追求されるべきである、というのが長老たちの教えである。(九)プシュカラよ、今、二つのうちのどちらかに心を決めなさい。賭博をするか、戦闘で弓を引くか。(一〇)」
ニシャダ国王にこのように言われて、プシュカラはあざ笑い、必ずや自分が勝つと考えて王に告げた。(一一)
「ニシャダ国王よ、幸いなことに、あなたは再挑戦に賭ける財産を手に入れた。幸いなことに、ダマヤンティーの苦難は終息した。幸いなことに、敵を滅ぼす王よ、あなたと王妃は生きながらえた。(一二)私が勝ち取るはずのその財産に飾られて、ヴィダルバの王女は明らかに私にかしずくこととなろう。天界において、天女がインドラにかしずくように。(一三)ニシャダ国王よ、私は常にあなたのことを思い出して待っていた。私は親しくない人々と賭博をしても楽しくない。(一四)今日、美しい尻をした、非の打ち所のないダマヤンティーを勝ち取って、目的を成就するであろう。私の心には常に彼女がいたから。(一五)」
彼のひどいたわごとを聞いて、怒ったナラは剣でその頭を切ろうと思った。(一六)しかし、王は笑うと、怒りで赤い眼をして彼に告げた。
「さあ賭けよう。どうしてしゃべるのか。勝ってからしゃべれ。(一七)」
かくてプシュカラとナラの賭博が始まった。汝に幸あらんことを。一回だけの賭けでナラは彼をうち破った。彼は宝石や宝庫を積み、生命を賭けてしまった。(一八)ナラはプシュカラを破ると、笑って告げた。
「私のすべての王国は揺らぐことなく、棘（危険人物）を取り除かれた。(一九)最低の王よ、お前はヴィダルバの王女を見てはいかん。愚か者よ。お前と取り巻きの者たちは彼女の奴隷になっ

た。(二〇) 前に私が敗れたのは、お前の行なった行為ではない。カリのなした所業なのだ。しかし、愚か者よ、お前は気づかなかった。私は決して他者がなした過失をお前がなしたことと考えない。(二一) お前は安楽に生きるがよい。お前に生命を返してやる。それに勇士よ、私は疑いなくお前を愛している。(二二) 私の兄弟愛は決してお前を捨てはしない。プシュカラよ、お前は私の弟なのだ。百年間生きよ。(二三)」

不屈の勇者ナラは、このように弟を慰め、何度も抱きしめて、自分の都に帰らせた。(二四) このようにニシャダ国王に慰められて、プシュカラは合掌して、おじぎをして彼に答えた。(二五)

「あなたの名声が不滅でありますように。幸せに一万年間生きられますように。王よ、あなたは私の生命と地位を救って下さったのだから。(二六)」

こうしてプシュカラは王にもてなされて一カ月間そこに滞在してから、自分の一族に取り巻かれ、喜んで自分の都に帰った。(二七) 彼は大軍と礼儀正しい召使に囲まれて、その体により、太陽のように輝いていた。(二八) 栄光ある王は、富裕で息災なプシュカラを送り出してから、この上なく飾りつけられた都に入城した。ニシャダ国王は都に入ると、市民たちを慰労した。(二九)

（第七十七章）

ブリハダシュヴァは語った。——

喜びに湧く都が静まり、盛大な祝典が始まった時、王は大軍を送ってダマヤンティーを連れもどした。(一) 敵の勇士を殺す、恐ろしく勇猛で高潔な父のビーマは、ダマヤンティーを丁重に送り出した。(二) ヴィダルバの王女が子供たちとともに到着した時、ナラ王は、ナンダナ園における神々の王（インドラ）のように楽しく暮らした。(三) かくてジャンブー大陸（全インド）における諸王の間で栄光に輝き、誉れ高い王は権力を取りもどし、再びその王国で暮らした。(四) そして彼は、作法にのっとって、十分な謝礼をともなう種々の祭祀を催した。

「王中の王（ユディシティラ）よ、あなたも間もなく、親しい人々とともに、ナラと同様に語られることになろう。(五) 最上の人よ、敵の都市を征服するナラは、賭博により、妻とともにあのような苦しみに陥った。(六) 王よ、ナラはたった一人で恐ろしい苦しみを味わったが、再び繁栄を獲得した。(七) しかしパーンダヴァよ、あなたは弟たちやクリシュナー（ドラウパディー）といっしょに、法（ダルマ）に専心しつつ、この大森林で楽しく暮らしておられる。(八) ヴェーダとその補助学に通じた気高いバラモンたちに、常に仕えられています。王よ、どうして嘆くことがありましょう。(九)

この物語はカリを滅ぼすために語られました。王よ、あなたのような方は、これを聞いて勇気づけられるでしょう。(一〇) 人間の財物が常に定めないことを思って、その得失に関してくよくよしないように。嘆いてはいけません。(一一) そして、このナラの偉大な物語を語る人々や、繰り返し聞く人々には、不幸がふりかかることはないでしょう。利益が彼に訪れ、

彼は幸福になるでしょう。(二二) この永遠なる最高の古（いにしえ）の物語を聞けば、子や孫や家畜を得、人間における最上の状態を得るでしょう。疑いもなく、無病で、喜びにあふれたものになるでしょう。(二三) あなたは『あの賭博師がまた私に挑戦するかも知れない』と恐れていますが、王よ、私があなたの恐れを除いてあげます。(二四) 不屈の勇者よ、私は賭博の真髄をすべて知っています。クンティーの息子よ、それを会得しなさい。私は喜んであなたに教えます。(二五)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

それから、喜んだ王はブリハダシュヴァに告げた。

「尊者よ、賭博の真髄を正確に聞きたいと思います。(二六)」

そこで偉大な苦行者は、偉大なパーンダヴァに賭博の真髄を伝授した。それから彼は、アシュヴァシラス（聖地の名）に沐浴しに行った。(二七)

ブリハダシュヴァが去った時、誓戒を固く守るユディシティラは、あちこちの聖地や高山から集まったバラモンや苦行者たちから、聡明なアルジュナが風を食って（断食して）、激しい苦行に専念していることを聞いた。(一八―一九)

「勇猛なアルジュナが難行の苦行をしている。あのような激しい苦行はいまだかつて見たことがない。(二〇) アルジュナは誓戒に専念した苦行者であり、単独行の聖者（ムニ）であり、栄光に満ち、ダルマが体をとって出現したかのようである。(二一)」

それを聞くと、ユディシティラは大森林において苦悩し、愛しい弟のジャヤ（アルジュナ）のことを思って嘆いた。(二二) ユディシティラは燃える心で、大森林において寄る辺を求め、種々の知識を知るバラモンたちにあれこれと質問した。(二三)

（第七十八章）／（第七十九章略）

(33) 聖地巡礼（第八十章－第百五十三章）

聖地巡礼の功徳

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

栄光ある勇士パーンダヴァたちは、ダナンジャヤ（アルジュナ）のことを恋しがりながら、ドラウパディーとともにその森に住んでいた。（一）その時、彼らはそこで偉大な神仙ナーラダに会った。その聖仙は、バラモンの栄光に輝き、燃える火のような威光を持っていた。（二）栄光あるクルの長上（ユディシティラ）は、弟たちに囲まれ、燦然たる威光に満ち、神々に囲まれたインドラのように輝いていた。（三）また貞女ドラウパディーは、サーヴィトリー（『リグ・ヴェーダ』の有名な詩節の名）がヴェーダ聖典を捨てることがないように、また太陽の光がメール山を捨てることがないように、法（ダルマ）に従って、プリターの息子たちを捨てることはなかった。（四）

聖仙ナーラダは彼らのもてなしを受けてから、ふさわしくダルマの息子（ユディシティラ）を慰めた。（五）そして彼は、偉大なダルマ王ユディシティラに告げた。

「法を守る者たちのうちの最上者よ、言いなさい。何が必要であるか。私はあなたに何を与えようか。（六）」

そこでダルマの息子である王は、弟たちとともに敬礼し、合掌して、神のようなナーラダに言った。（七）

「聖者よ、全世界の人々に尊敬されるあなたが満足すれば、誓戒を守る方よ、あなたの恩寵

により目的はすでにかなったも同然だと私は思います。（八）しかし、もし私と弟たちに好意をかけて下さるなら、非の打ち所のない最高の聖者（ムニ）よ、どうか私の心に存する疑念を晴らして下さい。（九）もし人が聖地巡礼に専念して、地上を右まわりにまわれば、彼には果報があるでしょうか。バラモンよ、どうか残らず告げて下さい。（一〇）」

ナーラダは言った。

「王よ、注意深く聞きなさい。バーラタよ、ビーシュマがプラスティヤから聞いたことをすべて……。（一一）」

「かつて、法（ダルマ）を守る者たちの最上者ビーシュマは、ガンガー（ガンジス）川の岸で、父のための誓戒を守って、隠者（ムニ）のように生活していた。（一二）神仙の住む、清浄で神聖な場所、神々やガンダルヴァ（半神の一種）の住むガンガー・ドゥヴァーラ（現在のハルドゥワール）に、その威光に満ちた男は座っていた。（一三）最高の輝きに満ちた彼は、祖霊たちや神々や聖仙たちを、儀軌に示された祭式によって満足させた。（一四）しばらくして、大苦行を積んだ彼は、祈禱を唱えているうちに、驚異的な姿をした最高の聖仙プラスティヤを見た。（一五）彼は激しい苦行を積んだ、光り輝く聖仙を見て、無比の喜びを得て、最高に驚嘆した。（一六）法を守る人々の最上者ビーシュマは、やって来た聖仙を、儀軌に示された祭式によって歓待した。（一七）接客の品を頭で捧げ持って、心を制御した清らかな男は、その最高の聖仙に名前を告げた。（一八）

「私はビーシュマです。御機嫌麗しう。誓戒を守る方よ、私はあなたの僕です。あなたにお会いしただけで、私はすべての罪過から解放されました。（一九）」

法を守る人々のうちの最上者であるビーシュマは、言葉をつつしみ、合掌し、沈黙していた。(二〇) 誓戒により、ヴェーダの学習と復唱により痩せ細った、クル族の長ビーシュマを見て、聖者は喜ばしい気持になった。(二一)

プラスティヤは言った。

「法を知る者よ、あなたの努力と自制により、また栄光ある者よ、あなたの真実により、私はすっかり満足した。(二二) 非の打ち所のない者よ、あなたは父親に対する献身にもとづいて、このように法を守っているから、それで私に会うことができた。息子よ、私はあなたに喜んでいる。(二三) 私は空しく見ることはない。ビーシュマよ、言いなさい。何をしたらよいか。クル族の長よ、あなたが言うことをかなえてあげよう。(二四)」

ビーシュマは答えた。

「聖者よ、全世界で尊敬されているあなたが喜ばれた時、私が主にお目にかかれただけで、すでに目的がかなったと考えます。(二五) しかし、もし私に好意をかけて下さるなら、法を守る人々のうちの最上者よ、私の心にある疑問についておたずねします。どうかそれに答えて下さい。(二六) 聖者よ、私には諸々の聖地について、法に関する疑問があります。それを一つずつ説いて下さい。お聞きしたいものです。(二七) 無量の勇気を持つ方よ、地上を右まわりにまわった者には、いかなる果報があるでしょうか。苦行を積んだ梵仙よ、それを私に話して下さい。(二八)」

プラスティヤは語った。——

おお、私は聖仙たちの窮極の行く方について語るであろう。それ故、わが子よ、諸々の聖地における果報を、心を集中して聞きなさい。(二九) その両手、両足、心、知識、苦行、名声を制御した人は、聖地の果報を得る。(三〇) 所有を離れ、満足し、自制し、清らかで、我執から離れた人は、聖地の果報を得る。(三一) 罪過なく、悪しき意図なく、節食し、感官を制御し、一切の欠点を離れた人は、聖地の果報を得る。(三二) 王中の王よ、怒らず、約束を守り、誓戒を固く守り、生類に対して自分と同様に慈しむ人は、聖地の果報を得る。(三三)

聖仙たちは、ヴェーダ聖典の中で、順序正しく、祭式について説く。そして、この世と死後における果報をも、すべて、如実に説く。(三四) 王よ、しかし貧しい人々は祭祀を達成することができない。祭祀は多くの資具を要し、種々多様な材料を必要とするから。(三五) 王たちが祭祀を達成できる。あるいは、富んだ人々が達成できる場合もある。財産のない人々や、孤立した一人ぼっちの人々(異本による)、団結しない人々は達成できない。(三六) しかし王よ、貧しい人々も達成できる方法、清浄な祭祀の果報に等しい方法がある。最高の戦士よ、それについて知りなさい。(三七) バラタの最上者よ、それは聖仙たちの最高の秘説である。清浄なる聖地巡礼は、祭祀よりも優れている。(三八) 三夜断食しない者、聖地に行かない者、黄金や牛を布施しない者、そういう者こそ真に貧しい人となる。(三九) 大なる謝礼をともなう火神称讃(アグニシュトーマ)(ソーマ祭の基本形)などの祭祀によって祭祀を行なっても、聖地巡礼によるほどの果報を得ない。(四〇)

非常に幸せな人は、人間界にある、神の中の神の聖地、三界において名高いプシュカラという聖地に入るであろう。（四一）クル族の王よ、プシュカラでは、三つの刻限（黎明、正午、黄昏）に一千億の聖地が現前する。（四二）アーディティヤ神群、ヴァス神群、ルドラ神群、サーディヤ神群、マルト神群、ガンダルヴァや天女（アプサラス）たちが、常にそこに住する。（四三）偉大な王よ、そこでは大なる福徳を積んだ神々や魔類や梵仙たちが苦行を行なって、神的なヨーガを修めている。（四四）賢明な人は、心でプシュカラを望んだだけでも、そのすべての罪過は清められ、彼は天頂において尊敬される。（四五）徳高い者よ、その聖地に、祖父（ピターマハ）（梵天）は、常に神々や魔類に尊敬されて、最高に満足して住んでいる。（四六）徳高い者よ、聖仙をはじめ、神々は、プシュカラにおいて、大なる福徳をそなえ、成就に到達した。（四七）祖霊や神々をひたすら敬う人が、そこで灌頂（沐浴）を行なえば、馬祀（アシュヴァメーダ）の十倍の功徳を得ると賢者らは言う。（四八）ビーシュマよ、もしプシュカラの森に住んで一人でもバラモンに食を給すれば、その人はその行為により、この世と死後において喜ぶ。（四九）もし野菜と根と木の実により生活し、信仰あり悪意なく、バラモンに布施すれば、その知者は、馬祀に〔等しい〕果報を得るであろう。（五〇）最高の王よ、バラモンであれ、王族（クシャトリヤ）であれ、実業者（ヴァイシャ）であれ、従僕（シュードラ）であれ、偉大な人々がもしこの聖地で沐浴するなら、彼らは卑しい胎に趣かないであろう。（五一）特にカールティカ月（十月―十一月）の満月の夜にプシュカラに行く人には、無尽の果報が増大する。（五二）朝に夕に合掌してプシュカラを念想するなら、バーラタよ、すべての聖地で沐浴するのと同じ果報があろう。そしてその人は、梵天（ブラフマー）の住処において不滅の諸世界に達するであろう。

（五三）男や女の生まれて以来の罪悪は、その人がプシュカラで沐浴するやいなや、すべて消滅する。（五四）マドゥスーダナ（クリシュナ）がすべての神々の始めであるように、王よ、プシュカラは諸々の聖地の始めであると言われる。（五五）自制した清浄な人がプシュカラに十二年間住むと、彼はすべての祭祀を達成し、梵界に行く。（五六）満百年間火供（アグニホートラ）を行なう人と、カールティカ月の満月の一夜プシュカラに住む人とでは、〔その功徳は〕まったく等しい。（五七）プシュカラに行くことは難しい。プシュカラで苦行することは難しい。プシュカラで布施することは難しい。そこに住むことは非常に難しい。（五八）

自制し節食し、プシュカラに十二夜住んだ人は、そこを右まわりにまわってから、ジャンブーマールガに入るであろう。（五九）神々や聖仙や祖霊が住むジャンブーマールガに入ってから、馬祀〔に等しい功徳〕を達成して、ヴィシュヌの世界へ行く。（六〇）そこに五夜滞在し、六食目ごと（三日ごと）のみにわずかな食をとる人は、悪趣に達することなく、最高の成就を達成する。（六一）

ジャンブーマールガから発って、タンドゥリカーシュラマに行くであろう。彼は悪趣に達することなく、天界において尊敬される。（六二）彼はアガスティヤ湖に達して、祖霊と神々の供養にいそしみ、三夜そこに滞在して、火神称讃（アグニシュトーマ）〔に等しい〕果報を得るであろう。（六三）そこで野菜で生活し、木の実を食べ、吉祥が住み世に敬われたカヌヴァ仙の隠棲所に達して、カウマーラ・パダ（クマーラの地歩）を見出すであろう。（六四）というのは、それは清浄なる原初からある法（ダルマ）の森であって、そこに入るやいなや、罪悪から解放されるのである。（六五）

そこで祖霊と神々を供養し、自制し節食して、すべての願望をかなえる祭祀の果報を享受する。(六六) それからそれを右まわりにまわってから、ヤヤーティ・パタナに行くであろう。そして、馬祀〔に等しい〕果報を得るであろう。(六七)
それから、自制し節食して、マハーカーラ（ウッジャイニーにあるシヴァ神殿）に行くであろう。そしてコーティ・ティールタで沐浴して、馬祀〔に等しい〕果報を得るであろう。(六八) それからウマーの夫（シヴァ）の聖地に行くであろう。それはバドラヴァタという名で、三界において名高い。(六九) そこで主にお参りして、千頭の牛の〔布施に等しい〕果報を得るであろう。そしてマハーデーヴァ（シヴァ）の恩寵により、ガナパティの地歩に達するであろう。(七〇)
それから、三界に名高いナルマディー川に達して、祖霊と神々を満足させて、火神称讃〔に等しい〕果報を得るであろう。(七一) 南部のシンドゥ（川または海？）に達して、梵行を修し感官を制御し、火神称讃〔に等しい果報〕を得て、天車に乗る。(七二) チャルマンヴァティー川に着き、自制し節食し、ランティデーヴァ（聖王の名）のもとを辞去して、火神称讃〔に等しい〕果報を得るであろう。(七三) 法を知る者よ、それからヒマーラヤの息子アルブダ山に行くであろう。ユディシティラよ、かつてそこに、大地の裂け目があった。(七四) そこに、三界に名高いヴァシシタの隠棲所がある。そこで一夜過ごすと、千頭の牛の〔布施に等しい〕果報を得るであろう。(七五) ピンガー・ティールタで沐浴して、梵行を修し感官を制御して、百頭の赤牛の〔布施に等しい〕果報を得る。(七六) それから世に名高いプラバーサに行くであろう。そこに、神々の口である、風の友なる火神が常に現前する。(七七) その最高の聖地で

沐浴し、清浄にして心を制御し、人は火神称讃と夜間祭祀〔に等しい〕果報に達する。(七八)
それから、サラスヴァティー川が海と合する所に行って、千頭の牛の〔布施に等しい〕果報を得て、火のように常に光り輝き、天界において幸せに暮らす。(七九) そこで三夜過ごして、祖霊と神々を満足させるであろう。そして、月のように輝き、馬祀〔に等しい果報〕を得る。(八〇) それからヴァラダーナ（「願いをかなえること」という意）という聖地に行くであろう。そこはドゥルヴァーサスがヴィシュヌの願いをかなえた場所である。人はヴァラダーナで沐浴すれば、千頭の牛の〔布施に等しい〕果報を得るであろう。(八一) それからドゥヴァーラヴァティーに行くであろう。人は自制し節食して、ピンダーラカで沐浴して、多くの黄金〔の布施に等しい果報〕を得るであろう。(八二) その聖地に、今もなお、蓮花の印のついた印章が認められる。それは奇蹟である。(八三) 三叉の槍の印のついた蓮が認められるのだ。まさにそこにマハーデーヴァ（シヴァ）が現前している。(八四) シンドゥ（インダス川）が海に合する所に着いて、心を制御し水の王（ヴァルナ「水天」）の聖地で沐浴する。(八五) それから祖霊と神々を満足させて、自らの威光で輝いているヴァルナの世界に達する。(八六) シャンクカルネーシュヴァラ神（ヴァルナ）を供養すれば、馬祀の十倍の功徳があると賢者らは説く。(八七) それを右まわりにまわって、三界に名高い、すべての罪悪から解放する、ドリミという聖地に行くべきである。(八八) そこでは、梵天などの神々がマヘーシュヴァラ（シヴァ）に伺候している。人はそこで沐浴し、神群に囲まれたルドラ（シヴァ）を供養して、生まれて以来なした罪悪を除去するのである。(八九) そのドリミはすべての神々に讃えられている。

そこで沐浴すれば、馬祀〔に等しい功徳〕を得るであろう。(九〇)かつてそこで、強力なヴィシュヌ神は、神々の棘(敵)を殺してから禊(みそぎ)をしたのだ。(九一)

それから人は、讃えられるヴァソールダーラーに行くべきである。そこに行くや、馬祀〔に等しい功徳〕を得るであろう。(九二)クルの長よ、人はそこで沐浴し、自己を制御し、神々と祖霊たちを満足させて、ヴィシュヌの世界において幸せに暮らす。(九三)バラタの雄牛よ、そこにはヴァス神群の清浄な最高の聖地がある。そこで沐浴し、水を飲んで、ヴァス神たちに尊敬されるものとなるであろう。(九四)それから、すべての罪悪を滅する、シンドゥーッタマという聖地がある。そこで沐浴すれば、多くの黄金〔の布施に等しい功徳〕を得るであろう。(九五)ブラフマトゥンガに着いて、清浄にして、心を制御し、汚れのない善行の人は、梵界(ブラフマローカ)に達する。(九六)「シャクラ(インドラ)の娘(クマーリカー)たち」の聖地は、シッダ(半神の一種類)たちが住んでいる。そこで沐浴すれば、人は速やかにシャクラの世界に達するであろう。(九七)その同じ場所に、レーヌカーの聖地があり、神々が住んでいる。そこで沐浴すれば、バラモンは月のように汚れなきものになろう。(九八)

それからパンチャナダ(パンジャーブ)に行き、自制し節食して、次第に、讃えられている五つの祭祀〔に等しい果報〕を得るであろう。(九九)人はそれから最高のビーマー(ウマー?)の聖地に行くであろう。そこで「子宮(ヨーニ)」において沐浴すれば、人は女神の息子となるであろう。黄金の耳飾りを着け、十万頭の牛に相当する大きな果報を得るであろう。(一〇〇—一〇一)三界に名高いギリムンジャに着いて、梵天(ピターマハ)に敬礼して、千頭の牛〔に等しい〕果報を得るであろう。

(一〇二)それから人は最高の聖地であるヴィマラに行くべきである。そこには今もなお、金と銀の魚が見られる。(一〇三)そこで沐浴すれば、ヴァージャペーヤ祭(ソーマ祭の一種)〔に等しい果報〕を得るであろう。そして、真我(アートマン)を一切の罪悪から浄めて、最高の帰趨に趣くであろう。(一〇四)

それから、三界に名高いマラダーに行くべきである。そして黄昏において、儀軌に従って沐浴し、火神に対し、能力に応じてチャル供を捧げるべきである。それは祖霊たちにとって不滅の布施であると賢者たちは言う。(一〇五—一〇六)火神に対するチャル供は、十万の牛、百の皇帝即位式(ラージャスーヤ)、千の馬祀と比べても勝っている。(一〇七)そこから発って、人はヴァストラーパダに入るべきである。マハーデーヴァ(シヴァ)を訪れて、馬祀〔に等しい〕果報を得るであろう。(一〇八)マニマットに達し、梵行(清浄行)を行ない心を統一して、そこで一夜を過ごしたら、王よ、火神称讃(アグニシュトーマ)〔に等しい〕果報を得るであろう。(一〇九)

それから、人は世界に名高いデーヴィカーに行くであろう。そこはバラモンたちの誕生の地であると伝えられる。(一一〇)それは三叉の槍を持つ神(シヴァ)の場所で、三界において名高い。人はデーヴィカーで沐浴し、マヘーシュヴァラ(シヴァ)を供養してから、能力に応じてそこでチャル供を捧げて、すべての願望をかなえる祭祀〔に等しい〕果報を得るであろう。(一一一—一一二)そこには、神々や聖仙の住む、カーマーキヤというルドラ(シヴァ)の聖地がある。人はそこで沐浴すれば、速やかに目的を成就する。(一一三)ヤジャナとヤージャナ、更にブラフマヴァールカーに行って、それからプシュパニヤーサで沐浴すれば、人は死を悲しむこと

はないであろう。(二一四) 神々や聖仙の住む、清浄なデーヴィカーは、幅が半由旬（ヨージャナ）で、長さが五由旬であると言われる。(二一五)

それから人は、順次にディールガサットラに行くべきである。そこで、梵天などの神々やシッダや最高の聖仙たちは、誓戒を守って、謝礼を伴う長期のサットラ祭を行なっていた。(二一六) ディールガサットラに行くや、人は皇帝即位式と馬祀〔に等しい〕果報を得る。(二一七) それから、人は自制し節食して、ヴィナシャナに行くべきである。そこはサラスヴァティー川が砂漠に消える場所である。その川は、チャマサ、シヴァ・ウドベーダ、ナーガ・ウドベーダにおいて再び現われるのである。(二一八) チャマサ・ウドベーダにおいて沐浴すれば、人は火神称讃〔に等しい〕果報を得るであろう。シヴァ・ウドベーダにおいて沐浴すれば、人は千頭の牛〔に等しい〕果報を得るであろう。ナーガ・ウドベーダにおいて沐浴すれば、人は竜の世界（ナーガローカ）に達するであろう。(二一九)(二二〇―二二一略)」（第八十章）

プラスティヤは語った。――

王中の王よ、それから人は称えられているクルクシェートラに行くべきである。そこに行くすべてのものたちは、罪悪から解放される。(一)

「クルクシェートラに行こう。クルクシェートラに住もう」とそのように常に言う人も、罪悪から解放される。(二) 勇士よ、サラスヴァティーの岸に一月住む、バラモンなど、神々、

聖仙、シッダ（以下、半神の列挙）、チャーラナ、ガンダルヴァ、天女（アプサラス）、夜叉（ヤクシャ）、蛇たちは、王よ、非常に清浄なブラフマクシェートラ（梵界と同じか）に行く。(三―四) 人が心によってクルクシェートラに行くことを望んだだけでも、その諸々の罪悪は消失して、その人は梵界に行くであろう。(五) 実に信仰をもってクルクシェートラに行けば、人は皇帝即位式（ラージャスーヤ）と馬祀と〔に等しい〕果報を得るであろう。(六) 王よ、それから強力な門衛である夜叉マチャクルカに挨拶すれば千頭の牛の〔布施に等しい〕果報を得るであろう。(七)

法（ダルマ）を知る王中の王よ、それから、ヴィシュヌの最高の場所であるサタタという地に行くべきである。そこにはハリ（ヴィシュヌ）が現前している。(八) そこで沐浴し、三界の主であるハリを供養すれば、馬祀〔に等しい〕果報を得て、ヴィシュヌの世界へ行く。(九) それから、三界に名高い、パーリプラヴァという聖地に行くべきである。人は火神称讃（アグニシュトーマ）と夜間祭祀（アティラートラ）〔に等しい〕果報を得る。(一〇) それからプリティヴィーの聖地に着き、千頭の牛〔に等しい〕果報を得るであろう。それから、巡礼者はシャールーキニーに行き、ダシャーシュヴァメーディカで沐浴すれば、まさに同じ果報を得るであろう。(一一) 竜（ナーガ）たちの最高の聖地であるサルパダルヴィーに到着し、火神称讃〔に等しい〕果報を得て、竜の世界を見るであろう。(一二) それから、門衛のタラントゥカのもとに行くべきである。そこで一夜を過ごせば、千頭の牛の〔布施に等しい〕果報を得るであろう。(一三)

それからパンチャナダに行き、自制し節食し、コーティ・ティールタに沐浴し、馬祀〔に等しい〕果報を得るであろう。アシュヴィン双神の聖地に着いて、容姿端麗に生まれるであ

ろう。（一四）それから猪（ヴィシュヌの化身）の最高の聖地に行くべきである。かつてヴィシュヌは、猪の姿をしてそこに住んだ。そこで沐浴すれば、火神称讃（に等しい）果報を得るであろう。（一五）それから、ジャヤンティーのソーマ・ティールタに入るべきである。人はそこで沐浴すれば、皇帝即位式（に等しい）果報を得るであろう。人はエーカハンサで沐浴して、千頭の牛の（布施に等しい）果報を得るであろう。（一六）

巡礼者はクリタシャウチャに着いて、プンダリーカを得て、禊をすべきである。（一七）それから、ムンジャヴァタという、叡知あるマハーデーヴァ（シヴァ）の（聖地に行く）。そこで一夜を過ごして、ガナパティ（シヴァの眷属の長）の地位に達するであろう。（一八）まさにそこに、世に名高い夜叉女がいる。彼女に会えば、福徳の世界に到達するであろう。（一九）それはクルクシェートラの門であると称される。巡礼者は心を集中してそれを右まわりにまわる。（二〇）そのプシュカラに等しい場所で、偉大なジャマダグニの息子ラーマに作られた聖地で沐浴し、祖霊と神々を供養すれば、目的を成就し、馬祀（に等しい）果報を得る。（二一）

それから、巡礼者はラーマ湖に行くべきである。そこで、激しい威光を持つラーマ（パラシュラーマ）は、力ずくで王族を滅ぼして、精力的に五つの湖を作り、血でそれを一杯にしたと聞いている。それで、すべての父や祖父たちを満足させた。それから、祖霊たちは喜んでラーマに告げた。（二二―二三）

「ラーマよ、栄光あるラーマよ、ブリグ族の勇士よ、あなたの祖先に対する信愛により、武勇により、我々はあなたに満足した。どうか願いごとを選んでくれ。輝きに満ちた者よ、あ

なたは何を望むか。（二四）」

最高の戦士ラーマは、そのように言われると、合掌して、空中にいる祖霊たちに言った。

（二五）「もしあなた方が私に満足し、私が御好意に値するなら、祖霊の恩寵により、再び苦行に没頭することを望みます。（二六）そして、私は怒りにかられて王族を滅ぼしましたが、あなた方の威光により、その罪から解放されたいと望みます。私の湖が、地上に名高い聖地となりますように。（二七）」

このラーマの殊勝な言葉を聞くと、祖霊たちは喜び、最高に満足して、ラーマに答えた。

（二八）「祖霊に対する特別の信愛により、あなたの苦行（功徳）が更にいっそう増進するように。あなたは怒りにかられて王族を滅ぼしたが、その罪から解放されるであろう。彼らはその所業により滅ぼされたのである。そしてあなたの湖は、疑いもなく聖地となるであろう。（二九―三〇）人はこれらの湖で沐浴すれば、祖霊たちを満足させるであろう。その人の祖霊たちは喜んで、地上において得がたい心願をかなえ、永遠の天界を授けるであろう。（三一）」

喜んだ祖霊たちは、このようにラーマの願いをかなえてから、ラーマに別れを告げ、その場で消え失せた。（三二）

このようにして、偉大なブリグ族の聖者ラーマの湖は清浄となった。梵行（清浄行）を修し、殊勝な誓戒を持し、ラーマの湖で沐浴して、ラーマを崇拝すれば、多くの黄金（に等しい果

報〕を得るであろう。（二三）（二四―九一略）

それから、ナイミシャ・クンジャに着く。かつてナイミシャの森に住む、苦行を積んだ聖仙たちは、聖地巡礼を企てて、クルクシェートラに行ったという。（九二）そしてサラスヴァティーの岸に園亭《クンジャ》（蔓や木でおおわれた場所）が作られた。その場所は、聖仙たちにこよない満足をもたらすようにということで作られたのである。（九三）人はその園亭で沐浴すれば、千頭の牛の〔布施に等しい〕果報を得るであろう。カニヤー・ティールタで沐浴すれば、火神称讃《アグニシュトーマ》〔に等しい〕果報を得るであろう。（九四）そこから、梵天《ブラフマー》の最高の場所に行くべきである。そこで沐浴すれば、低い種姓《ヴァルナ》の人も、バラモンの位を得るであろう。心の清らかなバラモンは、最高の帰趣に趣くであろう。（九五）それから、至高のソーマ・ティールタに行くべきである。人はそこで沐浴すれば、ソーマ（月）の世界に達するであろう。（九六）

それから、サプタサーラスヴァタの聖地に行くべきである。世に名高い大仙マンカナカはそこで成就を得た。（九七）我々の聞くところでは、かつてマンカナカはクシャ草の先端で手を傷つけ、それから野菜の液が流出したという。（九八）偉大な苦行者は野菜の液を見て喜んだ。そしてこの梵仙は驚きで眼を見開いて踊ったという。（九九）彼が踊っていると、彼の威光に迷わされて、動不動（の生類）もともに踊った。（一〇〇）梵天をはじめとする神々、苦行を積んだ聖仙たちは、マハーデーヴァ（シヴァ）にその聖仙のことを告げた。

「神よ、彼が踊りをやめるように計らって下さい。（一〇一）」

そこでシヴァ神は、神々によかれと願って、心のうちでは喜んで、踊っている聖仙のもとに行って告げた。（一〇二）

「ああ、法《ダルマ》を知る大仙よ、あなたは何のために踊っているのか。聖者《ムニ》の雄牛よ。今日、どうしてあなたは踊る理由があるのか。（一〇三）」

聖仙は言った。

「神よ、あなたは私の手から野菜の液が流れているのを御覧にならないのですか。それを見て、私は大喜びして踊っているのです。（一〇四）」

プラスティヤは語った。——

シヴァ神は笑って、情念に迷わされた聖者に告げた。

「私は驚かない。私を見よ。（一〇五）」

叡知あるマハーデーヴァはそう言って、指先で自分の親指を打った。（一〇六）すると傷口から、雪のように白い灰が出て来た。それを見ると聖者は恥じ入り、神の両足に平伏した。（一〇七）

「ルドラよりも偉大な神は他にいないと思います。槍を持つ神よ、あなたは神と阿修羅《アスラ》よりなる世界の帰趣です。（一〇八）あなたは、動不動のものを含む、このすべての三界を創造しました。そして、神よ、宇宙紀《ユガ》の終末に、すべては他ならぬあなたに帰入します。（一〇九）神々ですらあなたを知ることはできません。いわんや私など……。非の打ち所のない方よ、梵天

などのすべての神々はあなたのうちに認められます。(二一〇) あなたは全宇宙です。諸世界を創造した者、創造させた者です。一切の神々はあなたの恩寵により、この世界で全く危険なく喜んでおります。」

その聖仙は、このようにマハーデーヴァを讃えて平伏した。(二一一)

聖仙は言った。

「マハーデーヴァよ、あなたの恩寵により、私の苦行(功徳)が衰えることのないようにして下さい。(二一二)」

プラスティヤは語った。――

すると神は心から喜び、梵仙にこう言った。

「バラモンよ、私の恩寵により、あなたの苦行(功徳)が千倍に増大するように。(二一三) そして大仙よ、私はこの隠棲所に、あなたとともに住むであろう。サプタサーラスヴァタで沐浴して、私を崇拝する人々にとって、この世界と他の世界において得られないものは何もない。そして彼らは疑いもなくサラスヴァティー(弁才天)の世界に行くであろう。(二一四―二一五)」

(二一六―二二一略)

それから、三界に名高い、プリトゥーダカというカールティケーヤ(スカンダ)の聖地に行くべきである。そこで、祖霊や神々をひたすら崇拝して、沐浴を行なうべきである。(二二二) 男や

女が、人間の浅はかさにより、故意に、あるいは知らないで、何か好ましからぬ行為をしても、それはすべて、そこで沐浴するやいなや消失する。そして、馬祀(に等しい)果報を得、天界へ行くであろう。(二二三―二二四) クルクシェートラは清浄であると言われる。しかし、サラスヴァティー川はクルクシェートラより、諸聖地はサラスヴァティーよりも、プリトゥーダカは諸聖地よりも清浄であると言われる。(二二五) 一心に祈禱し、諸聖地のうちで最高のプリトゥーダカにおいて自己の体を捨てるならば、もはや死に苦しめられることはないであろう。(二二六) それは偉大なヴィヤーサやサナトクマーラにも歌われ、ヴェーダにも歌われている。王よ、必ずやプリトゥーダカに行くべきである。(二二七) プリトゥーダカよりも清浄な聖地は他にない。疑いもなく、それは祭祀に適し、清浄で、清めるものである。(二二八) 罪人といえども、そこプリトゥーダカで沐浴すれば天界に行くと賢者らは言う。(二二九) そこにはマドゥスラヴァという聖地がある。人はそこで沐浴すれば、千頭の牛の(布施に等しい)果報を得るであろう。(二三〇)(二三一―二七二略)

地上においてはナイミシャが神聖である。空中においてはプシュカラが神聖である。三界すべてのうちでは、クルクシェートラが優れている。(二七三) クルクシェートラにおいては、風に吹き散らされたほこりといえども、悪業をなした者をも最高の帰趣に導く。(二七四) サラスヴァティー川の南、ドリシャドヴァティー川の北、クルクシェートラに住む人々は、天界に住む人々である。(二七五)「クルクシェートラに行こう。クルクシェートラに住もう」と、一

言でも唱えれば、人はすべての罪から救われる。（二七六）クルクシェートラは梵天の祭壇であり、神聖で、梵仙たちが住む。そこに住む人々は決して悲しむことはない。（二七七）タラントゥカとアラントゥカの間、ラーマの湖とマチャクルカの間の土地、それがクルクシェートラ・サマンタパンチャカであり、梵天の最高の祭壇であると言われる。（二七八）

（第八十一章）／（第八十二章、第八十三章一—六四略）

王中の王よ、それから聖仙に讃えられるプラヤーガに行くべきである。そこには、梵天をはじめとする神々、方位神をともなう諸方位が住む。（六五）世界守護神たち、サーディヤ神群、ナイルリタ神群、祖霊たち、サナトクマーラをはじめとする最高の聖仙たちが住む。（六六）アンギラスをはじめとする梵仙たち、竜たち、スパルナ（金翅鳥）たち、シッダやチャクラチャラたちが住む。（六七）諸川や諸海、ガンダルヴァ、天女たちが住み、造物主をともなう聖なるハリ（ヴィシユヌ）が住む。（六八）そこに三つの火爐（聖火を焚く穴）があり、その間を、すべての聖地をともなうジャーフナヴィー（ガンガー）が、プラヤーガから流出している。（六九）そこで、三界に名高い太陽の娘ヤムナー（ジャムナー）は、ガンガーと合流して世界を清めている。（七〇）ガンガーとヤムナーの中間は、大地の女陰であると伝えられている。プラヤーガは女陰の端の陰門であると、聖仙たちは知っている。（七一）プラヤーガ、プラティシターナ、カンバラ、アシュヴァタラ、そしてボーガヴァティーの聖地は、造物主の祭壇であると言われる。（七二）

ユディシティラよ、そこでは、諸ヴェーダと諸祭祀とが実際に体をとって現われ、偉大な誓戒を持する聖仙たちとともに、造物主に仕えている。神々やチャクラチャラ（神仙の一種）たちは、祭祀により供犠を行なっている。（七三）それよりも神聖な地は三界に存在しない。プラヤーガはすべての聖地よりも優れている。（七四）その聖地の名が唱えられているのを聞くや、あるいは、その土を持つだけでも、人は罪から救われる。（七五）誓戒を固く守り、その合流地点で沐浴を行なうなら、皇帝即位式と馬祀（の果報に等しい）神聖な果報を得る。（七六）というのは、それは神々にすら敬われる祭祀の場所である。そこで与えられたものは、どのように小さいものでも、大なるものとなる。（七七）ヴェーダの言葉によっても、世人の言葉によっても、プラヤーガで死のうというあなたの決意をないがしろにしてはならぬ。（七八）そこには実に六億と一万の聖地が現前している。（七九）ガンガーとヤムナーの合流地点で沐浴するやいなや、四ヴェーダに通じた人や真実を告げる人の（功徳に等しい）功徳を得る。（八〇）そこにボーガヴァティーという、ヴァースキ竜王の最高の聖地がある。そこで沐浴を行なう人は、馬祀（に等しい果報）を得るであろう。（八一）そこには、ガンガーの岸に、三界に名高いハンサプラパタナとダシャーシュヴァメーディカという聖地がある。（八二）ガンガーがある場所は苦行林である。ガンガーの岸に近接した土地は、シッダの土地であると知らるべきである。（八三）

この真実を、再生族（バラモン等）たち、善き人々、息子、友人たち、弟子、従者の耳に唱えるべきである。（八四）それは法にかない、神聖であり、祭祀に適し、幸福であり、天界をもた

らし、心地よく、最高に浄めるものである。（八五）それは大仙たちの秘密であり、すべての罪を免れさせるものである。人は再生族の間でそれを学んで、汚れなき状態に達するであろう。（八六）この聖地の永遠なる神聖さを聞く人は、常に清浄であろう。彼は多くの生を想い出して、天上において喜ぶであろう。（八七）諸々の聖地は、行ける場合と行けない場合とがあると言われる。すべての聖地に行きたいと望んだら、心によってそこへ行くべきである。（八八）ヴァス神群、サーディヤ神群、アーディティヤ神群、マルト神群、アシュヴィン双神、神に等しい聖仙たちは、功徳を願ってそこを訪れる。（八九）

誓戒を守るクル族の勇士よ、かくのごとくあなたもまた、このようにして、自制し、諸々の聖地に行きなさい。功徳が功徳を呼んで増大するであろう。（九〇）かつて教養ある人に従う立派な人々は、感官を浄めて、信仰により、ヴェーダ聖典を知ることにより、それらの聖地に達した。（九一）誓戒を守らない者、自己を制御しない者、清浄でない者、盗賊、心の曲った人は、聖地において沐浴することはない。（九二）わが子よ、正しく行動し、常に法（ダルマ）と実利（アルタ）を知るあなたは、すべての祖先の人々を救った。（九三）法を知る王よ、梵天をはじめとする神々と聖仙の群は、あなたの法により常に満足している。（九四）インドラにも似たビーシュマよ、あなたはヴァス神群の世界を得るであろう。そして、地上において、永遠の大いなる名声を得るであろう。（九五）

ナーラダは言った。

「聖仙プラスティヤは喜んでこのように語ってから、別れを告げ、満足してその場で消え失せた。（九六）諸論書の真実の意味を知るクル族の虎ビーシュマは、プラスティヤの言葉に従い、地上を遍歴した。（九七）このようにして地上を遍歴する者は、死後、百の馬祀〔に等しい〕最高の果報を享受するであろう。（九八）そしてプリターの息子（ユディシティラ）よ、あなたはこの八倍の最高の法（ダルマ）〔の功徳〕を得るであろう。あなたは聖仙たちを導く者であるから、あなたの得る果報は八倍である。（九九）それらの聖地は羅刹の群に満ちている。クルの王子よ、あなたを除いて他に寄る辺は見出されない。（一〇〇）朝起きて、すべての聖地にまつわる神仙の偉業を唱える者は、一切の悪から解放されるであろう。（一〇一）

主立った聖仙たち――ヴァールミーキ、カーシャパ、アートレーヤ、カウンディニヤ、ヴィシュヴァーミトラ、ガウタマ、アシタ・デーヴァラ、マールカンデーヤ、ガーラヴァ、バラダラージャ、聖者（ムニ）ヴァシシタ、ウッダーラカ、シャウナカとその息子、最高の吟誦者ヴィヤーサ、最高の聖者ドゥルヴァーサス、大苦行者ガーラヴァ、これらすべての苦行を積んだ最高の聖仙たちがあなたを待っている。大王よ、彼らとともにそれらの聖地を訪れなさい。（一〇二―一〇五）無量の光輝を有するローマシャという神仙が、あなたと会うであろう。彼とともに行きなさい。（一〇六）そして法を知る者よ、私とともにそれらの聖地を訪れなさい。あなたはマハービシャ王のように、大なる名声を得るでしょう。（一〇七）徳性あるヤヤーティやプルーラヴァス王のように、クルの虎よ、あなたもまた自己の法により輝く。（一〇八）バギーラタ王のように、名高いラーマのように、すべての王の上に太陽のように輝く。（一〇九）マヌのよ

うに、イクシュヴァークのように、誉れ高いプールのように、威光に満ちたヴァイニヤのように、あなたもまた名高い。(一〇)ヴリトラを殺した者（インドラ）がかつて一切の敵対者を焼いたように、あなたも敵を滅ぼして、臣民を守るでしょう。(一一)蓮の眼をした方よ、あなたは自己の法《ダルマ》により征服した大地を得て、カールタヴィーリヤ・アルジュナのように、法により名声に達するでしょう。(一二)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

聖仙ナーラダはこのように偉大な王を慰めてから、別れを告げ、その場で消え失せた。(一三)徳性あるユディシティラは、そのことのみを考察して、聖地巡礼による功徳を聖仙たちに伝えた。(一四)　（第八十三章）

東西南北にある聖地

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

ユディシティラ王は弟たちと賢者ナーラダの考えを確かめてから、祖父に等しいダウミヤに告げた。(一)

「私は、人中の虎、不屈の勇者である限りなく高邁な勇士アルジュナを、武器を得るために旅に出した。(二)苦行者よ、彼は勇士であり、忠実で、有能であり、非常に武器に通じ、主

ヴァースデーヴァ（クリシュナ）のようである。(三)バラモンよ、敵を滅ぼすこの強力なクリシュナとアルジュナとについて、私と栄光あるヴィヤーサはよく知っている。三宇宙紀《ユガ》における、蓮の眼をしたヴァースデーヴァとアルジュナについて……。(四)ナーラダもまた知っている。彼はいつも私に語った。私も同じように知っている。その二人がナラとナーラーヤナという聖仙であることを。(五)彼ならできると考えて、私はアルジュナを派遣した。インドラに劣らない神の息子なら、神々の王に会って、インドラから武器を受けることができると考え、彼を旅に出したのである。(六)

ビーシュマとドローナは超戦士である。クリパとドローナの息子は無敵である。これらの強力な人々が、ドリタラーシトラの息子によって、戦いのために選ばれている。すべての勇士はヴェーダを知り、また武器を巧みに用いる。(七)そしてまた、御者の息子である勇士、神的な武器を用いるカルナは、常にアルジュナと戦うことを望んでいる。(八)彼は馬のように速く、風のように強力であり、ドゥルヨーダナという風に吹き上げられ、武器の熱をともない、激質《ラジャス》の煙を有する。(九)彼はカーラ（時間、破壊神）によって創造されたかのように、宇宙紀の終末の火のように、疑いもなく私の軍隊を枯れ草のように燃やすであろう。(一〇)

偉大なアルジュナは、雲のように、クリシュナという風に吹き上げられ、神的な武器という雨雲をともない、白雲という鶴を連れて、ガーンディーヴァ弓という虹（インドラの武器）で輝き、絶えず矢の雨を浴びせることにより、戦闘においてカルナの火を静めるであろう。(一一)

勇士アルジュナは、シャクラ（インドラ）から直々に、すべての神的な武器をまさしく得るであろ

う。（二三）彼は彼らすべてに匹敵すると私は考える。しかし、彼以外には（原文疑問）、戦闘において、敵に対抗できる者はいない。（二四）我々はみな、武器を手に入れたアルジュナに会えるであろう。アルジュナは重荷を担って挫折することはないから。（二五）

しかし、最高の人よ、我々はクリシュナー（ドラウパディー）とともに、あの勇士がいないので、このカーミヤカの森で安息を見出すことはない。（二六）どこか他に、多くの食物があり木の実のあるよい森はないか。清浄で心地よい、神聖な行ないの人々の住む森はないか。教えて下さい。（二七）その森に少しの間住んで、不屈の勇気を持つ勇士アルジュナを待とう。雨を望む者たちが雲を待つように。（二八）バラモンたちに知られた種々の隠棲所、湖、川、心地よい山々を教えて下さい。バラモンよ、あのアルジュナがいないので、このカーミヤカの森に住むことは楽しくないから。他の地方へ行きましょう。（二九―三〇）」（第八十四章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

すべてのパーンダヴァが意気消沈し、切望しているのを見て、ブリハスパティ（神々の師）のようなダウミヤは慰めながら告げた。（一）

「バラタの雄牛である王よ、バラモンに認められた神聖なる隠棲所と、諸々の地方と聖地と山々についてお話しするから聞きなさい。（二）

ユディシティラ王よ、まず第一に、王仙の群が住む、心地よい東の地方について、記憶している限り申しあげよう。（三）神々や聖仙（または「神仙」）の住むその地方に、ナイミシャという森がある。そこに、それぞれ神々に属する非常に神聖な諸々の聖地がある。（四）そこには、神々や聖仙の住む神聖で心地よいあのゴーマティー川がある。また、神々の祭祀の場所と、ヴィヴァスヴァット（太陽神）の犠牲（息子）を殺す場所がある。（五）そこに、王仙に敬われる聖なるガヤという最高の山がある。神々や聖仙たちが住む、吉祥なる梵天の湖がある。（六）人中の虎よ、そのために古人たちは説く。多くの息子を望むべきであると。そのうちの一人でもガヤーに行くようにと。（七）その同じ場所に、マハーナディーとガヤシラスがある。そこにはアクシャヤカラナというバニヤン樹があり、バラモンたちに称讃されている。そこで祖霊たちに供えられた食物は不滅（アクシャヤ）になる。（八）そこにはまた、聖なる水をたたえたパルグという大河がある。そして、豊富な根と木の実のあるカウシキー川がある。そこで、苦行を積んだヴィシュヴァーミトラがバラモンの位に達したのである。（九）そこに聖河ガンガー（ガンジス）が流れている。その岸でバギーラタは、多大な謝礼をともなう多くの祭祀を行なったのだ。（一〇）クルの王よ、パーンチャーラ国に蓮池があると言われる。そこでカウシカ姓のヴィシュヴァーミトラは、シャクラ（インドラ）とともに祭祀を行なった。そこで聖なるジャーマダグニヤ（ラーマ）は、ヴィシュヴァーミトラの超人的な力を見て、伝承された詩節を歌った。『カウシカはカニヤクブジャ（カナウジ）で、インドラとともにソーマ酒を飲んだ。それから、王族の位を超えて、私はバラモンだと言った。（一一―一二）』

世に名高いガンガーとヤムナーの合流点がある。それは清浄であり、聖仙が住み、最高に

浄めるものである。（二三）かつてそこで、生類の主である梵天が祭祀（ヤーガ）を行なった。それ故、そこはプラヤーガと呼ばれた。（二四）

「そしてそこにアガスティヤの最高の隠棲所がある。カーランジャラ山中にヒラニヤビンドゥと呼ばれる〔聖地がある〕。（二五）他の山々を凌駕し、神聖にして吉祥なる最高の山である、マヘーンドラという、偉大なブリグ族の聖者（パラシュラーマ）の住む山がある。（二六）かつてそこで梵天が祭祀を行なった。その祭場（サダス）に、聖なるガンガー女神がいた。（二七）そこにブラフマシャーラーという、名高い聖河がある。それは罪障を離れた人々に満ち、その眺めは神聖である。（二八）また、マタンガの最高の隠棲所、ケーダーラがある。それは清浄にして吉祥であり、世に名高く永遠である。（二九）また、多くの根と木の実と水のある、心地よいクンドーダ山がある。そこでナイシャダ（王（ナラ））は、水と安息を見出した。（三〇）そこに、苦行者たちに飾られた、心地よいデーヴァヴァナがある。またそこには、山の頂に、バーフダーとナンダーという川がある。（三一―三二）

大王よ、私はあなたに、東方の地方における、諸々の聖地、川、山、聖域について語りました。今度は他の三つの方角における、諸々の聖地、川、山、聖域について私の言うことを聞いて下さい。（三三）（第八十五章）

ダウミヤは言った。

「バーラタよ、南方における神聖な聖地について、知る限り詳細に話しますからお聞き下さい。（一）

その地方には、聖河ゴーダーヴァリーがある。そこには多くの遊園があり、水は豊富で、苦行者たちが住み、清浄である。（二）ヴェンナーとビーマラティーという二つの川がある。それらは罪障と恐怖を取り除き、鳥獣に満ち、苦行者の住居に飾られている。（三）そこには王仙ヌリガの川であるパヨーシニーがある。その川には心地よい諸々の聖地（ティールタ）があり、水は豊富で、バラモンたちが住む。（四）そして、ここでも、苦行を積んだ偉大なヨーギンであるマールカンデーヤは、ヌリガ王について伝承された詩節を唱えた。（五）

『ヌリガが祭祀を行なった時、インドラはソーマに酔い、バラモンたちは謝礼に酔ったと、我らは直接に聞いた。（六）』

ヴァルナスロータサ山には、根と木の実に富む、神聖にして吉祥なるマータラの森があり、また祭柱がある。（七）プラヴェーニーの北岸と、神聖なるカヌヴァの隠棲所には、諸々の有名な苦行者の森があると聞いている。（八）

シュールパーラカには、偉大なジャマダグニの二つの祭壇がある。心地よいパーシャーナ・ティールタとプラシュチャンドラの祭壇である。（九）マルティヤ国には、多くの隠棲所をともなうアショーカ・ティールタがある。パーンディヤ国には、アガスティヤ・ティールタとヴァルナのティールタがある。（一〇）同じパーンディヤには、神聖なる処女（クマーリー）たちと呼ばれる聖地がある。私はタームラパルニーについて語ろう。クンティーの息子よ、聞きなさい。

(二一)その隠棲所において、神々は偉大なる成果を望んで苦行を行なった。三界に名高いゴーカルナという聖地がある。(二二)そこの湖は、水は冷くて豊富であり、神聖で吉祥である。それは自己を制していない人々には、この上なく達しがたい。(二三)その同じ場所には、デーヴァサバ山中に、アガスティヤの弟子のトリナソーマーグニの隠棲所がある。それは神聖で、果実と根に満ちている。(二四)そこには、宝玉でできた吉祥なる聖ヴァイドゥーリヤ山がある。また、根と果実と水に満ちた、アガスティヤの隠棲所がある。(二五)

王よ、スラーシトラにおける諸々の聖域、聖地、川、山、湖についても語るであろう。(二六)バラモンたちは、そこにチャマソーンマッジャナという聖地があると言う。そして海上に、プラバーサという神々の聖地がある。そしてウッジャヤンタ山がある。(二七)そこに、ピンダーラカという、苦行者たちの住む聖地がある。その大山は、速やかに成就をもたらす。(二八)そこで、最高の神仙ナーラダが唱えた古い詩節が知られている。ユディシティラよ、それを聞きなさい。(二九)

『スラーシトラの、鳥獣の住む聖山ウッジャヤンタで苦行を行なう者は、天界において幸せに暮らすという。(三〇)』

そこには神聖なドゥヴァーラヴァティーがある。そこで古の神マドゥスーダナ（クリシュナ）が現に住んでいる。実に彼は永遠の法（ダルマ）であるから。(三一)ヴェーダを知るバラモンたち、真我（アートマン）について知る人々は、偉大なクリシュナのことを永遠の法であると述べる。(三二)というのは、ゴーヴィンダ（クリシュナ）は浄めるもののうちで最高に浄めるものであると言われる。神聖なもののうちで最高に神聖なもの、吉祥なもののうちで最高に吉祥なものと言われる。(三三)三界である神、蓮の眼をした神の中の神、永遠なる神、ハリ、不可思議な本性のもの、マドゥスーダナが、まさにそこに住むのである。(三四)」(第八十六章)

ダウミヤは言った。

「アヴァンティ地方と西部の地方における、浄める地域、神聖なる地域について語るであろう。(一)そこには聖河ナルマダーがある。西方に流れるその川は、プリヤングとマンゴー（藤の類）の森に満ち、ヴァーニーラ（藤の類）の森に囲まれている。(二)そこに聖者ヴィシュラヴァスの神聖なる住居があると知られている。人間を乗物とする財主クベーラはそこで生まれた。(三)ヴァイドゥーリヤ・シカラという、めでたい最高の聖山がある。そこには神的な花と実をつけた緑色の樹々がある。(四)その山の峰に賢者（ブリハスパティ?）の湖がある。そこでは蓮が満開であり、神々やガンダルヴァ（半神）たちが住む。(五)その天界にも似た、神々や聖仙たちの住む神聖な山では、多くの驚嘆すべきことが認められる。(六)また、湖水と聖地に満ちた王仙の川がある。それは神聖なヴィシュヴァーミトラの川パーラーである。(七)その川の岸で、ナフシャの息子ヤヤーティは善き人々の間に落ちた（一・八三参照）。しかし彼は再び〔天の〕諸世界、永遠の法（ダルマ）を獲得した。(八)

そこには神聖な湖とマイナーカ山がある。また、根と木の実に富むアシタという山がある。

(九) カクシャセーナの神聖な隠棲所と、いたるところで有名なチャヴァナの隠棲所がある。そこでは、人はわずかの苦行によっても目的を成就する。(一〇) 静寂の人々のうちの最上者よ。大王よ。ジャンブーマールガという聖地がある。その心が浄められた聖仙たちの隠棲所で、鳥獣の群が住む。(一一) それから、最も神聖な、常に苦行者の住む、ケートゥマーラーの聖地がある。また、メーディヤーとガンガーの森がある。名高いシンドゥの森(サインダヴァ)は、神聖で、バラモンたちが住む。(一二) 神聖な梵天(ピターマハ)の湖がある。プシュカラという聖地がある。それはヴァイカーナサ(苦行者の種類)たちやシッダ(半神の一種)たちや聖仙たちの愛する隠棲所である。(一三) ここにおいても、称讃するために、造物主はプシュカラについて次の詩節を唱えた。(一四)

『賢明な人が、たとえ心によってプシュカラを望んでも、彼の罪障は消滅するであろう。そして彼は天界において楽しむ。(一五)』(第八十七章)

ダウミヤは言った。

「王中の虎よ、北部にある聖地と聖域について、あなたに語るであろう。(一)

森に囲まれた聖河サラスヴァティーがある。そして、海に向う、激しい流れのヤムナーがある。(二) そこに、最も神聖で吉祥なる聖地プラクシャーヴァタラナがある。そこでバラモンたちは、サラスヴァティーの祭祀を行ない、祭祀の終わりに沐浴した。(三) また、神聖で

吉祥なるアグニシラスという聖地が知られている。そこでサハデーヴァは、棒を投げて測量して祭場を作り、祭祀を行なった。(四) まさにこのことについて、インドラの歌がこの世間に広まり、バラモンたちに歌われているのである。(五)

『サハデーヴァがヤムナー川に沿って設置した聖火は一千万であり、(バラモンに対する)一万の謝礼をともなう。(六)』

その同じ場所で、高名な聖輪聖王バラタは、三十五の馬祀(アシュヴァメーダ)を行なった。(七) 私がかつて聞いたところでは、バラモンたちの願望をかなえるシャラバンガ(異本による)の隠棲所は、この上なく神聖で有名である。(八) サラスヴァティー川は善き人々に常に敬われている。かつてヴァーラキリヤ聖仙たちはそこで祭祀を行なった。(九) そこには最高に神聖な、名高いドリシャドヴァティー川がある。そこで、ヴェーダを知る、ヴェーダに知られた、学術とヴェーダに通じた、非常に清浄なヴァイヴァルニヤとヴァルナ(水天のヴァルナとは原語が異なる)の二人が、常に神聖な祭祀を行なっている。(一〇—一一)

かつて、インドラ(帝釈天)とヴァルナ(水天)をはじめとする神々は集まって、ヴィシャーカユーパにおいて苦行を行なった。それ故、それは最高に神聖となった。(一二) 高名で栄光に満ちた偉大なジャマダグニ仙は、神聖で心地よいパラーシャカにおいて祭祀を行なった。(一三) そこでは、すべての最上の河川が現に姿を見せて、各々の水を持ち、その最高の聖仙を囲んで伺候していた。(一四) ここにおいても、その偉大な聖仙の力を見て、ヴィシュヴァーヴァスは次のような詩節を唱えた。(一五)

『偉大なジャマダグニが神々に対して祭祀を行なった時、すべての河川がやって来て、蜜により彼を満足させた。(一六)』

山々のうちの最高の山（ヒマーラヤ）は、ガンダルヴァ、夜叉、羅刹、天女（アプサラス）たちに飾られ、キラータ（山岳民）やキンナラが住む。(一七)それは神聖であり、梵仙の群が住み、その名は知れわたっている。ガンガー（ガンジス）はガンガー・ドゥヴァーラにおいて、力まかせにその山を断ち切った。(一八)そこにはサナトクマーラがいる。そして聖なるカナカラがある。そしてまたプルという名の山があり、そこでプルーラヴァスが生まれた。(一九)ブリグが大仙の群に仕えられて苦行した隠棲所は、ブリグの峰と呼ばれる大山である。(二〇)

ヴィシュヌ神は過去・現在・未来の一切であり、ナーラーヤナであり、永遠なる至高の神我（プルシャ）である。(二一)神聖で広大なバダリー川に沿って、そのこの上なく誉れ高い神の、三界に名高い神聖な隠棲所があると知られている。(二二)広大なバダリー川の付近では、熱い水を運ぶガンガーも別様であって、冷い水を運び黄金の砂を有する。(二三)栄光に満ち、威光に満ちた聖仙たちや神々が常にやって来て、至高のナーラーヤナ神を礼拝する。(二四)永遠の最高我であるナーラーヤナ神のおられる所には、すべての世界、聖地、聖域がある。(二五)それは神聖であり、最高ブラフマンであり、聖地であり、苦行林であり、そこには神と聖仙たち、シッダたち、すべての苦行者たちがいる。(二六)原初の神、大ヨーギン、マドゥスーダナ（ヴィシュヌ）のおられる所は、聖地のうちでも最も神聖である。その点、疑うことなかれ。(二七)

王よ、以上、地上における聖地と聖域があげられた。(二八)ヴァス神群、サーディヤ神群、アーディティヤ神群、マルト神群、アシュヴィン双神、梵天のように偉大な聖仙たちがそれらの地に住む。(二九)クンティーの息子よ、バラモンの雄牛たちとともに、栄光に満ちた弟たちとともに、それらの聖地を巡礼すれば、切ない思いを捨てられるであろう。(三〇)」

(第八十八章)

パーンダヴァ、聖地巡礼に出発

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

クルの王子よ、ダウミヤがこのように語った時、威光に満ちあふれた聖仙ローマシャがそこにやって来た。(一)パーンダヴァの長子である王と、彼に従う人々と、バラモンたちは、栄光ある聖者を〔歓迎するために〕立ち上がった。神々がシャクラ（インドラ）に対してそうするように。(二)ダルマ王ユディシティラは、作法通りに彼に敬意を払ってから、訪問の理由と遍歴の目的をたずねた。(三)偉大な聖者は彼にたずねられて、喜び、彼を喜ばせて、穏やかな言葉で告げた。(四)

「クンティーの息子よ、私は全世界を気ままに遍歴しているうちに、シャクラの住処に行き、そこで神々の王に会った。(五)私はそこで、あなたの弟である勇士アルジュナがシャクラと座を分かち合っているのを見た。彼がそのようにしているのを見て、私はすっかり驚いてし

まった。（六）そこで神々の王は私に告げた。
『パーンドゥの息子たちのもとに行け』と。

そこで私は、あなたと弟たちに会うために、急いでやって来たのである。（七）インドラと偉大なアルジュナの言葉により、非常に喜ばしいことをあなたに話してあげよう。（八）王よ、弟たちやクリシュナー（ドラウパディー）とともに、それを聞きなさい。

パーンダヴァの雄牛よ、あなたはあの勇士に武器を得よと命じた。アルジュナはルドラ（シヴァ）から、その無比なる偉大な武器を手に入れた。それは、苦行によりルドラに到来した、ブラフマシラス（梵頭）という武器である。（九－一〇）アルジュナは、甘露から生じたその恐ろしい（または「ルドラの」）武器を、〔それを使用するための〕呪文と、回収する方法と、贖罪法と祝禱とともに手に入れた。（一一）そしてまた、勇猛無比なるアルジュナは、ヤマ、クベーラ、ヴァルナ、インドラから金剛杵や杖などや、その他の神聖な武器を修得した。（一二）そして彼は、ヴィシュヴァーヴァスの息子（チトラセーナを指す）から、歌、踊り、歌詠、器楽を、作法に従って正しく学習した。（一三）このように、あなたの弟アルジュナは、武器を修得し、音楽（ガーンダルヴァ・ヴェーダ）を修め、幸せに暮らしている。（一四）ユディシティラよ、私は最高の神が私に告げたことをあなたに語るであろう。聞きなさい。（一五）

『あなたは必ずや人間界に行くであろう。最高のバラモンよ、そこで私の言葉によりユディシティラに言いなさい。（一六）――

汝の弟アルジュナは武器を修得し、神々が不可能な重大な神のための任務を果たしてから、速やかにそちらにもどるであろう。（一七）汝は弟たちとともに苦行に専念せよ。というのは、苦行よりも優れたものはないから。苦行により偉大な成果をあげることができる。（一八）バラタの雄牛よ、私はカルナについてよく知っている。彼は合戦において、〔アルジュナの十六分の一にも値しないであろう。（一九）汝の心にはカルナに対する恐怖が存するが、アルジュナがここから帰った時、私はその恐怖を取り除いてやろう。（二〇）また、汝は聖地巡礼を意図しているが、その意図についても、疑いもなくローマシャがすべて語るであろう。（二一）そして、苦行の果報と聖地における果報について大仙が告げることを、その通りに信ずべきである。（二二）』」　　（第八十九章）

ローマシャは告げた。
「ユディシティラよ、今度はダナンジャヤ（アルジュナ）が言ったことを聞きなさい。（一）というのは、
『私の兄ユディシティラに、法にかなった繁栄を与えて下さい。苦行者よ、あなたは最高の法と苦行とを知っていますから。そしてまた、栄光ある諸王の永遠の法を知っていますから。（二）そしてあなたは、人間を最高に清浄にするものを知っておられるから、ユディシティラに聖地の福徳を授けてあげて下さい。（三）その王が諸々の聖地に行くように、そして牛を布施するように、全身全霊をもって努力して下さい。』
とそうアルジュナは私に言った。〔そして続けた。〕（四）

『あなたに守られて、彼はすべての聖地を巡礼するであろう。難儀な場所や危険な場所において、羅刹たちから彼をお守り下さい。(五) ダディーチャが神々の王（インドラ）を、アンギラスたちが太陽を守るように、最高のバラモンよ、クンティーの息子を羅刹たちからお守り下さい。(六) というのは、多くの山のような魔物、羅刹がいるが、彼らはあなたに守られたクンティーの息子たちを襲うことはできないでしょう。(七)』

そこで私は、インドラとアルジュナの指示に従って、危険からあなたを守りつつ、あなたとともに巡礼するであろう。(八) クルの王子よ、私はかつて諸々の聖地を二度訪れた。今度はあなたとともに、それらを三度訪れるであろう。(九) ユディシティラよ、有徳な王仙たちやマヌなどは、恐怖を除去する諸聖地を巡礼した。(一〇) 正直でない人、自制していない人、無学な人、悪をなす人、心の曲った人は、クンティーの子よ、聖地で沐浴することはできない。(一一) しかしあなたは、常に敬虔であり、法（ダルマ）を知り、約束を守る。あなたは更に、一切の罪障から解放されるであろう。(一二) パーンダヴァよ、あなたもバギーラタ王や、ガヤなどの王や、ヤヤーティのようになるであろう。(一三)」

ユディシティラは言った。

「嬉しさのあまり、そのお言葉に対して答えることができません。神々の王が想い起こして下さるとは。これに勝ることがありましょうか。(一四) ダナンジャヤの兄（自分）はあなたと会え、インドラが想起して下さるとは、私にまさる者はいるでしょうか。(一五) また、あなたは聖地を訪れることについて話されましたが、私はすでにダウミヤの言葉によりそのように

決心していました。(一六) バラモンよ、あなたが聖地を訪れるために発とうと思われたまさにその時、私は必ず出発するでしょう。私は固く決意しております。(一七)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

ローマシャは出発の決意をしているパーンダヴァに告げた。

「大王よ、身軽になりなさい。身軽になれば、自由に出かけることができる。(一八)」

ユディシティラは言った。

「王への忠誠心からついて来た市民たちや、比丘やバラモンや苦行者たちは、引き返しなさい。(一九) ドリタラーシトラ大王のもとに行きなさい。彼はふさわしい時に、ふさわしい俸給をくれるであろう。(二〇) もしその王がふさわしい俸給をくれない場合は、パーンチャーラの王（ドルパダ）が、我々への好意から、あなた方にそれをくれるであろう。(二一)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

それから、重い荷物を持った市民たちや、バラモンや苦行者たちは、大部分、象の都（ハスティナプラ）めざして出発した。(二二) ドリタラーシトラ王は、ダルマ王に対する愛情から、礼儀正しく、財産を与えて彼らを受け入れた。(二三) それから、クンティーの息子である王は、満足して、ローマシャと少数のバラモンたちとともに、カーミヤカの森に三夜だけ滞在していた。(二四)

（第九十章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

それから、クンティーの息子が出発する時、森に住んでいたバラモンたちが近づいて来て、次のように言った。(一)

「王よ、あなたは弟たちや偉大な神仙ローマシャとともに、聖地巡礼に行かれます。(二)大王様、我々も連れて行って下さい。というのは、あなたなしで、我々は聖地に行くことはできませんから。(三)王よ、聖地〔の途中〕には、猛獣たちがおり、難所や険阻な場所もあり、わずかな人々は聖地に到達することはできません。(四)あなたと弟たちは勇士で、最高の弓取りです。あなたたち勇士に守られれば、我々も聖地に行くことができます。(五)あなたの御好意により、王よ、我々は聖地巡礼と誓戒のすばらしい果報を得ることができましょう。(六)王よ、我々はあなたの力に守られることにより、聖地で沐浴して清浄になり、聖地を訪れることにより罪障を除くことができましょう。(七)バーラタよ、あなたもまた、聖地で沐浴して、カールタヴィーリヤ王、王仙アシタカ、ローマパーダ、勇猛な全地上の帝王バラタたちの、到達しがたい世界に、必ずや達することができるでしょう。(八―九)プラバーサなどの聖地、マヘーンドラなどの山、ガンガーなどの川、プラクシャなどの聖樹を、王よ、あなたとともに見たいものです。(一〇)王よ、もしバラモンに対する愛情があなたに少しでもあるなら、すぐに我々の願いを実行して下さい。そうすれば、あなたは至福に至るでしょう。(一一)勇士よ、常に聖地には苦行を妨害する羅刹が満ちております。我々を彼らから救って下さい。(一二)ダウミヤや賢者ナーラダや、偉大な苦行を積んだ神仙ローマシャが語った諸々の聖地、それらをすべて、ローマシャに守られて、作法通りに我々とともに巡礼しなさい。そうすれば罪障を除くことができます。(一三―一四)」

このように彼らに尊敬されて、パーンダヴァの雄牛は喜びの涙に濡れ、ビーマセーナなどの勇猛な弟たちに囲まれて、「承知した」とすべての聖仙たちに告げた。(一五)強力なパーンダヴァの長は、ローマシャと司祭のダウミヤの許しを得て、弟たちや非の打ち所のない体のドラウパディーとともに、出発の決意をした。(一六)その時、栄光に満ちたヴィヤーサとナーラダとパルヴァタという賢者たちが、パーンダヴァに会うために、カーミヤカの森にやって来た。(一七)ユディシティラ王は、作法通りに彼らをもてなした。聖者たちは接待を受けてから、ユディシティラに告げた。(一八)

「ユディシティラよ、双子よ、ビーマよ。心を真直ぐにしなさい。心を浄め、清浄になって、諸々の聖地を訪れなさい。(一九)というのは、身体を制御することは人間の誓戒、心に浄められた思考は神の誓戒とバラモンたちが言うから。(二〇)実に、汚れなき心は勇士たちにふさわしい。友愛に満ちた思考を抱き、清浄になって、諸々の聖地を訪れなさい。(二一)あなた方は、身体を制御する誓戒により清浄になり、心により浄められて神の誓戒を行なって、前述のような果報を得るであろう。(二二)」

パーンダヴァたちとクリシュナーは、その通りにしますと約束して、全員、神的人的な聖

者たちの祝福の言葉を受けた。(二三) 彼らはローマシャとドゥヴァイパーヤナと、神仙ナーラダとパルヴァタの両足をかき抱いた。(二四) それから勇士たちは、ダウミヤと、その他の森に住む人々とともに、プシュヤ星宿が支配するマールガシールシャ月（十一月−十二月）に出発した。(二五) 彼らは棒（または、ロープ、または、器）を持ち、ぼろと鹿皮をまとい、髪を編み、貫きがたい鎧を着て、諸々の聖地を巡礼した。(二六) 彼らはインドラセーナなどの臣下、合計十四（または、十五）の戦車、給食係りその他の従者たちをともなっていた。(二七) パーンダヴァの勇士たちは、武器を持ち、刀を帯び、箙と矢を持ち、東方に向かって出発した。(二八)（第九十一章）

王仙ガヤの祭祀

ユディシティラは言った。

「最高の聖仙よ、私は自分に長所がないとは思いません。しかし、他の王はそれほど苦しんでいないのに、私はひどく苦しんでいます。(一) 私の敵たちは長所がなく、法に専念してもいないのに、ローマシャよ、彼らはどうしてこの世で繁栄しているのですか。(二)」

ローマシャは答えた。

「王よ、法を愛さない人々が、非法により栄えたとしても、決して悩むことはない。(三) 人が非法により栄え、幸せを得て、ライバルに勝利しても、彼は根こそぎに滅亡するであろう。(四) というのは、王よ、ダイティヤやダーナヴァ（類魔）が非法により栄えても、結局は滅びて

しまったのを私は見たから。(五)

王よ、私はかつて神々の宇宙紀に、すべてを見た。神々は法を愛し、阿修羅たちはそれを捨てた。(六) 神々は聖地を巡礼したが、阿修羅たちはそうしなかった。以前に、非法がもたらす驕りが彼らに入りこんだ。(七) 驕りから慢心が起こり、慢心から怒りが生じた。怒りから無慚が生じ、それから無恥が彼らの生活を滅ぼした。(八) 彼らが無恥にして無慚であり、生活がすさみ、誓戒を破ると、忍耐、幸運、法はすぐに彼らを捨てた。幸運は神々のもとに行き、不運が阿修羅たちのもとに行った。(九) それから、不運にとりつかれ、驕りに心乱れたダイティヤとダーナヴァに、カリ（神悪）がとりついた。(一〇) 彼らが不運につきまとわれ、カリにとりつかれ、驕りに心乱れ、祭式を失い、正気を失い、高慢に支配された時、すぐに滅亡が彼らに訪れた。ダイティヤたちは名誉を失い全滅した。(一一―一二)

一方、神々は法を実行し、海や川や湖や聖域を訪れた。(一三) そして、苦行と祭祀と布施と祝福の言葉により、一切の罪悪を滅して、至福に達した。(一四) このようにして、いたるところで布施を行ない、祭式を行ない、諸聖地を訪れ、神々は最高の繁栄に達した。(一五)

同様に、王中の王よ、あなたもまた弟たちとともに諸聖地で沐浴して、再びあの幸運を見出すであろう。これは永遠の道である。(一六) ヌリガ王、ウシーナラの息子シビ、バギーラタ、ヴァスマナス、ガヤ、プール、プルーラヴァスが、常に苦行を行じ、水に触れて、聖地巡礼により、偉大な人々と会うことにより、浄らかになり、清浄なる名声と財物を得たように、王中の王よ、あなたもまた広大な繁栄を得るであろう。(一七―一九) イクシュヴァークが息

子たちや親族たちと行なったように、また、ムチュクンダやマーンダートリやマルッタ王が行なったように、神々が苦行の力により清浄なる名声を得たように、また神仙たちがすべてそれを得たように、あなたもそれを得るであろう。（二〇―二二）一方、ドリタラーシトラの息子たちは、驕りと迷妄に支配されて、疑いもなく、近いうちにダイティヤたちのように滅亡するであろう。（二三）」（第九十二章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

かくて勇士たちは連れ立って、あちこちに滞在したが、やがてナイミシャの森に到着した。（一）そしてパーンダヴァたちは、ゴーマティー川の清浄なる聖地において沐浴を行ない、牛と財物を布施した。（二）そこで、クルの王子（パーンダヴァ）たちは、「乙女の聖地」と「馬の聖地」と「牛の聖地」において、繰り返し、神々や祖霊やバラモンたちを満足させた。（三）それから、彼ら一同は、ヴリシャプラスタ山のヴァーラコーティにおいて、バーフダー川で沐浴を行なった。（四）彼らは神々の祭場であるプラヤーガに滞在し、身体を洗って、最高の苦行を行なった。（五）誓いを守る偉大な勇士たちは、ガンガー（ガンジス）とヤムナーの合流点において罪障を離れ、バラモンたちに財物を布施した。（六）それからパーンドゥの息子たちは、バラモンたちとともに、苦行者たちの住む「造物主の祭壇」に行った。（七）勇士たちはそこに滞在して、森でとれる食物によって常にバラモンたちを満足させつつ、最高の苦行を行なっ

た。（八）

それから彼らは、法を知る高徳な王仙ガヤに尊ばれる山に行った。（九）そこには、ガヤシラス湖と聖河マハーナディーがある。聖仙の住む、非常に清浄な聖地、最高のブラフマサラス（梵天湖）がある。（一〇）そこにおいて、聖者アガスティヤはヴァイヴァスヴァタ（ヤマ）のもとに行ったのである。そしてそこに、永遠なるダルマ自身が住んでいた。（一一）それは一切の川の発生の地であり、そこに槍を持つマハーデーヴァ（シヴァ）が常に現前している。（一二）そこでパーンダヴァの勇士たちは、巨大なアクシャヤ・ヴァタ（不滅のバニヤン樹）のあるところで、盛大な聖仙に対する祭祀により、チャートゥルマースヤ祭（四カ月ごとの祭祀）を行なった。（一三）苦行を積んだバラモンたちは、幾百となくそこに集まって来て、聖仙の作法により、チャートゥルマースヤ祭を行なった。（一四）そこで、ヴェーダに通達した、常に学術と苦行に専念するバラモンたちは、祭場に座って、偉大な人々の神聖なる物語を始めた。（一五）

そこにおいて、学術と誓戒に通じた、不犯の戒を守るシャマタという者が、アムールタラヤスの息子のガヤについて語った。（一六）

「バーラタよ、アムールタラヤスの息子である、最高の王仙ガヤの、神聖なる行為を私から聞きなさい。（一七）ここで彼の祭祀が行なわれ、多くの食物と多くの謝礼が出された。そこでは、幾百幾千という食物の山があった。（一八）何百というギーの川とダヒ（ヨーグルト状の乳製品）の川があった。そして幾千という高価な香辛料の流れがあった。（一九）毎日のように、求める人々に食物が与えられた。バラモンたちはまた、他の見事に調理された食物を食べた。（二〇）そ

こで謝礼の分配の時に、梵音（ヴェーダの音声）は天に達した。そこで、梵音以外に何も聞こえなくなった。(二一)その行きわたる聖なる音により、地上と諸方位と空中と天は満たされた。それは大なる奇蹟であった。(二二)そこにおいて輝かしい人々は、諸方面において、清浄な飲食物により満ち足りて、詩歌を歌った。(二三)
『ガヤの祭祀において、今、いかなる生物が食べることを望んでいるか。そこには、二十五の食べ残しの山がある。(二四)無量の輝きを有する王仙ガヤが祭祀において行なったようなことは、以前にもなされなかったし、これからもなされることはなかろう。(二五)ガヤは供物によって神々を非常に満足させたので、神々はどうして他の人々に与えられたものを受けることができようか。(二六)』

クルの王子よ、湖畔で、その偉大な人物の祭祀に際し、このような多くの詩歌が歌われた。(二七)」(第九十三章)

悪魔を食べたアガスティヤ

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

それから、(バラモンたちに)多くの謝礼をし、クンティーの息子である王は出発して、アガスティヤの隠棲所に着き、ドゥルジャヤーに滞在した。(一)そこで、話す人々のうちの最上者である王は、ローマシャにたずねた。

「ここでアガスティヤは、いかなる理由でヴァーターピを殺したのか。(二)人を殺すその悪魔は、いかなる力を持っていたのか。また、どうして偉大なアガスティヤに怒りが生じたのか。(三)」

ローマシャは語った。――

クルの王子よ、かつてマニマティーの都に、イルヴァラという悪魔がいた。彼にはヴァーターピという弟がいた。(四)その悪魔は苦行を積んだバラモンに言った。

「尊者よ、私にインドラのような息子を一人授けて下さい。(五)」

そのバラモンは、彼にインドラのような息子を授けなかった。そこでその悪魔はそのバラ

モンに対してひどく怒った。(六)

さてこの悪魔が、死んだ者に呼びかけると、その者は再び肉体を取りもどして、生き返るのであった。(七)そこで彼は、阿修羅ヴァーターピをよく調理された山羊に変えて、それをバラモンに食べさせ、再びその名を呼んだ。(八)大悪魔ヴァーターピは、そのバラモンの脇腹を裂いて、笑いながら出て来た。(九)このようにして、邪悪な悪魔イルヴァラはバラモンたちに食べさせては、繰り返し殺していたのである。(一〇)

ちょうどそのころ、尊者アガスティヤは、洞窟の中で頭を下にして吊り下がっている祖霊たちを見た。(一一)彼は吊り下がっている彼らに、「あなた方はここで何をしているのですか」とたずねた。ヴェーダ学者たちは、「子孫のためである」と彼に答えた。(一二)彼らは彼に告げた。

「我々はお前自身の祖先である。この洞窟にたどり着き、子孫を求めて吊り下がっているのである。(一三)アガスティヤよ、もしお前が最高の子孫を作れば、我々はこの地獄から解放され、わが子よ、お前も〔善〕趣(天界)に到達するであろう。(一四)」

真実と法(ダルマ)に専念する栄光ある彼は、彼らに答えた。

「御先祖たちよ、あなた方の望み通りにしましょう。あなた方の心の苦熱が去らんことを。(一五)」

それから、聖仙は子孫について考えていたが、息子を産むために、自分にふさわしい妻女を見出せなかった。(一六)彼は色々な生物の最高の諸部分を集めて、最高の女性を創り出し

た。(一七)苦行を積んだ聖者は、自分の目的のために創り出した彼女を、子供を求めて苦しんでいたヴィダルバ国王に与えた。(一八)その雨雲に囲まれた稲妻のように魅力的な、美しい顔の女はそこで生まれ、その美しい体で輝きながら成長した。(一九)ヴィダルバ国王は生まれたばかりの彼女を見て喜び、バラモンたちに告知した。(二〇)すべてのバラモンたちは、彼女を祝福して、ローパームドラーという名を彼女につけた。(二一)彼女は最高の容姿をとって、水中の蓮のように、火の輝かしい炎のように、速やかに成長した。(二二)

彼女が年ごろになると、美しく着飾った百人の少女と、百人の召使女が、その美しい女に忠実にかしずいた。(二三)その光り輝く少女は、百人の召使女に囲まれ、百人の少女の中央で、天空におけるローヒニー(星宿の名)のように座っていた。(二四)彼女は年ごろで、よい性質で、行ないも正しかったが、あの偉大な聖仙を恐れて、誰も彼女に求婚しなかった。(二五)しかしその少女は真実を守り、容姿の点で天女を凌駕し、そのよい性質によって父親と親族の人々を満足させた。(二六)父親は、そのように条件の整った若いヴィダルバの王女を見て、「誰に娘を与えるべきか」と考えこんだ。(二七)(第九十四章)

ローマシャは語った。――

一方アガスティヤは、彼女が家庭の主婦になれると考え、やって来て、ヴィダルバ国王に告げた。(一)

「王よ、息子を生むために私は結婚したいと思う。私はあなたに求婚する。ローパームドラーを私に下さい。(二)」

聖者にそう言われて、王は当惑した。与えたくはなかったが、拒絶することもできなかったのである。(三) そこで王は妻のところに行って言った。

「あの大仙は強力である。怒ったら、呪詛の火で焼くであろう。(四)」

王が妻とともに悩んでいるのを見て、ローパームドラーは適切な時に近づいて、次のように言った。(五)

「王様、私のために悩むことはありません。私をアガスティヤに与えて下さい。お父様、私によって御自身を救いなさい。(六)」

娘の言葉により、王は偉大なアガスティヤに、作法に従って、ローパームドラーを与えた。(七) アガスティヤは妻を得て、彼女に告げた。

「その高価な衣服と装飾品を捨てなさい。(八)」

そこで、バナナの〔幹の〕ような腿をした切れ長の眼の女は、美しく高価で繊細な衣装を捨てた。(九) それから、ぼろ衣と樹皮と鹿皮をまとい、その切れ長の眼の女は夫と同じ誓戒と生活を行なうようになった。(一〇)

最高の聖仙は、忠実な妻とともに、ガンガー・ドゥヴァーラに行って、激しい苦行を行なった。(一一) 彼女はいそいそと、また尊敬をこめて夫に仕えた。そこでアガスティヤはこの上なく妻に満足した。(一二) それから多くの日々が過ぎた時、聖仙は苦行で輝き沐浴をした妻を見た。(一三) 彼は彼女の奉仕と清さと自制と美々しさと容色に喜んで、交わりをするために彼女を呼んだ。(一四)

すると美しい女は手を合わせて、恥じらうかのような風情で、愛情をこめて聖仙に言った。(一五)

「疑いもなく、夫は子孫を望んで妻を娶ります。しかし聖仙よ、あなたに私が喜びを感じられるようにして下さい。(一六) バラモンよ、父の家の楼閣にある私の寝台と同じような寝台で、私と寝て下さい。(一七) 私は神々しい装飾品で飾られて、花輪をつけ装飾品で飾られたあなたに、自分の望みのままに身をまかせたいのです。(一八)」

アガスティヤは言った。

「美しいローパームドラーよ、美しい胴の女よ、お前の父親のような財産は私にはない。(一九)」

ローパームドラーは言った。

「主よ、あなたは苦行の力によってすべてのものを集めることができます。生き物の世界にあるすべてのものを、瞬時に。(二〇)」

アガスティヤは言った。

「お前の言う通りだ。しかし、そうすれば私の苦行の力は失われる。私の苦行の力が失われないようなことを要求しなさい。(二一)」

ローパームドラーは言った。

「苦行者よ、私の受胎に適した時期はごくわずかしか残っていません。そうしなければ、私は決してあなたと寝ません。（二二）でも、あなたの義務（ダルマ）を損ねたくもありませんが。しかし、私の望むようにお計らい下さい。（二三）」

アガスティヤは言った。

「魅力的な女よ、もしそれがお前の心に決めた望みなら、おお、私は出かけよう。美しい女よ、お前はここに居て、好きなようにしていなさい。（二四）」（第九十五章）

ローマシャは語った。——

そこでアガスティヤは、財産を乞うために、シュルタルヴァン王のところに行った。彼は他の王たちより富んでいると知っていたからである。（一）その王は、クンバヨーニ（アガスティヤ）が来たことを知ると、大臣たちとともに国境まで出て、丁重に迎え入れた。（二）そして王は、彼に接客用の品を作法通りに出して、うやうやしく来訪の目的をたずねた。（三）

アガスティヤは言った。

「王よ、私は財産を求めてここに来ました。能力に応じて、他のものを損わない程度に、私に分け前を下さい。（四）」

ローマシャは語った。——

そこで王は、すべての収入と支出を彼に告げた。

「賢者よ、あなたが適当と思う財産をお取り下さい。（五）」

それから、収入と支出が等しいのを見て、公正な心を持つバラモンは、受け取ればあらゆる面で生類に苦しみを与えると考えた。（六）そこで彼はシュルタルヴァンを連れて、ヴァドゥリヤシュヴァのところに行った。彼は国境において、礼儀正しく二人を出迎えた。（七）ヴァドゥリヤシュヴァは二人に接客用の品と洗足の水を出し、許しを乞うてから来訪の目的をたずねた。（八）

アガスティヤは言った。

「王よ、我々は財産を求めてここに来ました。能力に応じて、他のものを損わない程度に、我々に分け前を下さい。（九）」

ローマシャは語った。——

そこで王は、すべての収入と支出を二人に告げた。

「お知りになったら、超過した分をお取り下さい。（一〇）」

それから、収入と支出が等しいのを見て、公正な心を持つバラモンは、受け取れば、あらゆる面で生類に苦しみを与えると考えた。（一一）

アガスティヤとシュルタルヴァンとヴァドゥリヤシュヴァ王は、プルクッツァの息子で大金持のトラサダスユのところに行った。（一二）トラサダスユは乗物で国境まで出て、作法通

りに彼らを歓迎した。(二三)イクシュヴァーク家の最高の王は、ふさわしく彼らをもてなしてから、くつろいだ彼らに来訪の目的をたずねた。(二四)

アガスティヤは言った。

「王よ、我々は財産を求めてここに来ました。能力に応じて、他のものを損わない程度に、我々に分け前を下さい。(二五)」

ローマシャは語った。——

そこで王は、すべての収入と支出を彼らに告げた。

「お知りになったら、超過した分をお取り下さい。(二六)」

それから、収入と支出が等しいのを見て、公正な心を持つバラモンは、受け取れば、あらゆる面で生類に苦しみを与えると考えた。(二七)

そこですべての王は、寄り集まってお互いを見て、偉大な聖者に告げた。(二八)

「バラモンよ、この地上に、イルヴァラという富裕な悪魔がいます。我々はみなで彼のところに行き、財産を要求しましょう。(二九)」

イルヴァラに財産を乞おうということで彼らの意見は一致した。そこで彼らはそろって、イルヴァラのもとに行った。(三〇)(第九十六章)

ローマシャは語った。——

イルヴァラは大仙と王たちが来たのを知って、大臣たちとともに、国境で彼らを歓迎した。(一)その時、阿修羅の長は、例によって調理された弟のヴァーターピによって彼らを接待した。(二)すべての王仙は、羊となって調理された大阿修羅ヴァーターピを見て消沈し、度を失った。(三)すると、最高の聖仙アガスティヤは、王仙たちに言った。

「嘆くことはない。私が大阿修羅を食べてしまう。(四)」

大仙は上席に行って座った。魔王イルヴァラは、笑みを浮べて彼に奉仕した。(五)アガスティヤはヴァーターピをすべて食べた。彼が食べ終わった時、阿修羅イルヴァラはヴァーターピを呼んだ。(六)すると偉大なアガスティヤから空気(おくび)が出て来た。イルヴァラは、大阿修羅が消化されてしまったのを知って絶望した。(七)彼は大臣たちとともに合掌して、たずねた。

「あなたは何の目的で来られたのですか。何をしたらよろしいでしょうか。(八)」

するとアガスティヤは笑って、イルヴァラに告げた。

「阿修羅よ、我々はみな、あなたが財宝の主であるのを知っている。(九)これらの王はあまり金持ちではない。そして私は大いに財産を求めている。能力に応じて、他のものを損わない程度に、我々に分け前を下さい。(一〇)」

するとイルヴァラはおじぎをして、聖仙に告げた。

「あなたのお望みの財産をさし上げます。(一一)」

アガスティヤは言った。

「大阿修羅よ、一万頭の牛と、一万の黄金を、一人一人の王にあげて欲しい。(二二) 私にはその二倍と、黄金の車と、思考のように速い二頭の馬をもらいたい。すぐに車を調査して欲しい。確かに黄金でできているか。(二三)」

ローマシャは語った。――

調査したところ、その車は黄金でできていた。それから、恐れた悪魔は莫大な財産を与えた。(二四) そして、ヴィヴァージャとスヴァージャという、その車につないだ二頭の馬を与えた。二頭は、それらの財産とアガスティヤと王たちを、一瞬のうちにアガスティヤの隠棲所に運んだ。(二五) そこで、王仙たちはアガスティヤに別れを告げて帰って行った。聖者は、ローパームドラーの要求をすべてかなえた。(二六)

ローパームドラーは言った。

「尊者よ、あなたは私の要求をすべてかなえてくれました。すぐに最高の力をそなえた子供を産ませて下さい。(二七)」

アガスティヤは言った。

「美しい女よ、私はお前の行ないに満足した。ところで、お前の子供について考えていることを言うので、聞きなさい。(二八) 千人の息子がよいか、十人に等しい百人の息子がよいか、百人に等しい十人の息子がよいか、千人に等しい一人の息子がよいか。(二九)」

ローパームドラーは答えた。

「苦行者よ、千人に等しい一人の息子が欲しいです。賢明で立派な一人の息子の方が、立派でない多くの息子より優れていますから。(三〇)」

ローマシャは語った。――

聖者は「承知した」と約束して、適切な時期に、等しい徳性を有する、互いに信頼し合う(または「互いに欲望を抱き」)妻と交わった。(三一) それから、胎児を宿らせてから、彼は森に行った。彼が森に住んでいる間に、胎児は七年の間成長した。(三二) 七年が過ぎた時、威力によって燃えるかのような、ドリダスユという誉れ高い偉大な聖仙(カヴィ)が誕生した。補助学とウパニシャッドをともなうヴェーダ聖典を唱えながら……。(三三) その聖仙の息子は、威光を持つ大仙となった。彼はまだ小児の頃、父の家で、大量の祭祀のための薪(イドゥマ)を運んだ。そこでイドゥマヴァーハと呼ばれるようになった。(三四) 彼がそのように能力をそなえたのを見て、聖者は喜んだ。そして彼の祖霊たちは、望み通りの世界に到達した。(三五)

これがすべての季節の花が咲く有名なアガスティヤの隠棲所である。プラフラーダの家系のヴァーターピは、ここでアガスティヤに殺された。(三六) 王よ、この彼の隠棲所は心地よく、諸々の美質にめぐまれている。この聖なるガンガー(ガンジス)で、望みのままに沐浴しなさい。(三七)

(第九十七章)

海水を飲み干したアガスティヤ

ユディシティラは言った。

「私はあの賢明な大仙アガスティヤの行為を詳細に聞きたいと思います。最高のバラモンよ。(一)」

ローマシャは語った。――

大王よ、限りなく高邁なアガスティヤの、神的で驚異的で超人的な物語を、また、彼の威力について聞きなさい。(二)

黄金時代《クリタ》に、恐ろしい悪魔たちがいて、戦いにおいて不屈であった。彼らはカーレーヤという悪名高い集団で、非常に凶暴であった。(三)彼らはヴリトラ(悪魔の名)を依り所とし、種々の武器を振りかざして、いたるところで、大インドラをはじめとする神々を襲撃した。(四)そこで、かつて神々はヴリトラを殺そうと企て、インドラを先頭にして梵天《ブラフマー》のところに行った。(五)梵天は合掌している彼らに告げた。

「神々よ、私はあなた方が企てた計画をすべて知っている。(六)ヴリトラを殺せるように、方策を説くであろう。ダディーチャという、広大な叡知を有する、高名な大仙がいる。(七)みなでそろって彼のところに行って、願いをかなえて欲しいと頼みなさい。敬虔な彼は、心から喜んで、願いをかなえてくれるだろう。(八)あなた方が勝利を願うなら、みなでそろって、三界の幸福のために、彼の骨を要求しなさい。彼は身体を捨てて、自分の骨を与えるであろう。(九)彼の骨で、非常に恐ろしい堅固な金剛杵《ヴァジュラ》を造りなさい。それは鋭く、六角形で、恐ろしい音を響かせ、大敵をも殺す。(一〇)インドラはその金剛杵でヴリトラを殺すであろう。あなた方にすべてを告げた。それ故、速やかに実行しなさい。(一一)」

このように告げられて、神々は梵天に別れを告げ、ナーラーヤナ(ヴィシュヌ)を先頭にして、ダディーチャの隠棲所に行った。(一二)それはサラスヴァティー川の対岸にあり、種々の樹木や蔓草でおおわれていた。そこでは、蜂たちの羽音が、歌詠僧《サーマン》の(歌声の)ように響いていた。雄の郭公《コーキラ》の鳴声が混じり、活き活きと、虫たちの鳴声が響いていた。(一三)そこでは、水牛、猪、鹿、ヤクたちは、虎の恐怖もなく、あちこちで歩きまわっていた。(一四)(発情して)こめかみが裂け(分泌液を流す)雌雄の象たちは、池に飛び込んで戯れ、いたるところで鳴いていた。(一五)そこでは、獅子や虎などは、大声で咆哮しているが、隠れて、穴や洞窟に住んでいた。(一六)このように、そこかしこ美々しく、魅力的な、天界にも似たダディーチャの隠棲所に神々は行った。(一七)そこで、彼らは太陽のように輝くダディーチャを見た。彼はその体により、きらきらと輝いていた。梵天がラクシュミー(吉祥天)により輝くように。(一八)神々は彼の足もとにひれ伏して挨拶し、敬礼して、全員で、梵天の告げたような願いごとをした。(一九)

するとダディーチャは非常に喜んで、最高の神々に言った。

「神々よ、あなた方のためになることをしましょう。そして、私は自分の身体を捨てるでしょう。(二〇)」

自己を制御した最高の人間である彼は、このように告げて、自分の生気を捨てた。そこで、神々は、指示された通りに、生気の失せた彼の骨を取った。(二一)神々は上機嫌で、勝利をめざして、トゥヴァシトリ(工巧神)のもとに行き、用向きを伝えた。トゥヴァシトリも彼らの言葉を聞くと、上機嫌で仕事に精を出した。(二二)彼は非常に恐ろしい形の金剛杵(ヴァジュラ)を作り上げた。作り終わると、彼は喜んでインドラに告げた。

「神よ、この最高の金剛杵で、今こそ、恐ろしい神々の敵を粉砕しなさい。(二三)敵を殺したら、神群とともに、天上界に住み、天界すべてを統治しなさい。」

(二四)トゥヴァシトリにそう告げられて、インドラは喜び勇み、うやうやしく金剛杵を握った。

(第九十八章)

ローマシャは語った。――

それから、インドラは金剛杵を持ち、強力な神々に守られて、天地をおおっているヴリトラを攻撃した。(一)ヴリトラは、武器を振りかざした、そびえ立つ山のような巨大な体のカーレーヤたちに、いたるところ守られていた。(二)それから、たちまちにして、神々と悪魔たちの間に、世界を恐れさせる大戦争が起こった。(三)勇士たちの腕により振り上げられ打ち合わされ、身体に振り下ろされる剣の、さわがしい音が聞えた。(四)(切られて)空中から地上に落下する頭は、茎から落ちた椰子の実のように見えた。(五)カーレーヤたちは黄金の鎧を着て、棍棒で武装して、火事になった山々のように、神々に襲いかかった。(六)神々は結束して激しく攻撃する彼らの勢いに耐えることはできず、うち破られ、恐怖にかられて逃走した。(七)千眼者インドラは、彼らが恐れて逃げるのを見て、また、ヴリトラが増大するので、非常に落胆した。(八)シャクラ(インドラ)が落胆したのを見て、永遠なるヴィシュヌは自分の威光をシャクラに与えて、彼の力を増大させた。(九)神群は、シャクラがヴィシュヌに増強されたのを見て、各々の威光を彼に与えた。清浄な梵仙たちも同様にした。(一〇)シャクラは、ヴィシュヌと神々と栄光ある聖仙たちによって増強されて強力になった。(一一)一方ヴリトラは、神々の王が強力になったのを知って、大声で咆哮した。彼の咆哮により、大地と諸方位と空と天と山々はすべて震動した。(一二)大インドラはその恐ろしい大音声を聞くと最高に悩み、恐怖にかられ、ヴリトラを殺すべく、あわてて強力な金剛杵を放った。(一三)その黄金の首環をつけた巨大な阿修羅(アスラ)は、シャクラの金剛杵に打たれて倒れた。かつて最高の大山マンダラが、ヴィシュヌの手から投げ出されたように。(一四)最高の悪魔が殺された時、シャクラは恐れて湖に逃げ込もうとして走った。彼は恐怖にかられたので、自分の手から金剛杵を放ったことも、ヴリトラを殺したことも覚えていなかったのである。(一五)すべての神々は喜び勇んだ。大仙たちはインドラを讃えた。神々は急いで集合して、ヴリトラが殺されて落胆した悪魔たちを殺した。(一六)その時、彼らは神々に殺されつつ、恐怖に

かられて海に逃げ込んだ。そして、測り知れぬ、魚にあふれ宝に満ちた海に入ると、集まって笑いながら、三界を滅ぼすために協議をした。そこにいた知恵のある連中は、色々な方策を考えた。（一七－一八）彼らは考えているうちに、やがて恐ろしい決意をした。

「まず第一に、学術と苦行を積んだ者たちを滅ぼすべきだ。（一九）というのは、すべての世界は苦行〔の力〕によって、維持されているから。そこで、速やかに苦行を滅ぼそう。地上における苦行者、法（ダルマ）を知る者たち、賢者たちは誰でも、すぐに殺すべきである。彼らがいなくなれば、世界も滅びるのだ。（二〇）」

一同はそのように決意して、世界を滅ぼそうとして最高に勇み立った。大波の立つ、宝に満ちた、ヴァルナ（天水）の住処である海を砦として。（二一）　（第九十九章）

ローマシャは語った。――

カーレーヤたちは、ヴァルナの住処である海を拠り所として、三界を滅ぼす計画を実行に移した。（一）夜中、怒った彼らは、隠棲所や聖地にいる隠者たちを常に食った。（二）ヴァシシタの隠棲所では、百八十八名のバラモンと、その他九名の苦行者が、邪悪な彼らに食われた。（三）彼らはバラモンたちの住む清浄なチャヴァナの隠棲所に行って、木の実と根を食する百人の隠者たちを食った。（四）彼らは夜中にそのように行動して、昼は海中に入った。そしてバラドゥヴァージャの隠棲所においては、風と水を食べて生きる、自己を制御した十二名の

梵行者たちが殺された。（五）このような次第で、悪魔たちは夜間、腕力に驕り高ぶって、すべての隠棲所を徘徊した。死神にとりつかれたカーレーヤたちは、多くのバラモンの群を殺害した。（六）しかし人々は、気の毒な苦行者に対してこのようにふるまう悪魔たちに気づくことはなかった。（七）朝になって、食を節して痩せた隠者たちが、生気を失った身体で、大地に横たわっているのが見出されるのであった。（八）大地は、法螺貝の堆積のような、肉、血、髄、腸、関節のない死体であふれた。（九）散らばった水差し、こわれた杓、散乱した火供（アグニホートラ）によって大地はおおわれた。（一〇）世界中はカーレーヤの恐怖におびえ、そこではヴェーダの学習はやみ、〔供物を捧げる時に唱える〕ヴァシャットという声もやみ、祭祀や祝典を行なうこともなくなり、活気がなくなった。（一一）

このようにして人々は憔悴し、自分を救うために、恐怖にかられて方々逃げまわった。（一二）ある人々は洞窟に入った。また他の人々は滝に隠れた。また他の人々は死におびえ、恐怖から生命を捨てた。（一三）誇り高い勇猛な戦士たちのうちで、悪魔たちを探して非常な努力をした者たちもいた。（一四）しかし彼らは、海に隠れた悪魔たちを見出せず、この上なく疲労して死滅した。（一五）世界が滅亡に近づき、祭祀も祝典も行なわれなくなった時、神々は最高に苦しんだ。（一六）彼らは大インドラとともに集まり、無敵のナーラーヤナ・ヴァイクンタ（ヴィシュヌ神）を前にして、恐れて協議を行なった。（一七）集合した神々はマドゥスーダナ（ヴィシュヌ）に言った。

「主よ、あなたは我々と世界の創造者であり、守護者であり、維持者です。あなたは動不動

のこの一切を創造しました。（一八）蓮花の眼をした神よ、かつてあなたは、世界のために猪の姿をとって、水没した大地を海中から救い上げました。（一九）最高の人（最高我）よ、あなたは人獅子（ナラシンハ）の姿をとって、強力な原初の悪魔ヒラニヤカシプを殺しました。（二〇）あなたは侏儒（ヴァーマナ）の姿をとって、一切の生類に殺されない大阿修羅バリを三界から追い出しました。（二一）偉大な戦士として名高い阿修羅ジャンバは残忍で祭祀を妨害したが、あなたに倒されました。（二二）そのような行為は数知れません。マドゥを殺した方よ、あなたは恐怖におののく我々の寄る辺です。（二三）それ故、神々の主である神よ、世界のために、我々はあなたに申し上げます。世界の生類と神々とシャクラ（インドラ）を、大なる危険から守って下さい。（二四）」

（第百章）

神々は言った。

「四種の生類はすべて、ここからの贈物（異本「あなたの恩寵」）により生活しています。彼らは繁栄させられて、供物により神々を繁栄させます。（一）このように、諸々の世界は相互に依存し合って存立しています。それらはあなたの恩寵により、悩むことなく、まさにあなたによって守護されています。（二）ところが、今や諸世界にとって最大の危険が訪れました。バラモンたちが、夜中、何者によって殺されるのかわかりません。（三）バラモンたちが滅びれば、地上は滅亡に趣くでしょう。地上が滅びれば、天界も滅亡に趣くでしょう。（四）強力な世界主よ、

あなたの恩寵により、全世界が滅亡しないようにお守り下さい。（五）」

ヴィシュヌは答えた。

「神々よ、私は生類が減少する原因をすべて知っている。それをあなた方に話すから、冷静に聞きなさい。（六）カーレーヤと呼ばれる非常に残忍な集団がある。彼らはヴリトラを頼りにして全世界を悩ませた。（七）彼らはヴリトラが英邁なる千眼者（インドラ）に殺されたのを見て、生命を守るためにヴァルナの住処（海）に入った。（八）彼らは、鰐や鮫に満ちた恐ろしい海に入ると、諸世界を滅ぼすために、夜中、隠者（ムニ）たちを殺している。（九）しかし、彼らを滅ぼすことはできない。彼らは海に保護されているから。あなた方は海を干上がらす手段を考えるべきである。実にアガスティヤを除いて、他の誰が海を干上がらすことができるか。（一〇）」

ヴィシュヌの言葉を聞いて、神々は最高神に別れを告げ、アガスティヤの隠棲所に行った。（一一）彼らはそこで、威光に輝く偉大なヴァルナの息子（アガスティヤ）に会った。彼は、梵天が神々に伺候されているように、聖仙たちに伺候されていた。（一二）彼らは隠棲所にいる、不滅で偉大な、苦行を積んだミトラとヴァルナの息子（アガスティヤ）に近づくと、彼の諸々の業績をあげて彼を讃えた。（一三）

神々は言った。

「かつてあなたは、ナフシャに苦しめられた諸世界の寄る辺であった。その世界の棘（ナフシャ）は、世界の利益のために、神々の王位から追い落とされた。（一四）太陽に対して怒って、最高の山ヴィンディヤは突然増大したが、あなたとの約束を守るために、増大しなくなった。

(二五) 世界が闇におおわれた時、生類は死に苦しめられ、まさにあなたに庇護を求め、最高の至福に達した。(二六) 尊者は常に、恐怖におののく我々の寄る辺である。そこで、悩める我々は、あなたに願いをかなえてもらいたいのだ。あなたはいつも願いをかなえてくれるから。(二七)」

（第百一章）

ユディシティラはたずねた。

「どういうわけでヴィンディヤ山は、怒りにかられて突然増大したのですか。大仙よ、そのことを聞きたいと思います。(一)」

ローマシャは語った。——

太陽は日の出と日没の間に、山の王、黄金の山である大山メールを右まわりにまわって敬意を表していた。(二) それを見て、ヴィンディヤ山は太陽に言った。

「太陽よ、あなたがいつもメール山をまわるように、私に対しても右まわりの礼をして欲しい。(三)」

そう言われると、太陽は山の王に答えた。

「私は自分の意志であの山を右まわりにまわるのではない。この世界の創造者が、私がそのようなコースをとるように指定したのだ。(四)」

それを聞くと、山は激しく怒って増大し、太陽と月の道を妨害しようとした。(五)

それから、すべての神々は集まって、インドラとともに偉大な山の王のもとに行き、種々の方法で彼の企てを止めようとしたが、彼は彼らの言葉を聞こうとしなかった。(六) そこで神々は、こぞって、隠棲所にいる苦行者、法(ダルマ)を守る人々のうちの最高者、非常に驚異的な力に輝くアガスティヤのもとに行って、そのことを告げた。(七)

神々は言った。

「あの山の王ヴィンディヤは、怒りにかられて、太陽と月と星々の道をふさぎました。(八) 最高のバラモンよ、あなたを除いて、他に誰も彼を止めることができません。栄光に満ちた方よ、彼を止めて下さい。(九)」

ローマシャは語った。——

神々の言葉を聞くと、バラモンはヴィンディヤ山のところに行った。彼は妻とともにそこに行き、近くに立って、ヴィンディヤに言った。(一〇)

「最高の山よ、道を譲っていただきたい。私はある用事で南方へ行くところです。(一一) 私がもどって来るまで待っていて下さい。山の王よ、私がもどったら、その後は思いのままに増大しなさい。(一二)」

このようにヴィンディヤ山と約束したので、今日でも、ヴァルナの息子（アガスティヤ）は南部地方からもどらないのである。(一三)

あなたが私に問われたので、アガスティヤの力によりヴィンディヤが増大しなくなった事情をすべて申しあげました。(一四)ところで王よ、アガスティヤのおかげでカーレーヤたちがすべての神々に殺されたいきさつを話すから、聞きなさい。(一五)

神々の言葉を聞いて、ミトラとヴァルナの息子(アガスティヤ)は言った。

「あなた方は何の目的で来られたのか。私にどのような願いをかなえてもらいたいのか。」

このようにたずねられて、神々は聖者に答えた。(一六)

「偉大な大仙よ、大海を飲み干してもらいたいのだ。そうすれば、我々はあのカーレーヤという神々の敵を、従者たちとともに殺すことができる。(一七)」

聖者は神々の言葉を聞くと、承知したと答えた。

「あなた方の望みのようにしましょう。世間の人々に大なる幸福をもたらしましょう。(一八)」

誓戒を守る聖者はこのように告げると、苦行を成就した聖仙や神々とともに、川々の夫である海へ行った。(一九)人間、蛇、ガンダルヴァ、夜叉、キンプルシャ(半神の一種)たちも、その奇蹟を見たいと望んで偉大な聖者について行った。(二〇)それから、一同はそろって海に着いた。海は恐ろしい音響をたて、波を立てて踊るかのようであり、風によって動揺していた。(二一)洞穴のところでたゆたい、泡の群で笑うかのようである(笑いは白色とされる)。種々の大魚に満ち、種々の鳥に満ちていた。(二二)神々とアガスティヤとガンダルヴァと大蛇たち、及び栄光ある聖仙たちは海に近づいた。(二三)

(第百二章)

ローマシャは語った。——

海に到着すると、ヴァルナの息子である尊い聖仙(アガスティヤ)は、集合した神々や聖仙たちに告げた。(一)

「今、私は世界の幸福のためにヴァルナの住処(海)を飲み干す。あなた方は、速やかになすべきことを行なって下さい。(二)」

ミトラとヴァルナの不屈の息子は、このように告げると、世界中が見ている前で、いきり立って海の水を飲んだ。(三)インドラをはじめとする神々は、海が飲み干されているのを見て、最高に驚嘆し、讃歌によって彼を讃えた。(四)

「あなたは我々の救済者であり、諸世界の創造者であり、世界の発現者である。あなたの恩寵により、神々を含む世界は絶滅を免れるであろう。(五)」

偉大な聖者は神々に称讃され、神々しい花をふり注がれて、いたるところガンダルヴァの音楽が鳴り響いている間に、大海の水をすべて飲み干した。(六)海の水が干上がったのを見て、すべての神々は最高に喜び、神聖なすばらしい武器をつかむと、怯むことなく悪魔たちを殺した。(七)悪魔たちは、偉大で強力で雄叫びをあげる神々に殺された。その時、彼らは猛烈で偉大な神々の勢いに耐えることができなかった。(八)悪魔たちは神々に殺されつつも、

恐ろしい叫び声をたて、しばしの間、激しく戦った。(九) 彼らは前もって心浄い聖者たちにより、苦行の力で焼かれていたので、力の限り戦ったが、神々に殺されていった。(一〇) 彼らは黄金の飾りをつけ、耳環と腕環をつけていたが、殺されて、花をつけたキンシュカ樹のように輝きに満ちていた。(一一) 幾名かの生き残ったカーレーヤたちは、大地の女神を引き裂いて、地底界(パーターラ)に避難した。(一二)

神々は悪魔たちが殺されたのを見て、様々な言葉で聖者の中の雄牛を讃え、次のように言った。(一三)

「栄光ある人よ、あなたの恩寵により世界の者たちは大なる幸福に到達した。恐ろしく勇猛なカーレーヤたちは、あなたの威光によって殺された。(一四) 強力な方よ、世界を栄えさせる人よ、海を満たして下さい。あなたの飲んだ水を再び吐き出して下さい。(一五)」

そう言われて、尊い聖者の中の雄牛は答えた。

「私は水を消化してしまいました。あなた方は努力して、海を満たす他の方法を考えて下さい。(一六)」

集まった神々は、心の清い大仙の言葉を聞くと、驚嘆し、かつ悲嘆に暮れた。(一七) すべての生類は、お互いに別れを告げ、聖者の中の雄牛にお辞儀をして、もと来た道を帰って行った。(一八) 神々は海を満たす手段について何度も協議してから、ヴィシュヌとともに梵天のもとに行った。一同は合掌して、海を満たす方法についてたずねた。(一九)

(第百三章)

サガラ王の息子たち

ローマシャは語った。――

世界の祖父である梵天は、集まった神々に告げた。

「すべての神々よ、思い思いのところに帰りなさい。(一) 長い時が経過したら、海はもとの状態にもどるであろう。偉大な王バギーラタを通じて、その親族たちを機縁として……。(二)」

ユディシティラはたずねた。

「バラモンよ、どうして親族たちが機縁となったのか。どのようにして、海はバギーラタの苦行によって満ちたのか。(三) 苦行者よ、私はそのことを詳しく聞きたいと思います。その王の最高の行ないを話して下さい。(四)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ダルマ王（ユディシティラ）にこのようにたずねられて、偉大なる最高のバラモンは、偉大なサガラの偉業を語った。(五)

ローマシャは語った。――

イクシュヴァークの家系にサガラという王が生まれた。彼は容姿と勇気と力にめぐまれ、栄光に満ちていたが、子供がいなかった。（六）彼はハイハヤ家とターラジャンガ家を滅ぼし、他の諸王を支配下に置き、自分の王国を統治していた。（七）彼には、容色と若さを誇る二人の妻がいた。一人はヴァイダルビー（ヴィダルバ国の出）であり、もう一人はシャイビヤー（シビ国の出）であった。（八）王は息子を望んで、妻たちとともにカイラーサ山に行き、非常に激しい苦行を行なった。（九）彼は非常に激しい苦行を行なっているうちに、ヨーガを修得して、偉大なるシヴァ神に会った。三眼の、三都（トリプラ）の破壊者である、シャンカラ、バヴァ、イーシャーナ、槍を持つ者、ピナーカ弓を持つ者、トリアンバカ、荒ぶる主、多様な姿を持つ神、ウマーの夫であるシヴァ神に。（一〇―一一）強力な王は願いをかなえる神を見るや、妻たちとともに平伏し、息子が欲しいと懇請した。（一二）ハラ（シヴァ）は満足して、最高の王とその妻たちに告げた。
「王よ、汝はこの時にあたり、私に願いごとをかなえるよう望んだから、最高の人よ、汝の一人の妻に六万人の勇猛で戦自慢の息子が生まれるであろう。（一三―一四）王よ、そして彼らはそろって全滅するであろう。だが、もう一人の妻に、家系を担う勇士が生まれるであろう。」
ルドラは彼にこう告げると、その場で消え失せた。（一五）一方、サガラ王は、二人の妻とともに、大喜びで自分の王宮に帰った。（一六）それから、蓮の眼をした彼の二人の妻、ヴァイダルビーとシャイビヤーは懐妊した。（一七）それからしばらくして、ヴァイダルビーは瓢箪の形をした胎児を生んだ。そして、シャイビヤーは、神々しい姿の息子を生んだ。（一八）その時、王はその瓢箪を捨てる決心をした。すると、虚空から重々しい響きの音声が聞こえた。（一九）

「王よ、性急なことをしてはならぬ。息子たちを捨ててはならぬ。瓢箪の中から種を取り出して、注意深く守りなさい。（二〇）一つずつ、熱したギーの満ちた器に入れて。王よ、そうすれば六万人の息子たちを得るであろう。（二一）マハーデーヴァ（シヴァ）は、このような段取りで、あなたに息子たちが生まれるように定めたのだ。考え違いしてはならぬ。（二二）」

（第百四章）

ローマシャは語った。――

最高の王よ、このように虚空からの声を聞いて、信頼して、言われた通りに実行した。バラタの雄牛よ。（一）かくて、ルドラの恩寵により、その王仙に、無量の威光をそなえた六万人の息子が生まれた。（二）彼らは乱暴で、残酷なふるまいをし、空中を経巡った。多数であったので、神々を含めた世界中の者たちを軽んじていた。（三）勇猛で戦いに長じた彼らは、神々やガンダルヴァや羅刹たちや、すべての生類を悩ませた。（四）世界（の生類）は、愚かなサガラの息子たちに殺され続けていたが、すべての神々とともに、梵天のもとに庇護を求めた。（五）一切の世界の祖父（梵天）は、彼らに告げた。
「すべての神々よ、世界の生類とともに、来た道を帰りなさい。（六）遠からずして、サガラの息子たちに、自己のなした行為により、非常に恐ろしい大帰滅があるであろう。（七）」

神々と世界の生類たちは、梵天に別れを告げて、もと来た道を引き返した。(八)

バラタの雄牛よ、それから長い期間が過ぎて、強力なサガラ王は、馬祀（アシュヴァメーダ）を執り行なった。彼の馬は、息子たちによく守られて、地上を歩きまわった。(九) ところがその馬は、水が無い恐ろしい外観の海に着くと、王子たちが努力して見張っていたにもかかわらず、その場で消え失せてしまった。(一〇) サガラの息子たちは、最上の馬が盗まれたと考え、帰国して、馬が盗まれて見えなくなったと父に報告した。王は、「みなしてあらゆる方面で馬を探せ」と命令した。(一一) それから、彼らは父の命令により（異本による）、すべての方面においてその馬を探した。彼らは一切の地上を探した。(一二) その後、サガラのすべての息子たちは互いに集まったが、誰も馬と馬を盗んだ者を見つけることはできなかった。(一三) そこで彼らは帰国し、父の前で合掌して父に告げた。

「王よ、あなたの命令により、我々は、海や森や島、河川や洞窟、山や山林にいたるまで、地上をすべて探索しました。しかし、馬も馬盗人も見つけることができませんでした。(一四―一五)」

王は彼らの言葉を聞くと怒りにかられ、運命にせかされて、彼らすべてに告げた。(一六)

「帰らないつもりで行け。再び馬を探せ。息子たちよ、祭祀に用いる馬なしで帰って来るな。(一七)」

サガラの息子たちは命令を受けて、再び全地上の探索を開始した。(一八) その時、勇猛なサガラの息子たちは、地面に割れ目ができているのを見出した。彼らは穴に達して掘り下げ

た。鋤や鍬（くわ）により（水の無い）海の底を掘り下げて行った。(一九) サガラの息子たちがいっしょになって掘るので、ヴァルナ（天水）の住処（海）はいたるところ裂かれ、最高に苦しんだ。(二〇) 阿修羅、蛇、羅刹など、種々の生類は、サガラの息子たちに殺されて、苦痛の叫び声をあげた。(二一) 生類は幾百幾千となく、頭を切り落とされ、胴を失い、膝や骨や頭蓋骨を断たれていた。(二二)

彼らがこのように、マカラ（海豚または鰐）の住処である海を掘っている間に、非常に長い時間が経ったが、馬は見出されなかった。(二三) やがて、海の東北の場所で、怒ったサガラの息子たちは、地底界（パーターラ）に至るまで掘ったところ、そこの地面で歩きまわっている例の馬を見た。(二四) そして、偉大なカピラ仙を見た。その最高の聖仙は、威光に満ちあふれ、苦行の力で輝き、焔に輝く火のようであった。(二五)

（第百五章）

ローマシャは語った。――

王よ、彼らは馬を見ると、総毛立って喜び、カーラ（時間、破壊神）にせかされ、馬をつかまえたいと切望し、偉大なカピラを無視して、いきり立って駆け寄った。(一) ヴァースデーヴァと呼ばれる最高の聖者カピラは怒った。(二) 彼は眼を見開いて、彼らに威光（熱力）を投げつけた。かくて、その絶大な威光をそなえた聖者は、愚かなサガラの息子たちを焼き尽くしたのである。(三)

大苦行者ナーラダは彼らが灰になったのを見て、サガラ王のもとに行き、彼に知らせた。(四) 王は聖者の口からその恐ろしい知らせを聞くと、少しの間悲嘆に暮れて、不動者（シヴァ）の言葉を思い出した。彼は自分で自分を慰めて、馬のことを考えた。(五) そこで彼は、アサマンジャスの息子である、孫のアンシュマットを呼んで、次のように言った。(六)

「あの無量の力を持つ、六万人の息子たちは、私のために、カピラの威光を受けて死んでしまった。(七) そして罪のない孫よ、私はお前の父親をも捨てたのだ。法を守るために、市民たちの幸福を願って。(八)」

ユディシティラはたずねた。

「王中の虎サガラは、どうして勇猛な我が子を捨てたのか。息子というのは捨てがたいものなのに。苦行者よ、私に語って下さい。(九)」

ローマシャは語った。――

シャイビヤーの産んだサガラの息子はアサマンジャスという名前であった。ところが彼は、市民たちの子供の首ねっこをつかみ（異本による）、その泣き叫ぶ無力な者たちを川に投げこんでいた。(一〇) そこで市民たちは、恐怖と悲しみに沈み、みなしてサガラのところに行き、合掌して立って、サガラに懇願した。(一一)

「大王様、あなたは敵軍などの危険から我々を救って下さる方です。どうか恐ろしいアサマ

ンジャスの危険から我々を救って下さい。(一二)」

最高の王は、市民たちの恐ろしい言葉を聞くと、少しの間悲嘆に暮れていたが、大臣たちに命じた。(一三)

「私の息子アサマンジャスを、たった今、都から追放せよ。もしあなた方が私に好意を寄せるなら、このことをすぐに実行してくれ。(一四)」

王にこのように命じられた大臣たちは、王が命じた通り、すぐに実行した。(一五)

以上、サガラが市民の幸福を願い、偉大な息子を追放した次第をすべて語りました。(一六) ところで、サガラが勇士アンシュマットに告げたことを、あなたにすべてお話ししますから、聞いて下さい。(一七)

サガラは言った。

「お前の父親を捨てたことにより、また息子たちが死んだことにより、また馬を取りもどせないことにより、私は苦しんでいる。(一八) それ故、孫よ、馬を連れもどして、祭祀が妨げられたことでひどく苦しみ錯乱している私を、地獄から救ってくれ。(一九)」

ローマシャは語った。――

偉大なサガラにそのように言われて、アンシュマットは苦労して、あの大地が裂けている場所へ行った。(二〇) 彼は例の道を通って、〔水の無い〕海に入り、偉大なカピラとあの馬を

見た。(二一) 彼は威光に満ちあふれた古の最高の聖仙を見ると、地面に頭をつけておじぎをして、彼に用向きを伝えた。(二二) 威光に満ちた徳高いカピラはアンシュマットに満足し、「願いをかなえてやろう」と彼に告げた。(二三) そこで彼は、まず第一に、祭祀のために馬をいただきたいと選んだ。第二に、祖霊たちを浄めたいと願って、水を選んだ。(二四) 威光に満ちた聖者の中の雄牛カピラは彼に告げた。

「あなたに幸あらんことを。非の打ち所のない者よ、あなたが望むものはすべて、あなたに与えるであろう。(二五) あなたには、忍耐と法(ダルマ)と真実とが確立している。あなたにより、サガラは目的を達成した。そしてあなたによって、父は〔真に〕息子を持った〔と言える〕。(二六) また、あなたの力により、サガラの息子たちは天界へ行くであろう。そして、あなたの孫は、サガラの息子たちを浄めるために、マヘーシュヴァラ(シヴァ)を満足させて、ガンガー川を天上から〔地上に〕もたらすであろう。(二七) 人中の雄牛よ、どうかこの祭祀に用いる馬を連れて行くがよい。わが子よ、偉大なサガラの祭祀が完了するように。(二八)」

偉大なカピラにそう告げられて、アンシュマットは馬を連れて、サガラの祭場にもどった。(二九) 彼は偉大なサガラの足下に平伏し、王に接吻されて、王にすべてを報告した。(三〇) 彼は、サガラの息子たちの滅亡について見たこと聞いたこと、馬を連れて祭場にもどったいきさつを王に語った。(三一) それを聞くと、サガラ王は息子のことで生じた嘆きを捨てた。そして、アンシュマットをねぎらってから、祭式を完了した。(三二) 祭祀を終えたサガラは、すべての神々から尊敬された。彼はヴァルナの住処である海を息子であると考えた(海は「サーガラ」

と呼ばれるようになった)。(三三) 蓮の眼の王は非常に長い期間王国を統治してから、孫に国政の重荷を委ねて天界へ逝(い)った。(三四)

徳性あるアンシュマットは、彼の祖父と同様にして、海に取り巻かれた大地を統治した。(三五) 彼にディリーパという法(ダルマ)を知る息子が生まれた。アンシュマットも息子に王国を委ねて逝去した。(三六) その後、ディリーパは、祖先たちが大量に死んだことを聞いてひどく心を痛め、彼らの運命について考えた。(三七) 王はガンガー(ガンジス)を地上に降ろすべく非常に努力し、力の限り手を尽くしたが、降ろすことができなかった。(三八) 彼に、法に専念する、栄光あるバギーラタという息子が生まれた。彼は約束を守り、善良であった。(三九) ディリーパは彼を王位につけて森に隠遁した。その王は、苦行の功徳を積んで、やがて森から天界へ逝った。(四〇)

(第百六章)

ローマシャは語った。——

この偉大な弓取り、偉大な戦士である王は、世界中の人々の心と眼の喜びとなった。(一) この勇士は、祖先たちが偉大なカピラによって恐ろしい最期を遂げ、天界へ行けないでいることを聞いた。(二) 王は王国を大臣に託して、悩む心で、苦行を行なうためにヒマーラヤの山腹へ行った。(三) 彼はガンガー女神(ガンジス)を喜ばせようと望み、苦行により罪障を焼いた。(四)(五—一二略)

王はそこで激しい苦行を行ない、千年間、木の実と根と水を食べて暮らした。(一三) 神の千年が過ぎた時、大河ガンガーは、自ら肉体を持って彼の前に現われた。(一四)

ガンガーは告げた。

「偉大な王よ、私に何を望むのですか。あなたに何を与えたらよいのです。最高の人よ、言いなさい。あなたの言葉通りにしましょう。(一五)」

ローマシャは語った。——

このように言われて、王はヒマーラヤの娘（ガンガー）に答えた。

「願いをかなえる女神よ、大河よ、私の祖父たちは馬を探しているうちに、カピラによってヤマ（閻魔）の住処に導かれました。(一六) 六万人の偉大なサガラの息子たちは、カピラの熱力にあって、即座に死滅したのです。(一七) このようにして死んだ彼らは、天界に住むことができません。彼らの身体をあなたが水で浄めないうちは……。(一八) 栄光ある女神よ、私の祖先であるサガラの息子たちを天界へ導いて下さい。大河よ、どうか彼らのことをお願いいたします。(一九)」

世人に崇拝されるガンガーは、王の言葉を聞くと、非常に喜んで、バギーラタにこう言った。(二〇)

「偉大な王よ、私はあなたの言う通りにしましょう。この点、疑いはありません。しかし、私が天から落下する時、その衝撃は耐えがたいものであり、三界において、最高の神である青頸（ニーラカンタ）のマヘーシュヴァラ（シヴァ）以外には、誰もそれを支えることはできません。(二一—二二) 勇士よ、苦行によって恵深きハラ（シヴァ）を満足させなさい。その神が、落下する私を頭で受け止めてくれるでしょう。そして彼は、あなたの祖先たちの幸運を願って、あなたの望みをかなえてくれるでしょう。(二三)」

バギーラタ王は、この言葉を聞くと、カイラーサ山に行って、シャンカラ（シヴァ）を満足させた。(二四) しばらくして、その最高の人は、シヴァと会って、祖先たちが天界に住めるよう、ガンガーを受け止めてもらいたいという願いを、彼にかなえてもらった。(二五)

（第百七章）

(一)

ローマシャは語った。——

シヴァ神はバギーラタの言葉を聞くと、神々によかれと願い、「承知した」と王に答えた。

「勇士よ、最高の王よ、吉祥にして神聖なる神の川が天上から落下する際、私はあなたのために彼女を受け止めよう。(二)」

シヴァはこのように告げてから、種々の武器を振りかざした眷属に囲まれて、ヒマーラヤに入った。(三) それから、直立して、最高の人バギーラタに言った。

「勇士よ、山王の娘である川に〔落下するように〕頼め。天から落下する最高の川を、私は

受け止めるであろう。(四)」

シヴァの言葉を聞くと、王は敬礼して、一心にガンガーを思念した。(五) 王に思念された、美しい水をたたえた美しい川は、直立したシヴァ神めざして、天上から勢いよく落下した。(六) 彼女が落下するのを見て、神々や大仙やガンダルヴァや蛇や羅刹たちは、見物したいと望んで集まって来た。(七)

ヒマーラヤの娘は天上から落下した。その水は激しく渦巻き、魚や鰐がひしめいていた。(八) ハラ（シヴァ）は、額のところに落ちた、天空の帯であるガンガーを、真珠の首飾りのように受け止めた。(九) かくて、その川は〔天空地で〕三様に分かれた。その水は多量の泡に満ちており、まるで鵞鳥(ハンサ)たちの列のようであった。(一〇) ある場所では曲がりくねり、あちこちでつまずいて、彼女はあたかも、その泡という白衣におおわれた酔っぱらい女のように進んだ。ある場所では、彼女は波音により大きな音を轟かせた。(一一)

このように、天空から落下した川は、地上に達して非常に多様な姿をとった。それから、彼女はバギーラタに告げた。(一二)

「偉大な王よ、どの道を進んだらよいか、道を示して下さい。王よ、あなたのために地上に降下したのですから。(一三)」

その言葉を聞くと、バギーラタ王は、偉大なサガラの息子たちの屍体がある場所に行った。神聖な水で浄めるためであった。(一四) 一方、ハラはガンガーを受け止めてから、世界の生類に敬礼されて、神々とともに、最高の山カイラーサに帰った。(一五)

王はガンガーとともに海に到着すると、そのヴァルナの住処である海を速やかに水で満たした。(一六) 王はガンガーを娘にした（ガンガーはバーギーラティーと呼ばれるようになった）。そして願望がかない、祖霊たちに水を与えた。(一七)

〔天・空・地の〕三道を流れるガンガーが、海を満たすために地上に降りた次第を、あなたにすべて語りました。(一八) また、偉大なアガスティヤが目的のために海水を飲み干した次第、また、バラモンを殺していたヴァーターピを殺した次第を、大王よ、あなたの質問に答えて、お話ししました。(一九)　（第百八章）

聖地巡礼（つづき）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

それからクンティーの息子は、次第に、罪悪と恐怖を除去するナンダー川とアパラナンダー川に行った。(一) 王は吉祥なるヘーマクータ山に着いて、非常に多くの不可思議で驚嘆すべきことを見た。(二) そこで声を出すと、幾千という雲や落石があり、人々は気落ちして、それに登ることができなかった。(三) そこでは常に風が吹き、神（インドラ）は常に雨を降らし、しかも朝と夕方に聖なる火が見られるのであった。(四) パーンダヴァはこのように多くの驚嘆すべきことを見て、再びローマシャにその奇蹟についてたずねた。(五)

ローマシャは語った。――
敵を苦しめる王よ、以前に私が聞いたことをお話ししますから、注意深く聞きなさい。
（六）このリシャバ山に、リシャバという苦行者が住んでいた。この苦行者は数百歳で、非常に怒りっぽかった。（七）彼は他の人々に話しかけられると、怒って山に言った。
「誰かがここでしゃべったら、岩石を投げつけろ。（八）」
その苦行者はまた風を呼び寄せて、「声をたててはならぬ」と告げた。話をする人は、雨雲によって制止された。（九）このようにして、王よ、その大仙はこのような種々の行為を行ない、また種々の行為を禁じた。（一〇）
王よ、かつて神々がナンダー川に来た時、神々を見ようとする人々が、突然、彼らの後について来たということである。（一一）シャクラ（インドラ）をはじめとする神々は、見られることを望まず、山を障害物として、この土地を通行不能にした。（一二）それ以来、クンティーの息子よ、人々はいつもこの山を見ることができず、いわんや登ることなどできなくなった。（一三）苦行を積まない人は、この山を見ることも登ることもできないのだ。クンティーの息子よ、それ故、言葉を制しなさい。（一四）ここでは、一切の神々が常に最高の祭祀を行なっている。今日もまた、このように彼らが祭祀を行なっている徴が認められる。（一五）このドゥールヴァー草はクシャ草（吉祥草）の形をしている。そしてこの大地は〔それで〕おおわれている。王よ、これらの多くの樹々は祭柱の形をしている。（一六）今日もまた、神々と聖仙たちが滞在している。朝と夕方に彼らの祭火が見られる。（一七）クンティーの息子よ、ここで沐浴する人々の罪障は速やかに消滅する。クル族の長よ、それ故、弟たちとともに沐浴を行ないなさい。（一八）ナンダー川で沐浴したら、あなたはカウシキー川に行くであろう。そこでヴィシュヴァーミトラは最高の苦行を行なったのだ。（一九）
ヴァイシャンパーヤナは語った。――
王は弟たちとともにそこで沐浴してから、吉祥の水をたたえる、神聖で心地よいカウシキー川に行った。（二〇）（第百九章）

リシャシュリンガ（鹿角仙人）物語

ローマシャは言った。

「バラタの雄牛よ、これが神聖なる神の川カウシキーです。ここに心地よいヴィシュヴァーミトラの隠棲所が輝いております。（一）そしてまた、偉大なカーシャパのプニャーキヤという隠棲所があります。感官を制御した苦行者リシャシュリンガは彼の息子です。（二）ヴァーサヴァ（インドラ）は、リシャシュリンガの苦行の力によって雨を降らせました。旱魃の時、インドラは彼を恐れて雨を降らせたのです。（三）このカーシャパの強力で威光に満ちた息子は、雌鹿から生まれました。彼はローマパーダ王の領土において、大なる奇蹟を行ないました。（四）穀物が回復した時、ローマパーダ王は彼に娘のシャーンターを与えました。太陽が娘のサーヴィトリーを与えるように。（五）」

ユディシティラはたずねた。

「カーシャパの息子リシャシュリンガは、どうして雌鹿から生まれたのか。獣姦したことになるが……。また、どうして苦行の力をそなえたのか。（六）またインドラは、旱魃の時に、どうしてその聡明な少年を恐れて雨を降らせたのか。（七）また、鹿のような彼の心を惑わせ

るとは、誓いを守る王女シャーンターはどのような姿をしていたのか。（八）また、王仙ローマパーダは敬虔な人であると聞いているが、どうしてインドラは彼の領土に雨を降らせなかったのか。（九）尊者よ、このことをありのままに、詳しくお話し下さい。私はリシャシュリンガの行為について聞きたいと願っております。（一〇）」

ローマシャは語った。――

「梵仙ヴィバーンダカは、苦行によりその心が浄められ、その精力が無駄になることはなく、造物主（プラジャーパティ）に等しい輝きをそなえていた。（一一）その彼の息子として、栄光に満ちたリシャシュリンガが生まれた次第を聞きなさい。その少年は大湖で生まれ、偉大な威光をそなえ、長老に尊敬されていた。（一二）

カーシャパ（ヴィバーンダカ）は大湖に着いて、苦行を行なっていた。長い期間、身を苦しめて、その聖仙は神々や聖仙たちに尊敬された。（一三）ところが、彼が水浴している間に、天女ウルヴァシーを見て、彼の精液がこぼれ落ちた。そして、喉が渇いた雌鹿が、水とともにそれを飲み、妊娠した。運命の定めたことは空しからず、必ず実現するものであるから（原文疑問）。（一四―一五）その雌鹿に彼の息子が生まれた。それが偉大な聖仙リシャシュリンガで、常に苦行し、もっぱら森林の中で成長した。（一六）その偉大な聖仙の頭には、一本の鹿の角が生えていた。そこで、彼はリシャシュリンガ（鹿角）という名で有名になった。（一七）彼は父の他に人を見たことがなかった。それ故、彼は常に清浄行に専心していた。（一八）

その頃、ダシャラタの友人で、ローマパーダという人がアンガ国の王であった。(一九)彼は気まぐれから、バラモンたちに対して嘘をついたということである（異本による）。そこでその王はバラモンたちに見捨てられた。(二〇)そしてたまたまその王の司祭もいなくなったので（または、「司祭が罪を犯したので」）、千眼者（インドラ）は雨を降らせることをやめ、国民は苦しんだ。(二一)そこで王は、神々の王が雨を降らせるように、有能で苦行を積んだ賢明なバラモンたちにたずねた。(二二)

「雨神はどうしたら雨を降らせるであろうか。方法を見つけて下さい。」

賢者たちは彼にうながされて、各自の意見を彼に告げた。(二三)そのうちの、ある最高の聖者が王に言った。

「最高の王よ、バラモンたちはあなたに対して怒っています。贖罪を行ないなさい。(二四)王よ、聖者の息子リシャシュリンガを連れて来なさい。彼は森に住み、女性を知らず、ひたすら廉潔です。(二五)王よ、もしその大苦行者があなたの領土に到来したら、雨神はすぐに雨を降らせるでしょう。疑問の余地はありません。(二六)」

その言葉を聞くと、彼は自身の贖罪を行なった。彼は都を出てから、バラモンたちが満足した時、再び帰って来た。帰って来た王を見て、臣民たちは（喜んで）出迎えた。(二七)それから、アンガ国王は政策に通じた大臣たちを呼んで、リシャシュリンガを来させるための策を真剣に協議した。(二八)不屈の王は、論書に通じ、こよなく実利に通じ、政策に通達した大臣たちと相談して、ある方策を考えついた。(二九)王は最高の遊女たちを呼び、あらゆ

る手管に巧みな遊女たちに告げた。(三〇)

「美しい女たちよ、聖仙の息子リシャシュリンガを、方策により誘惑して信用させて、私の領土に連れて来なさい。(三一)」

女たちは王に対する恐怖もあったが、聖仙の呪詛を恐れて、青ざめて取り乱し、その仕事はできないと答えた。(三二)ところが、一人の老女が、王に次のように告げた。

「大王様、あの苦行者を連れて来るよう努力いたします。(三三)私の望みを色々とかなえていただければ、聖仙の息子リシャシュリンガを誘惑してごらんに入れます。(三四)」

王は彼女のすべての願いをきいてやった。そして、多くの財物と種々の宝石を与えた。(三五)それから彼女は、若さと美貌にめぐまれた何人かの女たちを連れて、急いで森へ行った。(三六)

（第百十章）

ローマシャは語った。——

王の仕事を成就するために、彼女は舟の上の隠棲所を作った。そうしたのは、王の命令もあったが、自分の判断からでもあった。(一)その隠棲所は、種々の花や果実をつけた人工の樹々で飾られていた。それらは種々の茂みや蔓草をともない、美味の望みのままの果実をつけていた。(二)非常に心地よく、非常に魅力的な、最も奇蹟的な眺めの舟の隠棲所を彼女は作った。(三)それから彼女は、その舟をカーシャパの隠棲所からほど遠からぬ所につないで、

男たちを用いてその聖者の園林を偵察させた。(四) それから遊女は、カーシャパの不在を見すまして、聡明な娘になすべきことを託して派遣した。(五) その手管に巧みな娘は苦行者の近くに行き、隠棲所に着いて、その聖仙の息子に会った。(六)

遊女は言った。

「聖者よ、苦行者さんたちはお元気ですか。根や果実はたくさん有りますか。あなたはこの隠棲所で楽しく暮らしておられますか。今日、私はあなたに会いに来ました。(七) 苦行者たちの苦行はお盛んですか。あなたの父上は相変らず威光にあふれておられますか。バラモンよ、あなたは満足していますか。リシャシュリンガさん、勉強をなさっていますか。(八)」

リシャシュリンガは答えた。

「あなたは輝かしい。星のように輝いている。あなたはご挨拶すべき人であると私は思う。私は進んで、法（ダルマ）に従って、足をすすぐ水と果実と根をあなたにさし上げましょう。(九) どうぞくつろいで、黒鹿の皮でおおわれた安楽なクシャ草の座席にお座り下さい。あなたの隠棲所はどこにあるのですか。バラモンよ、あなたは神のように、いかなる誓戒を行なっているのですか。(一〇)」

遊女は言った。

「カーシャパの息子よ、私の心地よい隠棲所は、この山から三由旬（ヨージャナ）離れたところにあります。そこでは、挨拶しないのが我々の習わしです。また、足をすすぐ水に触れることもありません。(一一)」

リシャシュリンガは言った。

「あなたに熟した果実をあげましょう。バッラータカ、アーマラカ、パルーシャカ、イングダ、ダヌヴァナを。プリヤーラを好きなだけ食べなさい。(一二)」

ローマシャは語った。――

彼女はそれらをすべて無視して、彼に高価な食物を与えた。それらの見た目も美しい御馳走は、リシャシュリンガに喜びをもたらした。(一三) 彼女はまたよい香りのする花輪を与えた。また、多彩で輝かしい衣を与えた。そして、上等の飲物を与えた。それから彼女は喜び、戯れ、笑った。(一四) 彼女は彼のそばで、毬で遊んだ。果実をつけた蔓草がしなだれかかるように。その肢体を相手の肢体にくっつけて、何度もリシャシュリンガを抱きしめた。(一五) 彼女は、花をつけたサルジャ、アショーカ、ティラカの樹々をたわめ、手折って、酔っ払って恥じらいを無くしたかのように、大仙の息子を誘惑した。(一六) それから、リシャシュリンガの様子が変ったのを見すまして、彼女は彼の身体を何度も抱きしめてから、火供（アグニホートラ）をしなければという口実のもとに、彼を見つめながらゆっくりと立ち去った。(一七)

彼女が去った時、リシャシュリンガは愛に迷い、放心状態になった。彼女にのみ心を奪われ、空虚で、深くため息をつき、哀れな姿になった。(一八)

しばらくして、黄褐色の眼をし、爪の先に至るまで毛むくじゃらの聖仙、学習にいそしみ、行ない澄まし三昧に達した、カーシャパ・ヴィバーンダカが現われた。(一九) 彼は近づいて、

座っている息子を見た。息子は一人で考えこみ、心を乱し、ため息をつき、何度も上方を見ていた。ヴィバーンダカは悩める息子に言った。(二〇)

「わが子よ、薪を用意してないのか。お前は今日、火供を行なわないのか。〔火供用の〕杓(しゃく)を洗わないのか。今日は、〔乳搾るために〕護摩(ホーマ)の牝牛を仔牛といっしょにしないのか。(二一)息子よ、お前は前と違う。もの思いにふけり、放心している。今日、お前は何故この上なく悩んでいるのか。お前にたずねる。今日、何者がここに来たのか。(二二)」

(第百十一章)

リシャシュリンガは言った。

「ここに髪を編んだ学生(梵行者)が来ました。彼は背は高からず低からず、聡明そうです。顔色は金色で、蓮花のような眼をしています。神の子のように輝いていました。(一)容姿端麗で太陽のように輝いていました。チャコーラ鳥のように美しい白と黒の眼をしていました。(二)その編髪は黒く、輝かしく、よい香りがし、金の紐で結ばれ、非常に長いものでした。(二)彼の首のところには、樹の根を囲む容器のような形のもの(首飾り)が、空中の稲妻のように輝いていました。そして、首の下には、二つの球がありました。それは毛が生えてなくて、非常に魅力的なものでした。(三)臍のところで、胴はくびれていました。そして彼の腰は異常に大きかったです。彼の衣の下に、私のと同じような帯が輝き出ていましたが、それは黄金でできていました。(四)また、彼の両足には、何か音をたてる珍しい形のものが光っていました。両手には、それと同じように音をたてる輪がはまっていました。それはちょうどこの数珠と似ていました。(五)彼が動くと、それらは池にいる発情したハンサ鳥の鳴き声のような音をたてました。彼の衣は珍しいもので、美しく、私のとは似ていません。(六)彼の顔は珍しく、美しく、口をきくと心を喜ばせるかのようです。彼の言葉は、雄のコーキラ鳥の声のようで、それを聞くと私の心は動揺しました。(七)ちょうど春の季節の最中に、風に揺られた森が香りを放つように、父上、彼も風に吹かれると最上の芳香を放ちました。(八)そのよく整えられた編髪は二つに分けられ、額に均等にかかって輝いていました。彼の両耳は、形のよい、多彩な環状のもので囲まれていました。(九)そして、彼は美しい丸い果実を、右の手で打ちました。その珍しいものは、何度も地面に達しては、高く跳ね上がりました。(一〇)彼はそれを打っては回転し、風に吹かれた樹のように動きまわりました。神々の子のような彼を見て、父上、私に最高の喜びと愛情が生じました。(一一)彼は何度も私の身体を抱きしめ、私の編髪をつかんで顔を下げさせ、口と口を重ねて音をたてました。それは私に歓喜を生じさせました。(一二)そして、彼は足をすすぐ水に無関心でした。また、私のさし出したこれらの果実にも同様でした。これが私の流儀です、と彼は私に言いました。そして、別の新しい果実を私にくれました。(一三)私はそれらの果実を食べました。ここにある果実はそれらの果実の味と比べものになりません。それらには、このように皮がありません。それには、このように種がありません。(一四)気高い姿をした彼は、また、非常においしい水を

飲むようにと私に勧めました。それを飲んで、私に最高の歓びが生じました。そして地面が揺れるかのようになりました。(二五)このすばらしく芳わしい花輪は、彼が紐で編んだものです。苦行により輝いている彼は、その花輪をここに投げ出して、自分の隠棲所へ帰りました。(二六)彼が去った時、私は放心し、私の体は燃えるかのようになりました。私はすぐに彼のそばに行きたいと思います。そして彼がいつもここで歩きまわっていて欲しいと思います。(二七)父上、私は彼のそばに行きます。一体彼はどのような誓戒を行なっているのでしょうか。厳格な彼が行なっている苦行を、彼とともに行ないたいと思います。(二八)」

(第百十二章)

ヴィバーンダカは言った。

「息子よ、彼のような羅刹どもが、そのような驚嘆すべき姿でうろつきまわっているのだ。彼らは類い稀な姿であるが、非常に残酷で、常に苦行の妨害を企てている。(一)息子よ、彼らはそのような非常に美しい姿で、種々の方策により人を惑わすのである。そして残酷な彼らは、森の中で、隠者(ムニ)たちが至福から堕ち、また(善き人々の)世界から堕ちるようにしむけるのだ。(二)自制した隠者は、善き人々の世界を求めるなら、決して彼らとつき合ってはならぬ。邪悪にふるまう彼らは、苦行者たちの苦行の妨害をして喜ぶ。罪なき息子よ。(三)息子よ、その飲物はよからぬ者に嗜まれる酒で、飲まれるべきではない。そして、そのき

らびやかで輝かしく、芳わしい花輪は、隠者にはふさわしくないとされる。(四)」

ローマシャは語った。——

ヴィバーンダカは、それは羅刹だと言って息子を制止してから、その女を探し求めた。三日たっても彼女を見つけることができないで、彼は隠棲所にもどった。(五)ところが、カーシャパ(ヴィバーンダカ)は、沙門(修行者)の作法に従って再び果実を採りに行った。その時、若い遊女は、再び聖仙リシャシュリンガを惑わすために出て来た。(六)リシャシュリンガは、彼女を見るや、喜んで取り乱し、駆け寄った。そして彼女に言った。

「私の父がもどって来ないうちに、あなたの隠棲所へ行きましょう。(七)」

それから、彼女はカーシャパの一人息子を、巧みに舟に乗せて舟を出し、様々な方策により誘惑しながら、アンガ国王のもとにもどった。(八)王は(あらかじめ)非常に輝かしい舟を派遣して、(カーシャパの)隠棲所の見える所にそれを停泊させておいて、また岸から(樹々などを)運んで、隠棲所と称する美しい森を作っておいたのであった。(九)

王がヴィバーンダカの一人息子を王宮に招じ入れたところ、(インドラ)神は突然雨を降らせ、世界中を水びたしにした。(一〇)ローマパーダ王は願望がかない、娘のシャーンターをリシャシュリンガに与えた。それから王は、ヴィバーンダカの怒りを鎮める対策をした。すなわち、ヴィバーンダカの来る道を牛を用いて耕した。そして多くの家畜を(置き)、屈強な牛飼に命じた。

「息子を探し求める大仙ヴィバーンダカがお前たちにたずねたら、お前たちは合掌して彼に告げなさい。『これはあなた様の息子さんの家畜と耕作地です。大仙よ、あなたにどのようなことをしたら喜んでいただけますか。我々はみな、あなたの命令通りに従う召使です。』と。（二一―二三）」

さて、そのひどく短気な隠者は、果実と根を採ってから、自分の隠棲所に帰った。そして、そこで息子を探したがどこにも見出せないで、彼はこの上なく怒った。（二四）彼は怒りに引き裂かれつつ、王のしわざであると疑い、アンガ国王とその領土を焼き尽くそうとして、チャンパーに行った。（二五）カーシャパは疲れ、飢えて、豊かな牧場に着いた。彼は牛飼たちに礼儀正しくもてなされて、王者のようにそこでその夜を過ごした。（二六）彼らから大そうもてなされて、彼は、

「善き人々よ、あなたたちは誰に仕えているのか」

とたずねた。すると彼ら一同は近づいて言った。

「この財産はあなた様の御子息に贈られたものです。（二七）」

彼は各地でもてなされ、種々の甘い言葉を聞き、その怒りはほとんど鎮まり、満足して、都にいるアンガ国王のもとに行った。（二八）彼はその人中の雄牛に手あつくもてなされ、天上におけるインドラのような息子を見た。そしてそこに嫁のシャーンターを見た。彼女は閃く稲妻のようであった。（二九）

村落、牧場、息子、そしてシャーンターを見て、彼の強い怒りは鎮まった。そこでヴィバーンダカは王に最高の恩寵をなした。（三〇）大仙はそこに息子を残して、太陽や火のように輝く彼に告げた。

「息子が生まれたら、王に彼の一切の世話を頼んで、森に帰りなさい。（三一）」

リシャシュリンガは父の言葉通りにしてから、父親のもとに行った。シャーンターは規定に従って、彼の後について行った。天空でローヒニー（星宿）が忠実に月に従うように。（三二）愛らしいアルンダティーがヴァシシタに従うように。ローパームドラーがアガスティヤに従うように。ナラにとってのダマヤンティーのように。インドラにとってのシャチーのように。（三三）アージャミーダ（ユディシティラ）よ、ナーダーヤニー・インドラセーナーが、常にムドガラに従順であったように。同様に、シャーンターも愛情をもって、森に住むリシャシュリンガに仕えた。（三四）

その福徳の誉れ高い隠者の神聖な隠棲所が、大湖（マハーフラダ）を飾りながら、ここに輝き出ております。王よ、ここに沐浴し、なすべきことを果し、身を浄め、他の聖地を巡礼しなさい。（三五）

（第百十三章）

聖地巡礼（つづき）

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

ジャナメージャヤよ、それからパーンダヴァはカウシキー川を発って、順次にすべての聖

地を巡礼した。(一)彼はガンガー河口の海岸に着いて、五百の川の中央で沐浴した。(二)それから勇猛な王は、弟たちとともに、海岸に沿って、カリンガに行った。(三)

　ローマシャは言った。

「クンティーの息子よ、これがカリンガです。そこにはヴァイタラニー川があります。ダルマ神といえども、神々に庇護を求めて、そこで祭祀を行ないました。(四)その北岸は、聖仙たちに満ち、祭祀に適し、山々に飾られ、常にバラモンたちが滞在しています。(五)実にここにおいて、かつてある聖仙たちは祭祀を行ない、等しく『神の道』(デーヴァ・ヤーナ)を通って天界へ逝きました。(六)王中の王よ、まさにここで、ルドラ(シヴァ)は祭祀の獣を奪い、『これは私の取り分だ』と言ったのです。(七)その獣が奪われた時、神々はルドラに告げました。『他人の財産を侵害してはいけない、すべての法を滅ぼしてはいけない』と。(八)

　その後、彼らは美辞を連ねてルドラを讃えました。そして供物により彼を満足させ、敬意を払いました。(九)そこで彼は獣を捨てて、『神の道』を通って行きました。ユディシティラよ、ここでルドラについて伝承された詩をお聞きなさい。(一〇)

『神々はルドラを恐れて、すべての分け前のうち、新鮮な最高の取り分は、永遠にルドラのものであると決定した。(一一)』

　ここでこの詩節を唱えながら水に触れる人は、『神の道』を行き、その人の眼は輝きます。(一二)」

　ヴァイシャンパーヤナは語った。――

　それから、栄光あるすべてのパーンダヴァたちとドラウパディーは、ヴァイタラニー川に降りて、祖霊たちを〔供養して〕満足させた。(一三)

　ユディシティラは言った。

「聖なる苦行者よ、この川で沐浴するやいなや、私は人間の境界から離れた。見なさい、ローマシャよ。(一四)よく誓戒を守る人よ、あなたの恩寵により、私は一切の世界を見ている。これは偉大なヴァイカーナサたちが祈禱している声である。(一五)」

　ローマシャは言った。

「ユディシティラよ、あなたの聞いている声の出ている所は、三十万由旬の彼方です。王よ、沈黙していて下さい。(一六)王よ、そこに心地よいスヴァヤンブー(梵天)の森が現われ出ています。そこで栄光あるヴィシュヴァカルマン(一切造者)が祭祀を行ないました。(一七)その祭祀において、スヴァヤンブーはカシャパに、謝礼として山や森を含む大地(神女)を与えました。(一八)与えられるやいなや、大地は失望し、怒って世界の主に言いました。(一九)

『主よ、誰であれ人間に私を与えるのはよくありません。あなたのこの贈与は無効です。私は地底界に行きます。(二〇)』

　しかし聖仙カシャパは、嘆く大地を見て、彼女をなだめました。(二一)それから、彼の苦行により満足した大地は、水中から再び出て、祭壇の形をとって現われました。(二二)王よ、ここに見事な形状の祭壇が現われ出ています。大王よ、そこに登れば、精力あるものになる

でしょう。(二三) そして私は、あなたのために吉祥の句（災いを除く句）を唱えましょう。今、あなたがこれに登れるように。というのは、この祭壇は人間に触れられると海中に入ってしまいますから。(二四)

『あなたは火神（アグニ）、ミトラ、女陰（ヨーニ）、神聖なる水、ヴィシュヌの精液、甘露（アムリタ）の臍』

このように真言を唱えながら、パーンダヴァよ、急いでこの祭壇に登りなさい。(二五)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

吉祥の句を唱えられて、偉大なユディシティラは、海上（の祭壇のところ）に行った。そしてすべて指示された通りに行なってから、マヘーンドラ山に行き、一夜を過ごした。(二六)

（第百十四章）

パラシュラーマの怒り

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

王はそこで一夜を過ごした後、弟たちとともに、苦行者たちを最高にもてなした。(一) ローマシャは彼に、すべての苦行者たちを紹介した。ブリグの一族、アンギラスの一族、ヴァシシタの一族、カーシャパの一族を。(二) 王仙は彼らに会い、合掌して挨拶し、ラーマ（パラシュラーマ）の従者である勇士アクリタヴラナにたずねた。(三)

「尊者ラーマは、いつ苦行者たちに会いに来られるのですか。その機会に、私はブリグの後裔にお目にかかりたいと思います。(四)」

アクリタヴラナは言った。

「自己を知るラーマ様は、すでにあなたが来られていることを知っておられます。ラーマ様はあなたのことを気に入っており、すぐにあなたに会われることでしょう。(五) そして、苦行者たちは、毎月の第十四日目と第八日目に、ラーマ様に会います。この夜が過ぎると、第十四日目です。(六)」

ユディシティラは言った。

「あなたはあの強力なジャマダグニの従者です。以前彼が行なったすべての偉業の目撃者です。（七）ですから、すべての王族（クシャトリヤ）（武士）たちがラーマに滅ぼされた次第を、どのようにして、どのような原因でそうなったか、話して下さい。」（八）

アクリタヴラナは語った。——

カーニャクブジャ（カナウジ）に、非常に強力で偉大な王がいた。彼はガーディという名で世に知られていた。彼は森へ行って住んだ。（九）彼が森に住んでいる間に、天女にも似た娘が生まれた。ブリグの一族のリチーカが彼女に求婚した。（一〇）すると王は、その誓戒を厳守するバラモンに告げた。

「我々の一族には、先祖に始められたある慣習があります。（一一）それぞれ黒い耳を持つ、千頭の白い駿馬を結納の品とすることです。最高のバラモンよ。（一二）ブリグの息子よ、しかし尊者にそれを払えとは言えません。私の娘はあなたのような偉大な方に与えられるべきですから。（一三）」

リチーカは言った。

「私はそれぞれ黒い耳を持つ千頭の白い駿馬をさし上げます。あなたの娘さんは私の妻になって下さい。（一四）」

アクリタヴラナは語った。——

彼はその通りにすると約束して、ヴァルナ（水天）に告げた。

「それぞれ黒い耳を持つ千頭の白い駿馬を私に下さい。（一五）」

そこでヴァルナは彼に千頭の馬を与えた。そこに馬たちが生じた場所は、アシュヴァ・ティールタ（馬の聖地）と称されるようになった。（一六）そこで、ガーディはガンガー（ガンジス）河畔のカーニャクブジャで、彼に娘のサティヤヴァティーを与えた。そして神々は新郎側に出席した。千頭の馬を得て、神々を見て、合法的に妻を得て、最高のバラモンであるリチーカは、望み通りに、心のままに、その美しい胴の女と楽しんだ。（一七―一八）結婚式が行なわれた時、息子と妻に会おうとして、ブリグ族の長がやって来て、彼を見て喜んだ。（一九）長上（グル）は神群に敬意を表され、そこに座った。夫妻は彼をもてなし、そば近く仕え、合掌して立っていた。（二〇）それから、尊者ブリグは喜んで嫁に言った。

「愛らしい女よ、願いごとを選びなさい。望みをかなえてやろう。（二一）」

彼女は自分と母の息子が欲しいとお願いした。彼はその願いをかなえてやった。（二二）

ブリグは告げた。

「受胎期に、お前と母親は受胎式のために沐浴し、それぞれ樹木を抱け。母はアシュヴァッタ樹を、お前はウドゥンバラ樹を。（二三）」

しかし、二人の女は樹を抱く時に、あべこべに抱いた。ある日ブリグがやって来て、あべこべに抱いたことを知った。（二四）すると、大威光を有するブリグは、嫁のサティヤヴァティーに告げた。

「お前の息子は、王族（クシャトリヤ）（武士）のようにふるまうバラモンとなろう。（二五）お前の母の息子は、バラモンのようにふるまう偉大な王族となろう。彼は精力に満ち、善き人々の道を践（ふ）むであろう。（二六）」

そこで彼女は、何度も舅に懇願した。

「私の息子がそのようになりませんように。どうか孫がそうなりますように。（二七）」

彼は、「そのようにしよう」と言って、彼女を喜ばせた。やがて時が来て、彼女は息子ジャマダグニを生んだ。そのブリグ一族の子は、威力と威光にあふれていた。（二八）その威光に満ちた息子は成長して行ったが、ヴェーダの学習にかけて、多くの聖仙たちを凌駕した。（二九）すべての弓のヴェーダ（兵学）と、四種の武器の術が、太陽のように輝く彼に顕現した。（三〇）

（第百十五章）

アクリタヴラナは語った。——

ヴェーダの学習に専念する、大苦行者ジャマダグニは、それから、苦行を修し、その自制により神々を圧倒した。（一）彼はプラセーナジット王のところに行き、娘のレーヌカーに求婚した。王は彼に娘を与えた。（二）ブリグの後裔は、レーヌカーを妻に得た後、隠棲所において、忠実な妻とともに苦行を行なった。（三）彼女に四人の息子が生まれた。五番目にラーマが生まれた。ラーマは末の子であったが、みなのうちで一番優れていた。（四）

ある日、息子たちが果実を採りに出かけた時、誓戒を守るレーヌカーは、沐浴しに行った。（五）ところが、帰ろうとして、レーヌカーは、たまたまチトララタというムリッティカーヴァティーの王を見かけた。（六）その王は、蓮花の花輪をつけ、妻たちとともに水の中で遊んでいた。その華美な王を見て、レーヌカーはあこがれた。（七）彼女はこの道ならぬ思いにより、放心して、水の中で濡れてしまった。彼女はふるえながら隠棲所に入った。夫は彼女の異常に気づいた。（八）彼女が平静さを失い、バラモンの（清浄の）輝きを失っているのを見て、大威光を有する彼は、「けしからん」と言って叱責した。（九）その時、ジャマダグニの長男のルマンヴァットという名の者がやって来た。また、スシェーナ、ヴァス、ヴィシュヴァーヴァスという息子たちも来た。（一〇）聖者は彼らに順次、母を殺すように命じた。ところが彼らは肝をつぶし途方に暮れて、何も言わなかった。（一一）そこで彼は怒って、彼らを呪った。彼らは呪われて意識を失い、たちまち鳥獣のようになり、昏迷に陥ったかのようになった。（一二）

その後で、敵の勇士を殺すラーマが隠棲所にやって来た。大苦行者ジャマダグニは、大いに怒りながら彼に告げた。（一三）

「あの悪い母親を殺せ。息子よ、恐れることはない。」

するとラーマは斧をとって、母の頭を切り取った。（一四）それから、偉大なジャマダグニの怒りは急速に去った。彼は満足して次のように言った。（一五）

「息子よ、お前は私の命令により、行ないがたい行為をなした。法（ダルマ）を知る者よ、心で望ん

でいる願いごとを選べ。(二六)」

彼は以下のことを選んだ。――母が生き返ること、母を殺したことを忘れること、母殺しの罪に触れぬこと、兄弟がもとの状態にもどること。(二七) 大苦行者ジャマダグニは、彼に戦闘において無敵なることと長寿なることを授け、その他ありとあらゆる願望をかなえた。(二八)

ある時、前と同様に、彼の息子が外出した時、アヌーパの主である勇猛なカールタヴィーリヤがやって来た。(二九) 聖仙の妻は、隠棲所を訪れた彼をもてなしたが、武力に酔い痴れていた彼は、そのようなもてなしを喜ばなかった。(三〇) 彼は荒らしまわり、その隠棲所から、泣き叫ぶ護摩牛の仔牛を力ずくで奪い、大木を切り倒した。(三一)

父親は自ら、帰宅したラーマにそのことを話した。そしてひどく泣いている牝牛を見て、怒りがラーマに入りこんだ。(三二) 彼は怒りにかられて、カールタヴィーリヤに突進した。ブリグの後裔である勇士は、戦闘において武勇を発揮した。(三三) 彼は輝かしい弓をとって、鋭い矢により、千本にも及ぶ、閂(かんぬき)のような相手の腕を切り落とした。(三四)

〔カールタヴィーリヤ〕アルジュナの息子たちは、ラーマに恨みを抱き、ラーマのいない時に、隠棲所にいるジャマダグニを襲撃した。(三五) 精力に満ちた苦行者は戦わなかった。彼らは、寄る辺ない者のように、何度もラーマと呼んでいる苦行者を射殺した。(三六)

カールタヴィーリヤの勇猛な息子たちは、ジャマダグニを射殺してから、引きあげて行った。(三七) ジャマダグニがそのようなことになり、彼らが立ち去った時、ブリグの後裔が薪を持

って帰って来た。(三八) その勇士は、父がこのように不慮の死をとげたことを知って、悲嘆に暮れた。(三九)

（第百十六章）

ラーマは言った。

「父上、私の落度により、あの愚かで卑しいカールタヴィーリヤの息子たちは、あなたを射殺しました。森で鹿を射殺するように。(一) 父上、あなたは法(ダルマ)を知り、正しい道を践(ふ)み、一切の生類に対し罪が無いのに、どうしてこのような死があなたにふさわしいのか。(二) あなたは苦行を行じ、老い、戦わないのに、鋭い百の矢で殺すとは、彼らは何とひどいことをしたのか。(三) 法を知り、戦わない一人の人を殺して、あの恥知らずの連中は、あちらで大臣や友たちに何と説明するのであろうか。(四)」

アクリタヴラナは語った。――

偉大な苦行者は、そのようにひどく悲嘆に暮れ、色々と嘆いてから、父のために一切の葬式を行なった。(五) 父を火葬にしてから、勇士ラーマは、すべての王族(クシャトリヤ)(武士)を殺すことを誓った。(六) 怒った強力な勇士は、武器をとって、精力的に、死神さながら、一人でカールタヴィーリヤの息子たちを殺した。(七) 最高の戦士ラーマは、更に、彼らに従う王族たちをすべて粉砕した。(八) 主は二十一回も、地上から王族を一掃し、サマンタパンチャカに五つ

の血の湖を作った。(九)ブリグの家系を担う彼は、それらの湖で、祖霊を満足させた。そして彼は直々にリチーカ(ジャマダグニの父)に会った。リチーカはラーマを制止した。(一〇)それから、栄光あるジャマダグニの息子は、盛大な祭祀により神々の王インドラを満足させ、祭官たちに土地を与えた。(一一)彼は長さ十尋、高さ九尋の黄金の祭壇を作って、偉大なカシャパに与えた。(一二)バラモンたちはカシャパの許可を得て、それを割って(カンダシャス)分配した。それ故、彼らはカーンダヴァーヤナと呼ばれるようになった。(一三)

無量の勇武を有する彼は、大地を偉大なカシャパに与えてから、この山の王マヘーンドラ山に住んでいる。(一四)このように、彼は世に住む王族たちに敵対した。そして、無量の威厳に満ちたラーマは、地上を征服した。(一五)

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

それから、月の第十四日目に、気高いラーマはいつものように、バラモンたちと、ダルマ王(ユディシティラ)と弟たちの前に姿を見せた。(一六)王中の王は弟たちとともに彼を崇拝した。最高の王はまた、バラモンたちに最高の敬意を表した。(一七)ジャマダグニの息子を崇拝し、また彼に敬意を表されて、征服者はマヘーンドラ山でその夜を過ごしてから、南の方角に出発した。(一八)

(第百十七章)

聖地巡礼(つづき)

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

威厳に満ちた王は、旅を続けるうちに、海岸のあちこちで、バラモンたちに飾られた、神聖で心地よいすべての聖地を見た。(一)徳行のユディシティラは、それらの聖地で、弟たちとともに沐浴した。それから彼は、最高に神聖なプラシャスター川に行った。パリクシットの息子(ジャナメージャヤ)よ。(二)そこにおいても、威厳に満ちた彼は沐浴し、祖霊と神々を満足させた。彼は主立ったバラモンたちに財物を布施してから、ゴーダーヴァリー川に行った。(三)それから、罪障を離れた王は、ドラヴィダにおいて、世にも神聖なる海に着いた。そして勇士は、清浄にして神聖なアガスティヤ・ティールタと、ナーリー・ティールタ(「女性の聖地」一・二〇九・一参照)を見た。(四)そこで、最高の弓取りであるアルジュナの、余人には不可能な例の行為を聞いて、また最高の聖仙の集団に敬われて、パーンドゥの息子はこの上なく喜んだ。(五)地上における諸王の主は、それらの聖地で、クリシュナー(ドラウパディー)と弟たちとともに沐浴し、アルジュナの勇武に敬意を払いつつ楽しんだ。(六)それから、その海辺の諸聖地において、王は千頭の牛を布施して、心喜び、弟たちとともに、アルジュナが牛を布施したことを語り合った。(七)彼はそれら海岸の諸聖地や、その他の多くの聖場を、順次に巡礼して、その念願もかない、最も神聖なるシュールパーラカを見た。(八)そこで、海のとある地点を渡って、

彼は地上に名高い森に着いた。かつてそこで神々が苦行を行ない、最も神聖なる王たちの愛する森である。(九)長くて太い腕を持つ彼は、そこで最高の弓取りである、リチーカの息子(この場合は、パラシュラーマを指すか。前章参照)の祭壇を見た。それは徳高い人々に敬われるべきもので、苦行者の集団に囲まれていた。(一〇)(一一―一四略)

彼はこの海岸の聖地を通って、再び弟たちとともに出発した。そして、地上において偉大なバラモンたちによく知られている聖地プラバーサに行った。(一五)大きくて赤い眼をした彼は、弟たちとともに、そこで沐浴して、神々の群と祖霊たちを満足させた。クリシュナー(ドラウパディー)や、ローマシャをはじめとするバラモンたちも同様にした。(一六)法を守る者たちの最上者である彼は、十二日間、水と風のみを食し、夜と昼に沐浴を行なった。そして、周囲一面に火を燃やして、苦行を行なった。(一七)〔バラ〕ラーマとジャナールダナ(クリシュナ)は、彼が激しい苦行を行なっていることを聞いた。そこで全ヴリシュニ族の領袖である二人は、軍隊を率いて、アジャミーダの後裔ユディシティラのもとに行った。(一八)(一九―二三略)(第百十八章)

ジャナメージャヤはたずねた。

「苦行者よ、聖地プラバーサに着いて、ヴリシュニ族の人々とパーンダヴァたちが何をしたか、どのような話をしたのか。(一)ヴリシュニとパーンダヴァはすべて、一切の学問に通達

した偉大な人々で、お互いに友人であるから。(二)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

海岸にある神聖な聖地プラバーサに着いて、ヴリシュニ族の人々は勇敢なパーンダヴァたちを取り巻いて、そば近く立っていた。(三)それから、牛乳、ジャスミン、月、蓮糸、銀のように白く輝く、森の花の花輪をつけた、鋤を持つラーマ(バララーマ)は、蓮の眼をした〔クリシュナ〕に話しかけた。(四)

「クリシュナよ、法が行なわれたとて、人に繁栄をもたらさぬ。非法は人に破滅をもたらさぬ。偉大なユディシティラが髪を編み、森に住み、樹皮を身につけて苦しんでいるのだから。(五)そしてドゥルヨーダナは大地を支配している。しかも大地は裂けて彼を呑むことはない。非法をなした方が法よりも優れていると、愚かな人は考えるかも知れない。(六)ドゥルヨーダナが栄え、ユディシティラが王国を奪われて不幸である時、一体、今、生類は何をしたらよいのかという疑惑が、各々の人々に生じている。(七)というのは、このダルマから生まれたユディシティラ王は、法に専念し、真実を守り、気前がよく、王国と幸福を失っても、どうして法に背いて繁栄するであろうか。(八)ビーシュマ、バラモンのクリパ、ドローナ、そして一族の長老である王は、どうして、パーンダヴァたちを亡命させて安楽でいられるのか。悪い了見のバラタ族の長たちはけしからん。(九)あの悪い王は、あの世で祖霊たちに会って、どのように言うのだろう。罪もない息子たちを王位から追い落としながら、『私

は息子たちに正しくふるまった』と言うのだろうか。（二〇）彼は、『私は何をしたので、地上に諸王がいる中で、盲目に生まれついたのか』と、叡知（の眼）により見ようとしない。クンティーの息子たちを王位から追放して……。（二一）ヴィチトラヴィーリヤの息子（ドリタラーシトラ）とその息子たちは、このようなひどいことをして、必ずや祖霊の世界の大地において、満開の花をつけた金色の樹（注釈は「死のしるし」と解する）を見るであろう。（二二）きっと彼は、あの広くて高い肩をして、大きい赤い眼をした彼ら（ビーシュマたち）にたずねて〔その意見を〕聞かなかったのだろう。恐れることもなく、武器をとったユディシティラと弟たちを森に発たせたのだから。（二三）

ここにいるこの長い腕のビーマは、武器なしで、敵の大軍を殺すであろう。狼腹（ビーマ）の声を聞いただけで、敵軍は糞尿を流すであろう。（二四）飢えと渇きと旅の疲れで痩せたその勇士は、種々の武器と矢を持ち、敵に会ったら、森でのこのおぞましい滞在を思い出して、必ずや敵を全滅させるだろう。（二五）実にこの地上の人々において、精力と力にかけて彼に匹敵するものは誰もいないであろう。その彼は、寒暑、風、太陽に身も痩せ、戦闘において敵を全滅させるであろう。（二六）この狼腹は、戦いにおいて、ただ一騎で、東部の諸王とそれに従う者たちをうち破ってめでたく帰還したが、その勇猛な超戦士が、森で樹皮を着て苦しんでいるとは。（二七）

このサハデーヴァを見よ。彼はダンタクーラで、集結した南部の諸王をうち破ったが、苦行者の身なりをして苦行をしている。（二八）

ここにいる勇士（ナクラ）は、戦いを好み、ただ一騎で西部の諸王をうち破ったが、その彼が、森で根と木の実を食べ、髪を編み、ほこりにまみれた身体で修行している。（二九）

そこにいる、超戦士である王の娘は、盛大なサットラ祭において、祭壇から生まれた。その、幸せにふさわしい貞女が、どうしてこのように恐ろしい森の生活に耐えなければならないのか。（三〇）

ダルマ神、風神、インドラ、アシュヴィン双神という神々の息子たちが、幸せにふさわしい彼らが、どうして不幸にも森で修行しているのか。（三一）ダルマの息子が敗北し、その妻や弟や従者たちとともに追放された時、そしてドゥルヨーダナが栄えている時、どうして大地は山もろとも没しなかったのか。（三二）」

（第百十九章）

サーティヤキは言った。

「ラーマよ、今は嘆いている時ではありません。我々はみなで、過去のことでなく今後のことを行なわなければなりません。もしユディシティラが何も言わないでも。（一）というのは、この世で寄る辺のある人々は、自分から事業を企てないものですから。ところが、彼らには諸事業において寄る辺があります。ヤヤーティにとってのシャイビヤーなどのように（一・八八参照。本和訳では省略した）。（二）ラーマよ、同様にして、この世でその勇士たちのために、寄る辺である人々が自分の考えで諸事業を企てれば、その寄る辺のある勇士たちは、寄る辺のない人々のよう

に苦境に陥ることはありません。（三）ラーマ、クリシュナ、プラデュムナ、サーンバ、私という、三界の主たる寄る辺を得ながら、どうして彼はこのように弟たちとともに森に住んでいるのか。（四）ダシャールハの軍隊は、多様な武器と多彩な鎧を身につけて、今日、進軍すべきです。ドリタラーシトラの息子は、親族とともに、ヴリシュニの軍に征服されて、ヤマ（閻魔）の住処へ行くがよい。（五）シャールンガ弓を持つ者（クリシュナ）はさておき、あなたのみが、怒ってこの地上を取り囲むことができます。ですからドリタラーシトラの息子とその一味を殺しなさい。神々の主である大インドラがヴリトラを殺したように。（六）」（七―二一略）

ヴァースデーヴァは言った。

「マーダヴァ（サーティヤキ）よ、疑いもなくそれは真実だ。勇気に満ちた者よ、我々はそなたの言葉を受け入れる。しかし、クル族の雄牛は、自分の両腕で勝ち得た土地でなければ決して望まない。（二二）実にユディシティラは、享楽や恐怖や貪欲によって自己の義務（ダルマ）を決して捨てはしない。超戦士であるビーマとアルジュナも、双子も、ドルパダの娘のクリシュナーも、全く同様である。（二三）狼腹とダナンジャヤの二人は、戦いにかけて地上に並ぶものがない。そして、マードリーの双子を従えたら、彼はどうして全地上を統治しないであろうか。（二四）偉大なパーンチャーラの王、チェーディの王とケーカヤ国と我々が、敵に対し進軍して戦えば、スヨーダナ（ドゥルヨーダナ）はこの世を去るであろう。（二五）」

ユディシティラは言った。

「マーダヴァよ、あなたの言われたことは不思議ではない。しかし私は王国よりも真実を守

りたいのだ。ただクリシュナだけが、私をよく知っている。そして、私もクリシュナをよく知っている。（二六）この勇士が勇武の時であると知る時、サーティヤキよ、あなたとケーシャヴァはスヨーダナを滅ぼすであろう。（二七）ダシャールハの勇士たちは、今日のところはお引き取り下さい。私は人間の世界の主である寄る辺によって確固としている。類い稀な人々よ、法（ダルマ）において怠ることのなきよう。御機嫌よう、またお会いしましょう。（二八）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

お互いに挨拶し、別れを告げ、すべての老人や子供を抱きしめ、ヤドゥ族の勇士たちは自分の家に帰った。王の方も聖地巡礼を続けた。（二九）

クリシュナと別れてから、ダルマ王は、ヴィダルバ国王が隆盛にした、すばらしい聖地に満ちたパヨーシニー川に行って滞在した。その川の水には、搾られたソーマ汁が混っている。（三〇）

（第百二十章）

チャヴァナ仙人の回春

ローマシャは語った。——

王よ、ヌリガはここで祭祀を行ない、ソーマ酒によりインドラを満足させたということである。彼は満足し、酩酊した。(一)ここでインドラは、神々や造物主たちとともに、多くの謝礼をともなう、多彩な祭祀を盛大に行なった。(二)また、ここで、アムールタラヤスの息子である王(ガヤ)は、七つの馬祀において、ソーマ酒により主インドラを満足させた。(三)彼の七つの祭祀においては、すべての用具は黄金でできていた。通常は、祭祀においては、用具は木製と土製であると定まっているが。(四)そして、彼のそれらの祭祀における七種の式次第は有名になった。そして七つの祭柱の一本一本の上には、環がついていた。(五)ユディシティラよ、インドラをはじめとする神々が、自ら、彼の祭祀における輝かしい黄金の祭柱を建てたのである。(六)このガヤ王の最上の祭祀において、インドラはソーマ酒に酔い、バラモンたちは謝礼に酔った。(七)世界の砂、天空の星、雨の滴が、何者によっても数えられないように、それと同様に数限りない財物を、その七つの祭祀において、ガヤは列席者たちに与えた。(八―九)上に挙げたもの(砂など)がたとえ数えられたとしても、彼の謝礼の額は数え

ることはできなかったであろう。(一〇)そして彼は、ヴィシュヴァカルマン(毘首羯磨、「一切造者」)によって造られた黄金製の牝牛(または、サラスヴァティー「弁才天」)によって、諸方からやって来たバラモンたちを満足させた。(一一)諸所で祭祀を行なう偉大なガヤの聖域(チャイティヤ)によって、地上は残り少なくなった。(一二)このような行為によって、彼はインドラの世界に達した。パヨーシニー川で沐浴する者は、彼と同じ世界へ行くであろう。(一三)それ故、非の打ち所のない王中の王よ、あなたも弟たちとともにここで沐浴すれば、罪障を離れたものとなろう。(一四)

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

最上の人(ユディシティラ)は、弟たちとともに、パヨーシニー川で沐浴してから、その威光ある非の打ち所のない王は、弟たちとともに、ヴァイドゥーリヤ山と大河ナルマダーに行った。(一五)それから、聖仙ローマシャは、あちこちにある心地よいすべての聖地の名を挙げた。(一六)王は弟たちとともに、適切に、望みのままに巡礼した。何度も、幾千の財物をバラモンたちに布施しながら。(一七)

ローマシャは言った。

「クンティーの息子よ、人はヴァイドゥーリヤ山を見て、ナルマダー川に降りると、神々や諸王と同じ世界に行きます。(一八)最上の人よ、今はトレーター紀(第二のユガ)からドゥヴァーパラ紀(第三のユガ)に移る過渡期です。(一九)わが子よ、クンティーの息子よ、ここにシャリヤーティの祭祀の地が輝いています。

そこでカウシカ（インドラ）が現にアシュヴィン双神とともにソーマ酒を飲みました。（二〇）そしてブリグの息子である大苦行者チャヴァナは、大インドラに対して怒り、インドラを麻痺させました。そして、王女スカニヤーを妻としました。（二一）」

ユディシティラはたずねた。

「どのようにして彼はインドラを麻痺させたのか。どうしてブリグの息子である大苦行者は怒ったのか。（二二）バラモンよ、またどうしてナーサティヤ（アシュヴィン双神）がソーマを飲めるようにしたのか。尊者よ、これらすべてをありのままに私に語って下さい。（二三）」

（第百二十一章）

ローマシャは語った。——

大仙ブリグには、チャヴァナ・バールガヴァという名の息子がいた。光輝に満ちた彼はこの湖の付近で苦行を行なっていた。（一）パーンドゥの息子よ、この威光に満ちた男は、一柱のように動かずに、非常に長い間、一カ所で結跏趺坐（ヴィーラスターナ）していた。（二）王よ、長い期間が経過して、その聖仙は蟻塚に変じ、蔓草におおわれ、蟻だらけになってしまった。（三）かくてこの知者は全身土の塊りのようになり、蟻塚におおわれて苦行を続けた。（四）

さて、長い期間が過ぎた時、シャリヤーティという名の王が、この心地よい最上の湖で楽しむためにやって来た。（五）彼には四千人の女性の随行がいた。そして、スカニヤーという

美しい一人娘がいた。（六）彼女は女友達（侍女）に囲まれ、一切の装飾品に飾られていた。彼女は歩きまわっているうちに、バールガヴァの蟻塚を見つけた。（七）その美しい歯の女は、女友達に囲まれて、方々見ながら、美しい樹を探して楽しんだ。（八）彼女は若さと美貌にめぐまれ、愛にあふれ、酔い心地で、豊かに花をつけた森の樹の枝を手折った。（九）彼女が女友達から離れて一人になった時、一衣をつけ飾りをつけて歩いている彼女を、まるで稲妻のような彼女を、賢者バールガヴァが見た。（一〇）最高の光輝を有する、苦行の力をそなえた梵仙は、人気（ひとけ）のないところで彼女を見ながら楽しんだ。彼は嗄れ声でその美しい女に声をかけたが、彼女の方は彼の声を聞かなかった。（一一）それからスカニヤーは、蟻塚の中にバールガヴァの両眼を見て、分別を失い、好奇心にかられて、「これは何かしら」と言いながら、荊で彼の眼を突いた。非常に怒りっぽい彼は彼女に両眼を突かれて怒った。そこで彼はシャリヤーティの兵士たちの大小便を止めてしまった。（一二―一三）それから、大小便を止められ、このように便秘に苦しむ兵を見て、王はたずねた。（一四）

「偉大なバールガヴァは、常に苦行し、老い、特に怒りっぽい。今日ここで、誰かバールガヴァに過失を犯した者はいるか。知ってしたにせよ、知らずにしたにせよ。すぐに本当のことを言え。（一五）」

すべての兵士たちは、「我々は過失を犯したおぼえがありません。あらゆる手だてを尽くし、得心ゆくまで、あなた様がお調べ下さい」と彼に答えた。（一六）そこで王は、優しく、また厳しく、自ら友人の群にたずねた。しかし彼らも、何も知らなかった。（一七）それから、

王の兵士が便秘に苦しみ、不快に苦しみ、父も悩んでいるのを見て、スカニヤーは次のように言った。(一八)

「私は歩きまわっているうちに、蟻塚の中に何か輝くものを見ました。蛍のように思って、近づいてそれを突いたのです。(一九)」

それを聞いて、シャリヤーティは急いで蟻塚のところに走って行き、そこに、苦行の点でも年齢の点でも老いたバールガヴァを見出した。(二〇) そこで王は、兵士のために合掌して懇願した。

「娘が知らないでしたことを許してやって下さい。(二一)」

するとチャヴァナ・バールガヴァは王に言った。

「あなたの娘は、容姿にめぐまれ気高いが、貪欲と迷妄に支配されている。(二二) 王よ、彼女をいただければ、私は辛抱するであろう。王よ、私はこのことをあなたに誓う。(二三)」

シャリヤーティは、聖仙の言葉を聞くと、ためらうことなく娘をその偉大なチャヴァナに与えた。(二四) チャヴァナはその娘を受け取って満足した。聖仙の好意を得て、王は兵士とともに帰って行った。(二五) 非の打ち所のないスカニヤーは、苦行者を夫として、愛情をこめて、苦行により、勧戒により、常に彼に仕えた。(二六) 美しい顔の善良な女は、火神と客人に奉仕し、速やかにチャヴァナを満足させた。(二七)

(第百二十二章)

ローマシャは語った。——

王よ、しばらくして、神々のうちのアシュヴィン双神が、沐浴して裸でいるスカニヤーを見た。(一) 美しい肢体をした、神々の王の娘のような彼女を見て、ナーサティヤすなわちアシュヴィン双神は、駆け寄ってこうたずねた。(二)

「美しい腿の女よ、お前は誰の女か。森で何をしているのか。美しい女よ、我々はお前のことを知りたいと思う。本当のことを言いなさい。(三)」

そこでスカニヤーは衣を着て、最高の双神に答えた。

「私はシャリヤーティの娘で、チャヴァナの妻でございます。(四)」

するとアシュヴィン双神は笑って、再び彼女に言った。

「美しい女よ、どうして父親はお前を、死期の近い男に与えたのか。(五) お前は森の中で、雨雲に囲まれた稲妻のように輝いている。美しい女よ、神々のうちにも、お前に等しい女を見たことがない。(六) しかし非の打ち所のない肢体の女よ、すべての装飾品をつけ、最高の衣服を着たら、いっそうお前は輝くだろう。このような泥で汚れた姿でいるより。(七) 美しい女よ、どうしてお前はそのようでありながら、享楽とは縁がなくなった、老いさらばえた夫に仕えているのか。(八) お前を守ることも養うこともできない夫に。美しい微笑の女よ、チャヴァナを捨てて、我々のうちのどちらかを夫として選んだ方がよい。神の子のような女よ、青春を無駄にしてはならぬ。(九)」

このように言われて、スカニヤーは双神にこう答えた。

「私は夫のチャヴァナを愛しております。私をそんな女と思わないで下さい。（二〇）」
彼らは再び彼女に言った。
「我々は神々の医師である。お前の夫を若く、容姿端麗にしてやろう。（二一）それから、彼と我々両者のうちの誰かを夫に選びなさい。美しい顔の女よ、この約定のもとで彼に告げなさい。（二二）」
彼女は双神の言葉により、バールガヴァのそばに行き、双神に言われた言葉をブリグの息子に告げた。（二三）それを聞くと、チャヴァナは妻に「そのようにしなさい」と言った。彼女は夫に承諾されて、「そのようにして下さい」と告げた。（二四）アシュヴィン双神は、彼女の承諾の言葉を聞くと、王女に告げた。
「お前の夫は水に入るべきだ。（二五）」
そこでチャヴァナは容色を望んで、すぐに水に入った。そして、アシュヴィン双神も湖に入った。（二六）それから一瞬の後に、みなは湖から上がって来た。すべて神々しい姿をし、若く、輝かしい耳環をつけ、等しい姿をして、心の喜びを増大させた。（二七）彼らはみなでそろって言った。
「美しい女よ、我々のうちでお前の望む誰か一人を夫に選べ。美しい顔色の女よ。お前が愛する男を選べ。（二八）」
王女はすべて同じ姿をして立っている彼らを見て、意（こころ）と知性により決定し、自分自身の夫を選んだ。（二九）チャヴァナは妻を得て、そして望んでいた若さと容色を得て、大威光を有する彼は、喜んでナーサティヤ双神に次のように言った。（三〇）
「老いた私は、あなた方のおかげで、容色と若さを得ることができました。（三一）そこで、私は嬉しく思い、神々の王の見ている前で、あなた方がソーマを飲めるようにしてあげましょう。私はあなた方に約束します。（三二）」
それを聞くと、双神は喜んで天上へ行った。一方、チャヴァナとスカニヤーは、神々のように楽しんだ。（三三）（第百二十三章）
ローマシャは語った。——
シャリヤーティ王は、チャヴァナが若返ったことを聞いて喜び、軍隊とともにバールガヴァの隠棲所にやって来た。（一）シャリヤーティ王は、神々の子のようなチャヴァナとスカニヤーを見て、全世界を得たかのように喜んだ。（二）王と王妃は、聖仙にもてなされた。その気高い王は二人のそばに座り、種々の快い言葉を述べた。（三）その時、バールガヴァは彼を満足させつつ次のように言った。
「王よ、あなたのために祭祀を行ないましょう。祭祀に必要なものを準備しなさい。（四）」
すると、シャリヤーティ王は最高に喜んで、そのチャヴァナの言葉を歓迎した。（五）祭祀に適した吉日に、シャリヤーティは最高の祭場を造らせた。（六）そこでチャヴァナ・バールガヴァは、彼のために祭祀を行なった。そこで起こった奇蹟を話しますから、聞きなさい。

（七）チャヴァナはアシュヴィン双神に供えるためにソーマを〔杓で〕取り上げた。しかし、インドラは、双神が杓を受けようとするのを止めた。（八）

インドラは言った。

「このナーサティヤ双神はソーマに値しないと私は思う。この両者は神々の息子たちの医師であるから、その職業ゆえにふさわしくないのだ。（九）」

チャヴァナは答えた。

「容色と富にめぐまれた偉大な双神を軽蔑してはなりませぬ。インドラよ、彼らは私を、天人のように不老にしてくれましたから。（一〇）あなたや他の神々がソーマにふさわしいのに、どうして彼らだけがソーマにふさわしくないのですか。インドラよ、アシュヴィンたちも神なのです。（一一）」

インドラは言った。

「彼らは医師で、労働者であり、自由な姿をとって人間の世界をぶらついている。彼らはどうしてソーマにふさわしいか。（一二）」

ローマシャは語った。――

インドラがその言葉を繰り返していると、バールガヴァは彼にかまわないで、ソーマの杓をつかんだ。（一三）しかし、彼がアシュヴィン双神のために最上のソーマを取り上げたのを

見て、インドラ神は次のように告げた。（一四）

「汝がこの両者のために自らソーマを取り上げるなら、この恐ろしい形の最上の金剛杵（ヴァジュラ）を汝に放つぞ。（一五）」

バールガヴァはそう言われても、笑ってインドラを見やり、アシュヴィン双神のために、作法通り最上のソーマを杓で取り上げた。（一六）そこでシャチーの夫（インドラ）は彼に恐ろしい形の金剛杵を投じた。しかしバールガヴァは、金剛杵を投じようとする彼の腕を麻痺させた。（一七）チャヴァナはインドラの腕を麻痺させてから、呪句（マントラ）を唱え、火中に供物を投じた。威光に満ち満ちた彼は目的を成就し、神を害そうと企てた。（一八）それから、魔術により、その聖仙の苦行の力から、強力で巨大な体の、マダという大阿修羅（アスラ）が生じた。その阿修羅の体は、神々や阿修羅によっても表現され得ないものであった。（一九）彼の大きな口は、鋭くとがった歯があって、恐ろしいものであった。下顎は地面にあり、上顎は天に達していた。（二〇）彼の四本の牙は、百由旬（ヨージャナ）ずつの長さであった。もう一方の諸々の歯は十由旬であった。それらは城塁にも似て、また、槍の先端のように見えた。（二一）両腕は山のようで、等しく、一万由旬の長さであった。その両眼は日月のようであり、顔は死神（アンタカ）に似ていた。（二二）稲妻のように揺れ動く舌によって唇を舐め、口を大きく開き、恐ろしい目つきをして、力ずくで世界を呑むかのようであった。（二三）彼は怒り狂い、食おうとしてインドラに駆け寄った。非常に恐ろしい姿をして、その音声を諸世界に響かせつつ。（二四）

（第百二十四章）

ローマシャは語った。――
腕が麻痺したインドラ神は、恐ろしい顔のマダが、死神のように、食おうとして口を大きく開けて近づいて来るのを見て、恐怖のあまり何度も口の端を舐めていたが、ついに神々の王は恐怖にかられて、チャヴァナに言った。(一―二)

「バールガヴァよ、今日からアシュヴィン双神はソーマに預(あず)かれるであろう。バラモンよ、私はあなたに約束する。(三) あなたの企画が空しくなることはないように。これは最高の規定(指令)である。そして梵仙よ、あなたが空しく何かをなすことはないと私は知っている。(四) あなたが今日、アシュヴィン双神がソーマに預かれるようにしたように、バールガヴァよ、あなたの精力がいっそう輝くように。スカニヤーとあの父親の名声が世に広まるように。(五) 私はあなたの精力が輝くように定めたから、私に恩恵を与えて下さい。あなたの望み通りになるように。(六)」

シャクラにこのように言われて、偉大なチャヴァナの怒りは去った。彼は速やかにインドラを解放した。(七) そして強力な彼は、前に創造したマダを、酒、女、賭博、狩猟に、何度も分割した。(八) このようにマダを破棄し、ソーマの滴でシャクラや、アシュヴィン双神を仲間にした神々を満足させ、王に祭祀を行なわせた。(九) それから、その最も雄弁な聖者は、その力量を全世界に知らしめ、愛するスカニヤーとともに、森で楽しく暮らした。(一〇)

聖地巡礼(つづき)

王よ、そこに鳥たちが囀る湖が輝いております。あなたはここで、弟たちとともに、祖霊と神々を満足させなさい。(二一) バラタ族の王よ、その湖とシカタークシャを見てから、サインダヴァ森に着いて、運河を見なさい。大王よ、すべてのプシュカラにおいて、水に触れなさい。(二二) アールチーカ山は賢者たちの住処であり、常に果実を有し、常に流れを有し、マルト神群の最高の住処です。そしてユディシティラよ、幾百という神々の聖域(チャイティヤ)がありま す。(二三) 聖仙たちはあの月(チャンドラマス)の聖地を尊崇しています。ヴァイカーナサ聖仙やヴァーラキリヤたちも同様であります。(二四) 三つの聖なる峰々と、三つの滝があります。あなたはそれらすべてをまわり、欲するがままに沐浴しなさい。(二五) クンティーの息子である王よ、シャンタヌとシュナカと、ナラとナーラーヤナの両者は、そこで永遠の境地に達しました。(二六) ここアールチーカ山において、神々と祖霊たちは大仙たちとともに常に住み、苦行しております。ユディシティラよ、彼らを供養しなさい。(二七) 王よ、そこでは聖仙たちはチャル供を食べています。悠久の流れのヤムナー川があり、そこでクリシュナが苦行に専念しています。(二八) 敵を苦しめる者よ、双子とビーマとクリシュナー(ドラウパディー)と、みなでそこに行きましょう。よく苦行を積み、痩せた身体で。(二九)

王よ、これがインドラの聖なる滝です。ここで、配置者(ダートリ)と制定者(ヴィダートリ)とヴァルナは、上方へ昇

りました。(二〇)忍耐強く最高に徳高い彼らは、ここに住んでおります。この聖なる名山は、友情にあつく廉直な人々のためのものです。(二一)これが、王仙の群が住むヤムナー川です。そこには種々の祭祀が集積し、神聖で、罪障と恐怖を払う川です。(二二)偉大な戦士マーンダートリ王は、ここで自ら祭祀を行ないました。そして、与える者たちのうちの最上者サハデーヴァ・ソーマカもまた祭祀を行ないました。(二三)(第百二十五章)

父から生まれたマーンダートリ王

ユディシティラはたずねた。

「マーンダートリは三界にその名の知れた王中の虎です。偉大なバラモンよ、そのユヴァナーシュヴァの息子である最高の王は、どのようにして生まれたのですか。そして、その無量の光輝を有する者は、どのようにして最高の境地に達したのですか。(一)三界は偉大なヴィシュヌ神の支配下にあるように、彼の支配下にあります。私は賢明な彼の業績について聞きたいと思います。(二)また、シャクラ(インドラ)と等しい光輝を有する、無敵の力を持つ彼が、マーンダートリと呼ばれるようになった次第を聞きたいです。あなたは語ることに巧みですから。(三)」

ローマシャは語った。——

王よ、注意深く聞きなさい。あの偉大な王が、マーンダートリという名で世にもてはやされるようになった次第を。(四)

イクシュヴァークの家系に生まれた、ユヴァナーシュヴァという王がいた。その王は、多

くの謝礼をともなう祭祀を行なった。(五)この法（ダルマ）を守る人々の最上者は、千の馬祀（アシュヴァメーダ）を行ない、その他、種々の、豊富な謝礼をともなう主要な祭祀を行なった。(六)しかし、その偉大で誓戒を固く守る王仙は、子供を持っていなかった。(七)そこで彼は、王国を顧問官たちに任せて、常に森に住んでいた。彼は教典に示された儀軌(指令)により、真我（アートマン）に専心して、渇きで干涸びた心をして、ブリグの隠棲所に入って行った。(八)その夜、偉大なブリグ族の後裔である大仙は、サウデュムニ(ユヴァナーシュヴァ)が息子を得るように祭祀を行なった。(九)そこには、前から置かれている大きな水瓶が、呪句で清められた水で満たされていた。王妃がそれを飲んで、シャクラのような息子を生むようにということであった。(一〇)大仙たちは、徹夜をして疲れたので、水瓶を祭壇に置いて眠った。サウデュムニが彼らのいるところに通りかかった。(一一)喉は干涸び、渇きに苦しんで、王はひどく水を欲した。彼は疲れ、隠棲所に入って水を求めた。(一二)その時、疲労した彼は、干涸びた喉で叫んだ。ところが誰もその鳥のような声を聞きつけなかった。(一三)それから王は、その水で満ちた瓶を見て急いで駆け寄り、水を飲んでから、瓶を放り投げた。(一四)渇きに苦しんでいた賢明な王は、冷い水を飲んで渇きが鎮まり満足した。(一五)

それから、王とともに目覚めたすべての聖仙たちは、例の瓶に水が無くなっているのを見出した。(一六)彼らは集まって、これは誰の仕業かとたずねた。ユヴァナーシュヴァは、「私がやりました」と真実を答えた。(一七)聖者バールガヴァは、「それはよくないことだ」と彼に言った。

「その水はあなたの息子のために置かれたもので、苦行の力に満ちている。(一八)私は激しい苦行を行なって、あなたの息子のためにそこに呪力（ブラフマン）をこめたのだから。偉大な力と勇武をそなえた王仙よ。(一九)その息子が強力で非常に精力的で、苦行の力をそなえ、その力によりシャクラをもヤマ(閻魔)の住処に送るほどになるように。(二〇)王よ、そのような方法により、私はこれを用意したのである。王よ、今日あなたが水を飲んだとは、まずいことをしたものだ。(二一)しかし我々は今、起きたことを変えることはできない。あなたがそのようにしたのも、きっと運命のなせるわざであろう。(二二)大王よ、あなたは渇き、儀軌と呪句で清められた、私の苦行の力をこめた水を飲んだ。その水から、あなたは自ら、このような力にあふれた息子を生むであろう。(二三)我々はあなたのために最も驚異に満ちた祭祀を行なうであろう。精力的なあなたが、シャクラ(インドラ)に等しい息子を生むように。(二四)」

それから、百年が過ぎた時、その偉大な王の左の脇腹を裂いて、まるで太陽のような、威光に満ちた息子が出て来た。しかも、ユヴァナーシュヴァ王は死ななかった。それは奇蹟のようであった。(二五―二六)それから、威光に満ちたシャクラが彼を見ようとしてやって来て、その人指し指を彼の口の中に入れた。(二七)「彼は私を(マーム)吸うであろう(ダースヤティ＝ダートリ)」とインドラは告げた。そこで、インドラをはじめとする神々は、彼にマーンダートリという名をつけた。(二八)幼児はシャクラの与えた人指し指を吸ってから、十三腕尺（キシュク）(一キシュクは前腕の長さ)の背丈に成長した。(二九)ヴェーダ聖典と弓のヴェーダ(兵学)と、諸々の神聖な武器が、思念されただけでその王者のそばに立った。(三〇)アージャガヴァという名の弓、角からできた矢、

貫かれない鎧が、即座に彼に奉仕した。(三一) 彼はインドラ自身によって灌頂され（王位について）、法によって三界を征服した。ヴィシュヌが闊歩（三歩）によって三界を征服したように。(三二)

その偉大な人の無敵な輪は廻転し、諸々の宝は自らその王仙のそばに集まった。(三三) この財宝に満ちた大地が彼の所有となり、彼は多くの謝礼をともなう多様な祭祀を行なった。(三四) 威光に満ちた彼は、〔祭祀のための〕祭壇を積み、多くの法を達成し、その無量の光輝に満ちた人は、シャクラの半分の座席を得た（シャクラと座席を分け合った）。(三五) この常に法に専念する賢者は、勅令により、一日で、宝の山（または「海」）や都をともなう大地を征服した。(三六) 四辺に至る大地は、多くの謝礼をともなう彼の祭祀の祭場によって満たされ、おおわれない場所はなかった。(三七) その偉大な人物は、一万パドマ（一パドマは十億）の牛をバラモンたちに与えたと言われる。(三八) 十二年間雨が降らなかった時、その偉大な人物は、インドラが見ている前で、穀物を生長させるために雨を降らせた。(三九) 月種に生まれた偉大なガーンダーラの王は、鳴り響く大きな雨雲のようであったが、彼はその王をうち破って矢で殺した。(四〇) その偉大な人物は、四種の生類を征服し、自身の苦行と威光により、諸世界を平定した。(四一)

これが、太陽のように輝く彼の祭場です。クルクシェートラの中央、最も神聖なる場所において、それを見なさい。(四二) 王よ、あなたが問われた、マーンダートリの偉大な業績と最高の誕生について、あなたにすべてお話ししました。(四三)（第百二十六章）

ソーマカ王、一人息子を犠牲にする

ユディシティラはたずねた。

「最も雄弁なる人よ、ソーマカという王はどのような力をそなえていたのか。彼の業績と実力をありのままに聞きたいと思います。(一)」

ローマシャは語った。——

ユディシティラよ、ソーマカという徳性ある王がいた。彼にはふさわしい百人の妻がいた。(二) その王は息子を求めて大いに努力したが、非常に長い期間が過ぎても、妻たちに子供を作ることができなかった。(三)

彼は老齢になっても努力を続けていたが、ある時、百人の妻〔の一人〕にジャントゥという息子が生まれた。(四) すべての母たちは、生まれた子を取り巻いて世話をしていた。常に彼の背後で、彼の望むこと喜ぶことをしながら。(五)

さて、ある時、蟻がジャントゥの尻を咬んだ。咬まれた子供は痛がって泣いた。(六) そこですべての母たちは、みなでジャントゥを取り巻いて、ひどく悲しんで泣いた。その声はか

しましいものであった。(七)王は大臣たちの集まりで、祭官たちと座っていたが、その突然起こった悲嘆の声を聞いた。(八)そこで王は、どうしたことかと思って人を遣わした。侍従は息子に関して起こったことを報告した。(九)ソーマカ王は急いで立ち上がり、大臣たちとともに後宮に入り、息子をなだめた。(一〇)王は息子をなだめてから後宮から出て、祭官や大臣たちとともに座った。(一一)

ソーマカは言った。

「一人の息子しかいないということは何たることだ。息子がいない方がましだ。諸々の生類は常に苦しむものであるから、一人息子しかいないということは悲しいことだ。(一二)バラモンよ、私は息子を欲し、吟味してこの百人の妻を集めて娶ったが、彼女たちに複数の息子は生まれなかった。(一三)私はすべての妻に対し努力したが、やっとのことで一人息子のジャントゥが生まれただけだ。これ以上悲しいことがあろうか。(一四)最高のバラモンよ、それに私と妻たちは老齢になった。彼女たちと私の生命は、今、この一人息子に依存している。(一五)百人の息子が生まれるような、適当な祭式がないであろうか。その祭式は、大きなものでも、小さなものでも、どんなに困難なものでもよいが。(一六)」

祭官は答えた。

「百人の息子が生まれるような祭式があります。ソーマカ様、もしそれを実行することができれば申しあげますが。(一七)」

ソーマカは言った。

「なすべきことであろうとなかろうと、それで百人の息子が生まれるなら、必ずやる。尊者よ、私に言ってくれ。(一八)」

祭官は言った。

「王よ、私が祭式を行なっている時、ジャントゥを犠牲としなさい。そうすれば、遠からずして、あなたに栄光ある百人の息子が生まれるでしょう。(一九)彼の脂肪を火に供えている時、母たちは煙を嗅ぐべきです。そうすれば、彼女たちは非常に強力なあなたの息子たちを生むでしょう。(二〇)息子のジャントゥも、再び同じ母親に生まれるでしょう。彼の後ろの(または「左の」)脇には金色の印がついているでしょう。(二一)」(第百二十七章)

ソーマカは言った。

「バラモンよ、やるべきことは何でもやってくれ。私は息子が欲しいから、あなたの言うことはすべて行なう。(一)」

ローマシャは語った。——

そこで祭官は、ジャントゥを犠牲として、ソーマカに祭祀を主催させた。しかし母たちは、憐憫にかられて、強く息子を引き止めた。激しい悲しみにかられ、「ああ、私たちはもうおしまいだ」と叫びながら。(二)母たちは彼の右手を持って引きもどした。一方、祭官も、彼

の左手を持って引っぱった。(三)彼女たちが雌の鶚(みさご)のように嘆いている間に、祭官はその息子を引っぱり込んで、儀軌に従って彼を犠牲にし、彼の脂肪を火に供えた。(四)脂肪が火に供えられている間、母たちはその臭いを嗅いだ。そして彼女たちは嘆き悲しみ、突然地面に倒れた。それから、すべての王妃たちは妊娠した。(五)

それから十カ月たって、ソーマカとすべての妻たちの間に、残らず百人の息子が生まれた。(六)ジャントゥは長男として、同じ母に生まれた。彼は母たちにとって、他の各自の息子よりも愛しいものであった。(七)彼の後ろの(または「左の」)脇に金色の印があった。彼は美質をそなえ、百人の息子のうちの第一人者であった。(八)

その後、ソーマカの師(グル)はあの世に行った。そして、時が過ぎ、ソーマカもまたあの世に行った。(九)さて、彼は恐ろしい地獄で、焼かれている師を見てたずねた。

「バラモンよ、あなたは何故、地獄で焼かれているのか。(一〇)」

師は火でひどく焼かれながらも彼に答えた。

「王よ、私はあなたのために祭祀を行ないました。これはその行為の果報です。(一一)」

それを聞くと、王仙はダルマ王(閻魔)に言った。

「私がそこに入りましょう。私の祭官を解放して下さい。尊師は私のために地獄の火で焼かれているのですから。(一二)」

ダルマは言った。

「王よ、(他の)行為者の果報を他の者が受けることは決してない。最高の布施者よ、あな

たの果報はしかじかであるとここに認められる。(一三)」

ソーマカは言った。

「私はこのヴェーダ学者なしでは、神聖なる世界を望みません。神々の世界であろうと、地獄であろうと、私はまさに彼とともに住みたいと思います。ダルマ王よ。私は彼と同じ行為をしたのですから。神よ、福徳であろうとなかろうと、我々二人の果報は同じであるべきです。(一四―一五)」

ダルマは言った。

「王よ、もしそのように望むなら、彼とともに等しい時間だけ果報を受けなさい。その後でよい帰趣に達するであろう。(一六)」

蓮の眼をした王は、すべてその通りにした。それから、その行為によって獲得したすばらしい世界を再び得た。その師のバラモンといっしょであった。彼は師を愛していたから。(一七)

ローマシャは語った。——

この眼前に輝いているのが、神聖な彼の隠棲所です。忍耐強く、ここで六夜を過ごせば、人は善い帰趣に達します。(一八)王中の王よ、我々は熱を離れ、自己を制御し、ここに六夜滞在しましょう。クルの長よ、準備しなさい。(一九)

(第百二十八章)

聖地巡礼（つづき）

ローマシャは語った。——

王よ、ここでは、かつて造物主（プラジャーパティ）は自ら、千年間続くイシティークリタというサットラ祭を行なったという。（一）アンバリーシャ・ナーバーガは、ヤムナー川の岸で祭祀を行なった。彼は祭祀と苦行とにより、最高の成就に達した。（二）王よ、これは最も神聖な、ナフシャの息子（ヤヤーティ）の祭祀の地である。ここで彼は祭祀を行なってから、祭官たちに十パドマ〔の牛〕を与えた。（三）クンティーの息子よ、見よ。無量の威厳に満ちた皇帝ヤヤーティ、インドラと競い合ったヤヤーティの、この祭祀の場所を。（四）見よ。種々の聖火に満ちた大地が、ヤヤーティの祭祀に圧倒されて沈みこんでいるのを。（五）これが一葉のシャミー樹である。これが最高の盃である。見よ、ラーマの湖を。見よ、ナーラーヤナの隠棲所を。（六）王よ、これは、無量の威光に満ちた、アールチーカの息子（パラシュラーマ。または、リチーカの息子、ジャマダグニ）が、ヨーガを行ないつつ地上を遍歴している間に、ラウピヤー川に隠遁した場所である。（七）クルの王子よ、私は伝承された詩節を誦えるから聞きなさい。乳鉢を装身具とするピシャーチャ女が〔バラモンの女に〕告げた。（八）

「ユガンダラにおいて凝乳（ダディ）を食べ、アチユタスタラで夜を過ごし、ブーティラヤで沐浴し、あなたは息子とともにここに住むことを望む。（九）ここで一夜を過ごしてから、もし第二夜を過ごすならば、あなたの昼の行動と夜の行動は全く変わってしまうであろう。（一〇）」

おお、バラタ族の最上者よ、今日、ここで一夜を過ごそう。クンティーの息子よ、実にこれはクルクシェートラの門である。（一一）王よ、まさにここで、ナフシャの息子ヤヤーティ王は、多くの宝に満ちた祭式を行なった。その祭式においてインドラは喜んだ。（一二）このヤムナー川の聖地は、プラクシャーヴァタラナと呼ばれる。賢者たちは、それは最上天への門であると言う。（一三）ここで最高の聖仙たちは、サーラスヴァタの祭祀を行ない、祭柱と乳鉢を持ち、祭祀の終わりに沐浴した。（一四）まさにこの場所で、バラタ王は法（ダルマ）によって地上を征服して、犠牲用の黒い斑点のある馬を繰り返し放った。（一五）人中の虎よ、まさにこの場所で、マルッタは、神仙の長であるサンヴァルタに守られて、最高のサットラ祭を催した。（一六）王中の王よ、ここで沐浴すれば、人は全世界を観察できる。沐浴すれば、罪障を清めることができる。（一七）

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

パーンダヴァの長は、弟たちとともにそこで沐浴してから、大仙たちに讃えられつつ、ローマシャに次のように告げた。（一八）

「不屈の勇者よ、私は苦行によってすべての世界を観察しています。ここにいながら、白馬にひかれたパーンダヴァの最上者（アルジュナ）を見ます。（一九）」

ローマシャは言った。

「勇士よ、その通りです。大仙たちも見ております。あの聖河サラスヴァティーを見なさい。それはそれのみに庇護を求める人々で満ちております。最高の人よ、そこに沐浴すれば、罪障を滅するでしょう。（二〇）神仙たちはここでサーラスヴァタの祭祀を行ないました。クンティーの息子よ、聖仙たちも、王仙たちも同様に行ないました。（二一）これが造物主の祭壇で、全周五由旬（ヨージャナ）です。それは、常に祭祀を行なう、偉大なクルの土地（クシェートラ）です。（二二）」

（第百二十九章）

ローマシャは語った。――

ここで人間たちは苦行を行ない、天界へ行った。王よ、死のうと望む人々が幾千とここにやって来る。（一）というのは、かつてダクシャは祭祀を行ないながら、次のような祝福の言葉を述べたから。

「ここで死ぬ人々は天界を獲得する」と。（二）

これが清浄なる聖河サラスヴァティーの激流である。ここはサラスヴァティーが消滅する地点（ヴィシャナ）である。王よ。（三）ここがニシャーダたちの国土である。彼らを憎んで、サラスヴァティーは地下に入ったのである。「ニシャーダたちが私を知ることがないように」と。（四）これがチャマサ・ウドベーダで、サラスヴァティーはそこから出現する。そこで、神聖で清浄なる諸河がその川に合流する。（五）

これがシンドゥ川の大きな聖地である。そこでローパームドラーはアガスティヤに会って、夫として選んだ。（六）太陽のように輝く方よ、ここに聖地プラバーサが輝いている。それはインドラの愛する場所で、清浄で神聖であり、罪障を滅する。（七）ここに、ヴィシュヌの足跡（パダ）という最高の聖地が見える。これが心地よく、最高に浄めるヴィパーシャー川である。（八）聖仙ヴァシシタは、息子たちの死を悲しみ、自分自身を縛って、まさにここに飛び込んだが、束縛を離れ（ヴィパーシャ）再び立ち上がった。（九）

これは大仙たちの住む、すべてに神聖なカーシュミーラ地方である。弟たちとともにこれを見よ。（一〇）ここで、北方のすべての聖仙、ナフシャの息子（ヤヤーティ）、アグニ（火神）、カーシャパが会合した。（一一）大王よ、ここにマーナサ湖の門が現われている。栄光あるラーマは山の中にその住処を作った。（一二）（一三―一五略）

大王よ、あなたはあの大山ブリグトゥンガを見るであろう。（一六）ヤムナー川の近くのジャラーとウパジャラー川を見るであろう。そこでウシーナラ（シビ国の王）は祭祀を行なってヴァーサヴァ（インドラ）を凌駕した。（一七）

ヴァーサヴァとアグニは、王を試すために、王の祭場に近づいた。（一八）願いをかなえる両神は、偉大なウシーナラを試そうと思い、インドラは鷹となり、アグニは鳩となってその祭祀の場に近づいた。（一九）鳩は鷹を恐れて、庇護を求めて王の腿のところに行き、そこに隠れた。（二〇）

（第百三十章）

鷹と鳩

鷹は言った。

「すべての王はあなたのことを、法（ダルマ）を性とするものと言う。（そのあなたが、どうして法に背く行為をしようとしているのか。（一）王よ、飢えに苦しむ俺の、定められた食物を奪ってはいけない。あなたは法を切望するあまり、法を捨ててしまった。（二）」

王は答えた。

「大鳥よ、この鳥はお前を恐れ、恐怖にかられ、救いを求め、生命を渇望して、私のもとにやって来たのである。（三）鷹よ、このように安全を求めて来た鳩を保護しなかったら、最高の非法であると思わないかね。（四）鷹よ、鳩は震え、動転しているかのように見える。生命を求めて私のもとに来た彼を捨てることは非難されることだ。（五）」

鷹は言った。

「王よ、一切の生類は食物によって生存する。生類は食物によって繁栄し、それによって生きる。（六）捨てがたいものを失っても、長らく生きることができる。しかし、食物がなければ、長く生きることはできない。（七）王よ、もし今日、俺が食物を失えば、俺の生気は体を

離れて、再びもどらぬ道へ行くであろう。（八）法（ダルマ）を性とするものよ、俺が死ぬば、妻子も死ぬであろう。あなたは鳩を守ることにより、多くの生命を殺すことになる。（九）法を阻害するような法は、それは法ではなく悪法である。矛盾しないような法が法である。不屈の勇者よ。（一〇）王よ、矛盾することにおいて軽重を決定して、そこにおいて障害が存しないような法を実行すべきである。（一一）王よ、法と非法の確定において、軽重を知って、より優れた方を取って、法を確定せよ。（一二）」

王は言った。

「最高の鳥よ、あなたは非常にすばらしく語る。あなたは法を知っている。鳥の王スパルナ（金翅鳥、ガルダ）ではないか。法にかなった多くのすばらしいことをあなたは語るから。（一三）あなたに知らないことは何もないと私は見る。だが、庇護を求めて来たものを捨てることがよいとどうして思うのか。（一四）鳥よ、あなたは食物を求めてこのように企てた。あなたは別のやり方によっても、もっと優れた食物を得ることができる。（一五）雄牛、猪、鹿、水牛、あるいはあなたの望む他のものを、今日、あなたのために用意する。（一六）」

鷹は言った。

「俺は猪や雄牛や種々の鹿は食べない。大王よ、そんな食物を食べても何にもならない。（一七）王族の雄牛よ、俺には運命の定めた食物がある。王よ、俺の鳩を放せ。（一八）鷹は鳩を食べるものだ。これは永遠のきまりである。王よ、道をわきまえて、決してバナナの幹に登ってはいけない。（一九）」

王は言った。
「鳥の群に敬われる者よ、繁栄するシビ国の王国を治めよ。鷹よ、あるいはあなたの望むものをすべてあげる。ただし、この庇護を求めて来た鳥を除いて。(二〇) 最高の鳥よ、何をしたら鳩を放すか言ってくれ。その通りにしよう。私は決して鳩を渡さないから。(二一)」
鷹は言った。
「ウシーナラ王よ、もしあなたが鳩を愛するなら、自分の肉を切り、鳩〔を〕秤にのせ、あなたの肉の量が鳩と等しくなったら、それを俺にくれ。そうすれば俺は満足するであろう。(二二―二三)」
王は答えた。
「鷹よ、あなたが私に要求したことは好意であると考える。それ故、今、自分の肉を秤で量って与えよう。(二四)」
ローマシャは語った。――
さて、最高の法（ダルマ）を知る王は、自分の肉を切り、鳩とともに計量した。(二五) しかし、秤で量ると、鳩の方が重かった。ウシーナラ王は再び肉を切って与えた。(二六) 鳩と釣り合う肉がなくなった時、すっかり肉を切り取った王は自ら秤にのった。(二七)
鷹は言った。
「法を知る者よ、私はインドラである。鳩はアグニである。法に関し汝を試験しようとして、祭場に来たのである。(二八) 王よ、汝が体から肉を切り取ったから、王よ、汝の輝かしい名声は諸世界を支配するであろう。(二九) 世界において、人間たちが汝のことを語り継ぐ間は、汝の名声と諸世界は永遠に存続するであろう。(三〇)」
ローマシャは語った。――
パーンドゥの息子よ、私とともに、あの偉大な王の住居を見なさい。神聖で、罪障を払う住居を。(三一) 王よ、まさにここで、神聖で偉大なバラモンたちは、常に神々や永遠の聖者（ムニ）たちを見るのである。(三二)

（第百三十一章）

アシターヴァクラとバンディンの謎々

　ローマシャは言った。
「ウッダーラカの息子シュヴェータケートゥは、聖句(マントラ)を知り、最高の知性を有すると、地上において称讃されております。王よ、彼の神聖なる隠棲所を見なさい。そこには、常に果実をつけた樹々が茂っています。(一)シュヴェータケートゥはここで、人間の体をとったサラスヴァティー(弁才天)を直々に見ました。シュヴェータケートゥは、姿を現わしたサラスヴァティーに言いました。
『私が言葉を知悉しますように。(二)』
　王よ、そのころ、カホーダの息子アシターヴァクラと、ウッダーラカの息子シュヴェータケートゥという、叔父と甥の関係にある二人は、ブラフマン(ヴェーダ)を知る人々のうちの最上者であった。(三)叔父と甥である二人のバラモンは、ヴィデーハ国王の祭場に入り、論争において、比類なきバンディンを破った。(四)」
　ユディシティラはたずねた。
「そのバラモンはいかなる力を持つのですか。あのように才能のあるバンディンを破るとは。

また、どうしてアシターヴァクラと呼ばれるようになったのですか。ローマシャよ、すべてを私にありのまま告げて下さい。(五)」
　ローマシャは語った。——
「王よ、ウッダーラカには、カホーダという名の一人の自制した弟子がいた。彼は師匠の意に従って仕え、長い間、ヴェーダ学習を行なっていた。(六)バラモンの弟子たちは彼を軽蔑し、師はその軽蔑を知ってはいたが、突然、彼に知識を授け、娘のスジャーターを妻として与えた。(七)やがて彼女は火のような胎児を宿した。ところがその胎児は、学習している父に告げた。
「父上、あなたは毎夜学習をしています。しかしそれは正しく進行しているとは思われません。(八)」
　大仙は弟子たちの中で侮辱され、怒って胎児を呪った。
「お前は胎内にいる間にしゃべったから、八肢分(アシタ)(全身)において曲折する(ヴァクラ)であろう。(九)」
　このようにして、大仙は障害者として生まれ、アシターヴァクラという名で有名になった。彼の母方の叔父がシュヴェータケートゥであった。この叔父は彼と同年であった。(一〇)
　ところで、胎内で息子が育っている間、スジャーターは悩み、人のいないところで、財産のない夫に近づき、財産を求めて次のように言った。(一一)
「大仙よ、私は無一物でどのようにしたらよいでしょうか。もう十カ月目になります。私が

子を産んだ時に、それで私が急場を乗り切ることができるような財産があなたにはまったくありません。（二二）」

妻にこのように言われて、カホーダは財産を求めてジャナカのもとに行った。ところがそのバラモンは、論争に巧みなバンディンにより論破され、水中で溺れることを余儀なくされた。（二三）

ウッダーラカは、彼が論争において、吟誦者（スータ）（バンディン）のために水中で溺れさせられたことを聞いて、スジャーターに告げた。

「このことはアシターヴァクラには隠しておくべきである。（二四）」

そこで彼女はその助言をよく守った。やがて、バラモンのアシターヴァクラが生まれたが、彼は何も聞かなかった。彼はウッダーラカを父のように考え、シュヴェータケートゥを兄のように考えていた。（二五）

それから十二年が過ぎた時、アシターヴァクラは父（実は祖父）の膝に座っていた。シュヴェータケートゥは、泣く彼の両手を引っぱって、「これはお前の父親の膝ではない」と告げた。（二六）その時、「兄」に言われた残酷な言葉は、彼の心にとどまり、ひどく苦しめた。彼は家に帰り、泣きながら母にたずねた。

「私の父親はどこにいるのですか」と。（二七）そこでスジャーターはひどく悩み、呪いを恐れてすべてを告げた。母からすべての真実を聞くと、そのバラモンはシュヴェータケートゥに次のように言った。（二八）

「ジャナカ王の祭祀に行こう。彼の祭祀はとてもすばらしいと聞いている。そこでバラモンたちの論争を聞こう。そして、そこで最上の御馳走を食べよう。我々に学識もそなわることになろう。梵音（ヴェーダの朗誦）は、吉祥で魅力的だから。（二九）」

そこで、叔父と甥は、ジャナカ王の盛大な祭祀に出かけて行った。アシターヴァクラは門前払いをされたが、道で王に会い、次のように告げた。（三〇）

（第百三十二章）

アシターヴァクラは言った。

「バラモンと会わなければ、道は盲人のもの、道は聾者のもの、道は女性のもの、道は重荷を運ぶ人のもの、道は王のものです。しかし、バラモンと会ったら、道はまさにバラモンのものです。（一）」

王は答えた。

「私は今、あなたに道を譲る。あなたの望む道を自由に行きなさい。聖火は軽んじられない。インドラといえども、常にバラモンに敬礼する。（二）」

アシターヴァクラは（門番に）言った。

「君、我々は祭祀を見るために来たのだ。我々の強い好奇心は増大した。我々は客として来た。入れて欲しい。門番よ、あなたの許可を待っている。（三）インドラデュムナの息子（ジャナカ）の祭祀を見るために、我々はここで、ジャナカ王とお会いし、お話ししたいと願って

いる。門番よ、我々の怒りにより、即座に、最高の病にかかることのないようにしなさい。（四）」
門番は言った。
「我々はバンディンの命令通りにしている。『私が告げる言葉を聞け。バラモンの子供たちは入れてはならぬ。長老の、賢明な、最高のバラモンたちを入れなさい』という。（五）」
アシターヴァクラは言った。
「もし長老が入れるなら、門番よ、私は入るにふさわしい。というのは、我らは〔学識の点で〕長老であり、誓戒を修しており、ヴェーダの力により入るにふさわしい。（六）我々は長上に仕え、感官を制し、知識の取得に関し窮極に達している。子供だからといって軽蔑してはならぬと言われる。火は生まれたばかり〔の子〕でも、触れられれば焼く。（七）」
門番は言った。
「ヴェーダの〔すべて〕をそなえた言葉（〔オーム〕）を唱えよ。一つのシラブルではあるが、多くの形を持ち、輝かしい言葉を。さあ、自分が子供であることをよく見なさい。どうして自慢するのか。弁論を完成することは得られがたいものだ。（八）」
アシターヴァクラは言った。
「成長は身体の増大によっては知られない。シャルマリー樹の大きくなった〔種の入った〕鞘のように。低くて細い木でも、果実をつければ、成長しているのだ。しかし、果実をつけない木は成長したとは言えない。（九）」

門番は言った。
「この世では、子供たちは年長者から知恵を得て、時が過ぎた後、成長する。わずかな間に知識を得ることはできないものだ。どうして子供のあなたが年長者のように語るのか。（一〇）」
アシターヴァクラは言った。
「頭が白髪になったからとて、彼は長老ではない。子供といえども知恵あるものを、神々は長老と見なす。（一一）聖仙たちは、『〔ヴェーダ〕学を修めたものが我々にとって偉大である』という法（ダルマ）を作ったが、それは年齢や白髪や財産や親族によってではない。（一二）私はバンディンに会いたいと望んで王の集会に来たのである。門番よ、蓮の花輪をつけた王に私の到来を告げよ。（一三）門番よ、今日、あなたは見るであろう。私は賢者たちと論争し、論議が高まり、他のすべての人々が沈黙している時、私が高いものになるか、それとも低いものになるかを。（一四）」
門番は言った。
「どうして十歳のあなたが、自己を律した賢者らのみが入ることを許された祭祀に入場することができよう。だが、私はあなたが入れるように、方法を講じて努力しよう。ふさわしく努力しなさい。（一五）」
アシターヴァクラは〔王に会って〕言った。
『おお、王様、ジャナカ族の長よ、あなたは讃えらるべきです。すべての富貴があなたに存

します。かつてヤヤーティ王が祭式を行なったように、あなたは祭式を行なっています。(二六)

賢者バンディンは、ヴェーダ学者たちを論争において破り、敗れた人々すべてを、ためらうことなく、あなたに遣わされた腹心の部下により水につけていると聞いております。(二七)バラモンたちからそれを聞き、謎々をしようとして来たのです。バンディンはどこですか。私は彼に会って、太陽が星々を消滅させるようにうち破って見せます。(二八)」

王は言った。

「お前は相手の言葉の力を知らないで、バンディンに勝とうなどと望んでいるのだ。力量があると評判の人々だったら、そのように言えるかも知れないが。論争に長けた人々が彼に会えるのだ。(二九)」

アシターヴァクラは言った。

「彼は私のような者とは論争したことがない。だから彼は獅子のようになり、恐れることなく吠えているのです。今日、私と会って敗れ、横たわるでしょう。車軸が弱い車がこわれて、道ばたに横たわるように。(三〇)」

王はたずねた。

「六つの轂(こしき)を持ち、十二の車軸を持ち、二十四の接合点(パルヴァン)を持ち、三百六十の輻(や)を持つものの意味を、最高の聖仙(カヴィ)は知っている。(三一)」

アシターヴァクラは答えた。

「二十四の接合点(節、半月)を持ち、六つの轂(季節)を持ち、十二の車軸(月)を持ち、三百六十の輻(日)を持つ、常に回転する輪(チャクラ)(一年、時間)が、あなた方を守らんことを。(三二)」

王はたずねた。

「その両者は、つながれた牝馬のようで、鷹のように落下する。神々のうちの誰がその両者を生むか。そしてその両者は何者を生むか。(三三)」

アシターヴァクラは答えた。

「王よ、その両者(稲光と雷?)が、あなたの家にも敵どもの家にも有りませんように。火がそれらを生み、またその両者は火を生みます。(三四)」

王はたずねた。

「眠っても眼を閉じないものは何か。生まれても動かないものは何か。心を持たないものは何か。急速に増大するものは何か。(三五)」

アシターヴァクラは答えた。

「魚は眠っても眼を閉じない。卵は生まれても動かない。石には心がない。川は急速に増大する。(三六)」

王は言った。

「あなたは神のような性質を持つ。人間とは思えない。あなたは子供ではない。長老であると思う。雄弁にかけてあなたに匹敵する者は見出されない。そこで私は門に入ることを許可する。(三七)」

(第百三十三章)

アシターヴァクラは言った。
「王よ、ここに集まってウグラセーナ（ジャナカ）とともにいる無比の諸王の間にあって、大きな湖水においてハンサ鳥がさえずるように論争する人々のうちで〔彼を〕見出そうという気持にはまったくなれません。(一)優れた論客とうぬぼれる人よ、今日あなたは賭けを行なって、川が流れるようにには私の前で答えられないでしょう。バンディンよ、今日、輝きに満ちた火のような私の前で、気を確かに持っていなさい。(二)」
バンディンは言った。
「寝ている虎を起こすな。口の端を舐めている毒蛇の頭を足蹴にすれば、咬まれずに逃れられないと知るべきだ。(三)力の弱い者が強いとうぬぼれて山を打てば、彼の手と爪が裂けるのみ。山には傷もつかぬ。(四)ミティラーの王と比べれば、他の王たちは取るに足らぬ。マイナーカ山と比べれば、他の山々は取るに足らぬように。雄牛と比べれば仔牛が取るに足らぬように。(五)」
ローマシャは語った。――
アシターヴァクラは怒り、集会において大音声をあげて、バンディンに告げた。
「私が文章を言ったら、その先を続けなさい。私もあなたの文章の先を続けます。(六)」

バンディンは言った。
「唯一の火（アグニ）が多様に燃やされる。一つの太陽がこの宇宙を照らす。ただ神々の王（インドラ）のみが勇士で敵を殺す。ただヤマ（閻魔）のみが祖霊たちの主である。(七)」
アシターヴァクラは言った。
「インドラとアグニの二つは連れ立って歩く。ナーラダとパルヴァタは二人の神仙である。アシュヴィンは二体である。車の車輪は二つである。制定者（ヴィダートリ）（創造者）は妻と夫の二を定めた。(八)」
バンディンは言った。
「この生類は行為（または儀式）によって三様に生まれる。三ヴェーダが結合してヴァージャペーヤ祭を担う。アドゥヴァリウ祭官は三度（日の出、正午、日没）の祭祀を行なう。三つの世界、三つの光（太陽、月、星）があると言われる。(九)」
アシターヴァクラは言った。
「バラモンの住期（人生の段階）は四である。四が結合して祭祀を担う。方位は四である。種姓は四である。牛は四足である。以上のように常に言われる。(一〇)」
バンディンは言った。
「五つの聖火が存する。パンクティ（韻律の種類）は五脚（四分の一詩節）よりなる。祭祀は五である。五つの感官が存する。ヴェーダには、五つの髷を持つ五（異本「アプサラス」?）が存する。世界には五つの聖河が知られている。(一一)」

アシターヴァクラは言った。

「火を設置する場合は、六頭の牝牛を謝礼とするとある人々は言う。時間(カーラ)の輪(チャクラ)は六季節である。六つの感官が存する。クリッティカー星（すばる星）は六である。すべてのヴェーダには、六のサーディヤスカ祭が認められる。（二二）」

バンディンは言った。

「七種の家畜と七種の野獣がいる。七つの韻律が一つの祭式を担う。七名の聖仙がいる。七つの敬意の表わし方がある。七絃のヴィーナー（琵琶）が知られている。（二三）」

アシターヴァクラは言った。

「八のシャーナ（重さの単位）は〔銀の〕一シャタマーナにあたる。獅子を殺すシャラバ（空想上の動物）は八足である。神々のうち、ヴァス神は八体であると聞く。一切犠牲祭(サルヴァヤジュニャ)には、祭柱は八角であると規定される。（二四）」

バンディンは言った。

「祖霊たちのため祭火が燃やされている間に唱える詩節は九であると言われる。創造は九の段階を有すると言われる。ブリハティー（韻律の名）は九のシラブルを持つとされる。計算は常に九進法である。（二五）」

アシターヴァクラは言った。

「世界において人の状態は（または、「人間にとって方位は」）は十であると言われる。千は百の十倍であると言われる。妊婦は十カ月胎児を宿す。ダシェーラカ、ダシャダーシャ、ダシャールナ（民族名）

は、〔十（ダシャ）という名がついている〕。（二六）」

バンディンは言った。

「第十一日〔の式の〕犠牲獣は十一。天上の神々のうちで、ルドラは十一。そこにおける祭柱(ユーパ)も同じく十一。生気を有するものの変化は十一であると言われる。（二七）」

アシターヴァクラは言った。

「一年は十二カ月と言われる。ジャガティー（韻律名）の四分の一詩節は十二シラブルである。普通の祭祀は十二日間続くと言われる。バラモンたちは、十二のアーディティヤをあげている。（二八）」

バンディンは言った。

「第十三日目は非常に恐ろしいと言われる。大地は十三の大陸を有する……。（二九）」

ローマシャは語った。――

バンディンはそこまで言うと沈黙した。アシターヴァクラが後半の詩節を述べた。

「ケーシン（獅子？）は十三日走る（疑問）。アティッチャンダスは十三〔シラブル〕以上である。（三〇）」

吟誦者(スータ)の息子が考えこんでうつむき、沈黙したのを見て、また、アシターヴァクラが唱え続けるのを見て、大喚声が起こった。（三一）ジャナカ王の盛大な祭祀において、このように混乱が生じた時、すべてのバラモンたちは喜んで、合掌して敬意を表しつつ、アシターヴァ

クラに近づいた。（二二）

「彼は博識のバラモンたちを、論争において破って、水に沈めたという。今日はバンディンがその同じ道をたどるべきだ。彼をつかんで水に沈めなさい。（二三）」

バンディンは言った。

「私はヴァルナ王の息子である。ジャナカよ、あなたのサットラ祭と同時に、あちらでも十二年間にわたるサットラ祭が行なわれた。私はそのために優れたバラモンたちをそこに送ったのである。（二四） 彼らはすべて、ヴァルナの祭祀を見るために行ったが、再びここにもどって来るであろう。私は敬われるべきアシターヴァクラを尊敬する。彼のために私は父に会うであろう。（二五）」

アシターヴァクラは言った。

「彼らバラモンたちは知者であったが、言葉と知性とによって敗れ、海の水に沈められた。その言葉を、知性とともに、私は救い上げた。賢者らがその言葉を吟味するように。（二六）アグニ・ジャータヴェーダスは〔諸物を〕燃やすが、賢者たちの家を除外して、熱によって焼くことがないように、同様に、幼い子供が哀れに語っている時、賢者らは言葉を吟味するのである。（二七） あなたはシュレーシュマータキー樹〔の実を食べて〕力を失って〔私の言葉を〕聞くのか、あるいは称讃の言葉があなたを迷わすのか。ジャナカよ、あなたは棒で突かれて〔かりたてられる〕象のように、私の言葉を聞こうとしない。（二八）」

ジャナカは言った。

「私はあなたの神のような超人的な言葉を聞く。あなたはまさに神のようだ。あなたは論争においてバンディンを破ったのだから。今や、バンディンはあなたに任せる。好きなようにしてくれ。（二九）」

アシターヴァクラは言った。

「王よ、私は生きているバンディンに用はありません。もしヴァルナが彼の父親なら、彼を海に沈めて下さい。（三〇）」

バンディンは言った。

「私はヴァルナ王の息子である。私は水に沈められても恐れない。アシターヴァクラは今、すぐに父のカホーダに会うであろう。（三一）」

ローマシャは語った。――

それから、偉大なヴァルナに敬意を表されたすべてのバラモンたちが、ジャナカの面前に出現した。（三二）

カホーダは言った。

「ジャナカよ、このようなわけで、人々はその行為により息子を望むのです。息子は私ができなかったことをなしとげました。（三三） ジャナカよ、力なきものには力ある息子が、愚かなものには賢明な息子が、無知なものには博識の息子が生まれます。（三四）」

バンディンは言った。

「王よ、死神(アンタカ)が自ら、戦場において敵どもの頭を切り取らんことを。あなたに幸あらんことを。(三五) 偉大なウクティヤ(歌讃)と最上のサーマン(詠歌)とが歌われている。このサットラ祭において、ソーマは十分に飲まれた。このジャナカの祭祀において、神々は喜んで、非常に清浄なる分け前を現に受け取った。(三六)」

ローマシャは語った。――

王よ、すべてのバラモンたちが、以前にも増して輝きに満ちて出現した時、バンディンはジャナカ王に別れを告げて、海の水に入った。(三七) アシターヴァクラは父に敬意を表してから、それらのバラモンたちに、ふさわしく敬意を表された。彼はバンディンを破ってから、叔父とともに、この最上の隠棲所にもどって来た。(三八) クンティーの息子よ、あなたは満足して、弟たちやバラモンたちとともに、ここで幸せに暮らしてから、清浄な行為に専念し、私とともに他の聖地を巡礼するであろう。アージャミーダよ。(三九)(第百三十四章)

慢心したヤヴァクリータ

ローマシャは語った。――

王よ、ここにマドゥヴィラー、またはサマンガー川が見える。これがカルダミラという、バラタの沐浴場である。(一) インドラはヴリトラを殺した後、繁栄を失ったが、サマンガー川で沐浴して、一切の罪障から解放されたという。(二) 人中の雄牛よ、ここがマイナーカ山が地底に没した場所である。かつてアディティ(神々の母)はそこで、息子を得るために食物を料理した。(三) この山の王に登れば、あなた方は、不名誉をもたらす言うに言われぬ不幸を除去することができよう。(四) 王よ、これらが聖仙たちの愛する山々、カナカラである。ユディシティラよ、ここに大河ガンガー(ガンジス)が見える。(五) ここで聖者サナトクマーラは最高の成就に達した。アージャミーダよ、それに沐浴すれば、あなたは一切の罪障から解放されるであろう。(六) プニヤと呼ばれる湖水、ブリグトゥンガ山、そしてガンガーに、クンティーの息子よ、身内の人々とともに黙して沐浴せよ。(七) ストゥーラシラスの心地よい隠棲所が見える。クンティーの息子よ、そこで慢心と怒りを捨てよ。(八) そこにライビヤの隠棲所が見える。そこで、バラドゥヴァージャの息子である聖仙(カヴィ)ヤヴァクリータは滅した。(九)

ユディシティラはたずねた。

「栄光ある聖仙バラドゥヴァージャは、どのようにして能力をそなえたか。そして、聖仙の息子ヤヴァクリータはどのようなわけで滅したのか。（二〇）ローマシャよ、これらすべてをありのままに聞きたいと思います。神に似た人々の行為が語られれば、非常に嬉しいです。（二一）」

ローマシャは語った。――

バラドゥヴァージャとライビヤは友人であった。彼らはこの上なく親しくこの森に住んでいた。（二二）ライビヤには、アルヴァーヴァスとパラーヴァスという二人の息子がいた。バラドゥヴァージャにはヤヴァクリー（ヤヴァクリータ）という息子がいた。（二三）ライビヤとその息子たちは学者であった。他方は苦行者であった。両者の友情は、幼少の時から、無類のものであった。（二四）

威光あるヤヴァクリーは、苦行者の父がバラモンたちに尊敬されず、ライビヤとその息子たちが尊敬されているのを見て、悩み、怒りにかられ、ヴェーダを知悉するために、激しい苦行を行なった。（二五―二六）その大苦行者は、燃え盛る大火の中で身体を苦しめ、ついにインドラを悩ませることとなった。（二七）そこでインドラはヤヴァクリータのところに行って、「何の原因で汝は最高の苦行を行なっているのか」とたずねた。（二八）

ヤヴァクリーは言った。

「神群に敬われる方よ、バラモンたちによって学ばれなかった諸ヴェーダが顕われ出るようにと、私はこの最高の苦行を行なっているのです。（二九）パーカ（悪魔の名）を殺した方よ、私はヴェーダ学習のためにこのように企てたのです。カウシカ（インドラ）よ、私は苦行により、一切の知識を知りたいと願っています。（三〇）主よ、諸ヴェーダは師の口伝により、長い期間をかけて修得できます。それ故、私はこのように最高の努力をしているのです。（三一）」

インドラは言った。

「梵仙よ、汝が進もうとしているのは正しい道ではない。身を滅ぼして何になる。バラモンよ。行って師の口から学べ。（三二）」

ローマシャは語った。――

シャクラ（インドラ）はこのように言って立ち去った。無量の勇気を有するヤヴァクリーの方は、再び苦行に精を出した。（三三）その大苦行者は激しい苦行を行なって、神々の王をひどく苦しめたということである。（三四）インドラ神は再び、そのように激しい苦行を行なっている偉大な聖者に近づいて、制止した。（三五）

「このような企ては不可能だ。汝と汝の父親にヴェーダが顕われ出るなど、正気の沙汰ではない。（三六）」

ヤヴァクリーは言った。

「神々の王よ、私の望み通りにして下さらないのなら、私は一層努力して、より激しい苦行

を行ないます。(二七)マガヴァットよ、聞きなさい。神々の王よ、もし私の望みをすべてかなえて下さらなければ、私は身体の各部分を切って、燃え盛る火の中に供えるでしょう。(二八)」

ローマシャは語った。――

その偉大な聖者の決意を聞いて、賢明な神は制止する方法を色々と考慮した。(二九)そこでインドラは、幾百歳の弱々しい労咳にかかったバラモンの苦行者の姿をとった。(三〇)そしてヤヴァクリータがガンガー川で沐浴する場所で、彼は砂でもって堰を作っていた。(三一)彼が忠告しても、その最高のバラモンが彼の言葉を聞こうとしないので、シャクラは砂でガンガーを埋めようとしたのである。(三二)シャクラはヤヴァクリータを諭そうとして、一握りの砂を絶えずガンガーに投げ入れ堰を作り始めた。(三三)聖者の雄牛であるヤヴァクリーは、堰を作ろうと努力している彼を見ると、笑って次のように言った。(三四)

「バラモンよ、何をしているのか。何の目的で。役にも立たないのに、大そう努力しているが。(三五)」

インドラは言った。

「私はガンガーに堰を作ろうとしている。渡るのが容易になるであろう。というのは、人々は渡る時いつも苦労しているのだから。(三六)」

ヤヴァクリーは言った。

「この大きな流れは、決してあなたにせき止められることはできない。不可能なことをやめなさい。可能なことを企てなさい。(三七)」

インドラは言った。

「汝がヴェーダのためにこのような苦行を始めたように、同様に私もこのような仕事を始めたのである。(三八)」

ヤヴァクリーは言った。

「神々の主よ、もし私の企てが、あなたの企てと同じように無益だと思うなら、パーカを殺した方よ、私に可能なことをかなえて下さい。神群の主よ。私が他の人々を凌駕するよう、願いをかなえて下さい。(三九―四〇)」

ローマシャは語った。――

インドラは大苦行者の願いをかなえてやった。

「望み通り、父親とともに、汝に諸ヴェーダが顕われ出るであろう。(四一)そしてその他の汝が望む願いも[かなうであろう]。ヤヴァクリーよ、帰りなさい。(四二)」

彼は願いをかなえられて、父のもとに言って告げた。(第百三十五章)

ヤヴァクリーは言った。

「私と父上の二人に諸ヴェーダが顕われ出るでしょう。そして我々は他の人々を凌駕するでしょう。私は願いをかなえられました。(一)」

バラドゥヴァージャは言った。

「息子よ、望み通りの願いをかなえられて、お前に慢心が生ずるだろう。そして慢心に満ちて、哀れにもお前は速やかに滅びるであろう。(二)この点について、神々に述べられた詩句が例証となる。

息子よ、かつてバーラディという精力的な聖仙がいた。(三)彼は息子の死に嘆き悲しみ、難行の苦行を行なった。『私に不死の息子がありますように』と。そして彼は息子を得た。(四)神々は彼に恩寵を与えた。しかし(息子を)不死者(神)たちと等しいものにはしなかった。

『不死である人間は存在しない。彼はある依所により定められた寿命を有する者となろう。(五)』

バーラディは言った。

『最高の神々よ、あれらの山々は不滅で、永遠に立っています。私の息子の寿命はあれを依所として下さい。(六)』」

バラドゥヴァージャは続けた。

「やがて彼に息子のメーダーヴィンが生まれた。彼はいつも短気であり、誕生の事情を聞いて慢心し、聖仙たちを軽蔑した。(七)彼は聖者(ムニ)たちを悩ませながら地上を遍歴しているうちに、強力で賢明なダヌシャークシャに遭遇した。(八)メーダーヴィンはその聖仙を侮辱した。その強力な聖仙は彼を呪った。『灰になれ』と。しかし、そう言われても、彼は灰にならなかった。(九)強力なダヌシャークシャは、メーダーヴィンが無事なのを見て、水牛たちを用いて、彼の依所(山)を破壊した。(一〇)依所が破壊されて、その子供はたちまち死んでしまった。父親は死んだ息子を抱いて嘆いた。(一一)悲嘆に暮れている彼を見て、聖者たちはかつてヴェーダに述べられている詩句により告げた。それを私から聞きなさい。(一二)

『人間(死すべきもの)は決して運命を超えることはできない。ダヌシャークシャは水牛たちを用いて山々を破壊した。(一三)』

このように、恩寵を得て強力になった若者たちは、慢心に満ち、速やかに滅んだ。お前はそのようになってはならぬ。(一四)あのライビヤは強力である。彼の二人の息子も同様である。息子よ、注意して彼に近づかないようにせよ。(一五)というのは、彼は怒ったらお前を滅ぼすことができるから。そして、学者、苦行者、偉大な聖仙は怒りっぽいものである。(一六)」

ヤヴァクリーは言った。

「そのようにいたします。父上、決して心配なさいませんように。私は父上を尊敬するように、ライビヤを父として尊敬します。(一七)」

ローマシャは語った。――

ヤヴァクリーは父に優しく告げたが、何ものをも恐れない彼は、他の聖仙たちを悩ませては最高に満足していた。(一八)

(第百三十六章)

ローマシャは語った。——

何ものをも恐れないヤヴァクリーは、歩きまわっているうちに、ライビヤの隠棲所の方に行った。それはマーダヴァ月(四月―五月)のことであった。(一)花咲く樹々に飾られたその神聖な隠棲所で、彼はライビヤの嫁(息子の妻)がキンナラ(半神の一種)の女のようにそぞろ歩いているのを見た。(二)ヤヴァクリーは愛欲に正気を失って、破廉恥にも、恥じらう女に「私とつきあえ」と言った。(三)彼女は彼の性を知っており、彼の呪詛を恐れ、またライビヤの威光をも知り、「そうします」と言って彼の方に行った。(四)それから彼を片隅に連れて行き沐浴させた(原文疑問)。その時、ライビヤがその隠棲所に帰って来た。(五)彼は悩んで泣いている嫁——パラーヴァスの妻——を見て、優しい言葉で慰めながらたずねた。(六)その美しい女は、彼にすべてを告げた。ヤヴァクリーの言ったこと、思案してから自分が彼に答えたことを。(七)ライビヤがヤヴァクリータの行為を聞いた時、彼の心を燃やすかのような激しい怒りが生じた。(八)その短気な苦行者は、その時、怒りにかられ、一本の弁髪を抜いて聖火の中にくべた。(九)すると、彼女と似た姿の女が出現した。それからまた、もう一本の弁髪を抜いて火の中にくべた。(一〇)すると、恐ろしい眼をした、おぞましい姿の羅刹が出現した。両者はライビヤ

に、「どのような仕事をしたらよいでしょうか」とたずねた。(一一)怒った聖仙は、両者に、「ヤヴァクリーを殺してくれ」と告げた。両者は「かしこまりました」と言って、ヤヴァクリータを殺しに出かけた。(一二)

それから、大仙に創造された妖女は彼に近づいて、彼を惑わせて彼の水瓶を奪い去った。(一三)水瓶を奪われてヤヴァクリータが不浄になった時、あの羅刹が矛を振りかざして襲いかかった。(一四)羅刹が矛を持って襲って来るのを見て、ヤヴァクリーは急いで立ち上がり、池の方に逃げて行った。(一五)ところが池が干上がっているのを見て、ヤヴァクリータは急いでありとあらゆる川を求めて行った。しかしそれらも干上がっていた。(一六)彼は矛を持つ恐ろしい羅刹に追い立てられ、恐れて、急いで父の火供(アグニホートラ)の祭場に逃げ込もうとした。(一七)ところが彼がそこに入ろうとした時、盲目のシュードラ(従僕の階層)の番人が力ずくで彼を制止した。そこで彼は入口で立ち往生した。(一八)羅刹はシュードラに制止されているヤヴァクリータを矛で撃った。彼は心臓を断たれて倒れた。(一九)羅刹はヤヴァクリータを殺してライビヤのもとに帰った。そしてライビヤのもとを辞し、例の女とともに立ち去った。(二〇)

(第百三十七章)

ローマシャは語った。——

クンティーの息子よ、バラドゥヴァージャは日々の学習を終え、薪の束を持って自分の隠

棲所に入った。（一）いつもは、すべての火は彼を見ると立ち上がるのだが、その時は、彼の息子が殺されたので、火は彼を迎えなかった。（二）大苦行者は火供における変化を見て、座っている盲目のシュードラの番人にたずねた。（三）

「シュードラよ、どうして火は以前のように私を見て喜ばないのか。そしてお前も。隠棲所においては恙無く行っているのか。（四）私の愚かな息子がライビヤのところへ行ったのではあるまいな。早く私に答えてくれ。私の心は晴れないから。（五）」

シュードラは答えた。

「確かにあなたの愚かな息子はライビヤのところへ行きました。そして強力な羅刹に殺されて横たわっています。（六）彼は矛を持った羅刹に追いかけられて火室に来ましたが、私は入口で彼を両腕で制止しました。（七）彼はひどく不浄で、水を求めていましたが、矛を持つ早足の羅刹に追いつかれて殺されてしまいました。（八）」

ローマシャは語った。——

バラドゥヴァージャはそのシュードラの不幸な言葉を聞くと、息の絶えた息子を抱いて、ひどく悲嘆に暮れた。（九）

「お前はバラモンたちのために苦行を行なったのではなかったか。バラモンたちに学ばれなかった諸ヴェーダが顕われ出るようにと。（一〇）お前は偉大なバラモンたちに対していつも適切にふるまった。一切の生類に対して罪がなかった。しかし、お前は乱暴になって行った。

（一一）わが子よ、私はお前がライビヤの住居に行くことを禁じた。ところがお前は、あの死神ヤマのような残酷な男のところに行った。（一二）あの威光に満ちた男は、お前が年老いた私の一人息子であることを知りながら、邪にも怒りにかられた。（一三）息子よ、ライビヤの行為による息子の死を悼み、お前がいないので、地上において最も愛しい生命を捨てるつもりだ。（一四）ちょうど私が罪なことに息子の死を悼んで身体を捨てるように、罪もないライビヤを、その長男が速やかに殺すこととなろう。（一五）息子が生まれない人々は幸せだ。彼らは息子のことを悲しむことなく幸福に暮らせる。（一六）しかるに、息子ゆえの悲しみから、ひどく心を乱し、苦しんで親友を呪う者たちよりも悪い者がいるだろうか。（一七）私は息子が死んでいるのを見て、親友を呪った。誰か他の人がこのような災禍を経験するだろうか。（一八）」

このように様々に嘆いてから、バラドゥヴァージャは息子を焼いた。それから彼は、燃え盛る火に入った。（一九）

（第百三十八章）

ローマシャは語った。——

ちょうどそのころ、ライビヤの祭主である、栄光に満ちたブリハドデュムナ王がサットラ祭を催した。（一）賢明なブリハドデュムナは、ライビヤの二人の息子、アルヴァーヴァスとパラーヴァスとをサットラ祭の協力者に選んだ。（二）二人は父の許しを得てそこに行った。

ライビヤとパラーヴァスの妻は隠棲所にとどまっていた。（三）さて、パラーヴァスは妻に会いたいと望み、一人で家に帰った。彼は森の中で、黒鹿の皮におおわれた父を見た。（四）夜の終わりであったが、まだ闇が残っている時、彼は眠気で盲目のようになり、深い森の中を歩く父を獣であると思った。（五）彼は獣だと思い、身を守るために心ならずも父を殺した。（六）

　彼は父の葬式一切をすませてから、再びサットラ祭にもどって、弟に言った。（七）

「お前は一人では決してこの祭式を担うことはできない。しかし私は、獣だと思って父を殺してしまったのだ。（八）そこでお前は、どうか私のために、バラモン殺しに対する誓戒を行なってくれ。隠者よ、というのは、私のみがこの祭式を行なうことができるのだから。（九）」

　アルヴァーヴァスは言った。

「あなたが賢明なプリハドデュムナのサットラ祭を行なってくれ。私はあなたのために、感官を制してバラモン殺し〔の際の贖罪法〕を行なおう。（一〇）」

　聖者アルヴァーヴァスはバラモン殺し〔の贖罪法〕を完了してから、再びサットラ祭にもどって来た。（一一）パラーヴァスは弟がもどったのを見て、会場にいるプリハドデュムナに告げた。（一二）

「あのバラモン殺しがあなたの祭祀を見ようとしても入れてはなりません。バラモン殺しは、

見るだけでもあなたを害することは確実です。（一三）」

　アルヴァーヴァスは召使たちに追い出された時、「私はバラモンを殺しませんでした」と何度も言った。（一四）召使たちが繰り返し「バラモン殺しめ」と言った時、彼は自らバラモン殺しをしたとは認めなかった。

「これは私の兄がやったことである。私はそれを贖罪したのです。（一五）」

　神々はアルヴァーヴァスの行為に喜んだ。彼らは彼を〔司祭に〕選び、パラーヴァスを追放した。（一六）それから、アグニをはじめとする神々は彼の願いをかなえることにした。彼はそこで、自分の父が生き返るようにと願った。（一七）更に彼は、兄が無罪になること、父が殺されたことを忘れること、バラドゥヴァージャとヤヴァクリータの二人が生き返ることを願った。（一八）そこで彼らはすべて甦った。その時、ヤヴァクリータは、アグニをはじめとする神々に言った。（一九）

「私はブラフマン（ヴェーダの語）を学び、誓戒を行ないました。どうしてライビヤは、学を修めた苦行者である私を、あのような方法で殺すことができたのですか。最高の神々よ。（二〇）」

　神々は告げた。

「聖者ヤヴァクリータよ、お前の言うようにはしてはならぬ。というのは、お前はかつて師（グル）なしで、容易に諸ヴェーダを学んだのだから。（二一）一方彼は、その行ないにより苦労して師たちを満足させて、長い期間かけて、辛苦の末最高のブラフマンを学んだのである。（二二）」

ローマシャは語った。——
アグニをはじめとする神々は、彼らすべてを甦らせてから、ヤヴァクリータにこのように告げると、再び天界へ帰って行った。(二三)
これが彼の神聖なる隠棲所である。そこでは樹々は常に花と実をつけている。王中の虎よ、ここに滞在すれば、すべての罪障から解放されるであろう。(二四)(第百三十九章)

ガンダマーダナ山のパーンダヴァたち

ローマシャは言った。
「王よ、カイラーサ山は六百由旬(ヨージャナ)あり、そこには神々が集まっている。そこにはヴィシャーラー(バダリー)川が流れている。(一九略)(二〇)そこにはクベーラの宮殿があり、無数の夜叉(ヤクシャ)、羅刹、キンナラ、竜(ナーガ)、スパルナ(ガルダ)、ガンダルヴァたちが住む。(二一)プリターの息子よ、今、苦行と自制により彼らの間に入りなさい。私とビーマセーナの力とに守られて。(二二)王者ヴァルナ、戦勝者ヤマ、ガンガーとヤムナーとこの山とが、あなたを祝福せんことを。(二三)
女神ガンガーよ、インドラの黄金の山の頂で、私はあなたの音を聞く。美しい方よ、山々から彼を守れ。すべてのアージャミーダ族の人々に敬われる王を。山の娘よ、山々に入ろうとしているこの王の守護となれ。(二四)」
ユディシティラは言った。
「ローマシャが恐れるのは、かつてないことだ。みんなクリシュナー(ドラウパディー)を守れ。油断してはならぬ。というのは、この地方は最も難所であると彼は考えているから。それ故、ここで最高の清浄行を守れ。(二五)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。

それから彼は勇猛なビーマに告げた。——

「ビーマセーナよ、努めてクリシュナーを守れ。弟よ、アルジュナが遠く離れて不在の時、危険な際、クリシュナーはお前だけが頼りだ（異本による）。（二六）」

それから偉大な王は双子（ナクラとサハデーヴァ）に近づいて、頭に接吻し身体に触れ、涙声で言った。

「恐れることはない。油断することなく進みなさい。（二七）」

（第百四十章）

ユディシティラは言った。

「ここには見えない生き物や強力な羅刹たちがいるが、火と苦行とにより越えることができる。狼腹（ヴリコーダラ）（ビーマ）よ。（一）力を伴侶として飢えと渇きを除去せよ。クルの王子よ、力と巧妙さに寄る辺を求めよ。（二）お前はカイラーサ山に関する聖仙の言葉を聞いた。知性により考えて見よ。どうしてクリシュナーが越えられよう。（三）勇者よ、むしろサハデーヴァ、ダウミヤ、料理人、厨房長、すべての召使、車、馬、及び、道中の辛苦に耐え得ないその他のバラモンたちすべてとともに引き返しなさい。切れ長の眼のビーマよ。（四—五）私とナクラと大苦行者ローマシャの三人は、節食し、誓戒を守り、進んで行くことにする。（六）ガンガー・ドゥヴァーラにおいて、私の帰りを待ちつつ、ドラウパディーを守って、私が帰るまで滞在していなさい。（七）」

ビーマは言った。

「王女は疲れ苦悩しています。しかしこの美しい女性は、アルジュナに再会したいと望み、旅を続けます。（八）あなたも彼を見ることができないでひどく苦しんでいます。いわんや、サハデーヴァや私やクリシュナーを見なければどうなるでしょう。（九）もしあなたがそう思われるなら、車やすべての召使や料理人や厨房長を引き返させてもよいでしょう。（一〇）しかし私は、決してここであなたを捨てようとは思いません。この羅刹に満ちた、難儀で険阻な山の中で。（一一）この誓戒を守る栄光に満ちた王女は、あなたなしでは引き返せないでしょう。（一二）同様に、常にあなたに献身的なサハデーヴァも、決して引き返さないでしょう。私は彼の考えを知っていますから。（一三）それにまた、大王よ、すべての者がアルジュナに会いたいと切望しています。ですから、いっしょに行きましょう。（一四）もし、多くの谷に富むこの山を車で越えることができないなら、徒歩で行きましょう。王よ、失望してはなりません。（一五）パーンチャーラの王女（ドラウパディー）が歩けないところは、私が彼女を背負います。私はこのように決心しました。王よ、失望してはなりません。（一六）非常に繊細な、マードリーの息子である二人の勇士が、難所においてもし進めなくなったら、私が越えさせましょう。（一七）」

ユディシティラは言った。

「ビーマよ、お前がそのように言う時、お前の力が増大するように。長い道中、ドラウパディーと双子を運ぶことができるように。どうかそうしてくれ。そのようなことは他の者には

できない。お前の力、誉れ、法（ダルマ）、名声が増大するように。勇士よ、あなたが落胆したり敗北したりすることのないように。（一八―一九）クリシュナーと双子の兄弟を運ぶのだから。（二〇）」

それから、美しいクリシュナーは微笑して告げた。——

ヴァイシャンパーヤナは語った。

「バーラタよ、私は行きます。私について悩まないで下さい。（二一）」

ローマシャは言った。

「ガンダマーダナ山は苦行により越えることができます。クンティーの息子よ、我々はみな苦行に専念しましょう。（二二）ナクラ、サハデーヴァ、ビーマセーナ、私、そして王であるあなたは、アルジュナに会えるでしょう。（二三）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

そのように語っていた時、彼らは多くの象と馬のいるスバーフの広大な領土を見て喜んだ。（二四）それはヒマーラヤ山中にあり、キラータ族やタンガナ族に満ち、幾百のクニンダ（プリンダ？）族に満ちていた。神々が住み、多くの驚異に満ちていた。（二五）クニンダ族の長スバーフは、国境で彼らを見て歓迎した。（二六）一同はそこでもてなされて快適に過ごし、太陽が明るく輝く朝、ヒマーラヤ山へ出発した。（二七）インドラセーナをはじめとする臣下、厨房長、料理人、ドラウパディーのつき人たちをすべてクニンダ王に預けて、強力な勇士、クルの王子（パーンダヴァ）たちは徒歩で進んだ。（二八―二九）パーンダヴァ一同は、クリシュナーを連れ、アルジュナに会うことを望み、喜び勇んで、その国から粛々と出発した。（三〇）

（第百四十一章）／（第百四十二章略）

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

弓を張り、箙と矢を持ち、弓籠手（ゆごて）と弓懸（ゆがけ）をつけ、剣を持つ、無量の威光に満ちた勇士たち、すべての弓取りの最上者である勇士たちは、最高のバラモンたちを擁し、パーンチャーラの王女をともない、ガンダマーダナ山（香酔山）へ行った。（一―二）彼らは湖や川や山や森を見た。山の頂に、大きな蔭を投げる樹々を見た。神々や聖仙の群の住む、常に花や果実のある場所を見た。（三）勇士たちは根や実を食べ、自己を抑制して、起伏の激しい険阻な場所を歩きまわった。多種多様の獣たちを見ながら。（四）偉大な男たちは、聖仙やシッダや神々のいる、ガンダルヴァや天女（アプサラス）の好む、キンナラの住む山に入った。（五）

さて、勇士たちがガンダマーダナ山に入った時、激しい風が吹き大雨が降った。（六）それから、多くの葉とともに多量の塵芥が舞い上がり、大地と空間と天をおおった。（七）空が塵におおわれた時、何も見分けがつかなくなり、彼らは互いに話すこともできなくなった。（八）彼らはまた、闇に視力を奪われ、お互いに見られなくなった。彼らは砂利まじりの風に引きずられた。（九）風で折られて、激しく地面に倒れる樹々や、その他の樹々も、大きな音

をたてた。(二〇)
「天が地上に落ちたのであろうか。それとも山々が裂けたのだろうか。」すべての人々は風に幻惑されてそのように考えた。(二一) 彼らは風を恐れ、手近にある樹木、蟻塚、窪地を手で探って避難した。(二二) 強力なビーマセーナは弓を構え、たまたま会ったクリシュナー（ドラウパディー）をつかんで、木に避難して立っていた。(二三) ダルマ王（ユディシティラ）(二四) ナクラと大苦行者ローマシャと、その他のバラモンたちは、樹々に避難し、恐れてあちこちに身を寄せていた。(二五)

風がゆるやかになり、砂塵がおさまるとすぐに、大粒の雨が降り始めた。(二六) それから、突風にあおられた雹の混った大雨が、あらゆる場所を満たしながら、絶え間なく降った。(二七) それから、海に向う川々の水は濁り泡立ち、いたるところで溢れ出た。(二八) 川々は多量の水をたたえ、多くの泡や漂流物におおわれ、大きな音をたて、樹々を引き倒しながら流れて行った。(二九) 雨がやみ風がおさまり、川の水が低地に去り、太陽が現われた時、彼ら一同は徐に〔避難所を〕出て再会した。そしてその勇士たちは、再びガンダマーダナ山に向けて出発した。(三〇—三二)

（第百四十三章）

羅刹ガトートカチャの援助

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

それから、偉大なパーンダヴァたちが出発したばかりの時、徒歩で行くことに慣れていないドラウパディーは座り込んでしまった。(一) あの風と雨によって疲労困憊した誉れ高いパーンチャーラの王女は、非常に繊細でもあったので、意識を失った。(二) 黒い瞳の女は意識を失って倒れながら、その丸い釣合いのとれた両腕で両腿をつかんだ。(三) 象の鼻のような、そろえた腿をつかみながら、彼女は突然バナナの木のようにふるえながら大地に倒れた。(四) 美しい尻の女が、まつわりつく蔓草のように倒れた時、強力なナクラは彼女に駆け寄って抱きしめた。(五)

ナクラは言った。

「王よ、黒い瞳のパーンチャーラ王の娘は疲れて地面に倒れました。バーラタよ、彼女を見て下さい。(六) この優美に歩む女は、苦労に慣れておらず、最高の苦しみに達しました。大王よ、この疲れ果てた女性を慰めてあげて下さい。(七)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

その言葉を聞いて、王はひどく苦しんだ。ビーマもサハデーヴァも、速やかに駆け寄った。

(八) 徳性あるクンティーの息子は、蒼白な顔をした痩せた女を見て、膝に抱き、悩み、悲嘆に暮れた。(九)

「この幸福にふさわしい美しい顔色の女は、守られた家において、快適に敷かれた寝床で寝るのに慣れているのに、どうして地面に倒れて横たわっているのか。(一〇) この恩寵にふさわしい女の繊細な両足と、蓮のような顔は、どうして私のために、今、黒ずんでしまったのか。(一一) 賭博を望んだ私は、考えなしに、何をしてしまったか。獣のいる森を、クリシュナーを連れてさまよって。(一二)

『パーンチャーラの王女は、パーンダヴァを夫として得て、幸福になるであろう』と言って、父のドルパダ王はこの切れ長の眼の女を与えた。(一三) 彼女はそんなものはまったく得ないで、疲れと悲しみにやつれ、大地に倒れて横たわっている。これもこの罪深い私の所業のせいだ。(一四)」

ダルマ王ユディシティラがこのように嘆いている時、ダウミヤをはじめとするすべての最高のバラモンたちがそこに集まって来た。(一五) 彼らは彼を慰め、祝福により敬った。そして羅刹を滅ぼす呪句(マントラ)を唱え、祭式を行なった。(一六) 最高の聖仙たちが鎮静のために呪句を唱えている間に、パーンダヴァたちは冷い手で幾度も彼女に触れ、水の混った冷い風により彼女を介抱した。パーンチャーラの王女は気持よくなり、次第に意識を回復した。(一七―一八) 彼らは哀れなクリシュナーを鹿皮の寝床に寝かせて、意識を取りもどした哀れな女性を慰めた。(一九) 双子は彼女の吉祥の印のついた赤い足を、肉刺(まめ)のできた手でゆっくりとさすった。

(二〇) ダルマ王ユディシティラは彼女を慰めた。そしてクルの最上者はビーマセーナに告げた。(二一)

「ビーマよ、険阻な、雪で越えがたい多くの山々がある。勇士よ、クリシュナーはそれらの山の中をどのようにして歩くことができるか。(二二)」

ビーマセーナは言った。

「王中の王よ、あなたと、王女と、人中の雄牛である双子を、私自身が導きましょう。絶望してはなりませぬ。(二三) あるいは、非の打ち所のない方よ、私から生まれた、私と等しい力を持つ、空を飛ぶことのできるガトートカチャが、あなたの命令により、我々すべてを運ぶでしょう。(二四)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ダルマ王に承諾されたビーマは、息子である羅刹のことを想起した。徳性あるガトートカチャは、父に想起されるやいなや、合掌してその場に現われた。その勇士はパーンダヴァたちとバラモンたちに挨拶し、彼らからも挨拶された。その不屈な勇者は、父のビーマセーナに言った。(二五―二六)

「私はあなたに想起されました。私は急いでお仕えするためにやって来たのです。勇士よ、御命令下さい。私はきっと何でもいたします。」

それを聞くと、ビーマセーナは羅刹を抱きしめた。(二七)

(第百四十四章)

ユディシティラは言った。
「ビーマよ、この法(ダルマ)を知り強力で勇猛な羅刹の雄牛、我々に献身的なあなたの実子が、すぐに母（ドラウパディー）を運ぶようにしてくれ。(一) 恐ろしく勇猛なビーマよ、お前の力により私はパーンチャーラの王女とともに、傷つくことなくガンダマーダナ山を越えることができる。(二)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――
人中の虎ビーマセーナは兄の言葉を聞くと、敵を苦しめる息子ガトートカチャに命じた。(三)
「ヒディンバーの無敵の（異本による）息子よ、お前の母（ドラウパディー）は疲れ果てた。息子よ、お前は欲するがままに進むことができ、強力である。空を飛行するものよ、彼女を運べ。(四) どうか彼女を肩にのせ、我々の中央で低空を飛行せよ。彼女を恐れさせないように。(五)」
ガトートカチャは言った。
「私は一人でも、ダルマ王、ダウミヤ、王女、双子を運ぶことができます。いわんや今日は仲間がいますからなおさら容易です。(六)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――
勇猛なガトートカチャは、そう告げると、パーンダヴァたちの中央を進み、クリシュナーを運んだ。他の〔羅刹〕たちがパーンダヴァたちを運んだ。(七) 無比の輝きを放つローマシャは、自分自身の威力により、第二の太陽のように、シッダの道を通って行った。(八) 恐ろしく勇猛な羅刹たちは、羅刹の王の命令により、すべてのバラモンたちを運んで行った。(九) このようにして、彼らは美しい森や林を眺めつつ、バダリー・ヴィシャーラー（「大きな棗(なつめ)の木」、三・一四五・一七参照）をめざして進んで行った。(一〇) 勇士たちは、強力で高速の羅刹たちに運ばれて、わずかの距離であるかのように長い道のりを速やかに越えた。(一一) 彼らは蛮族の群に満ちた土地、種々の宝物の鉱山のある土地を見た。種々の鉱脈の集積した山麓を見た。(一二) ヴィディヤーダラ（半神の類）の群に満ちた土地、いたるところ猿やキンナラ、キンプルシャ、ガンダルヴァのいる土地を見た。(一三) 多くの川に満ち、種々の鳥の声に満ち、種々の獣に満ち、猿に飾られた土地を見た。(一四) 彼らは多くの国土を過ぎ、北クルをも過ぎ、種々の驚異に満ちた最高の山カイラーサを見た。(一五)
その付近に、彼らはナラとナーラーヤナの隠棲所を見た。それは常に花と果実をつけた神々しい樹々に満ちていた。(一六) そして彼らは、太い幹をした魅力的な例の棗(バダリー)の木を見た。それは艶々していて、陰繁く、最高の美をそなえていた。(一七) 青々した、多くの、柔らかい葉をつけて美しく、大きな枝を持ち、大きく広がり、こよなく輝いていた。(一八) それは蜜を滴らす非常に甘い多くの神的な果実に満ち、神聖であり、いつも大仙の群が集い、

常に発情して喜ぶ種々の鳥の群に満ちていた。（一九）その木の生えている土地は、蚊やぶよがおらず、多くの〔食用の〕根と実と水があり、青草におおわれ、神々やガンダルヴァが住んでいた。（二〇）その土地の部分は非常に平らかで、本来美しく、雪が優しく触れ、茨が無かった。（二一）

偉大な人々は、バラモンの雄牛たちとともにその棗の木に近づいて、一同は羅刹の肩から徐(おもむろ)に下りた。（二二）パーンダヴァたちは、バラモンの雄牛たちとともに、ナラとナーラーヤナのその聖なる隠棲所を見た。（二三）その聖なる場所は、太陽の光が触れないでも闇(タマス)が無く、飢えや渇きや寒暑の苦しみが無く、悲しみを無くさせた。（二四）そこは大仙の群にあふれ、ヴェーダの光輝をそなえ、法(ダルマ)を欠いた人々には入りがたい所であった。（二五）そこは供物や護摩で清められ、神々しく、よく純化された塗香があった。神々しい花や供物により、いたるところ輝いていた。（二六）それは広大な聖火堂とすばらしい杓(しゃく)に満ちていた。大きな水瓶や土器により飾られていた。そこは一切の生類の寄る辺であり、梵音が響いていた。（二七）その神聖で疲労を除く、寄る辺を求めるべき隠棲所は、光り輝き、筆舌に尽くしがたく、神々への奉仕で飾られていた。（二八）そこには、解脱に専念する大仙や、感官を制御した苦行者たちや、ブラフマンと合一した高徳のヴェーダ学者たちがいた。彼らは木の実と根を食べ、自己を制御し、綴れと黒鹿の皮をまとい、熱力(タパス)の点で太陽や火に等しく、その心が浄められていた。（二九―三〇）

威光に満ち、自制し、清浄で賢明な、ダルマの息子ユディシティラは、弟たちとともにそこに近づいた。（三一）神的な知識をそなえ、こよなくヴェーダの学習に専念するすべての大仙は、ユディシティラが来たのを見て、祝福の言葉を述べながら、大喜びで出迎えた。（三二）火のように輝く彼らは、作法通りに彼らを歓待し、清浄な水と花と根と木の実を出した。（三三）ダルマの息子ユディシティラは、大仙たちによるもてなしを、喜んで恭しく受けた。（三四）それから、不屈のパーンドゥの息子は、クリシュナー（ドラウパディー）や弟たちや、ヴェーダとその補助学に通じたバラモンたちとともに、インドラの王宮のような、神々しい香りのする、魅力的な、天界にも似た、輝きに満ちた聖域に喜んで入った。（三五―三六）

そこで、徳性あるユディシティラは、神々や神仙に敬われ、ガンガー（ガンジス）川に飾られた、ナラとナーラーヤナの聖域を見た。（三七）偉大な勇士たちは、蜜の滴る果実をつけた、神聖で大仙の群の住むその樹に、バラモンたちとともに近づいて滞在した。（三八）彼らは種々の鳥の群のいるマイナーカ山、ヒラニヤシカラ、吉祥なるビンドゥ湖を見た。（三九）彼らは聖河バーギーラティー（ガンジス）を見た。それは冷くて清らかな水をたたえ、吉祥で、宝玉と珊瑚におおわれ、樹々に飾られていた。（四〇）それは神的な花に満ち、心の喜びを増させる。偉大なパーンダヴァたちは、その川を眺めつつ時を過ごした。（四一）人中の雄牛である勇士たちは、そこで神々や祖霊たちを何度も満足させつつ、バラモンたちとともに滞在した。（四二）人中の虎、神のように輝くパーンダヴァたちは、クリシュナーが種々に戯れるのを見て楽しんだ。（四三）

（第百四十五章）

ビーマと神猿ハヌーマット

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

人中の虎たちは、ダナンジャヤ（アルジュナ）に会いたいと望み、最高の清浄さを保ち、そこに六夜の間滞在した。パーンダヴァたちは、すべての生類の心を楽しませる魅力的なすばらしい森で、楽しみながら時を過ごした。開花し、果実の重みでたわみ、いたるところ美しく、雄のコーキラ鳥に満ちた樹々、青々とした葉をつけ、茂り、冷い陰を投げる魅力的な樹々に飾られた〔森〕、また、澄みきった水をたたえた色とりどりの湖、いたるところ紅蓮(カマラ)や青蓮(ウトパラ)で輝いている魅力的な形の湖を見て楽しんだ。（一―四）そこでは、芳香を含み、感触のよい風が吹いていた。すべてのパーンダヴァと、クリシュナーと、バラモンの雄牛たちを喜ばせつつ。（五）それから、たまたま東北の風が吹き、千弁の、太陽に似た神聖な蓮花を運んだ。（六）パーンチャーラの王女は、その神々しい香りの、清らかで魅力的な蓮が風に運ばれて地面に落ちるのを見た。（七）美しい女は、その美しく最高のサウガンディカ花を見て非常に喜び、ビーマセーナに告げた。（八）

「ビーマよ、この美しく輝く最高の神の花を見なさい。それは香りと形が見事で、私の心を楽しませる。（九）私はこれをカーミヤカの隠棲所にいるダルマ王にさし上げます。お願いですから私のためにそれをもっと取って下さい。（一〇）ビーマよ、もしあなたが私を愛しているなら、もっとたくさん持って来て下さい。私はカーミヤカの隠棲所にそれを持ち帰りたいと思います。（一一）」

非の打ち所のないパーンチャーラの王女は、ビーマセーナにこのように告げると、花を持ってダルマ王のもとに行った。（一二）

人中の雄牛である恐ろしく勇猛なビーマは、王妃の意向を知って、愛しいひとに喜んでもらいたいと望み、その花を運んで来た風の方角に向かって速やかに進んだ。他の花々を取って来ようと思って。（一三―一四）彼は金張りの弓と、毒蛇のような矢を持ち、怒った獣王（獅子）か発情した象のようであった。（一五）強力な男は、ドラウパディーに喜んでもらいたいと望み、自分の腕力にまかせて、恐れも迷いもなく、山を登って行った。（一六）無敵の彼は、木や蔓草や藪におおわれ、黒い岩石におおわれた、キンナラの住む清浄な山を歩きまわった。（一七）その山は種々の色を持つ鉱脈や木や獣や鳥により多彩であった。すべての装飾に満ち、大地の腕のようにそびえていた。（一八）（一九―四一略）

やがて、勇士はガンダマーダナ山の峰において、何由旬(ヨージャナ)も広がる美しいバナナの林を見た。（四二）大力のビーマは、それを揺すろうとして急いで近づいた。発情した象のように、種々の木々を砕きながら。（四三）強力の者たちのうちの最高者であるビーマは、多くの棕櫚のようにそびえるバナナの幹を引き抜いて、いたるところに力まかせに放り投げた。（四四）それから、多くの大きな生物や、ルル鹿と猿の群、水牛、水棲動物がやって来た。（四五）非常に恐ろしい獅子や虎が怒って口を開き、凄まじい大声で吼えながら、ビーマセーナに襲い

かかって来た。(四六) 勇猛な風神の息子ビーマは怒って、自分の腕力に訴え、象により象を、獅子により獅子を殺した。更に、その強力なパーンダヴァは、平手打ちで他の動物たちを殺した。(四七) 獅子や虎やハイエナたちは、ビーマに殺されそうになって、恐怖によりすべて糞と尿をたらしながら逃げ去った。(四八) 彼らを追い散らして、栄光ある強力なパーンドゥの息子は速やかに森に入り、喧噪で森を満たした。(四九) その恐ろしい音により、またビーマセーナの叫びにより、森の中にいるすべての鳥獣は戦慄(おのの)いた。(五〇) 突然、鳥獣のたてる音を聞いて、水で羽根の濡れた水鳥たちが幾千となく飛び立った。(五一) バラタの雄牛はそれらの水鳥の群を見て、それらのあとをたどり、美しい大湖を見出した。(五二) それはゆるやかな風に揺れる、向う岸に広がる金色のバナナの林に扇がれているかのようであったが、波立つことはなかった。(五三) 無量の輝きを有するその強力極まりない男は、巨象のように、速やかに、多くの紅蓮と青蓮の咲いたその湖に勢いよく飛び込み、そこで長らく遊んでから岸に上がった。(五四) それからビーマは、速やかに多くの樹木のあるその森に入り、すべての息を出して、法螺貝を高らかに吹き鳴らした。(五五) その法螺貝の音により、またビーマセーナの叫びにより、また恐ろしい彼の腕の音により、山の洞窟は反響した。(五六) その金剛杵(ヴァジュラ)の打撃にも似た、猛烈な腕を打つ音を聞いて、山の洞窟で眠っている獅子たちは、大音声を放った。(五七) 獅子の吠え声を恐れた象たちも、大きな叫び声をあげた。それにより山は満たされた。(五八)

ところで、猿の雄牛であるハヌーマットという巨大な体をした猿は、眠っていたが、その

音を聞きつけてあくびをした。(五九) 彼はバナナの林の中で眠っていたが、あくびをし、インドラの旗のようにそびえ立つ非常に長い尾を打ちつけて、インドラの雷電のような音をたてた。(六〇) 彼の尾の音に対し、山はその洞窟という口により、牛が吠えるように、いたるところで反響した。(六一) 彼のその尾の音は、興奮した象の鳴き声を圧倒して、多彩な色の山の尾根に広がった。(六二)

ビーマセーナはその音を聞くと、体毛をさか立て、音の源を探して、バナナの森を歩きまわった。(六三) やがて勇士は、バナナの森の中の大きな平石に座っている猿の王を見た。(六四) 彼は稲妻の群に似て、稲妻の群のように見られがたく、稲妻の群のように黄色で、稲妻の群のように敏捷であった。(六五) 彼は十字形の腕(肩)に、太くて短い首をつけ、肩幅が非常に広いので細く見える胴と尻をしていた。(六六) 旗のように上方に立ち、先端が少し曲っており、長い毛が生えている尾によって、彼は輝いていた。(六七) (彼の)顔は赤い唇を持ち、銅色の舌のある口を持ち、赤い耳を持ち、眉を動かし、光輝を放つ月のように牙を口のまわりにむき出していた。(六八) 口の中にある白い(歯の)輝きにより飾られていた。それは豊かなたてがみがつき、アショーカの花束のようであった。(六九) 彼は黄金のバナナの樹々の間に座り、大なる光輝を有し、その体により輝いて、燃え上がる火のようであった。(七〇) その勇猛で強力な最高の猿は、蜜のように黄色い眼で、恐れることなく見つめていた。(七一)

その時、恐ろしく勇猛なビーマは、急いで近づいて、猿に知らせるために獅子吼をした。

(七二) ビーマの叫びにより、鳥獣はふるえ上がった。しかし、気力に満ちたハヌーマットは、わずかに両眼を開けて、蜜のように黄色い眼で、馬鹿にしたように見た。(七三) 猿は人間であるクンティーの息子に、微笑みながら言った。

「私は病気でぐっすりと眠っていたのに、どうして私を起こしたのか。(七四) あなたはよく分別して、生類に憐れみをかけるべきではないか。我々は畜生であるから、法(ダルマ)を知らない。(七五) しかし知性をそなえた人間は生類に憐れみをかけるものだ。あなたのような知性のある人が、どうして、身体と言葉と心を害する、法を損なう残酷な行為に執着するのか。(七六) あなたは法を知らない。あなたは長老を尊重しない。愚かにも森に住む獣たちを滅しているのだから。(七七) 言いなさい。あなたは誰か。いかなる目的でこの人気(ひとけ)のない森に来たのか。(七八) これより先は、この山は進みがたく登りがたい。勇士よ、ここにはシッダ(半神の一種、または最高の聖者)の道以外には、道は存在しない。(七九) 強力な者よ、私は憐れみから、また友情から、あなたを制止する。これから先は、あなたは進むことはできない。休息せよ。(八〇) もし私の言葉を聞き入れてくれるなら、これらの甘露のような根と木の実を食べて、引き返しなさい。(八一)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

(第百四十六章)

賢明な猿の王の言葉を聞くと、敵を苦しめる勇士ビーマセーナは言った。(一)

「あなたは誰か。何故に猿の姿をとっているのか。バラモンに次ぐ種姓である王族(クシャトリヤ)があなたにたずねる。(二) 月種に属するクル族の、クンティーの胎に生まれたパーンダヴァ、風神の息子ビーマセーナという者が。(三)」

風神の息子ハヌーマットは、ビーマの言葉を微笑して聞くと、同じく風神の息子であるビーマに告げた。(四)

「私は猿だ。あなたの望むままに道を譲りはしない。引き返した方がよい。あなたが破滅しないように。(五)」

ビーマは言った。

「破滅であろうと何であろうと、俺はそんなことをあなたにたずねてはいない。猿よ、立ち上がって私に道を譲れ。あなたが破滅しないように。(六)」

ハヌーマットは言った。

「私には立ち上がる力はない。私は病気で苦しんでいるのだ。もしどうしても行かなければならぬなら、私を飛び越えて行きなさい。(七)」

ビーマは言った。

「属性のない最高我があなたの体を遍充している。知識によって知られ得るそれを、私は軽んじないし、飛び越えることもできない。(八) もし私が聖典により、生類を創造した者を知らないなら、あなたとこの山とを飛び越えられるのだが。ハヌーマットが海を飛び越えたように。(九)」

ハヌーマットは言った。
「海を越えたハヌーマットというのは一体誰のことか。クル族の最上者よ、私はあなたにたずねる。もしできるなら答えなさい。(二〇)」
ビーマは言った。
「彼は私の兄弟で、その美質により讃えられ、知力と精神力をそなえた、『ラーマーヤナ』において非常に有名な勇士である猿の雄牛である。(二一)その猿の王はラーマの妃のために、百由旬(ヨージャナ)にも及ぶ海を一跳びで越えた。(二二)その強力な者は私の兄弟である。私は威光にかけて、また、力と勇武と戦闘において、彼と同等である。私はあなたをうち負かすことができる。(二三)起き上がりなさい。私に道を譲りなさい。さもなくば今、私の勇猛さを見ることになる。私の命令を聞かないで、私にヤマ(閻魔)の王国に送られることのないように。(二四)」
ヴァイシャンパーヤナは語った。――
彼が力に酔い、腕力を誇っているのを見て、ハヌーマットは心の中で笑って言った。(二五)
「許して下さい。非の打ち所のない方よ、老いにより私には起き上がる力がありません。私を哀れと思い、この尾をどけて通って下さい。(二六)」
ビーマは馬鹿にして笑いながら、左手で大猿の尾をつかんだが、それを動かすことはでき

なかった。(二七)そこでビーマはインドラの武器のようにそびえる尾を両腕で持ち上げようとした。しかし、大力の彼が両腕を使っても、それを持ち上げることはできなかった。(二八)そこでビーマは眉をつり上げ、眼を見開き、眉をひそめて、体中汗をかいたが、持ち上げることはできなかった。(二九)栄光あるビーマは努力したが、尾を持ち上げることができず、猿のそばに立って、恥じてうつ向いていた。(三〇)そしてクンティーの息子は平伏し、合掌して言った。
「猿の中の虎よ、許して下さい。私の無礼な言葉を辛抱して下さい。(三一)あなたはシッダですか、神ですか、ガンダルヴァですか、あるいはグフヤカですか。もしよろしかったら言って下さい。猿の姿をとったあなたは誰ですか。(三二)」
ハヌーマットは答えた。
「勇士よ、あなたは私について知りたいと熱心に望んでいる。そこですべてを残らず聞きなさい。パーンドゥの王子よ。(三三)私は世界の息吹きである風によってケーサラの妻に生まれた。蓮弁の眼をした者よ、私はハヌーマットという猿である。(三四)すべての強力な猿の群の長たちは、太陽神の息子のスグリーヴァと、インドラの息子のヴァーリンという、二頭の一切の猿の王たちに仕えていた。私はスグリーヴァと親しくしていた。風が火と親しいように。(三五―三六)
スグリーヴァはある事情で、兄によって追放され、私とともにリシャムーカに長らく滞在していた。(三七)そのころ、ダシャラタの息子であるラーマという強力な勇士――実はヴィ

シュヌが人間の姿をとったもの——が、この地上を遍歴していた。(二八)その最高の弓取りは、父親によかれと望み、妻（シーター）と弟を連れ、弓を持ち、ダンダカの森に滞在した。(二九)ラーヴァナは、鹿の姿を示して聡明なラーガヴァ（ラーマ）を騙し、ジャナスターナ（地名）から、無理矢理にその妻を奪った。(三〇)妻を奪われたラーマは、弟とともに妻を探しているうちに、山の峰において猿の雄牛であるスグリーヴァを見た。(三一)偉大なラーマとスグリーヴァの間に友情が生まれ、ラーマはヴァーリンを殺してスグリーヴァを王位につけた。

彼はシーター探索のために猿たちを派遣した。(三二)そこで私も無数の猿たちとともにある方角に進んで行ったところ、ある禿鷲によってシーターの消息を伝えられた。(三三)それから私は、汚れなき行為のラーマが目的を成就するために、急いで百由旬（ヨージャナ）にも及ぶ海を飛び越えた。(三四)私はラーヴァナの住居で王妃に会って、そしてそこでわが名を輝かせてから引き返した。(三五)それから、勇猛なラーマはすべての羅刹たちを殺し、ヴェーダの啓示のように失われた妻を取りもどした。(三六)ラーマが出発した時、私はその勇士に頼んだ。『敵を殺す勇士よ、世界中にラーマの物語が存続する限り、私が生きながらえるように』と。『そのようであれ』と彼は言った。(三七)

ラーマは一万一千年間王国を治めた後、天界へ逝（い）った。(三八)なあ、非の打ち所のない者よ、ここでは天女やガンダルヴァたちが、あの勇士の業績を歌って私を楽しませてくれる。(三九)クル族の王子よ、この道は人間には行きがたい。そこで私は、あなたがこの神の住む道を進むのを制止したのだ。バーラタよ、誰かがあなたを害したり呪詛したりしないように

と。(四〇)これは神聖な神の道である。人間はここを進むことはできない。しかし、あなたがめざして来た湖は、すぐ近くにある。(四一)」（第百四十七章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

栄光ある勇士ビーマセーナは、このように告げられて満足し、平伏し、喜んで、兄弟である猿王ハヌーマットに、柔和な声で言った。(一)

「兄上にお目にかかり、私より幸運な者はおりません。あなたに会えて、非常に有難く、また満足しています。(二)しかし兄上、今日私に好意をかけていただきたいと思います。勇者よ、あなたがマカラ（海豚または鰐）の住処である海を飛び越えた時の姿を見たいと思います。(三)そうすれば私は満足し、あなたの言葉を信ずるでしょう。」

このように言われて、威光ある猿は笑って告げた。(四)

「お前や誰か他の者は、その姿を見ることができない。あの時は時代が今とは異なっていた。(五)時代はクリタ紀においては異なっている。トレーター紀、ドゥヴァーパラ紀においてはまた異なっている。今は破滅の時代である。今では私はあの姿をとることはできない。(六)大地、河川、山々、シッダたち、神々、大仙たちは、諸物と同じく、宇宙紀（ユガ）ごとに時代に従っている。というのは、腕力や体や威力は衰えたり増大したりするから。(七)それ故、クル族の王子よ、あなたはあの姿を見ることはできない。私も宇宙紀に従うから。時代というも

のは乗り越えることができない。（八）」（九―三九略）（第百四十八章）

ビーマは言った。

「私はあなたのかつての姿を見ないうちは決して決して立ち去りません。もし好意をかけて下さるなら、御自身の姿を見せて下さい。（一）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ビーマにこのように言われて、猿は微笑して、海を越えた時の姿を示した。（二）弟を喜ばせようと望んで、彼は非常に大きな体になった。彼の体は、身長も幅もこの上なく増大した。（三）無量の光輝に満ちた猿は、その姿をバナナの林いっぱいに広げ、山のようにそびえ立っていた。（四）その猿はまるで山のように、巨大な身体をそびえさせ、赤い眼をし、鋭い牙を持ち、眼をしかめ、長い尾を揺すり、諸方を遍満して立っていた。（五）兄のその巨大な姿を見て、ビーマは驚嘆し、繰り返し喜んだ。（六）その光輝により太陽のような、黄金の山のような、光り輝く虚空のような彼を見て、ビーマは眼を閉じた。（七）ハヌーマットは微笑してビーマセーナに告げた。

「非難の余地のない者よ、お前はここまでは私の姿を見ることができる。（八）私はこれ以上に大きくなることができる。私が心で望むだけ。ビーマよ、敵たちに対しては、この体は威力によりこの上なく増大する。（九）」

ハヌーマットのヴィンディヤ山やマンダラ山に似た、驚異的で非常に恐ろしい体を見て、風神の息子（ビーマ）は動顛した。（一〇）それからビーマは、（驚きと喜びで）身の毛を立て、合掌して、意気阻喪することなく、屹立しているハヌーマットに告げた。（一一）

「主よ、あなたの身体の巨大な大きさは見ました。強力な者よ、御自分で御自身の体を小さくして下さい。（一二）昇る太陽のようなあなたを見ることができませんから。マイナーカ山のように計り知れず犯しがたいあなたを。（一三）勇士よ、私の心の驚きは非常に大きいのです。あなたがそばにいるのに、ラーマが自らラーヴァナを攻めたとは。（一四）あなただけでも、自己の腕力により、あのランカーを兵士たちや乗物もろとも、その威力で滅ぼすことができるのに。（一五）風神の息子よ、ラーヴァナとその一党は、戦いにおいて、あなただけにもかなわないのです。（一六）」

ビーマにこのように言われて、猿の雄牛ハヌーマットは、愛情にあふれた重々しい声で、次のように答えた。（一七）

「勇士ビーマセーナよ。お前の言った通りだ。あの最低の羅刹は私にはかなわない。（一八）しかし、私があの世界の棘であるラーヴァナを殺したら、ラーガヴァ（ラーマ）の名声がなくなるであろう。そこでそうすることをやめたのだ。（一九）あの英雄は、羅刹王とその一党を殺し、シーターを自分の都に連れ帰り、世界において名声を確立した。（二〇）広大な叡知を持つ者よ。お前は兄の幸せに専念し、風神に守護されて、障碍ない完全な道を行け。（二一）こ

の道はお前をサウガンディカの森に導く。お前は夜叉と羅刹に守られた財主クベーラの庭園を見るであろう。(二二)しかしお前は、性急に自ら花を摘んではならぬ。人間は特別に神々を敬うべきである。(二三)」(二四―五二略)（第百四十九章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

それから猿は、自在に大きくなる巨大な身体を小さくして、再びビーマセーナを両腕で抱きしめた。(一)ビーマが抱きしめられた時、彼の疲労は消滅し、すべてが心地よくなった。(二)猿は涙に満ちた眼をし、親愛の情から涙声で口ごもり、再びビーマに告げた。(三)

「勇士よ、自分の住処に帰れ。私のことを思い出してくれ。話の合間に、私がここにいることを、誰にも告げてはならぬ。(四)強力な者よ、ここは財主クベーラの住処から退出した天女や、ガンダルヴァの女たちが帰って来る場所であり、今は帰って来る時間である。(五)私の眼は果報を得た。ビーマよ、お前といっしょにいて、人間の身体に触れ、私はラーガヴァ(ラーマ)を思い出させられた。(六)勇士よ、お前が私に会ったことが無益でないように。兄弟であることを前提として、お前は何か願いごとを選べ。(七)もし私が象の都に行って、卑しいドリタラーシトラの息子たちを殺すべきなら、私はそのようにしてやる。(八)もし私が石でその都を破壊すべきなら、私はお前のその望みを今日にでもやってやろう。(九)」

その偉大なハヌーマットの言葉を聞くと、ビーマは心から喜んで彼に答えた。(一〇)

「猿の雄牛よ、あなたはすでに、すべてのことを私のためにして下さった。勇士よ、あなたに幸いあれ。私はあなたにお許しを乞います。私に好意をかけて下さい。(一一)強力な者よ、あなたという守護者により、すべてのパーンダヴァは寄る辺を持ち、まさにあなたの威光により、一切の敵を征服するでしょう。(一二)」

そう言われたハヌーマットは、ビーマセーナに告げた。

「兄弟であるから、また親愛の情から、私はお前に好意をかけよう。(一三)強力なる勇士よ、お前は矢と槍に満ちた敵軍に突入し、獅子吼をするであろう。その時、私は自分の叫びでお前の叫びを増大させてやろう。(一四)私はヴィジャヤ(アルジュナ)の旗標にいて(アルジュナは猿を旗標とする)、敵の生命を奪う恐ろしい叫びを放つであろう。」

彼はそう告げて姿を消した。(一五)

その最高の猿が去った時、強力な者たちの最上者であるビーマは、大山ガンダマーダナめざしてその道を進んだ。(一六)彼は兄の身体と、地上において無比の輝きを思い出し、また、ダシャラタの息子(ラーマ)の偉大さと威厳を想起しつつ進んで行った。(一七)彼はサウガンディカの森〔に達すること〕を望んで、美しい森や林を動揺させた。(一八)その時、彼は見た。花開く蓮で多彩な花咲く森々を。泥水に濡れた、雨雲の群のような発情した象の群を。(一九)森の中で鹿たちは雌鹿を連れ、揺れるながしめをし、若草をほおばっていた。栄光ある彼は、道々その鹿たちに見られながら、急いで進んで行った。(二〇)ビーマセーナは恐れることなく、水牛や猪や虎の住む山に勇ましく入って行った。(二一)森の樹々は、花の重みで枝をた

れ、赤い新芽で愛らしく、風で揺れ、彼を招いているかのようであった。(二二) 彼は道々、いくつかの蓮池を通り過ぎた。それは蓮花により合掌して〔いるかのようで〕、酔い痴れた蜂たちが住み、その岸には心地よい森があった。(二三) 花咲く山の頂に心と眼を据え、ビーマはドラウパディーの言葉を糧（かて）とし、大急ぎで進んだ。(二四) 日暮れ時、鹿に満ちた森で、彼は汚れない黄金の蓮の咲く大きな川を見た。(二五) そこは発情したカーランダヴァ鳥がおり、チャクラヴァーカ鳥で飾られ、汚れない蓮に満ち、その川はあたかもその山の首飾りにされているかのようであった。(二六) 勇気に満ちた〔ビーマ〕は、その川のところに、喜びをもたらす、朝日のように輝く、大きなサウガンディカの森（生群）を見た。(二七) それを見て、パーンドゥの王子は、心願を成就したと思い、森の暮らしでやつれた愛しい女（ドラウパディー）に思いを馳せた。(二八)

（第百五十章）

サウガンディカの花

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ビーマは歩いて行くうちに、美しい森のある心地よいカイラーサ山において、羅刹たちに守られた心地よい蓮池を見た。(一) それは、クベーラの宮殿付近の山の急流に生じた、非常に美しい池で、種々の樹や蔓植物におおわれ、広い樹蔭に恵まれていた。(二) その池は青蓮に満ち、神々しく、黄金の蓮があり、世を浄化するものであり、美しく、稀有の外観を呈していた。(三) ビーマはそこで甘露水のような水を見た。それは冷くて軽く（澄み）、美しく、汚れなく、吉祥で豊富であった。(四) その美しい蓮池は、蓮とサウガンディカに満ち、最高に芳わしい黄金の蓮でおおわれていた。(五) その蓮は、すばらしい瑠璃の茎を持ち、非常に多彩で魅力的であり、ハンサ鳥やカーランダヴァ鳥に揺られ、汚れない花粉を放っていた。(六) その池は偉大な夜叉王クベーラの娯楽の場所であり、ガンダルヴァ（神半）や天女や神々に最高に尊崇されていた。(七) そこは聖仙や夜叉やキンプルシャや羅刹やキンナラが住み、ヴァイシュラヴァナ（クベーラ、毘沙門天）が守っていた。(八) 強力なビーマセーナはその神聖な池を見て最高に喜んだ。(九) 十万のクローダヴァシャスという羅刹たちは、王（クベーラ）の命により、多彩な武器と装束を身につけて、その池を守っていた。(一〇) 恐ろしく勇猛な勇士ビーマは、鹿皮をまとい、黄金の腕環をつけ、武器を持ち、剣を帯びていた。彼らはその恐れを知らぬ勇士が花を求めて近づいて来るのを見て、お互いに叫んだ。(一一－一二)

「この鹿皮をまとい武器を持つ虎のような男は、何を求めてここに来たのか、たずねて見るがよい。(一三)」

そこで一同は、威光をそなえた大力の狼腹（ビーマ）のもとに行ってたずねた。

「あなたは誰か、言って下さい。(一四) あなたは隠者の装束をまとい、綴（つづれ）を着ているようだ。輝きに満ちた者よ、あなたが来た目的を告げよ。(一五)」

（第百五十一章）

ビーマは答えた。
「羅刹たちよ、私はパーンダヴァのビーマである。ダルマの息子（ユディシティラ）の弟である。私は兄弟たちとともに、バダリー・ヴィシャーラー（「大きな棗（なつめ）の木」、三・一四五・一〇参照）に来た。（一）そこでパーンチャーラの王女（ドラウパディー）は、おそらく風に運ばれた、最上のサウガンディカ〔の花〕を見た。彼女はそれをたくさん得たいと願った。（二）私はその非の打ち所のない正式の妻を喜ばせようとして、花を摘むためにここに来たのであると知れ。夜行の者たちよ。（三）」
羅刹たちは言った。
「人中の雄牛よ、ここはクベーラのお気に入りの娯楽場である。死すべき人間がここで楽しむことはできない。（四）神仙、夜叉、神々は、夜叉の王の許可を受けて、ここで飲んだり楽しんだりしている。ガンダルヴァや天女たちも〔同様にして〕ここで楽しんでいるのだ。（五）誰でも、財主（クベーラ）を軽んじて、不正にここで楽しもうとすれば、その不心得者は疑いなく滅びるであろう。（六）あなたが彼を無視して、ここから力ずくで蓮を奪おうとするなら、あなたが自分をダルマ王の弟であると言ったのはどうなるのか。（七）」
ビーマは言った。
「羅刹たちよ、私はこの付近に財主を見かけない。また、もし大王（クベーラ）を見たとしても、請うことはできない。（八）というのは、王族は請わないものであるから。これは永遠の法（ダルマ）である。そして私は絶対に王族の法を捨てたくはない。（九）また、この美しい蓮池は山の急流

に生じたものである。これは偉大なクベーラの宮殿に達して（宮殿の中に）〔生じたものでは〕ない。（一〇）これは一切の生類とヴァイシュラヴァナ（クベーラ）とに共通の池である。そのような状態の物件に関し、誰が誰に請うというのか。（一一）」
ヴァイシャンパーヤナは語った。――
ビーマセーナはすべての羅刹たちにそう告げて、池に飛び込んだ。そこで羅刹たちは、声を出して栄光ある彼を制止した。「そんなことをしてはいけない」と怒って、いたるところから譴責して。（一二）しかし、恐ろしく勇猛な、威光に満ちた彼は、羅刹たちを無視して、池に飛び込んだ。みなは彼を制止して言った。（一三）
「彼をつかまえろ。縛れ。彼を斬れ。ビーマセーナを煮て食おう。」
彼らは怒ってそう言いながら、急いで後を追った。武器を振り上げ、眼をまわし（見開き）ながら。（一四）すると強力なビーマは、ヤマ（閻魔）の杖（ダンダ）のような、金の板を張った、重い巨大な棍棒をつかんで、彼らに襲いかかった。「そこにおれ」と言いながら。（一五）非常に恐ろしいクローダヴァシャスたちは、怒りにかられ、ビーマを殺そうとして、鉄棒や矛などの武器を振りまわして彼を攻撃し、彼の周囲をすっかり取り囲んだ。（一六）その風神とクンティーの間に生まれた強力な勇士、真実と義務（ダルマ）に専念する、勇武にかけて無敵の偉大な勇士は、敵の種々の道を断ち、武器を破壊した。その勇士は、池のほとりで、敵の勇士をはじめとし百名以上の者を殺した。（一七―一八）彼らは勇士たちを殺され、彼の勇猛さと力、〔武〕術の力と腕

力を見て、束になってもかなわず、急いで退却した。(一九)彼らはうち破られ、意識もうろうとして、速やかに空に昇った。こうして、ビーマに悩まされたクローダヴァシャスたちは敗退し、カイラーサの峰々に向かって走り去った。(二〇)彼はシャクラ(インドラ)のように魔類の群を圧倒し、戦いにおいて敵の群に勝利した。それから、敵を征服した彼はその蓮池に飛びこんで、望むがままに蓮を摘んだ。(二一)それから彼は、甘露のような水を飲んで、更に大きな精力と威光を身につけた。そして最高の芳香を有するサウガンディカ蓮を引き抜いて手に持った。(二二)

そこで、ビーマの力により退けられたクローダヴァシャスたちは、財主(クベーラ)に会って、非常に消沈し、戦闘におけるビーマの勇猛さと力をありのままに告げた。(二三)羅刹たちの話を聞くと、神は笑って彼らに言った。

「ビーマに蓮を望みのままに取らせなさい。クリシュナー(ドラウパディー)のために。私はすでにこのことを知っていた。(二四)」

そこで彼らは怒りを捨て、財主のもとを辞して、クル族の勇士(ビーマ)のもとに行った。そして、蓮池の中で、欲するがままに一人で戯れているビーマを見守った。(二五)

(第百五十二章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

バラタ族の雄牛よ、それからビーマは、それらの貴重で神聖で多様な汚れない多くの花を集めた。(一)すると、徐に砂利をまき上げ、荒々しい強い突風が吹いた。それは戦闘を予告するような風であった。(二)強い輝きを持つ流星が落ち、地震が生じた。太陽は闇におおわれ、光をさえぎられ、輝きを失った。(三)ビーマが勇武を発揮している間に、恐ろしい地震が生じた。大地が動き、ほこりの雨が降った。(四)諸方は赤かった。鳥獣は鋭い声で鳴いた。一切が闇におおわれ、何も見分けがつかなかった。(五)話す者のうちの最上者である、ダルマの息子ユディシティラは、その奇蹟を見て、「何者が我々を攻撃するのであろうか」と言った。(六)

「戦いに酔う(勇猛な)パーンダヴァたちよ、どうか戦いの準備をしてくれ。私の見るところでは、我々が武勇をふるう時は非常に近い。(七)」

そう言って王は方々見まわした。ダルマ王ユディシティラはビーマを見なかったので、そばにいるクリシュナーと双子に、戦闘において恐ろしく勇猛な弟ビーマについてたずねた。(八—九)

「パーンチャーラの王女よ、ビーマは何か仕事をしようと望んでいるのではないか。あるいは、無謀なことを好むあの勇士は、すでに何か無謀なことをやったのか。(一〇)というのは、大きな戦闘を予告し、大きな危険を予告する前兆が、突然、いたるところで起こったから。(一一)」

彼がそう言うと、聡明なクリシュナー、魅力的に笑う愛しい王妃は、夫を喜ばせようと望

み、次のように彼に答えた。(一二)
「王様、今日、風がサウガンディカの花を運んで来ました。私は喜んで、それをビーマセーナに見せて言いました。『もし勇士が多くの花を見つけたら、それをすべて持って、急いで帰って来て下さい』と。(一三―一四) 王様、きっとあの強力なパーンダヴァは、私を喜ばせるために、東北の方角に、花々を摘みに行ったのです。(一五)」
彼女にそう言われて、王は双子に告げた。
「我々も急いで、狼腹の後を追おう。(一六) 羅刹たちは、疲労困憊したバラモンたちを運んでくれ。そして、神のようなガトートカチャよ、お前はクリシュナーを運んでくれ。(一七) 明らかにビーマはここから遠方に入ったと私は思う。彼が行ってから長い時間が経過している。そして彼は風のように速い。(一八) 彼はガルダ鳥のように速く大地を越える。望むがままに空に飛び上がったり降下することさえできる。(一九) 夜行の者たちよ、我々はあなた方の力により彼を追うことができる。彼がヴェーダに通じたシッダ(成就者)に罪を犯さないうちに。(二〇)」
ヒディンバーの息子(ガトートカチャ)をはじめとするすべての羅刹たちは、「承知しました」と言った。彼らはクベーラの蓮池の場所を知っていた。(二一) 彼らは勇み立ち、パーンダヴァたちと多くのバラモンを運び、ローマシャをともなって飛んで行った。(二二) 一同はそろって飛んで行くうちに、例の森に、蓮の花が咲く非常に魅力的な蓮池を見た。(二三) そして彼らは、その岸に立っている偉大なビーマと、眼を大きく見開いている、殺された夜叉たちを見

た。(二四) 彼は両腕で棍棒を振り上げて、川岸に立っていた。それは、生類の滅亡の時に、杖(ダンダ)を持つ死神(アンタカ)のようであった。(二五) ダルマ王は彼を見ると、何度も抱きしめ、優しい声で言った。
「ああビーマよ、どうしてこのような乱暴をしたのか。神々に不快なことを。どうか、二度と再びこのようなことをしてくれるな。もし私を喜ばせたいと望むなら。(二六―二七)」
とこのようにビーマを諭した。それから彼らは蓮を取って、その蓮池において、神々のように楽しんだ。(二八)
ちょうどその時、巨大な体をした庭園の番人たちが石の武器を持って現われた。(二九) 彼らはダルマ王、神仙、ローマシャ、ナクラとサハデーヴァ、その他のバラモンの雄牛たちを見て、みな恭しく頭を下げて平伏した。(三〇) ダルマ王に慰められ、彼ら夜行の者たちは満足した。それから人中の雄牛であるクルの王子たちは、クベーラに認められて、しばし楽しみながらそこに滞在した。(三一)

(第百五十三章)

(34) ジャタースラ殺し（第百五十四章）

ビーマセーナ、羅刹のジャタースラを殺す

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

それから、そこでパーンダヴァたちが安心して暮らしているうちに、ビーマの息子（ガトートカチャ）と羅刹たちは立ち去った。(一) そしてある日、たまたまビーマセーナが不在の時、ある羅刹がダルマ王と双子とクリシュナーとをさらったのである。(二) その羅刹は、自分は一切の武器に関する呪句（マントラ）に通じ、最も武器に通じたバラモンであると称して、常にパーンダヴァたちに仕えていた。(三) 彼の名はジャタースラという。彼はパーンダヴァたちの箙（えびら）と矢を欲して（異本の読みをとる）、隙をうかがっていた。(四) 彼は勇猛なビーマセーナが狩のために出かけた時、醜悪で恐ろしく巨大な別の姿をとった。(五) その悪者は一切の武器を取り、ドラウパディーをわしづかみにし、三名のパーンダヴァをつかんで立ち去った。(六) しかしサハデーヴァだけは、やっとのことで逃げ出し、大力のビーマセーナが行った方角に向かって、彼に助けを求めて叫んだ。(七)

ダルマ王ユディシティラは、さらわれて行く間、その羅刹に言った。

「愚か者よ、お前の美徳（ダルマ）は失われるのに、お前はそのことを気にかけない。(八) その他のいかなる人間でも、畜生でも、ガンダルヴァや夜叉や羅刹でも、鳥でも家畜でも、人間に依存して生活する。だからお前も人間に依存して生活している。(九) この世界の繁栄により、汝

らの世界は繁栄する。そしてこの世界が苦しめば、神的なものたちもそれに続いて苦しむ。神や祖霊への供物で、作法に従って供養されれば、彼らは繁栄する。(一〇) 我々は国土の保護者、守護者である。羅刹よ。国土が守られなければ、どこに繁栄が、どこに幸福があろうか。(一一) 羅刹は決して、罪のない王を軽んずべきではない。そして、我らにはごくわずかの非行もない。人食いよ。(一二) それに、信頼できる友たちに決して危害を加えようとすべきではない。その人々の食物を食べ、その人々に寄る辺を求めたならば。(一三) お前は今まで我々に庇護を求め、尊敬されながら、食物を食べて快適に暮らした。愚か者よ。どうして我々をさらおうとするのか。(一四) お前はまったく空しく行動し、空しく老い、空しい知性を持つ。お前は空しい死にふさわしい。お前は今、空しく死ぬであろう。(一五) もしお前が愚かであり、すべての美徳（ダルマ）を欠くとしても、我々の武器を返して、戦闘によってドラウパディーを奪え。(一六) もしお前が無知にして、このような行為をするなら、この世で非法と不名誉を得るのみである。(一七) 羅刹よ、今日お前はこの人間の女性に触れた。毒を瓶に入れて揺って飲むようなものだ。(一八)」

それからユディシティラは、羅刹が重いと感じるようにした。羅刹は重さに負けて、前と同じように速く進めなくなった。(一九) そこでユディシティラは、ドラウパディーとナクラに告げた。

「愚かな羅刹を恐れるな。私は彼の速度を奪った。(二〇) 勇猛な風神の息子は遠からぬ所にいるであろう。やがて彼が来たら、羅刹は殺されるであろう。(二一)」

一方サハデーヴァは、愚かな羅刹を見つけ、ユディシティラに言った。（二二）

「王よ、王族（クシャトリヤ）にとってこれに勝る義務はあろうか。戦闘において敵と対決し、命を捨てるか、あるいは勝利するか……。（二三）戦って、敵が我らを殺すか、我らが敵を殺すか。勇猛な王よ、今がそのふさわしい場所と時である。（二四）不屈の勇者よ、王族の法（武士道）の時が到来した。我々が勝利しようと敗れようと、よい帰趨（天界）に達することができる。（二五）今日、羅刹が生きているうちに太陽が沈んだら、私は今後、決して自分は王族であると言わない。（二六）おい、おい、羅刹よ、待て。私はパーンダヴァのサハデーヴァだ。私を殺してから彼らを連れ去れ。あるいは、殺されて、今日ここで眠れ。（二七）」

彼がそのように言っている時、たまたま勇士ビーマセーナが金剛杵（ヴァジュラ）を持つインドラ神のように現われた。（二八）ビーマはそこに二人の兄弟と、誉れ高いドラウパディーと、地上に立って羅刹を非難しているサハデーヴァを見た。（二九）そして、カーラ（時間、破壊神）のために思慮を失い、道に迷い、運命に制止されて、あちこちさまよっている羅刹を見た。（三〇）さらわれて行く兄弟たちとドラウパディーを見て、大力のビーマは怒りにかられ、羅刹に言った。（三一）

「私は前からお前が武器を欲しがっていることを知っていた。しかしお前は私の眼中になかったから、その時私はお前を殺さなかった。それに、お前はバラモンの姿に化け、我々に不快なことを言わなかった。（三二）バラモンの姿をとり、好意的にふるまい、不快なことをまったくしない客人である罪のないお前を、どうして殺すことができようか。たとい羅刹であ

ると知っていても、そんなお前を殺す者は、地獄に堕ちるであろう。（三三）カーラに煮られぬうちは、お前の死はない。しかし、確かに今やお前は煮られた。驚異的な行為をなすカーラにより、お前がクリシュナーを誘拐しようなどという了見を起こさせられたのだから。（三四）カーラという糸により吊されたこの釣針をお前は呑みこんだ。水中で口を貫かれた魚のように、今日、お前はどうして私から逃れられるか。（三五）お前がめざす場所、お前の心がすでに行っている場所、お前はそこに行けないであろう。お前は〔羅刹の〕バカとヒディンバの逝った道をたどるであろう。（三六）」

ビーマにそう言われて、羅刹は恐れたが、カーラにせきたてられ、ユディシティラたちをすべて放り出して、戦うために近づいた。（三七）そして、怒りで唇をふるわせて、ビーマに告げた。

「俺は方角に迷ったのではない。悪党。俺がぐずぐずしたのはお前のためだ。（三八）俺は多くの羅刹が戦闘でお前に殺されたと聞いている。今日、俺はお前の血で、彼らに手向（たむ）けの水を供えるであろう。（三九）」

そう言われて、ビーマは口の端を舐めまわし、嘲笑い、怒って、死神の化身のように、格闘を望んで羅刹に突進した。（四〇）ビーマが戦いを求めて立ちはだかった時、羅刹の方も激して彼の方に突進した。バラがインドラに突進するように。（四一）両者の間に恐ろしい格闘が行なわれている間に、マードリーの二人の息子（ナクラとサハデーヴァ）は怒って突進した。（四二）しかし狼腹（ビーマ）は笑って彼らを止めた。そして、「私は羅刹をやっつけることができるから、見

物していなさい」と告げた。(四三)
「私自身、兄弟たち、よく実行された義務(ダルマ)、及び祭祀にかけて私は誓う。王よ、私はこの羅刹を屠るであろう。(四四)」

二人の勇者、羅刹と狼腹（ビーマ）とは、お互いに競いながら、腕で組み合った。(四五) 怒ったビーマと羅刹は、戦闘において互いに容赦することなく、その両者の間に、神と悪魔との戦いのような格闘が行なわれた。(四六) 大力の両者は樹々を次々と折ってはぶつけ合い、夏の終わりの雲のように咆哮した。(四七) 強者のうちでも最強の二人は、互いに勝利を望んで、交互に攻撃し、その腿で大木を砕いた。(四八) こうして、樹々を破壊しながら、獅子のような猿であるヴァーリンとスグリーヴァの兄弟がかつて戦ったような、樹木の戦いが行なわれた。(四九) 両者はしばらくの間、次々と樹々を砕いて、お互いにぶつけ合った。幾度も咆哮しながら。(五〇) やがてその場の樹々がすべて倒され幾百もの堆積にされた時、大力の両者は互いに相手を殺そうとして、しばらくの間、岩石でもって戦った。二つの大山が大きな雲によって戦うように。(五一—五二) 両者は猛々しく、交互に恐ろしい形の巨（岩）を、金剛杵(ヴァジュラ)のように、激しくぶつけ合った。(五三) 力自慢の二人はこのように攻撃し合ってから、なおも腕を組み合って、象のように相手を引きずった。(五四) それから、彼らは非常に恐ろしい拳で互いに攻撃し合った。偉大な勇者たちはガンガンという音をたてた。(五五) やがてビーマは、五つの頭を持つ蛇のような拳を固めて、勢いよく羅刹の首を打った。(五六) 羅刹はビーマセーナの腕で打たれて消耗した。羅刹が完全に疲労困憊したのを見て、ビーマセーナはなおも攻撃した。(五七) それから、神のような勇士ビーマは、両腕で羅刹を持ち上げて、力まかせに大地にたたきつけて粉々にした。(五八) ビーマは羅刹の全身を粉砕し、肘(ひじ)で打って、胴体から頭を引き抜いた。(五九) ビーマセーナの力により抜かれたジャタースラの頭は、唇を噛みしめ、血まみれになり、茎から落ちた果実のように落下した。(六〇) 勇士は羅刹を殺してユディシティラに近づいた。最高のバラモンたちは彼を讃えた。マルト神群がインドラを讃えたように。(六一)

（第百五十四章）

(35) 夜叉との戦闘（第百五十五章―第百七十二章）

アールシティシェーナの隠棲所

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

その羅刹が殺された時、ユディシティラ王は再びナーラーヤナの隠棲所に帰り、そこに滞在した。(一)ある時、彼は弟のアルジュナのことを思い起こして、すべての弟たちとドラウパディーを集めて次のように言った。(二)

「我々が森で幸せに過ごしている間に、四年が経過した。アルジュナは、五年後に最高の山である山王シュヴェータに着くと約束した。そして我々も、彼との再会を望み、そこへ行くと約束した。(三―四)無量の威光を持つ彼は、かつて私に約束したのだ。『私は武術を求めて五年間を過ごす』と。(五)そこで我々は、ガーンディーヴァ弓を持ち、武器を得て天界からこの世界にもどったその勇士と再会するであろう。(六)」

ユディシティラはそう言ってから、すべてのバラモンを召集した。そして、苦行を積んだ彼らに、その理由を説明した。(七)彼がその周囲を右まわりにまわって礼をすると、その激しい苦行を積んだバラモンたちは喜び、彼を祝福し、息災かどうかたずねて、彼をも喜ばせて告げた。(八)

「バラタの雄牛よ、この苦難は遠からずして幸福に帰するであろう。法を知る者よ、王族の法によりそれを乗り越えて、大地を守護しなさい。(九)」

勇猛な王はその苦行者たちの言葉を受けてから、バラモンたちと弟たちとともに出発した。(一〇)栄光ある彼は、ドラウパディーとガトートカチャなどを連れ、羅刹たちに随行され、ローマシャに守られていた。(一一)威光に満ち、よく誓戒を保つ彼は、弟たちとともに、ある時は徒歩で行き、ある時は羅刹たちに運ばれて行った。(一二)それから、ユディシティラ王は、多くの苦難について考えながら、獅子や虎や象に満ちた北の方角へ向った。(一三)カイラーサ山、マイナーカ山、ガンダマーダナ山麓、メール山を見て、(一四)山のずっと上の方に、多くの吉祥なる川を見て、七日目に、彼は神聖なるヒマーラヤ高原に達した。(一五)パーンダヴァたちは、ガンダマーダナに近い所で、種々の樹木や蔓の生じた神聖なるヒマーラヤの頂に、川岸に生えた花咲く大樹により囲まれた、最高に清浄なヴリシャパルヴァンの隠棲所を見た。(一六―一七)

勇猛なパーンダヴァたちは、徳性ある王仙ヴリシャパルヴァンに近づいて挨拶した。彼らの疲労はなくなった。(一八)その王仙は、わが子を迎えるように、バラタの雄牛たちを歓迎した。勇士たちは丁重にもてなされて、そこに七夜滞在した。(一九)八日目になった時、彼らは世に名高い聖仙ヴリシャパルヴァンにいとまを告げ、出発しようとした。(二〇)彼らはバラモンたちを一人一人ヴリシャパルヴァンに紹介した。そのバラモンたちは、しばらくの間、王仙に預けられ、親類のように歓待されて留まることになったのである。(二一)それからパーンダヴァたちは、上等の衣服と美しい宝石を、その王仙の隠棲所に預けた。(二二)過去と未来を知る、巧みで一切の法を知るその王仙は、バラタの雄牛たちに向かって、息子

に対するように教えを説いた。(二三) 偉大な勇士たちは別れを告げ、クリシュナー(ドラウパディー)や偉大なバラモンたちとともに、北方へ向けて出発した。ヴリシャパルヴァン王は、出発する彼らを送って行った。(二四) それから威光に満ちたヴリシャパルヴァンは、パーンダヴァたちをバラモンたちに委ね、彼らを祝福し、別れを告げ、道を教えてから引き返した。(二五)
不屈の勇者ユディシティラは、弟たちとともに、種々の獣の群のいる道を、徒歩で進んで行った。(二六) パーンダヴァたちは、種々の樹木におおわれた山の尾根で夜を過ごし、四日目にシュヴェータ山に入った。(二七) その美しい山は大きな雲のように見え、水にめぐまれ、宝玉や黄金で美しく、多様な峰を持っていた。(二八) 彼らはヴリシャパルヴァンに告げられた道を見出し、種々の山々を見て、教えられた通りの道をたどった。(二九) 山のずっと上の方で、彼らは最高に難儀な洞窟や多くの難所を、易々と越えて行った。(三〇)
ダウミヤ、クリシュナー、パーンダヴァたち、大仙ローマシャは、誰も落伍することなく、いっしょに進んで行った。(三一) 元気旺盛な彼らは、大山マーリヤヴァットに近づいた。その山は鳥獣の声が響き、種々の鳥に満ち、猿たちの群が住み、非常に魅力的で、清浄で、そこには蓮池があり、沼や大きな森があった。(三二―三三) それから彼らは、キンプルシャ、シッダ、チャーラナ(いずれも半神の種類)が住む、ガンダマーダナ山を見て、喜びで総毛立った。(三四) そのガンダマーダナの森には、ヴィディヤーダラ(半神の一種)やキンナラの女たちが徘徊し、象や獅子に満ち、猛るシャラバ(想像上の猛獣)がいた。(三五) また、その他の優しく鳴く獣たちがおり、まるでナンダナ(インドラの庭園)の森のようであった。(三六) 勇猛なパーンドゥの息子たちは喜んで、

その心を喜ばせる美しい森に次第に入って行った。(三七) 勇士たちは、ドラウパディーと偉大なバラモンたちとともに、鳥たちの鳴き声を聞いた。それは喜びを生じさせ、魅力的で優しく美しく、耳に心地よく、非常に甘いものであった。(三八) 彼らは、すべての季節の果実を豊富につけ、すべての季節の花に輝く、果実の重みでたわむ樹々を見た。(三九)(四〇―八七略)
その強力な勇士たちは、最高の帰趣に達して満足し、山の王の光景に飽くことがなかった。(八八) その時、彼らは、王仙アールシティシェーナの隠棲所を見た。そこは花々に満ち、果実をつけた樹々に満ちていた。(八九) それから彼らはアールシティシェーナに近づいた。彼は激しい苦行を行じ、痩せて血管が全身に浮き出ており、一切の法(ダルマ)を知悉していた。(九〇)

(第百五十五章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。――
ユディシティラは喜んで、苦行により罪悪を滅したその聖仙に近づき、その名前を讃えつつ、頭を下げて挨拶した。(一) それから、クリシュナー、ビーマ、誉れ高い双子が、頭を下げて近づき、王仙を囲んで、そのそばに立った。(二) パーンダヴァたちの司祭である、法を知るダウミヤもまた、その誓戒を堅く守る聖仙に、礼儀正しく近づいた。(三) その法を知る聖者は、天眼により、クルの最上者であるパーンドゥの息子たちの来ることを前から知っていて、「座りなさい」と告げた。(四)

聡明なるクル族の雄牛が弟たちとともに座ると、その大苦行者は彼に敬意を表してから、息災か否かをたずねた。（五）
「あなたは真実に背くことに心を向けたことはないか。法を心がけているか。プリターの息子よ、父母に対し不適切にふるまうことはないか。（六）あなたはすべての長上（グル）、長老、学者を敬っているか。プリターの息子よ、あなたは悪しき行為に心を向けたことはないか。（七）善行に対して恩返しをし、悪行を避けることが適切にできるか。そして自慢をしないか。クルの長よ。（八）立派な人々は、あなたにふさわしく尊敬されて満足しているか。森に住んでいても、法に従っているか。（九）プリターの息子よ、布施、法、苦行、清さ、廉直、忍耐に関し、あなたの行為に悩まされていないか。（一〇）プリターの息子よ、あなたは父祖伝来の行為に従事しているか。パーンダヴァよ、あなたは王仙が歩んだ道をたどっているか。（一一）というのは、各自の家に息子や孫が生まれた時、祖霊界にいる祖霊たちは悲しんだり笑ったりするのである。（一二）
『彼が悪行をなしたら、我々はどうなるか。彼が善行をなして、我々は幸せを得るだろうか。（一三）』
プリターの息子よ、父と母と火と師と、第五に自己（アートマン）を敬う人は、二つの世界を獲得する。（一四）
月相の変り目の日、水のみ食す聖仙と風のみ食す聖仙たちは、空中を飛行して、この最高の山を訪れる。（一五）また王よ、キンプルシャ（半神の一種）が相思相愛の愛しい女たちを連れて、

山頂にいるのが認められる。（一六）またプリターの息子よ、ほこりのつかない絹の衣を着た、多くのガンダルヴァ（半神の一種）と天女（アプサラス）の群も見える。（一七）そして、花輪をつけた美しいヴィディヤーダラ（半神の一種）の群や、大蛇やスパルナ（ガルダ）鳥や、その他の蛇たちもいる。（一八）月相の変り目の日には、この山の上では、太鼓、小鼓、法螺、ムリダンガ（太鼓の一種）の音が聞こえる。（一九）バラタの雄牛たちよ、ここに滞在すれば、そのすべてを聞くことができる。決してこの先に行こうと考えてはならぬ。（二〇）バラタの最上者たちよ、これから先は行くことができない。そこは神々の楽しむ場所で、人間の行く所ではない。（二一）バーラタよ、ここでは万物が少しでも軽はずみな行為をする人間たちを憎み、羅刹たちが彼らを打ちのめす。（二二）ユディシティラよ、この峰を越えると、最高に成就した神仙たちの道が現われる。（二三）勇士よ、軽はずみにもこれから先に進もうとする者を、羅刹たちが鉄の槍などで殺す。（二四）わが子よ、月相の変り目の日には、天女たちに囲まれたナラヴァーハナ・ヴァイシュラヴァナ（クベーラ、毘沙門天）が、その栄華とともに認められる。（二五）その一切の羅刹の主が山頂に座っているのを、万物は昇る太陽のように仰ぐ。（二六）バラタの最上者よ、この峰は、神々、魔類、シッダ（半神の一種）、及びヴァイシュラヴァナの庭園なのだ。（二七）わが子よ、ガンダマーダナ山では、月相の変り目の日に、富神（クベーラ）に仕えるドゥムブル（ガンダルヴァの長の名）の、歌や旋律の音が聞かれる。（二八）わが子ユディシティラよ、月相の変り目の日には、ここで万物は、以上のようなすばらしいことを目撃するのだ。（二九）最上のパーンダヴァたちよ、アルジュナに会うまで、すべての御馳走やおいしい果実を味わいつつここに住みなさい。（三〇）わが

子よ、あなた方はここに来たからには、決して軽はずみにしてはならぬ。最高の戦士よ、ここに好きなだけ滞在して、望みのままに楽しんで、それから大地を守護しなさい。(三二)」（第百五十六章）

ビーマ、夜叉と羅刹の群を殺す

ジャナメージャヤはたずねた。

「すべて神的な勇武を身につけた、偉大なパーンドゥの息子たちは、どれだけの期間、ガンダマーダナ山に滞在していたのか。(一)その偉大な世界的勇士たちは、そこに住んで、何を食べていたのか。最高の人よ、話して下さい。(二)ビーマセーナの武勇を詳しく私に語って下さい。ヒマーラヤ山でその勇士がしたことは何でも。最高のバラモンよ、実に彼は夜叉(ヤクシャ)たちと再び戦わなかったのですか。(三)彼らはヴァイシュラヴァナ（クベーラ、毘沙門天）と会ったのですか。アールシティシェーナが言ったように、そこに富神（クベーラ）が来るので。(四)苦行者よ、私はこのことを詳しく聞きたいのです。彼らのめざましい行為を聞いていて、私は飽きることがありませんから。(五)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

その無比の威光を有する聖仙の有益な忠告を聞いて、バラタの雄牛たちは常にその通りに行動した。(六)隠者(ムニ)の食べ物、おいしい木の実、清浄な矢で殺した鹿の肉、種々の清浄な蜜を食べつつ、バラタの雄牛たるパーンダヴァたちは、そのヒマーラヤの峰に滞在した。(七―八)このようにして彼らが生活し、ローマシャの種々の話を聞いているうちに、第五年目が過ぎた。(九)その前に、ガトートカチャは、「私は必要な時に参上します」と言って、すべての羅刹たちとともに去った。(一〇)偉大なパーンダヴァたちがアールシティシェーナの隠棲所に住み、多くの奇蹟を見ている間に、多くの月日が経過した。(一一)彼らがそこで楽しく日々を送っているうちに、自己(アートマン)を完成し誓戒を守る、徳高い隠者(ムニ)や吟遊詩人(チャーラナ)が好意を持って訪れた。バラタの最上者たちは、彼らすべてと神聖な会話を交わした。(一二―一三)

それから幾日か過ぎて、突然スパルナ（ガルダ）鳥が、湖に住む強力な大蛇をさらった。(一四)大山が震動し、大木が折れた。すべての生類と、パーンダヴァたちは、その驚異的な光景を見つめた。(一五)すると風が、最高の山の頂から、芳しく美しい花々をパーンダヴァたちのもとに運んで来た。(一六)パーンダヴァたちは、親しい人々とともに、その神々しい五色の花々を見た。誉れ高いドラウパディーも見た。(一七)その時彼女は、山の人気(ひとけ)のない場所に安楽に座っていた勇士ビーマセーナに告げた。(一八)

「バラタの雄牛よ、スパルナがたてた突風により、五色の花々が、すべての生類の見ている前で、アシュヴァラタ―川の方に落ちました。(一九)王よ、約束を守るあなたの弟（アルジュナ）は、カーンダヴァの森で、ガンダルヴァ、蛇、羅刹、そしてインドラをも制し、恐ろしい魔物たちを殺して、ガーンディーヴァ弓を得ました。(二〇)あなたにも非常に大きな威光と、偉大

な腕力があります。それは対抗され得ず不可侵で、インドラの力に匹敵するものです。（二一）一切の羅刹たちは、あなたの腕力の強烈さに恐れ、山を捨てて十方に避難するでしょう。ビーマセーナよ。（二二）それから、あなたの親しい人々は、恐怖と迷いを離れ、多彩な花々に満ちた吉祥なる最高の山の頂を見ることでしょう。（二三）ビーマよ、私は長いこと念願していました。私はあなたの腕力によって、山頂を見たいと思います。（二四）」

それから強力な勇士は、ドラウパディーによって自分が侮辱されたかのように感じ、よい雄牛が打撃に我慢できないように、それに我慢できなかった。（二五）ビーマは獅子や雄牛のように歩み、栄光あり、高貴で、黄金のように輝き、気高く、強力で誇り高く、自信があり、勇士であった。（二六）赤い眼をし、広い背中を持ち、盛りのついた象のように勇猛で、獅子の牙のような歯をし、広い肩をし、若いシャーラ樹のように背が高かった。（二七）彼は偉大で、全身美しく、巻貝のような〔線のある〕首を持ち、大きな腕を持ち、金張りの弓と刀と箙（えびら）を持っていた。（二八）その強力な男は誇り高い獅子のように、盛りのついた象のように、恐怖も迷いもなく、山に入って行った。（二九）

すべての生類は、弓矢と刀を持った彼が、獅子か盛りのついた象のようにやって来るのを見た。（三〇）ビーマはドラウパディーをこよなく喜ばせ、棍棒を持ち、恐怖と迷いを離れ、山の王に入って行った。（三一）疲労も臆病風も当惑も不満も、決して風神の息子ビーマに訪れることはなかった。（三二）その強力な男は、恐ろしい光景の難儀な隘路に到達し、多くの棕櫚を重ねた高さにそびえ立つ峰によじ登った。（三三）その強力な男は、キンナラ、大蛇、

隠者、ガンダルヴァ、羅刹たちを驚かせて、山の頂に着いた。（三四）そこでバラタの雄牛は、ヴァイシュラヴァナ（クベーラ、毘沙門天）の住処を見た。それは金色の、水晶のように輝く家々によって飾られていた。（三五）そこでは、ガンダマーダナ山から生じた、すべての香を運ぶ風が、万物を喜ばせつつ、いとも心地よく吹いていた。（三六）そこには、多彩な色の、色とりどりの花房をつけた、珍らしい樹々、不可思議で、最高に美しい種々の樹々があった。（三七）バラタの雄牛は、羅刹の王（クベーラ）の宮殿を見た。それは宝石の網で囲まれ、多彩な花輪で飾られ、神聖であった。（三八）勇士ビーマセーナは、棍棒と刀と弓を持ち、生命が惜しいとも思わず、山のように動かずに立っていた。（三九）それから彼は、敵どもを総毛立たせて、法螺貝を吹き鳴らした。そして弓弦を鳴らし、手を打ち鳴らし、諸々の生類を狼狽させた。（四〇）それから、夜叉、羅刹、ガンダルヴァたちは、その音を聞いて総毛立ち、ビーマの方に突進した。（四一）棍棒、鉄棒、刀、槍、戟（げき）、斧。夜叉や羅刹たちの腕は、これらの武器を持って輝いていた。（四二）それから、彼らとビーマとの戦闘が始まった。そしてビーマは、恐ろしく速い矢で、巨大な体をした彼らの用いた槍や戟や斧を断ち切った。（四三）強力な彼は、空中を飛行する、または地上にいる、怒号する羅刹たちの体を、矢によって貫いた。（四四）いたるところ羅刹たちの体からほとばしり出た血の大雨が、その強力な男にふり注いだ。（四五）ビーマの強力な腕に放たれた矢によって断ち切られた、夜叉と羅刹の体や頭が、おびただしく認められた。（四六）すべての生類は、見目よいビーマが羅刹たちにおおわれるのを見た。太陽が雲の群におおわれるように。（四七）しかし太陽が光線によりすべてのもの

に達するように、その強力な不屈の勇者は、敵を撃つ矢により、すべての敵を貫いた。（四八）すべての羅刹は威嚇し、大声で叫んだが、ビーマセーナを狼狽させることはできなかった。（四九）彼らは矢により全身傷つき、ビーマセーナに対して恐怖にかられ、武器をすべて放り投げ、恐ろしい嘆声をあげた。（五〇）彼らは棍棒、戟、刀、槍、斧をうち捨て、その強力な弓取りを恐れて、南方へ逃げ去った。（五一）

そこに、ヴァイシュラヴァナの友人である、マニマットという名の羅刹がいた。彼は広い胸と大きな腕を持つ勇士で、戟と棍棒を手にしていた。（五二）彼は強力で、権威と勇武を発揮した。彼は退却する彼らを見て、苦笑して言った。（五三）

「戦闘において、多数のお前たちが、たった一人の人間に敗れて、ヴァイシュラヴァナの宮殿に行ったら、富神にどのように言うつもりか。（五四）」

その羅刹は彼らすべてにこのように告げると、槍と戟と棍棒を手にして、ビーマを攻撃した。（五五）彼が盛りのついた象のように激しく攻撃すると、ビーマセーナは、三本の矢で彼の脇を射た。（五六）マニマットは怒り、大きな棍棒をつかんで、ビーマセーナに向けて力まかせに投げつけた。（五七）ビーマセーナは、空中で稲妻のように見える非常に恐ろしい巨大な棍棒を、石で研いだ多くの矢によって迎え撃った。（五八）だがそのすべての矢は、棍棒に達するとはじき返された。それらは勢いがあったが、棍棒の激しい勢いを止めることができなかったのである。（五九）しかし、恐ろしく勇猛で強力なビーマは、棍棒戦のやり方を心得ていたから、その打撃をかわした。（六〇）その間に、賢明な羅刹は、黄金の柄のついた鉄製

の非常に恐ろしい槍を投げた。（六一）おぞましい音をたて、火炎を放つ、その非常に恐ろしい槍は、ビーマの右腕を傷つけて、激しく大地に落下した。（六二）棍棒戦に長けた、無量の勇武を有する勇士ビーマは、その槍で深く傷ついたが、棍棒をつかんだ。（六三）ビーマはそのすべて鋼鉄製の棍棒をつかんで、雄叫びをあげ、強力なマニマットに向かって激しく突進した。（六四）マニマットも、輝く大槍をつかむと、咆哮して、猛烈な勢いでビーマセーナに投じた。（六五）棍棒戦に長けたビーマは、棍棒の先で槍を砕き、ガルダが蛇に襲いかかるように、速やかに彼に襲いかかった。（六六）勇士ビーマは戦いの頂点において、咆哮し、空中に飛び上がり、棍棒を激しく振りまわして投げつけた。（六七）その棍棒はインドラに投じられた金剛杵（ヴァジュラ）にも似て、風のような速さで飛び、羅刹を殺してから、地面に達してクリティヤー（黒魔術で用いる妖精）のように倒れた。（六八）すべての生類は、恐ろしい力の羅刹がビーマセーナに倒されるのを見た。それは雄牛が獅子に倒されるかのようであった。（六九）その羅刹が殺されて地面に横たわっているのを見て、生き残りの羅刹たちは、恐ろしい嘆声をあげながら、東の方角に逃げ去った。（七〇）　（第百五十七章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

山の洞窟が様々な音で反響しているのを聞き、ビーマの姿も見えないので、ユディシティラ、マードリーの二人の息子、ダウミヤ、ドラウパディー、バラモンたち、すべての友人た

ちは、みなして心配した。（一―二）そこで勇士たちはドラウパディーをアールシティシェーナに預け、武器を持ち、そろって山を登って行った。（三）それから、勇士たちが山頂に着いて眺めると、敵を制するビーマセーナを見出した。（四）そして彼ら勇士たちは、巨大でひどく恐ろしい強力な羅刹たちが、ビーマセーナに倒されて、体をひくひくさせ死んでいるのを見た。（五）棍棒と刀と弓を持つその勇士は、戦いですべての悪魔を殺して、インドラのように輝いていた。（六）パーンダヴァたちは、（死体を）またいで行き、狼腹（ビーマ）を抱きしめてから、最高の状態になってそこに座った。（七）彼ら四名の勇士たちによって山頂は輝いた。栄光ある世界守護者である最高の神々により天界が輝くように。（八）

クベーラ神の宮殿と殺された羅刹たちを見て、ユディシティラは座っているビーマに言った。（九）

「ビーマよ、お前は無謀にも、または迷妄によりこの罪悪を犯したが、勇士よ、これはお前にふさわしくない。嘘言が聖者にふさわしくないように。（一〇）法を知る人々は、王の嫌う行為をすべきでないと知っているが、ビーマセーナよ、お前は神々の憎む行為をしたのだ。（一一）実利と法を無視して、悪に心を向ける者は、必ずや悪しき行為の果報を受ける。私によかれと望むなら、二度と再びこのように行動してはならぬ。（一二）」

ものごとの是非を識別する、威光に満ちた徳性あるユディシティラは、不屈の弟にこのように告げると、そのことについて考えながら、話すのをやめた。（一三）その間、ビーマセーナに殺されなかった生き残りの羅刹たちは、みなしてクベーラの宮殿へ向かった。（一四）彼らは大急ぎで速やかにヴァイシュラヴァナ（クベーラ）の宮殿に着くと、ビーマセーナに対する恐怖に打ちひしがれ、恐ろしい嘆声をあげた。（一五）彼らは武器を失い、疲労し、血にまみれた衣服で、髪を振り乱して、夜叉の王（クベーラ）に告げた。（一六）

「王様、棍棒・鉄棒・剣・投槍・飛道具で武装した、あなたの主立ったすべての羅刹たちが殺されました。（一七）富神よ、一人の男が力ずくで山を荒らし、戦闘で、集まったクローダヴァシャス羅刹群を殺しました。（一八）富神よ、主立った羅刹王たちと夜叉たちが殺され、魂が抜け息絶えて横たわっています。（一九）山は取られました。我々は逃れましたが、あなたの友のマニマットは殺されました。これは人間のやったことなのです。後はお任せします。（二〇）」

すべての夜叉の王は、それを聞くと怒り、憤怒で眼を赤くして、「何だと」と叫んだ。（二一）夜叉の王である富神は、ビーマが二度目の罪を犯したことを聞いて憤り、「馬を戦車につなげ」と言った。（二二）従者たちは、雲のような、そびえる山頂のような最高の戦車に、ガンダルヴァの馬たちをつないだ。（二三）彼の最高の馬たちはすべての美質をそなえ、汚れない眼をし、威光と力と速力をそなえ、種々の宝石で飾られていた。（二四）馬たちは戦車につながれて輝き、矢のように進もうとして、勝利を告げるように身ぶるいして、お互いに勇み立った。（二五）王中の王である、輝きに満ちた神は、その大戦車に乗り、神々やガンダルヴァたちに讃えられつつ出発した。（二六）そのすべての夜叉と財宝の主である偉大な神が進軍した時、一千万の勇猛な夜叉たちが彼を取り巻いて彼に仕えた。彼らは赤い眼をし、黄金

のように輝き、巨大な体をし、強力で、武装し、剣を持ち、非常な速さで進んだ。(二七—二八) パーンダヴァたちは、見目麗しい偉大な富神が近づいて来るのを間近に見て、総毛立って喜んだ。(二九) 気力に満ちた勇士たち、弓と剣を持ったパーンドゥの息子たちを見て、クベーラも喜んだ。(三〇) 富神の従者たちは鳥のように全速力で山頂に飛び上がり、彼らの近くに立った。(三一) それから、富神がパーンダヴァたちに対して満足しているのを見てとり、夜叉とガンダルヴァたちは冷静に立っていた。(三二) 偉大なパーンダヴァたち、法（ダルマ）を知るユディシティラと、ナクラとサハデーヴァは、富神に敬礼した。(三三) すべての勇士たちは、自分が罪を犯したと考え、富神を取り巻いて、合掌して立っていた。(三四) 富神はヴィシュヴァカルマン（一切造者）に造られた輝かしい天車プシュパカに乗った。それは最高の寝台と座席をそなえ、その縁は美しく彩られていた。(三五) 巨大な体の、尖った耳をした、非常に迅速な、幾千という夜叉や羅刹たちが、座っている彼の側近くで仕えていた。(三六) また幾百のガンダルヴァたちや、天女の群が、彼を取り巻いてかしずいていた。神々がインドラに仕えるように。(三七) ビーマセーナは頭に金色の美しい花輪をつけ、弓矢と剣を手に持ち、富神を見上げた。(三八) ビーマは羅刹たちに傷つけられたが、その状況下でクベーラを見ても、彼には恐れも疲労もなかった。(三九)

鋭い矢を持ち、戦いを望んで立っているビーマを見て、クベーラはユディシティラに告げた。(四〇)

「プリターの息子よ、一切の生類は汝が生類の幸せに専念していることを知っている。汝は

縁者たちとともに、恐れることなく山頂に住みなさい。(四一) パーンダヴァよ、汝はビーマセーナに怒ってはいけない。彼らは実はすでにカーラ（時間、破壊神）によって殺されていたのだ。あなたの弟は単なる道具（実行する者）である。(四二) この無謀な行為がなされたことについて恥じることはない。そしてまた、夜叉と羅刹たちの滅亡は、前もって神々に予見されていたのだ。(四三) 私はビーマセーナに対して怒っていない。バラタの雄牛よ、私は喜んでいる。ビーマのこの行為により、私は最初から満足していた。(四四)」

クベーラはユディシティラにこのように告げてから、ビーマセーナに言った。

「クルの最上者よ、わが子ビーマよ、汝がクリシュナーのためにこの無謀な行為をしたことを、私は気にかけていない。(四五) 汝は私や神々を気にかけず、自分の腕力によって、夜叉や羅刹たちを滅ぼした。そこで私は汝に満足している。狼腹よ、今日、私は恐ろしい呪詛から解放されたのだ。(四六) 私はかつてある過失のために、怒った最高の聖仙アガスティヤによって呪われた。今、私はその罪を贖（あがな）った。(四七) パーンダヴァの王子よ、私は前もってこの苦しみを予見していたので、汝にはまったく罪はない。敵を殺す勇士よ。(四八)」

ユディシティラは言った。

「神よ、あなたはどうして偉大なアガスティヤに呪われたのですか。神よ、あなたが呪われた理由をお聞きしたいと思います。(四九) そして、その時、あなたと軍隊と従者たちが、その聖者の怒りによってその場で燃やされなかったということも、私の驚きとするところです。(五〇)」

ヴァイシュラヴァナ（クベーラ）は語った。――

王よ、クシャヴァティーにおいて神々の会議があった。種々の武器を持ち、恐ろしい姿をした、三百マハーパドマ（数の単位）の夜叉たちに囲まれて、私はそこに行った。（五一）その道中、私は最高の聖仙アガスティヤを見た。彼は種々の鳥の群に満ち、花咲く樹々で飾られたヤムナー河畔で、激しい苦行を行じていた。（五二）彼は上方に腕を上げ、太陽に顔を向けて立っていた。光輝の塊である、輝き燃え盛る火のような彼を見て、私の友人である栄光ある羅刹王マニマットは、愚かしさと無知と高慢さと迷妄とにより、空から、その大仙の頭に唾を吐きかけた。（五三―五四）大仙は怒って、一切の方角を燃やすかのように私に告げた。

「富神よ、あなたのこの邪悪な友は、あなたの見ている前で、私をないがしろにして、このように侮辱したから、それ故、彼はあなたの軍隊とともに、人間によって滅ぼされるであろう。（五五―五六）愚か者よ、この兵たちが殺されて、あなたは苦しむことになろう。しかし、まさにその人間を見たら、この罪から解放されるであろう。（五七）しかし、あなたの兵たちのうちで、譜代の軍を擁するものは、恐ろしい呪詛を受けることはない。行きなさい。彼らがあなたの命令を行なうであろう。（五八）」

以上がかつて私があの最高の聖仙から受けた呪詛である。偉大な王よ、汝の弟のビーマにより私は解放された。（五九）

（第百五十八章）

ヴァイシュラヴァナは語った。――

ユディシティラよ、志操堅固、敏腕、場所、時、勇武。以上が世間の営みを行なう場合の五種の要件である。（一）バーラタよ、クリタ・ユガ（黄金時代）においては、人々は志操堅固で、各自の仕事に巧みで、勇武の作法を知っていた。（二）王族の最上者よ、志操堅固で、場所と時をわきまえ、一切の法の規定を知る王族が地上を治める。（三）プリターの息子である勇士よ、すべての行為においてそのようであるその男は、この世で名声を得て、死後もよい帰趨を得る。（四）シャクラ（インドラ）は場所と時の中間（好機）をうかがって勇武を発揮し、ヴリトラを殺して、ヴァス神たちとともに、天界における王位を得た。（五）邪悪な性質と知性を持つ人は、悪のみを追求し、諸行為を識別できず、この世とあの世において滅びる。（六）非常に愚かな人々は、時を知らず、なすべきことを識別できず、空しい行為を企て、この世とあの世で滅びる。（七）無謀な行為を行ない、詐術にふけり、邪悪な性質で、すべての力を欲する人々の決意は悪である。（八）このビーマセーナは法を知らず、高慢で、幼稚で、短気で、恐れを知らない。人中の雄牛よ、彼を教導してやりなさい。（九）

汝は王仙アールシティシェーナの隠棲所にもどったら、最初の黒月の間、憂いも恐れもなく滞在しなさい。（一〇）人間の王よ、アラカー（クベーラの都市）の居住者たちは、ガンダルヴァ、夜叉、羅刹たちとともに、そしてすべての山に住む者たちは、私に命じられて、汝と最高のバラモンたちを守るであろう。勇士よ。（一一）法を守る人々の最上者である王よ、この山で狼

腹（ビーマ）が無謀な行為をしたら、汝はきっぱりと制止してやりなさい。（二二）王中の王よ、今後は森に住む者たちは常に汝らを見守り、奉仕し、いたるところで守るであろう。（二三）人中の雄牛よ、そしてまた私の召使たちは、多くのおいしい飲食物を持って汝らに仕えるであろう。（二四）わが子よ、アルジュナが大インドラの、狼腹が風神の、汝がダルマ神の、ヨーガにより生じた息子であるように、また、双子がアシュヴィン双神の化身たる息子であるように、ユディシティラよ、汝らはすべて、ここで私に守護されるであろう。（二五―二六）ビーマセーナの弟であるアルジュナは、ものごとの是非を識別し、一切の法の特性を知り、天界において元気に暮らしている。（二七）何であれ諸世界において最高の優れた資質と考えられているものはすべて、アルジュナにおいては生まれつきそなわっているのだ。わが子よ。（二八）自制、恵み深さ、力、知性、廉恥心、堅忍、最高の威光。あの無量の威光ある、気力に満ちた男には、以上の美質がすべて存する。（二九）パーンダヴァよ、彼は迷妄により非難される行為を行なうことがない。そして人間（じんかん）にあって、彼が嘘つきであると言う人はいない。（三〇）クル族の名声を高める彼は、神々や祖霊やガンダルヴァたちに敬われて、インドラの住処において諸々の武器を習得している。バーラタよ。（三一）汝の父の祖父であるあの威光に満ちたシャンタヌは、すべての王たちを法によって支配したものだが、その彼が天界で、ガーンディーヴァ弓を持つアルジュナのことを喜んでいる。（三二）そしてシャンタヌは、気力に満ち、一族の重荷を担い、祖霊と神々とバラモンたちを正しく敬い、名声あり、ヤムナー川の近くで七種の主要な大祭を行なった。（三三）王よ、天界を得てインドラの世界にいる、

曾祖父であるその皇帝シャンタヌは、汝が息災でいるかとたずねている。（三四）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

それから狼腹（ビーマ）は、槍と棍棒と剣と弓を遠ざけて、クベーラに敬礼した。（二五）すると、守護者である富神は、庇護を求める彼に告げた。

「敵どもの誇りを奪い、友たちの歓喜を高めよ。（二六）敵を悩ますバラタの雄牛たちよ、自分の心地よい住居に滞在しなさい。夜叉たちが汝らの願いをかなえるであろう。（二七）バラタの雄牛アルジュナは、武器を習得して、インドラのもとを辞去し、すぐに実際にもどって来るであろう。（二八）」

グヒヤカ（夜叉）の王は、最高の行為を行なうユディシティラにこのように教えると、最高の名山へ帰った。（二九）幾千の夜叉と羅刹たちは、彩色の布におおわれ、種々の宝物で飾られた車に乗って、彼の後に従った。（三〇）クベーラの宮殿に向かってアイラーヴァタ道（月の軌道の北側の道）を進む最高の馬たちは、あたかも鳥のような音をたてた。（三一）その富神の馬たちは、雲を引きずるかのように、風を飲むかのように、空中を速やかに進んで行った。（三二）そしてあの羅刹たちの死体は、富神の命により、山頂から除去された。（三三）というのは、今や聖者アガスティヤにより彼らにかけられた呪詛の時なのであった。それ故、彼らはすべて、マニマットとともに、戦闘で倒されたのであった。（三四）一方、偉大なパーンダヴァたちは、それらの住居で、すべての羅刹たちに敬われて、何の不安もなく快適にその夜を過ごした。

（第百五十九章）

（三五）アルジュナの帰還

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

それから、太陽が昇った時、ダウミヤは日々の勤めをしてから、アールシティシェーナとともに、パーンダヴァたちのもとに来た。（一）彼ら一同は、アールシティシェーナとダウミヤの両足におじぎをしてから、合掌してバラモンたちに敬意を表した。（二）それから大仙ダウミヤはユディシティラの右手をとり、東方を見て、次のように告げた。（三）

「大王よ、あの山の王マンダラは、海にいたるまでの土地をおおって輝いている。（四）パーンダヴァよ、インドラとヴァイシュラヴァナ（クベーラ）がその方角を守っている。山や森や林に美しく飾られたその地域を、（五）一切の法《ダルマ》を知る賢明な聖仙たちは、それは大インドラとヴァイシュラヴァナ王の住処であると言っている。（六）生類、法を知る聖仙、シッダ、サーディヤ、神々は、そこから昇る太陽を崇拝する。（七）

一方、一切の生類の主、正義《ダルマ》を本性とするヤマ王（閻魔）は、死者の帰趨であるこの南の方角に住んでいる。（八）あの非常に稀有な外観の聖山サンヤマナは、死者の王の住処で、最高の富貴にめぐまれている。（九）王よ、あれは賢者たちがアスタ（西山）と呼ぶ山の王である。太陽はあの山に達して、誓約（天則）により沈む。（一〇）ヴァルナ王（水天）はこの山の王と大洋に住み、諸々の生類を守護する。（一一）栄光に満ちた者よ、あの誉れ高い大メール山は、北の方角を照らして立つ。それはブラフマン（ヴェーダ）を知る人々の吉祥なる帰趨である。（一二）そこには梵天《ブラフマー》の祭場《サダス》があり、万物の本源《アートマン》である造物主が、動不動の一切の存在を創造しつつ住んでいる。（一三）大メールはまた、梵天の意《こころ》から生じた息子たちと呼ばれる主たち――ダクシャがその第七番目である――の、吉祥にして障りなき住処である。（一四）そしてわが子よ、まさにここにおいて、ヴァシシタをはじめとする七名の神仙（北斗七星）が、常に昇り沈む。（一五）汚れを離れた土地、メールの最高の峰を見よ。そこには梵天が、自己において充足した神々とともに住んでいる。（一六）

梵天の住処のかなたに、ナーラーヤナ（ヴィシュヌ）の住処が輝いている。その神は、一切万物の原質《プラクリティ》のうちの恒久なる原質であり、始めも終わりもない最高の主であると言われる。その偉大なヴィシュヌの住処は、神聖で、光輝よりなり、吉祥であり、神々といえどもそれを見るのは困難である。王よ、その場所は太陽と火を超えて輝き、それ自体の輝きにより、神々や魔類によっても認められがたいのだ。（一七―一九）すべての星はそこに至るともはや輝かない。というのは、高邁な主がそこで自ら輝いているから。（二〇）苦行者たちは最高の苦行を修め、清浄な行為により浄められ、そこ、ナーラーヤナのもとに趣く。（二一）ヨーガにより成就し、暗質《タマス》と迷妄を離れた偉大な人々は、そこへ行き、再びこの世界にもどって来ない。バーラタよ。（二二）栄光ある者よ、その主の住処は恒久にして不変である。ユディシティラよ、常にそれに敬礼せよ。（二三）

闇を掃う太陽の神は、すべての星を率いてそこを右まわりにまわる。(二四) それから太陽は、アスタ（西山）に達して、薄明を越え、北の方角に行く。(二五) 太陽の神はメールをまわって、一切万物の幸福に専念し、再び東方に出る。パーンダヴァよ。(二六) 同様に、月の神は、月相の変り目の日に一月を多様に分かち、諸々の星宿とともに進む。(二七) このようにして、この（太陽）は孜々として大メールを経巡ってから、一切の生類を繁栄させつつ、再びマンダラ山へ行く。(二八) かくて闇を掃う太陽の神は、その光線により世界を繁栄させ、このような妨げられることのない道を巡回する。(二九) 寒い季節を作ろうと望む時は、彼は南の方角へ行く。すると一切万物に寒季の時節が訪れる。(三〇) 太陽は引き返すと、その威光により、動不動の万物の威光を奪う。(三一) すると汗、疲労、倦怠、消耗が人々を襲う。諸生物は常に眠りをしきりに求める。(三二) このようにして太陽の神は、言い知れぬ道をおおって、更に生類を繁栄させつつ、雨を創り出す。(三三) 大威光に満ちた太陽は、快い雨と風と熱により、動不動のものたちを繁栄させつつ、再び回帰する。(三四) プリターの息子よ、このように太陽は孜々として時間（カーラ）の輪（チャクラ）をまわし、一切万物を率いて回転する。(三五) 太陽の進行は恒常である。それは止まることはない。パーンダヴァよ、彼は万物の威光を受け取り、再びそれを放出する。(三六) バーラタよ、この主は、一切万物の寿命と行為を配分し、常に昼夜とカラーとカーシター（いずれも時間の単位）を創り出す。(三七)」（第百六十章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

彼ら偉大な人々が正しい誓戒を守り、アルジュナとの再会を待ち望みつつ、その山の王に住んでいた間、彼らは楽しみと喜びを味わっていた。(一) 多くのガンダルヴァ（半神の一種）の群や大仙たちが、気力に満ち、非常に清らかな性質をし、威光をそなえ、真実と堅固さに満ちた彼らを訪れた。(二) その花咲く樹々の生じた最高の山に達して、勇士たちは、天界に達したマルト神群のように、最高に満足した。(三) 孔雀やハンサ（郭公）の鳴き声が響き、花々におおわれた大山の峰や尾根を見て、彼らは最高の喜びに達していた。(四) 彼らはその最高の山において、クベーラが自ら作った蓮池を見た。その岸は樹々におおわれ、そこにはカーダンバやカーランダやハンサなどの鳥がいて、蓮に満ちていた。(五) それから彼らは、多彩な花輪におおわれて輝かしい、美しさに満ちた遊戯の場所を見た。また、非常に魅力的な最高の宝玉を見た。それらはすべて、財宝を授ける神クベーラにふさわしいものであった。(六) 彼らは苦行に勤しみ、いつも歩きまわっていたが、多彩な色をしたよい香りの大樹におおわれ、常に雲の輪におおわれた山頂を認めることはできなかった。(七) その最高の山の光輝により、また輝く薬草の力により、昼夜の区別はまったくなかった。(八) 無量の威光に満ちた太陽はそこに住し、動不動のものを繁栄させている。獅子のような勇士たちはそこに立ち、日の出と日没とを眺めた。(九) 勇士たちは、太陽が昇り沈むのにつれて闇が去来するのを見た。そして、四方四維が太陽の光線の網に包まれるのを見た。(一〇) 彼らは学習をし、日々の儀式を行ない、法（ダルマ）に専念し、清らかな生活を守り、真実を守り、あの誓いに忠実な勇士（アルジュナ）

の到着を待っていた。(一一)
「まさにここで、我々はすぐに、武器を習得したアルジュナと会って喜ぶであろう」と言って、プリターの息子たちはこよなく期待して、苦行とヨーガに専念した。(一二)彼らは色とりどりの山の森を眺め、常にアルジュナのことを思っていた。彼らにとって、一昼夜は一年間のように長く感じられた。(一三)偉大なアルジュナが、ダウミヤの許しを得て、髷を結い出発した時、彼らの喜びはなくなった。アルジュナに心を寄せていた彼らにとって、どうして喜びがあったであろうか。(一四)アルジュナが兄ユディシティラの命令により、象のような足どりでカーミヤカの森から出発した時、彼らは悲しみにうちひしがれた。(一五)バーラタたちが武器を求めてインドラのもとに行った白馬の勇士のことを思い続けている間に、その山中で、彼らにとって一カ月が非常に長く感じられた。(一六)

やがてある日のこと、勇士たちがアルジュナのことを思っていると、稲光のように輝く、馬にひかれた大インドラの車が突然近づいて来るのを見て、彼らは歓喜した。(一七)そのマータリ(インドラの御者)に操縦された輝く車は、突然虚空を輝かせつつ、雲の中の流星のように、煙の出ない燃え立つ火焔のように輝いていた。(一八)その上にアルジュナが乗っているのが認められた。彼は花輪をつけ、すばらしい装身具をつけ、金剛杵(ヴァジュラ)を持つ神(インドラ)のような力を持ち、美々しさで輝きつつ、その山にやって来た。(一九)王冠で飾られた彼はその山に着くと、大インドラの車から降りて、まずダウミヤの両足に敬礼してから、続いてユディシティラの両足に敬礼した。(二〇)彼はまた狼腹(ビーマ)の両足に敬礼し、マードリーの二人の息子

に敬礼された。彼はクリシュナー(ドラウパディー)に会い、彼女を励まして、兄のそばで頭を下げていた。(二一)比類のない彼に会って、彼らは最高に喜んだ。王冠で飾られた彼も、彼らを見て、王を讃えつつ歓喜した。(二二)

プリターの息子たちはインドラの車に近づき、上機嫌でそれを右まわりにまわった。あのナムチの殺害者(インドラ)は、その車に乗って、ディティの息子たち(魔類)の七群を殺したものであった。(二三)彼らは非常に喜んで、マータリに対し、神々の王にふさわしい最高の歓待をした。クルの王子(パーンダヴァ)たちは、すべての神々の消息を適切にマータリにたずねた。(二四)マータリの方も彼らに挨拶し、父が息子を教えるように彼らに教えを説いた。そして無比の輝きを放つ車に乗って、再び神々の王のもとにもどった。(二五)

その最高の神の車が去った時、すべての敵を挫くインドラの偉大な息子は、インドラから与えられた高価で最高の形の、太陽のように輝く装身具を、喜んで愛しいスタソーマの母(ドラウパディー)に与えた。(二六)それから彼は、太陽や火のように輝くクルの雄牛たちと、バラモンの雄牛たちの中央に座り、すべてをありのままに語った。(二七)
「私はこのようにして、インドラ、風神、シヴァから直々に武器を習得しました。インドラと神々はみなして、私のよい性行と精神集中に喜びました。(二八)」
行ないの清浄なアルジュナは、天界に入ったいきさつを彼らにかいつまんで語ってから、マードリーの二人の息子とともに眠り、その夜を過ごした。(二九)　(第百六十一章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

その時、すべての楽器の音とともに、神々のたてる喧騒が空中に響いた。(一)また、車輪の音や鈴の音、種々の猛獣や鳥獣の鳴き声がいたるところに響いた。(二)ガンダルヴァや天女たちは、いたるところで太陽のような天車に乗って、かの敵を制する神々の王（インドラ）に随行していた。(三)それから神々の王インドラは、馬たちにひかれ、黄金で飾られ、最高の美々しさで輝く、雷雲のような音をたてる車に乗り、速やかにプリターの息子たちに近づいた。千眼者インドラは到着すると、車から降りた。(四―五)

栄光あるダルマ王ユディシティラは、偉大な神々の王を見るとすぐに、弟たちとともにその神に近づいた。(六)彼は〔祭官たちに〕多くの報酬を払い、儀軌に見られる儀式により、限りなく高邁な神を、作法通りにふさわしく供養した。(七)威光あるアルジュナも平伏して、インドラに対して従者のようにおじぎをして、その神々の王のそばに立った。(八)威光に満ちたクンティーの息子ユディシティラは、かたわらにアルジュナがうやうやしく立っているのを見て喜んだ。(九)彼は神々の王の、熱力（タパス）に満ち汚れのない編髪を見て、またアルジュナを見て、大きな喜びを感じたのであった。(一〇)英邁な神々の王インドラは、このように元気で歓喜にあふれた王に告げた。(一一)

「パーンダヴァよ、王よ、あなたはこの地上を治めるであろう。クンティーの息子よ、御機嫌よう。再びカーミヤカの隠棲所にもどりなさい。(一二)敬虔なアルジュナは、私からすべ

ての武器を得た。そして私はアルジュナに喜んだ。三界すべてといえども、彼に勝つことはできない。(一三)」

千眼者はクンティーの息子ユディシティラにこのように告げると、満足し、大仙たちに讃えられつつ、天界へ行った。(一四)

このように、富神の家にいるパーンダヴァたちがインドラに会ったことを、注意深く学習する賢者、清浄な生活をし、自制し、誓戒を厳守する賢者は、障碍なく、百年の間、幸福に生きるであろう。(一五―一六)　（第百六十二章）

山岳民（キラータ）とアルジュナの戦い

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

インドラが引き返した時、兄弟とクリシュナーに再会したアルジュナは、ダルマの息子（ユディシティラ）に敬意を表した。(一)アルジュナが挨拶した時、ユディシティラは喜んで、弟の頭に口づけし、歓喜で口ごもりながら彼に告げた。(二)

「アルジュナよ、お前は天界でどのように時を過ごしたか。またお前はどのようにして神々の王を満足させて、武器を手に入れたのか。(三)バーラタよ、お前は正しく武器を習得したか。神々の王は喜び、ルドラ（シヴァ）はお前に武器を与えたか。(四)お前はどのようにしてインドラや槍を持つ神（シヴァ）に会ったか。どのようにして武器を得たか。どのようにして彼を

満足させたか。（五）どのようにしてインドラ神はお前に『私はあなたに喜んだ』と告げたのか。お前はどのようにして喜ばせたのか。輝きに満ちた勇士よ、私はそれを詳しく聞きたいと思う。（六）非の打ち所のない者よ、どのようにして偉大な神（シヴァ）と神々の王はお前に満足したか。またどのようにして金剛杵(ヴァジュラ)を持つ神（インドラ）を喜ばせたのか。アルジュナよ、私にすべてを残らず話してくれ。（七）」

アルジュナは語った。

偉大な王よ、聞いて下さい。どのようにして私がインドラ神とシヴァ神に出会ったかを。（八）敵を挫く王よ、あなたに告げられた学術を学習し、私はあなたに指示されて、苦行のために森へ出発しました。（九）私はカーミヤカからブリグの峰に行き、苦行を始めました。そこで一夜を過ごした私は、道で一人のバラモンを見かけました。（一〇）クンティーの息子よ、彼は私に、「あなたはどこへ行くのか。私に言いなさい」とたずねました。クルの王よ、そこで私はありのままにすべてを語りました。（一一）最高の王よ、そのバラモンは私から真実を聞き、私に敬意を表し、私に満足しました。（一二）それから彼は、喜んで私に告げました。「バーラタよ、苦行を行ないなさい。あなたは苦行をしていれば、すぐに神々の王に会えるでしょう。（一三）」

そこで私は彼の言葉に従ってヒマーラヤ山に登り、一カ月間、根と木の実を食べて苦行を行じました。偉大な王よ。（一四）第二の月は、水だけを飲んで過ごしました。第三の月は、

絶食しておりました。パーンダヴァの王よ。（一五）第四の月は、私は腕を上げたままで立っていました。しかし私の活力はなくなりませんでした。それは奇蹟のようでありました。（一六）第四の月が過ぎ去って、第一日目が過ぎた時、猪の姿をした怪物が私の近くに来ました。（一七）それは鼻で地面を掘り、足でひっかき、腹を地面にこすりつけ、何度もころげまわりました。（一八）それを追って、キラータ（狩猟などで生活する部族民）の姿をした他の巨大な怪物がやって来ました。それは弓矢と刀を持ち、女性の群を引き連れていました。（一九）そこで私は弓と無尽の矢を入れた大箙(えびら)をとって、その身の毛のよだつ怪物を矢で射ました。（二〇）それと同時に、キラータも強力な弓を引き絞り、したたかに怪物を撃ちました。私の心を震わせるかのように。（二一）王よ、彼は私に告げました。

「これは俺が先に唾をつけた獲物だ。お前は狩猟の掟(ダルマ)を破って、どうしてそれを撃ったのか。（二二）俺は鋭い矢でお前の誇りを砕いてやろう。覚悟せよ。」（二三）そして山のように立つ私に、おびただしい矢を浴びせかけました。私の方も彼に雨のような多数の矢を浴びせました。（二四）そして私は、呪句(マントラ)で浄められた、輝く先端の矢を射て、彼を迎え撃ちました。金剛杵(ヴァジュラ)で山を撃つように。（二五）すると彼の姿は、百様、千様になりました。そこで私はそれらの身体を矢で射ました。（二六）バーラタよ、それらの身体が再び一つになるのが認められました。偉大な王よ、私はまた、それらをも粉砕しました。（二七）王よ、すると彼は、小さな体で大きな頭を持つものになり、そしてまた大きな体で小さな頭を持つものになり、そして一

つの体になり、私に戦いを挑みました。（二八）戦闘において、私は矢で彼をうち負かすことができなかったので、風神の武器を用いました。バラタの雄牛よ。（二九）しかし驚いたことに、彼を殺すことはできませんでした。その武器が退けられた時、私は非常に驚嘆しました。（三〇）偉大な王よ、そこで私は、その戦いにおいて、再びおびただしい矢を激しく彼に浴びせました。（三一）私はストゥーナカルナ、アヨージャーラ、シャラヴァルシャ、シャロールバナ、シャイラ、アシュマヴァルシャ（という飛道具）を用いて攻撃しました。ところが彼は、私のすべての武器を笑いながら受け止めました。非の打ち所のない方よ。（三二）それらがすべて消滅した時、私はブラフマ・アストラ（梵天の武器）を用いました。彼は燃え上がる矢によって一面におおわれました。彼は私が放つ偉大な武器によりおおわれて、ふくれ上がって見えました。（三三）世界は私が放つ光輝によって熱せられました。瞬時にして諸方と空は一面に照らされました。（三四）しかしその威光に満ちた男は、たちまちその武器をも破壊しました。王よ、ブラフマ・アストラが破られた時、私は大きな恐怖に襲われました。（三五）そこで私は弓と無尽の大箙をとり、その怪物を激しく射ました。ところが彼は、それらの武器をも浪費させせました。（三六）すべての矢と武器が浪費させられた時、私とその怪物は素手で戦いました。（三七）我々は拳で戦い、手の平で打ち合いました。そしてその怪物は私を打ち倒し、私は動けなくなって大地に倒れました。（三八）するとその怪物は笑って、女たちとともに、私の見ている前で、その場で消え失せたのです。まるで奇蹟のようでした。偉大な王よ。（三九）彼は実は神々の主マヘーシュヴァラ（シヴァ）であったのです。その神はこのようにし

てから、キラータの姿を捨て、驚異の衣をまとい、他の自分自身の神々しい姿、神的な本来の姿をとって立ちました。（四〇―四一）雄牛を旗標とし、ウマー（神妃）をともない、黄色い眼をし、多様な姿をそなえ、槍を持つ尊い神が現に認められました。（四二）その時、槍を持つ神は、対戦中と同じように正面に立つ私に近づいて、「私は満足した」と告げました。敵を苦しめる王よ。（四三）それから神は、私の弓と無尽の矢を入れた箙とを手渡し、「何か願いごとをせよ」と言いました。（四四）

「クンティーの息子よ、私はお前に満足した。言いなさい。お前に何をすればよいか。勇士よ、何か願望があれば言え。かなえてやろう。不死となることを除いて、お前の願望を言え。（四五）」

私は武器のことを考えながら、合掌し、頭を下げて、シヴァ神に言いました。（四六）

「神よ、もし私に満足して下さるなら、お願いがあります。私は神々の持つすべての武器を学びたいのです。」

シヴァ神は私に、「授けるであろう」と告げました。（四七）

「パーンダヴァよ、私のルドラの武器はお前に奉仕するであろう。」

そして満足した主は私にシヴァの武器（パーシュパタ）を授けたのです。（四八）偉大なる神は私にその永遠の武器を授けてから言いました。

「これは決して人間に対して用いてはならぬ。（四九）お前がひどく苦しめられたら、それを用いることができる。ダナンジャヤよ。そしてあらゆる場合、他の武器を迎撃する場合にそ

れを用いるべきである。(五〇)」
その雄牛を旗標とする神が満足した時、そのうち破られることのない、すべての武器を抑止できる、神的な武器は、具体的な姿をとって私の傍らに立ちました。(五一)それは敵たちを滅ぼし、敵の軍隊を殲滅し、神々や魔類（ダーナヴァ）や羅刹たちにとっても克服しがたく、耐えがたいものでした。(五二)私は彼の許しを得てその場に座りました。そして私が見ているうちに、その神はその場で消え失せました。(五三)

（第百六十三章）

アルジュナ、神々の武器を習得する

アルジュナは語った。——
神の中の神である偉大なシヴァの恩寵により、私は満足してそこでその夜を過ごしました。(一)私は夜を過ごし、朝のお勤めを終えた時、以前に会ったバラモンを見ました。(二)私は彼に起こったことをすべて報告しました。「私は偉大なシヴァ神に会いました」と。バーラタよ。(三)王中の王よ、その最高のバラモンは喜んで私に言いました。
「あなたは他の誰も会えない偉大な神（シヴァ）に会った。(四)非の打ち所のない者よ、ヴァイヴァスヴァタ（ヤマ）などのすべての世界守護神に会ってから、神々の王インドラに会うでしょう。彼もまた諸々の武器をあなたに与えるでしょう。(五)」
王よ、その太陽のように輝くバラモンは、このように告げると、私を繰り返し抱擁してか

ら、気の向くままに立ち去りました。(六)
さて、その日の午後、清浄な風が再び世界を新しくするかのように吹きました。敵を殺す王よ。(七)そしてヒマーラヤの山麓にいる私の近くで、新鮮でよい香りのする神々しい花々が咲き出ました。(八)よい音色の神々しい楽器や、インドラに捧げる魅力的な讃歌が、いたるところで聞こえました。(九)天女やガンダルヴァの群が、神の中の神の前で、いたるところで歌を歌っていました。(一〇)マルト神群が天車に乗ってそこにやって来ました。天界に住む大インドラの従者たちもやって来ました。(一一)それから、マルトを率いるインドラが、馬をつなぎ美しく飾られた車に乗り、神妃シャチーをともない、すべての神々とともに、そこにやって来ました。(一二)ちょうどその時、最高の富貴をそなえたクベーラ・ナラヴァーハナが私の前に現われました。(一三)そして南の方角に立つヤマと、それぞれの方角に立つヴァルナと神々の王を見ました。(一四)
偉大な王よ、彼ら神々の雄牛は私を労ってから告げました。
「アルジュナよ、世界守護神たちがそろっているのを見なさい。(一五)お前は神々との用件を成就するためにシヴァ神に会った。我々全員からも武器を受け取りなさい。(一六)」
そこで私は恭しく神々の雄牛たちに平伏し、種々の偉大な武器を礼儀正しく受け取りました。王よ。(一七)私は武器を受け取ってから神々に別れを告げました。バーラタよ、かくてすべての神々は引き返して行きました。(一八)敵を制する者よ。
神々の敵を殺す神、神々の主インドラは、美しく輝く戦車に乗り、微笑して次のように言

いました。(一九)
「アルジュナよ、私はお前が来る前からお前のことを知っている。以前にも私はお前の前に姿を見せた。バラタの雄牛よ。(二〇) というのは、お前はすでに何度も聖場で沐浴し、苦行を行じたから、天界へ行くであろう。パーンダヴァよ。(二一) しかしお前は再び最高に激しい苦行を行なうべきである。」
そして尊い神は、苦行を行なう方法をすべて告げました。(二二)
「私の指令により、マータリ（御者の名）がお前を天界に連れて行くであろう。というのは、お前はすでに神々や偉大な聖仙たちによく知られているから。(二三)」
そこで私はシャクラ（インドラ）に言いました。
「神よ、私に好意をかけて下さい。私は武器を学ぶためにあなたを師と仰ぎます。(二四)」
インドラは言いました。
「わが子よ、お前は武器を得て残酷な行為をするであろう。敵を苦しめる者よ。お前がそのために武器を欲したところの、その願望を達成せよ。(二五)」
アルジュナは語った。――
そこで私は言いました。
「敵を殺す者よ、私はそれらの神的な武器を人間に対しては使用しません。敵の武器を迎撃する場合を除いて。(二六) 神々の王よ、私にそれらの神的な武器を授けて下さい。後で私が

武器で獲得される諸世界（天界）に達するために。神々の雄牛よ。(二七)」
インドラは言いました。
「アルジュナよ、私は試すためにお前にあのように告げたのだ。お前のこの言葉は、私の息子にふさわしいものだ。(二八) バーラタよ、私の住居に行って、一切の武器について学べ。ヴァーユ（風天）、アグニ（火天）、ヴァス神群、ヴァルナ（水天）、マルト神群の武器、(二九) サーディヤの武器、梵天の武器、ガンダルヴァと蛇と羅刹の武器、すべてのヴィシュヌの武器、ニルリティ（死の女神）の武器、そして私に属するすべての武器を。クルの王子よ。(三〇)」
アルジュナは語った。――
シャクラ（インドラ）は私にこのように告げると、その場で消え失せました。王よ、私はその時、馬にひかれたインドラの戦車が近づいて来るのを見ました。それは神々しく、幻力（マーヤー）により作られ、清浄で、マータリに操縦されていました。(三一) 世界守護神たちが去った時、マータリは私に告げました。
「光輝に満ちた者よ、神々の王シャクラがあなたに会いたいと望んでいます。(三二) 勇士よ、あなたは成就しました。最高の仕事をしなさい。善行者たちの世界を見なさい。肉体を持ったままで天界へ行きなさい。(三三)」
マータリにそう言われて、私はヒマーラヤ山に別れを告げ、右まわりの礼をしてから、その最高の戦車に乗りました。(三四) 馬術に通じたマータリは、非常に巧みに、思考か風のよ

うに速い馬たちを適切にかりたてました。(三五) 王よ、その時その御者は、揺れる戦車に立つ私の顔を見て、驚いてこう言いました。(三六)

「あなたは神の戦車に乗りながら一歩も動かないとは、非常に奇蹟的で不思議なことであると私には思われます。(三七) 神々の王ですら、馬たちが最初に跳ねる時にはよろめくことを、私はいつも眼にしています。バラタの雄牛よ。(三八) しかしクルの王子よ、あなたは戦車が揺れても、しっかりと立っています。あなたの精神力はインドラを凌駕すると、私には思われます。(三九)」

マータリはそう言って、天空に突入した後、私に神々の住処と天宮を見せました。バラタ族の王よ。(四〇) インドラの御者マータリは喜んで、ナンダナの森やその他の多くの神々の森を私に見せてくれました。(四一) それから、インドラの住処であるアマラーヴァティーの都を見せました。それは願望を実らせる種々の神樹や宝石によって美しく飾られていました。(四二) 太陽はそこを照らすことなく、そこには寒暑、疲労、ほこり、泥、闇、老いはありません。王よ。(四三) 偉大な王よ、そこでは天人たちに、悲しみ、惨めさ、顔色が変わること、倦怠は認められません。敵を制する者よ。(四四) そこには怒りや貪欲や不浄もありません。王よ。神の住処においては、生類は常に満足して喜んでいます。(四五) そこでは樹々は常に花と果実をつけ、緑の葉をつけています。蓮とサウガンディカに満ちた種々の池があります。(四六) そこではよい香りの活気づける清浄な涼風が吹いていました。大地はありとあらゆる宝で彩られ、花々に飾られています。(四七) 甘美な声の、好ましい多くの鳥獣がいて、多

くの神々が天車で飛行するのが見られます。(四八) それから私は、ヴァス神群、ルドラ神群、サーディヤ神群、マルト神群、アーディティヤ神群、アシュヴィン双神を見て、彼らすべてに敬意を表しました。(四九) 彼らは勇武、名声、威光、力、武器、戦勝を得よと言って私を祝福しました。(五〇)

私は神々やガンダルヴァ（半神の一種）たちの住むその美しい都に入り、合掌して、神々の王である千眼者に近づきました。(五一) 最高に恵み深いシャクラ（インドラ）は喜んで、その玉座の半分を与え、尊敬をこめて私の体に触れました。(五二) 私は武器を得るために、その天界に、神々やガンダルヴァたちとともに住みました。諸々の武器を習得しながら。(五三) ヴィシュヴァーヴァスの息子のチトラセーナは私の友人となりました。そして彼は、私にすべてのガンダルヴァの武器（または「音楽」）を習得させました。王よ。(五四) 王よ、それから私は諸々の武器を習得した後、よくもてなされ、すべての願望を満たされて、インドラの住処で幸福に暮らしました。(五五) 私はその間、多くの歌や器楽を聞き、最高の天女たちが踊るのを見ました。敵を苦しめる者よ。(五六) バーラタよ、何ひとつ疎かにすることなく、適切に理解し、この上なく受け入れて、私は武器の習得にのみ専念していました。(五七) 千眼者はそのような私の願いに満足しました。王よ、私がこのようにして天界に住んでいるうちに時が過ぎて行きました。(五八)

（第百六十四章）

アルジュナは語った。――
私が武器を習得し、信頼を得た時、インドラは両手で私の頭に触れ、次のように告げました。(一)

「今や神群といえども、戦いによってお前に勝つことはできない。いわんや、人間界における、自己を制御していない人間たちはなおさらである。お前は戦闘にかけて無比であり、計り知れず、無敵である。(二)」

そしてその神は〔喜びと驚きで〕総毛立って、更に言いました。

「勇士よ、武器の戦いにおいてお前に匹敵するものは誰もいないであろう。(三)お前はいつも油断することなく、巧妙で、真実を語り、感官を制御し、バラモンを敬い、武器に通じ、勇猛である。クルの王子よ。(四)プリターの息子よ、お前は五通りの方法により、十と五の武器を習得した。お前に匹敵する者はいない。(五)アルジュナよ、お前は武器の使用法、その回収法、及び繰り返し使用する方法、贖罪法、対抗法をすべて知っている。(六)今やお前の師匠(グル)に対する謝礼をすべき時だ。勇士よ、それを実行すると約束してくれ。後はどうすればよいか私が心得ている。(七)」

王よ、そこで私は神々の王に言いました。

「もし私にできることなら、すぐにいたします。(八)」

王よ、するとインドラは笑って私に告げました。

「今やお前にできないことは、三界において何もない。(九)私にはニヴァータカヴァチャ族という魔類の敵がいる。彼らは海岸の砦に住んでいる。(一〇)彼らの数は三千万で、等しい姿と力と輝きを有する。クンティーの息子よ、そこで彼らを殺せ。それがお前の師匠(グル)に対する謝礼となろう。(一一)」

彼は輝きに満ちた神聖な戦車を私に貸し与えました。それはマータリに操縦され、孔雀のような毛並みの馬につながれていました。(一二)そして彼は、私の頭にこの最高の冠をつけ、彼自身にふさわしいような装身具を授けてくれました。(一三)それから、この貫くことのできない、快い感触の美しい最高の鎧をくれました。そしてこの消耗することのない弦をガーンディーヴァ弓に張ってくれました。(一四)かつて神々の主はその車に乗って、ヴィローチャナの息子バリを征服したものです。私はその輝く車に乗って出発しました。(一五)するとすべての神々は、その車の音に驚いて、私のことを神々の王と思って集まって来ました。王よ。そして私を見て、彼らは、「パルグナ(アルジュナ)よ、あなたは何をしようとしているのか」と私にたずねました。(一六)私はありのままに彼らに答えました。

「私は戦闘でこのようなことをするでしょう。私はニヴァータカヴァチャ族を殺したいと考えて出発したのです。非の打ち所のない神々よ、私を祝福して下さい。(一七)」

彼らは満足して、インドラを讃えるように私を讃えました。

「インドラはこの戦車に乗って戦い、シャンバラを征服した。ナムチ、バラとヴリトラ、プラフラーダとナラカを征服した。(一八)インドラはこの戦車に乗って戦い、幾千、幾百万、幾億の魔類を征服した。(一九)クンティーの息子よ、かつて強力なインドラがしたように、

あなたも戦闘において、この戦車に乗って進撃し、ニヴァータカヴァチャたちを征服するであろう。(二〇)そしてこの最高の法螺貝によってあなたは魔物たちを征服するだろう。偉大なインドラはこれにより諸世界を征服したのだ。(二一)」

神々は海から生じたデーヴァダッタ(法螺の名)を私に授けました。その時、私は神々に讃えられつつ、勝利のためにそれを受け取りました。(二二)法螺と鎧と矢を持ち、弓を握って、私は戦おうとして恐ろしい魔類の住処へ向けて出発しました。(二三)(第百六十五章)

ニヴァータカヴァチャ族を滅ぼす

アルジュナは語った。──

それから私は、あちこちで大仙たちに讃えられつつ(進んで行くうちに)、不滅の水の主である恐ろしい海を見ました。(一)そこには動く山のような波が認められました。泡立ち、分散しては集合し、そそり立つ波が。そこには幾千という宝物を満載した舟がいたるところに認められました。(二)ティミンギラ(鯨(ティミ)を呑むとされる大魚)やそれをも呑む大魚、亀、マカラ(海豚または鰐)が、水に沈んだ山のように認められました。(三)いたるところ水中に沈んだ幾千の法螺貝が認められました。それらは夜中、薄雲におおわれた星々のようでした。(四)そこには、幾千という宝の群が認められました。そして激しい風が吹きすさんでいました。それは奇蹟のような光景でした。(五)その激烈にして最高の、すべての水の依所を過ぎて、私は近くから、

魔物に満ちた悪魔の都を見ました。(六)

マータリは速やかに地上に降りて、戦車の音を響かせつつ都へ進撃しました。(七)その天空の雷鳴のような戦車の音を聞いて、魔物たちは私のことを神々の王と思って取り乱しました。(八)すべての者たちは、心を乱して、弓矢を持ち、槍、刀、斧、棍棒、杵を手にして、立ち尽くしていました。(九)それから魔物たちはふるえる心で城門を閉めました。都の防備を固め、誰も姿を見せませんでした。(一〇)そこで私は、大音響をたてる法螺デーヴァダッタを取り上げ、阿修羅の都に接近して、徐(おもむろ)にそれを吹きました。(一一)その音は天空を凝固させ、反響を生み出しました。非常に大きな生物もおののき、身を隠しました。(一二)

それから、すべてのディティの息子(類魔)ニヴァータカヴァチャたちが、いたるところから、幾千と姿を現わしました。彼らは種々の鎧を着て、種々の武器(武器の名の列挙、省略)を手にしていました。(一三―一五)するとマータリは、戦車で戦う方法について何度も熟考してから、平坦な土地に馬たちをかりたてました。バラタの雄牛よ。(一六)その駿馬たちはかりたてられて全速力で走ったので、私は何も見ることができませんでした。それは奇蹟のようでした。(一七)それから魔物たちは、種々に姿を変えたすべての戦士のおびただしい群を、大いに鼓舞しました。(一八)その大音響により、十万もの魚の群が息絶えて、山のように水上にあふれ出て来ました。(一九)それから魔物たちは全速力で私に襲いかかり、数百数千という鋭い矢を浴びせかけました。(二〇)彼らと私の間に、非常に恐ろしい激戦が繰り広げられました。それはニヴァータカヴァチャ族の滅亡をもたらす戦いでした。バーラタよ。(二一)それから、

神仙、魔類の聖仙の群、梵仙、シッダたちがその大戦闘を見に集まって来ました。(二二) 聖者たちは勝利を望んで、ふさわしい甘美な言葉で、私を讃えました。ターラカを滅ぼす戦いにおいてインドラを讃えたように。(二三)（第百六十六章）

アルジュナは語った。――

バーラタよ、それからすべてのニヴァータカヴァチャは、その戦いにおいて、一斉に武器をとり、激しく私に襲いかかりました。(一) 勇士たちは雄叫びをあげながら戦車の進路を断ち、私をすっかり取り囲み、矢の雨を浴びせました。(二) それから他の強力な魔物たちは、多数の棍棒や投槍とともに、槍と矛を手にして、槍や石弓を私に放ちました。(三) 絶えず彼らが放つ槍の大雨が、私の戦車の上に落下しました。(四) 他のニヴァータカヴァチャたちは、私に挑戦して駆け寄りました。彼らは鋭い武器で武装し、恐ろしく、カーラ（破壊神）のような戦士でした。(五) 私はその戦いにおいて、ガーンディーヴァ弓から、高速で一直線に飛ぶ種々の矢を十本ずつ放って、彼らを次々と殺しました。私の用いた、石でよく研がれた矢により、彼らはすべて退却しました。(六) マータリがすばやく馬たちをかりたてると、馬たちは風のように速く、多様な戦車の戦術を展開しました。そしてマータリに巧みに操縦されて、彼らはディティの息子たちを粉砕しました。(七) その大戦車には一万頭の馬がつながれていましたが、マータリに制御されて、わずかな数しかいないように進みました。(八) 彼らの足に蹴られたり、車輪の音に（うちひしがれ）、また私の矢に撃たれて、阿修羅たちは幾百となく死にました。(九) 他の弓を持つ兵たちは、息絶えて、御者を殺され、馬たちに引きまわされていました。(一〇) 勇猛な戦士たちは、すべての方角をおおって、種々の武器で打ちかかり、それで私の心はひるみました。(一一) ところが、私はマータリの最高に驚異的な力量を見ました。彼は駿速の馬たちを苦もなく操っていたのです。(一二) 王よ、そこで私は、その戦いにおいて、高速の多様な飛箭により、武装した阿修羅たちを幾百幾千と射貫きました。(一三) 敵を殺す勇士よ、私がそこであらゆる努力を払って戦っている間、勇猛なインドラの御者は喜んでおりました。(一四) 敵たちは馬と戦車に圧倒されて、ある者たちは死に、またある者たちは退却しました。(一五) ニヴァータカヴァチャたちは、戦闘において我々に競うかのように、いたるところで矢の大雨を降らせて、私を食い止めようとしました。(一六) そこで私は、ブラフマ・アストラ（梵天の武器）で加持した（アストラは呪文とともに発せられる武器）高速の多様な飛箭により、彼らを直ちに幾百幾千と殺しました。(一七)(一八―二六略) 魔物たちは、インドラの雷電のように激しい、高速で一直線に飛ぶ私の矢によって圧迫されて意気消沈しました。(二七) ニヴァータカヴァチャたちは、その身体や臓物はずたずたに切られ、武器の力は失せたので、幻術により私と戦いました。(二八)（第百六十七章）

アルジュナは語った。――

それから、いたるところで、非常に恐ろしい山のように、岩石の大雨が降り、私をひどく苦しめました。（一）私はその戦闘において、インドラの武器から発射された金剛杵のような高速の矢で、それを一つ一つ粉砕しました。（二）岩の雨が粉砕された時、火が生じ、そこに岩の粉末が落ち、火の海のようになりました。（三）岩の雨が撃退された時、私の近くに、車軸ほど太い大雨が降り注ぎました。（四）幾千と空から落ちるその激しい勢いの水流は、すべての天空と四方四維とをおおいました。（五）激しく降る雨、風のうなる音、魔物たちの叫び声によって、何も識別されなくなりました。（六）その水流は天地をすべておおい尽くし、地上に絶えず落ちて私を混乱させました。（七）そこで私はインドラに教えられた燃え上がる神聖な武器ヴィショーシャナ（「乾かすもの」という意）を放ち、それでその恐ろしい水を干上がらせました。（八）王よ、私が岩の雨を撃退し水の雨を干上がらせた時、魔物たちは火と風の幻術を放ちました。（九）そこで私は、水の武器で火を消し、強力な岩の武器で風の勢いを抑止しました。（一〇）その幻術が撃退された時、戦いに酔った魔物たちは、同時に種々の幻術を用いました。バーラタよ。（一一）そして、身の毛がよだつ強力な武器の雨が降り注ぎました。それらの恐ろしい形の武器は、火、風、岩の武器でした。（一二）その幻術のもたらす雨は、その戦いで私を苦しめました。それから、深く恐ろしい闇が一面に広がりました。（一三）恐ろしい濃い闇が世界をおおった時、馬たちは顔を背け、マータリもよろめきました。（一四）彼の手から、黄金作りの突き棒が地面に落ちました。彼は恐れて、「バラタの雄牛よ、あなたはどこにいるか」と何度も私にたずねました。（一五）彼が度を失った時、私は激しい恐怖に襲われました。彼は理性を失っておののき、私にこう言いました。（一六）

「かつて甘露（アムリタ）をめぐって、神々と阿修羅たちとの間に、激しい争奪戦がありました。非の打ち所のないプリターの息子よ、私はそれを目撃しました。（一七）また、シャンバラを殺す際にも、大戦争が起こりました。私はその際にも、神々の王の御者を務めました。（一八）また、ヴリトラを殺す時にも、私は馬を操縦しました。私はまた、ヴィローチャナの息子（バリ）との凄まじい戦いをも目撃しました。（一九）私はこれらの非常に恐ろしい戦闘に参加しました。しかしパーンダヴァよ、私はいまだかつて度を失ったことはありません。（二〇）きっと祖父（梵天）は生類の帰滅を定めたのです。というのは、世界を滅亡させる以外の目的で、このような戦いが行なわれるはずはありません。（二一）」

彼がそのように言うのを聞いて、私は自ら気を落ちつけ、魔物たちの幻術（マーヤー）の力を惑わせました。（二二）そして恐れるマータリに言いました。

「見なさい、私の腕力を。私の武器とガーンディーヴァ弓の力を。（二三）今、私は武器の幻力により、彼らの非常に恐ろしい幻術とおぞましい闇を滅する。御者よ、恐れるな。しっかりしなさい。（二四）」

王よ、私はこのように言って、神々を益するために武器の幻力を放ちました。それはすべての敵を惑わせるものでした。（二五）無尽の威力を持つ阿修羅の王たちは、それら種々の幻術が制圧された時、再び多様な幻術を行使しました。（二六）世界は再び明瞭になり、また闇に呑まれ、そして見えなくなり、そして水中に沈みました。（二七）そして明るくなった

時、マータリは馬たちを巧みに操縦し、最高の戦車をかって、身の毛もよだつ戦場を走りまわりました。(二八) 恐ろしいニヴァータカヴァチャたちが私に襲いかかりましたが、私は弱点を見つけて彼らをヤマ(閻魔)の住処に送りこみました。(二九) このように、ニヴァータカヴァチャを滅ぼす戦いが行なわれているうちに、突然、すべての魔物は幻術で姿をくらまし、見えなくなりました。(三〇)　（第百六十八章）

アルジュナは語った。——

魔物たちは姿を消したままで、幻術によって戦いました。私の方は、武器の力によって、見えない彼らに対して戦いました。(一) 正しく武器(呪句)により推進された、ガーンディーヴァから放たれた矢は、彼らのいるいたるところでその頭を断ち切りました。(二) 私が戦いにおいてニヴァータカヴァチャたちを殺しているうちに、彼らは突然、幻術を収めて自分たちの都城に入り込みました。(三)

魔物たちが退却し、あたりが見えるようになった時、私はそこに幾百幾千の魔物が死んでいるのを見ました。(四) そしてそこに、彼らの武器や装身具や身体や鎧が砕かれて堆積しているのが認められました。(五) 馬たちが一歩も動く余地がありませんでした。馬たちは突然空中に飛び上がりました。(六) すると姿の見えないニヴァータカヴァチャたちは、空を一面におおい、大岩を投げながら攻撃してきました。(七) 他の恐ろしい魔物たちは、地中にいて、

馬たちの足や戦車の車輪をつかみました。バーラタよ。(八) 私が戦っている間に、馬や戦車を把捉して、私と戦車を、すっかり山でおおいました。(九) 積まれた山々により、また落下する別の山々により、我々のいる場所は洞窟のようになりました。(一〇) 私は山々におおわれ、馬たちを把捉されて、この上なく困惑しました。マータリはそれを見ました。(一一) マータリは私がひるんだのを見て言いました。

「アルジュナよ、アルジュナよ、恐れるな。金剛杵(ヴァジュラ)の武器を発射しなさい。(一二)」

私は彼の言葉を聞いて金剛杵を発射しました。神々の王が愛用する金剛杵の武器を。王よ。(一三) 私は不動の境地に達し、ガーンディーヴァを加持して、金剛杵と結合した鋭い鉄製の矢を放ちました。(一四) すると金剛杵に推進されたそれらの矢は、金剛杵そのものとなって、すべての幻術とニヴァータカヴァチャたちを貫通しました。(一五) 山のような魔物たちは、金剛杵の衝撃に殺され、お互いに抱き合って、地上に倒れました。(一六) 一方その矢は、地中で戦車の馬をつかんでいた魔物たちを貫き、ヤマの住処に送りました。(一七) その場所は、殺され放置された山のようなニヴァータカヴァチャたちにおおわれました。散在する山々におおわれるかのように。(一八) 馬たちと戦車とマータリと私には、いささかの傷も認められませんでした。それは奇蹟のようでした。(一九)

王よ、それからマータリは笑って私に言いました。

「アルジュナよ、あなたに見られるような勇猛さは神々にも見られない。(二〇)」

阿修羅の群が殺された時、その都にいる彼らの妻たちはこぞって泣きました。秋における

鶴のように。(二一)それから私はマータリとともにその都市に入りました。戦車の音によりニヴァータカヴァチャの女たちを恐れさせつつ。(二二)一万頭の孔雀のような馬と、太陽のように輝く戦車を見て、女たちは群をなして逃げまわりました。(二三)恐れた女たちが装身具によりたてる音は、山々に落ちる石がたてる音のようでした。(二四)おののく魔物の女たちは、多くの宝石で多彩に輝く、黄金でできた自分の家に入りました。(二五)

私はその驚異的な外観の、神々の都を凌駕する最高の都を見て、マータリにたずねました。(二六)

「このような都に、どうして神々は住まないのですか。これはインドラの都よりも優れているように見えますのに。(二七)」

マータリは答えました。

「プリターの息子よ、これはかつて我らの神王の都でした。しかし神々はニヴァータカヴァチャ族によりここから追い出されたのです。(二八)彼らは激しい苦行を行じ、梵天を満足させ、この願いごとをしました。すなわち、ここに住み、戦闘において神々におびやかされぬことです。(二九)それからインドラ神は梵天に要請しました。

「尊い神はこのことに関し、自身の幸福を望んで善処して下さい。(三〇)」

するとその尊い神は、このことについて定められた運命をインドラに告げました。

「あなた自身が、他の身体により、彼らを滅ぼすであろう。ヴリトラハンよ。(三一)」

そこでインドラは、彼らを殺すために、あなたに武器を与えたのです。というのは、あなたが殺した敵たちを、神々は殺すことができなかったからです。(三二)バーラタよ、それから時が熟した時、あなたは彼らを滅ぼすためにここに来て、その通りにしました。(三三)大インドラは魔物たちを滅ぼすために、諸々の偉大な武器の、最高の大威力をあなたに習得させたのです。人間のインドラよ。(三四)」

アルジュナは語った。——

それから都に入り、魔物たちを殺してから、私はマータリとともに、再び神々の住処に帰りました。(三五)　(第百六十九章)

空飛ぶ都市

アルジュナは語った。——

私は引き返して行く時、別の大きな都市を見ました。それは自由に移動し、神聖で、火や太陽のように輝いていました。(一)そこには宝石づくりの多彩な樹々や、輝かしい鳥たちや、常に喜んでいるパウローマ族やカーラケーヤ族が住んでいました。(二)それはゴープラ門と小塔をそなえ、四門をそなえ、難攻であり、一切の宝よりなり、神聖で、奇蹟的な外観をしていました。そして花と果実に満ちた神々しい宝でできた樹々におおわれていました。(三)

また、非常に魅力的な天上の鳥たちに満ち、槍や刀や棍棒の武器を持ち、弓や槌を手にし、

花輪をつけ、常に喜ぶ阿修羅たちで、いたるところ満ちあふれていました。(四) この驚異的な外観の魔物たちの都市を見て、私はマータリに「ここに見える都は何か」とたずねました。王よ。(五)

マータリは答えました。

「プローマーという魔物の女と、カーラカーという偉大な阿修羅の女がおりました。彼女たちは神々の千年間、最高の苦行を行ないました。苦行の終わりに、梵天は彼女たちに願いをかなえてやると告げました。(六) 王中の王よ、彼女たちは、息子たちが苦しむことのないようにと願いました。そして、神々や羅刹や蛇たちに殺されることがないようにと願いました。(七) そしてこの善行の輝きを持つ、空飛ぶ美しい都市、すべての宝に満ち、神々、夜叉とガンダルヴァの群、蛇、阿修羅、羅刹たちによってすら難攻の都市、(八) すべての願望と美質をそなえ、憂いを離れ病いのない都市が、梵天によってカーラケーヤ（カーラカーの子孫という意）のために作られました。バラタ族の長よ。(九) 勇士よ、このパウローマ（プローマーの子孫）と魔類のカーラケーヤたちが住む、神々しい空飛ぶ都は、神々に妨げられることなく飛行しているのです。(一〇) この大都市はヒラニヤプラ（黄金の都）と呼ばれ、偉大な阿修羅カーラケーヤとパウローマたちに守られています。(一一) 王中の王よ、彼らは常に喜び、すべての神々に殺されず、恐れなく、これ以上望むものもなくここに住んでいます。しかし、かつて梵天により、人間が彼らの死をもたらすと定められたのです。(一二)」

アルジュナは語った。——

王よ、彼らが神や阿修羅たちに殺されないことを知って、私は勇み立ってマータリに言いました。

「すぐにあの都市へ行って下さい。(一三) あの神々の王の敵どもを武器で滅ぼしますから。というのは、邪悪な神々の敵で、私に殺されるべきでないものは決していないから。(一四)」

するとマータリは、その馬にひかれた神聖な戦車で、ヒラニヤプラのそばに、私を速やかに連れて行きました。(一五) 多彩な装飾と衣服をつけた魔物たちは、私を見ると大急ぎで武装して、戦車に乗って出撃して来ました。(一六) それから勇猛果敢な魔王たちが、怒って、種々の槍や矢、刀、鉄棒で私を攻撃しました。(一七) 王よ、私は明呪の力に依存して、武器を大雨のように浴びせて、その武器の大雨を抑止しました。(一八) 私は戦車の戦術により戦場を駆けまわりながら彼らを惑わしました。魔物たちは眩惑されて、お互いに殺し合いました。(一九) 彼らが迷って互いに攻撃し合っている間に、私は輝く矢によって、幾百となく彼らの頭を切り取りました。(二〇)

こうして魔物たちが殺されている時、彼らはその都城にもどり、魔類の幻術によって、都もろとも空に飛び上がりました。(二一) そこで私は矢を大雨のように浴びせて制止しました。その進路を塞いで、魔物たちの行く手を遮ったのです。(二二) しかし魔物たちは、〔梵天に〕授けられた恩寵により、その神聖で自由に動く、神々しい輝きを放つ空飛ぶ都市を、容易に保持しました。(二三) それは地中にもぐり、再び上方にとどまり、更に速やかに斜めに進み、

更に水中にもぐりました。(二四) 王よ、私は多様な武器により、その自由に動くアマラーヴァティー（神々の住処）のような都市を攻撃しました。(二五) それから私は、神の武器により加速された矢の群によって、その都市を魔物たちもろとも攻略しました。バラタの雄牛よ。(二六) 王よ、私の放った直進する鉄の矢により破壊された阿修羅の都は、砕けて地上に落ちました。(二七) 王よ、阿修羅たちは金剛杵のように速い私の鉄製の矢に撃たれ、カーラ（時間、破壊神）に急き立てられて逃げまわりました。(二八) それからマータリは、太陽のように輝く戦車で急降下して、急いで地上に降りました。(二九)

それから、私と戦おうと望む猛々しい者たちの六万台の戦車が私を取り囲みました。バーラタよ。(三〇) 私は禿鷲の羽根のついた鋭い矢でそれらを破壊しました。彼らはその戦いにおいて、海の波のように退却しました。(三一)

超人的な戦いで彼らを滅ぼせないと考え、私は次々とすべての武器を使用しました。(三二) めざましく戦う彼らの千台の戦車は、徐々に私の神的な武器をはね返しました。(三三) 幾百、幾千という勇士たちが多彩な戦車の戦術を展開しているのが、戦場で認められました。(三四) 彼らは多彩な王冠と花飾りをつけ、多彩な鎧と旗標をつけ、多彩な装身具をつけ、私の心を喜ばせるかのようでした。(三五) しかしその戦いにおいて、武器に加速された矢の雨によっても、私は彼らを圧倒することができませんでした。むしろ彼らが私を圧倒しました。(三六) 武術を習得し、戦いに長けた多くの敵に圧倒され、私はその激戦において苦しみ、大きな恐怖に陥りました。(三七) そこで私は戦場において、神のうちの神であるルドラ（シヴァ）に敬礼し、「生類に幸あれ」と言って、偉大な武器を準備しました。あのすべての敵を滅ぼす、ルドラの武器（ラウドラ）と称される武器です。(三八) すると私は、三つの頭と九眼を持つ男を見ました。彼は三つの顔、六本の腕を持ち、輝かしく、火のように燃える髪をして、舌で舐めまわす大蛇たちを頭に巻きつけていました。敵を殺す勇士よ。(三九) その恐ろしい永遠のルドラの武器を見て、私は恐怖を忘れ、それをガーンディーヴァにつがえました。バラタの雄牛よ。(四〇) それから無尽の威光を持つ三眼者シヴァに敬礼して、魔王たちを成敗するためにそれを発射しました。バーラタよ。(四一) 王よ、それは発射されるやいなや、戦場において幾千の姿をとりました。鹿、獅子、虎、熊、水牛、蛇、牝牛、象、スリマラ鹿、シャラバ、雄牛、猪、猫、狼、亡霊、ブルンダ、禿鷲、ガルダ鳥、マカラ、ピシャーチャ鬼、夜叉、神々の敵（阿修羅）、グヒヤカ、ナイルリタ（死神ニルリティの子孫たち）、象面の大魚、梟、魚と亀の群、種々の武器や刀を持ち、棍棒と槌を持つ悪霊。その武器が発射された時、これらの、またその他の種々の姿をした多くのものたちによって全世界は満たされました。(四二―四七) 三つの頭、四本の牙、四つの顔、四本の腕を持ち、多くの姿をとり、肉と脂肪と髄を食べるものたちが、集結した魔物たちを絶えず殺していました。(四八) そして私は、太陽や火のように輝き、雷電のように輝く、岩山のように堅固な、敵を殺す他の矢によって、あっという間にすべての魔物を殺しました。バーラタよ。(四九)

彼らがガーンディーヴァ弓にかりたてられて生命を失い空から落ちたのを見て、私は再びシヴァ神に敬礼しました。(五〇) そして、神々しい飾りに満ちた彼らがルドラの武器に粉砕

されたのを知って、神の御者は最高に喜びました。(五一)神々によってすら成し遂げられないような難行がなされたのを見て、インドラの御者マータリは私に敬意を払いました。(五二)そして喜んで合掌して、次のように言いました。

「あなたは神や阿修羅たちにもできないような行為を成し遂げました。神々の王ですら、戦いにおいてこのようなことをすることができません。(五三)この空飛ぶ大都市は神や阿修羅たちによっても滅ぼされません。勇士よ、あなたは御自身の勇武と武器と苦行(の功徳)の力によりそれを粉砕しました。(五四)」

その都市が破壊され、魔物たちが殺された時、すべての女たちは嘆きながら都の外に出て来ました。(五五)彼女たちは髪をふり乱し、雌の鶚(みさご)のようにおののき苦悩し、息子や父や兄弟たちのことを悲しみつつ大地に倒れました。(五六)女たちは主人を殺されて、声をからして泣き叫びながら、手で胸をたたき、花輪や装飾品を外しました。(五七)その魔物の都は、光彩を失い、主人を殺され、悲しみに満ち、繁栄を失い、苦悩と悲惨さにうちひしがれ、もはや輝かなくなりました。(五八)その都市は、ガンダルヴァの都(蜃気楼)のように、象のいなくなった池のように、樹々が枯れた森のように、見えなくなりました。(五九)

マータリは、任務を遂行して満足している私を、速やかに戦場から神々の王の住処に連れて行きました。(六〇)私はヒラニヤプラを破壊し、偉大な阿修羅やニヴァータカヴァチャたちを殺して、インドラのもとに帰って来ました。(六一)輝きに満ちた人よ、マータリは私の業績をすべて、詳しくありのままに、神々の王に報告しました。(六二)すなわち、ヒラニヤ

プラを破壊したこと、幻術を退けたこと、戦闘において強力なニヴァータカヴァチャたちを殺したことを。(六三)それを聞くと、栄光ある千眼の神インドラは、マルト神群とともに、「でかした、でかした」と言いました。(六四)それから神々の王は幾度も私を労ってから、神々とともに、非常に優しい言葉を述べました。(六五)

「お前は戦いにおいて、神や阿修羅を超える行為をなした。プリターの息子よ、お前は私の敵どもを殺して、師に対する大きな謝礼を払った。(六六)アルジュナよ、戦いにおいて常にこのように沈着であり、惑うことなく武器を使用すべきである。(六七)神、魔物、羅刹、夜叉、阿修羅、ガンダルヴァ、鳥類、蛇たちも、戦いにおいてお前に対抗できないのだ。(六八)クンティーの息子よ、徳性あるユディシティラは、お前の腕力に征服された大地を守護するであろう。(六九)」

(第百七十章)

神聖な武器を用いる時

アルジュナは語った。——

それから、私が安心し、矢傷も癒えた時、神々の王は私に好意をもって適切な時に告げました。(一)

「バーラタよ、すべての神聖な武器がお前のものだ。地上のいかなる人もお前に勝つことはできない。(二)わが子よ、お前が戦場に立つ時、ビーシュマやドローナやクリパやシャクニ

や、その他の王たちは、お前の十六分の一にも値しない。(三)」
インドラ神は私にこの貫かれることのない神聖な鎧と、黄金の花輪を授けました。(四)そしてインドラ神は、デーヴァダッタという大音響の法螺を授け、自らこの王冠を私にかぶせました。(五)それからインドラは、これらの多くの美しい神聖な衣服と神聖な装身具を私に授けました。(六)王よ、私はこのように敬意を表されて、インドラの清浄な住処で、ガンダルヴァ（半神の一種）の子供たちとともに楽しく住んでいました。(七)やがて満足したインドラと神々は私に告げました。

「アルジュナよ、お前が帰るべき時が来た。兄弟たちがお前のことを思い出しているから。で(八)」

バラタ族の王よ、このようにして私は、賭博から生じた不和のことを思い出しながら、インドラの住処に五年間滞在しました。(九)それからガンダマーダナに着き、この山の頂で、弟たちに囲まれたあなたに出会ったのです。(一〇)

ユディシティラは言った。

「アルジュナよ、バーラタよ、お前は幸いにも武器を得た。お前は幸いにも神々の王、主なる神を満足させた。(一一)非の打ち所のない勇士よ、お前は幸いにも女神をともなったシヴァ神を直々に見て、見事な戦いにより満足させた。(一二)バラタの雄牛よ、お前は幸いにも世界守護神たちに会った。幸いにも我々はすべて栄えている。幸いにもお前はもどって来た。(一三)今や都市を花輪とするこの大地の女神はすべて勝ち取られ、ドリタラーシトラの息子たちは征服されたも同然だと私は考える。(一四)ところでバーラタよ、お前がそれで強力なニヴァータカヴァチャを殺した、お前の神聖な武器を見たいものだ。(一五)」

アルジュナは言った。

「明日の朝、私がそれで恐ろしいニヴァータカヴァチャを倒した神聖な武器をすべて見られるでしょう。(一六)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

このようにアルジュナは、帰還のいきさつを語ってから、すべての兄弟たちとともにその夜を過ごした。(一七)

（第百七十一章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

その夜が明けた時、ダルマ王ユディシティラは起床し、弟たちとともに、なすべきことを行なった。(一)それから彼は、兄弟に喜びをもたらすアルジュナをうながした。

「アルジュナよ、それでお前が魔物たちを征服した武器を見せてくれ。(二)」

威光に満ちたアルジュナは、適切に最高の清浄さを保ち、神々から授けられたそれらの神聖な武器を見せた。アルジュナは、山を轅（ながえ）とし、樹木を車軸とし、それらを連結する棒のよ

うな美しい竹のある、大地の戦車に座って輝いていた。（三―四）それから、美しく輝く鎧をまとった彼は、ガーンディーヴァ弓と、海から生じた法螺貝デーヴァダッタをとり上げた。（五）そして燦然と輝く勇士アルジュナは、次々とそれらの神聖な武器を披露し始めた。（六）

ところが彼が神聖な武器を使用しようとした時、彼の両足に踏みしめられて、大地は樹々もろとも震動した。（七）河川や海は動揺し、山々は裂け、風は吹かなくなった。（八）太陽は輝かず、火は燃えなくなった。諸ヴェーダはバラモンたちに全く閃き出なくなった。（九）ジャナメージャヤ（聞き手である王の名）よ、地中にいる諸生物は苦しんで出て来て、アルジュナを取り囲んだ。（一〇）彼らはすべて、それらの武器に焼かれながら、顔をおおい合掌して、アルジュナに敬意を表した。（一一）

それから、梵仙、シッダ（半神）、神仙、すべての動物がそこに現われた。（一二）そして最高の王仙、神々、夜叉、羅刹、ガンダルヴァ、鳥たちが現われた。（一三）それから梵天、すべての世界守護神たち、マハーデーヴァ（シヴァ）神とその眷属がやって来た。（一四）それから風神（ヴァーユ）が、パーンダヴァたちの近く、いたるところで、よい香りのする多彩な天上の花輪で彼らをおおった。（一五）ガンダルヴァたちは、神々にうながされて、様々な詩節を歌った。天女たちの群は、集団で踊った。（一六）その喧噪の時において、ナーラダは神々にうながされてやって来て、聞くに値する言葉をアルジュナに告げた。（一七）

「アルジュナよ、アルジュナよ、神聖な武器を使用してはならぬ。それらを決してふさわしくない的に用いるものではない。（一八）またふさわしい的の場合も、苦境に立った時以外には決して使用してはならぬ。というのは、それらの武器を使用すれば、大なる災いがあるから。クル族の王子よ。（一九）アルジュナよ、もし伝えられた通りにそれらを守れば、それらの強力な武器は疑いもなく幸福をもたらすであろう。（二〇）しかしもしそれらを守らなければ、それらは三界の滅亡をもたらすであろう。パーンダヴァよ、決して二度とこのように行動してはならぬ。（二一）ユディシティラよ、あなたは戦場で、アルジュナが敵を滅ぼす時にそれらを用いるのを見るであろう。（二二）」

そこに集まったすべての神々やその他の者たちは、アルジュナを制止してから再び帰って行った。（二三）すべての者たちが引きあげた時、パーンダヴァたちはクリシュナーとともに、喜んでその森に滞在した。（二四）

（第百七十二章）

(36) 大蛇（第百七十三章―第百七十八章）

クベーラの楽園を出る

ジャナメージャヤはたずねた。

「武器を習得した最高の勇士が、インドラの住処から帰った時、プリターの息子たちはその勇士アルジュナと再会して、その後どのような行動をしたか。（一）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

その最高の勇士たちは、その同じ森において、インドラに等しいアルジュナとともに滞在し、その心地よい最高の山で、富神（クベーラ、毘沙門天）の遊園において楽しんだ。（二）最高の弓取りアルジュナは、比類のない家々と、種々の樹々が茂る遊園を見ながら、常に武器〔の修練〕に努めて、度々歩きまわった。（三）王子たちはヴァイシュラヴァナ（クベーラ）王の好意によりそこに住み、もはや通常の人間の富貴を望まなかった。そして彼らは至福の時を過ごした。（四）

アルジュナと再会して、彼らはそこで四年間を一夜のように過ごした。前の六年と合わせて、パーンダヴァたちは森で十年間幸せに暮らしたことになる。（五）その時、強力な風の息子（ビーマ）は、王のそば近くに座り、内密に有益で好ましいことを述べた。アルジュナも、神々の王のように勇猛な双子も、同様にした。（六）

「あなたの約束を履行しようとして、またあなたによかれと望んで、我々はスヨーダナ（ドゥルヨーダナ）とその一味を殺すことをやめて、森について来ました。（七）我々は幸福にふさわしいのに、スヨーダナに幸福を奪われ、この十一年目を過ごしています。あの最低の知性と性行の男をあざむいて、誰も知らないところで幸福に暮らしましょう。（八）王よ、あなたの命令により、誇りを捨てて、恐れなく森をさまよっています。奴らは我々が近くに住んでいるとあざむかれて、国外に亡命しても気がつかないでしょう。（九）王よ、一年間を隠れて過ごした後、我々はあの最低の男を容易に滅ぼすことができるでしょう。あの最低な男に、果実と花をともなう復讐をして。（一〇）あの手下どもに囲まれたスヨーダナに……。ダルマ王よ、それから地上を征服しなさい。王よ、我々はこの天国のような山を歩きまわって、憂いをなくすことができましょう。（一一）しかしバーラタよ、〔このままでは〕あなたの芳香を放つ名声は、この動不動の世界において滅するでしょう。クルの雄牛たちの王国を得れば、偉業を達成でき、諸々の祭式を達成することができます。（一二）王よ、あなたがクベーラから得ているものは、いつでも得ることができます。バーラタよ、罪を犯した敵を殺し罰する決意をしなさい。（一三）王よ、金剛杵（ヴァジュラ）を持つ神（インドラ）自身でさえ、あなたと対決したら、あなたの恐ろしい威光に耐えることはできないでしょう。ダルマ王よ、クリシュナとシニの孫（サーティヤキ）は、あなたの目的達成のために働けば、神々と対決しても苦悩することはないでしょう。王よ、あのシニの勇士は、クリシュナと同じく、力にかけて比類のない男です。（一四―一五）最上の王よ、ヤーダヴァ族をともなうクリシュナと同じく、我ら両名もあなたの目的達成のため

に働けば、そして軍事行動に巧みで勇猛な双子も働けば、我ら一同は敵と対決して、あなたの利益と権力の獲得に専念して行動するでしょう。(一六)」

それから、偉大なダルマの最高の息子、法と実利を知り最高の威力をそなえた王は、ヴァイシュラヴァナ(クベーラ)の宮殿を右まわりにまわって敬意を表した。(一七)ダルマ王は、家々や川や湖水、すべての羅刹たちに別れを告げ、やって来た道を見て、再び山を眺めた。(一八)そして、「山の王よ、私は友らとともに仕事を達成し、敵どもを征服し、王国を取りもどした後で、自己を制し、苦行のためにあなたに再会するであろう」と決意した。(一九)クルの王はすべての弟たちとバラモンに囲まれて同じ道を引き返した。前と同じように山の激流においては、ガトートカチャが彼ら一同を担った。(二〇)大仙ローマシャは喜んで、旅立った彼ら一同に、父が息子たちに対するように教えを説いてから、最高に清浄な神々の住処へ行った。(二一)彼とアールシティシェーナに教えられて、人間のうちの最上者であるプリターの息子たちは、心地よい聖地や苦行林や、その他の大きな湖水を見ながら旅を続けた。(二二)(第百七十三章)

大蛇に圧倒されたビーマ

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

その最高の山には、諸々の滝があり、諸方位を守る象たちやキンナラ(半神)や鳥たちがい

た。バラタの雄牛たちは、その快適な住処を去るのがつらかった。(一)しかしクベーラの愛するカイラーサ山が雲のように見えるのを眺めて、彼らの喜びは再び増大した。(二)勇士たちは峰々、山の隘路、山の牧場、尾根道の連なり、多くの断崖を見た。また、あちこちで平地(乾燥地)と低地(湿地)を見た。(三)また、鳥獣や象たちの住む、その他の大森林を見ながら、最高の人々は弓と刀を持ち、喜びに満ちて進んで行った。(四)心地よい森、湖水、川、山窟、峡谷。人中の雄牛たちは、いつも夜になるとこれらの場所で野宿した。(五)彼らは幾度も難所で野宿して、不可思議な姿をしたカイラーサ山を越え、非常に魅力的な、ヴリシャパルヴァンの最高の隠棲所に着いた。(六)彼らはヴリシャパルヴァン王に会い、彼に歓迎されて元気になり、幸ある旅行について詳しくありのまま彼に語った。(七)勇士たちは神々や大仙たちが好んで訪れるその清浄な隠棲所で、一夜、快適に滞在し、バダリー・ヴィシャーラー(「大きな棗の木」三・一四五・一〇参照)へ再び行き、快適に滞在した。(八)それから威厳に満ちた最高の人々は、ナーラーヤナの地に行って滞在した。そして彼らは、神々やシッダ(半神)が好んで訪れる、クベーラの愛する蓮池を見て憂いを晴らした。(九)すべての人々のうちで最も勇猛なパーンドゥの息子たちは、その蓮池を見て憂いを晴らし、恐れを離れて楽しんだ。梵仙たちがナンダナ(インドラの園)を訪れて楽しむように。(一〇)それから最高の人々は、みなしてバダリーにおいて快適に一カ月過ごしてから、前に来た道を次第にもどり、キラータ族の王スバーフの領土に行った。(一一)チーナ、トゥカーラ、ダラダ、ダールヴァなど、多くの宝石に満ちたクニンダ族の国々を過ぎて、険阻なヒマーラヤの地を過ぎ、最高の人々はスバーフの都を見た。

（二二）王子たちがみなして自分の領内にやって来たことを聞いて、スバーフ王は喜んで迎えに出た。クルの雄牛たちは彼を歓迎した。（二三）彼らはスバーフ王に会い、そしてヴィショーカ、インドラセーナなど、（自分たちの）すべての御者に再会し、その他の従者たち、厨房長たちに再会した。（二四）彼らはそこで快適に一夜を過ごし、すべての戦車と御者を得たので、ガトートカチャとその従者を帰らせて、それからヤムナー流域にある高山へ行った。（二五）その山には滝があり、その峰は雪におおわれて白く、そして赤く染まっていた。勇猛な男たちは、その山でヴィシャーカユーパ（聖地の名。三・八八・一二参照）に着いて、そこに滞在した。（二六）猪や種々の鹿や鳥の住む、チトララタの森のような大森林を幸せに歩きまわり、彼らは狩猟に専念し、その森で一年間を過ごした。（二七）そこの山の洞窟で、狼腹（ビーマ）は強力な大蛇に出くわした。その蛇は飢えに苦しみ、恐ろしい姿をして、死神のようであった。彼は絶望し途方に暮れて、心を乱した。（二八）そこにおいて、法（ダルマ）を守る者たちの最上者であり、無限の威光を持つユディシティラが狼腹の寄る辺となり、大蛇に全身を呑み込まれた彼を救い出した。（二九）

クル（パーンダヴァ）たちは、十二年目を、森の中で楽しく過ごしたが、やがて栄光で燃え上がり苦行の力をそなえた彼らは、チトララタの楽園のようなその森から出た。（三〇）それから彼らは、砂漠の周辺に行き、常に専ら弓術にいそしみ、サラスヴァティー川へ行き、滞在しようと望んで、ドゥヴァイタヴァナの湖に行った。（三一）彼らがドゥヴァイタヴァナに入って滞在していることを知って、苦行と自制と正しい行動様式と三昧をそなえた、草と水と鉢を

持った林住者がやって来た。（三二）無花果（プラクシャ）、アクシャ、ローヒータカ、籐、スヌハー、棗（なつめ）、カディラ、シリーシャ、ビルヴァ、イングダス、ピール、シャミー、カリーラなどの植物がサラスヴァティー川の岸に生じていた。（三三）サラスヴァティーは夜叉やガンダルヴァや大仙たちに愛され、神々の祭祀の賜物のような川である。王子たちは楽しくその川岸を歩きまわり、幸福に過ごした。（三四）（第百七十四章）

ジャナメージャヤは言った。

「聖者（ムニ）よ、一万頭の象の力を持つ大力のビーマセーナが、どうしてその大蛇を見て、それほどひどく恐れたのか。（一）彼は蓮池で最高の夜叉と羅刹たちを殺してから、力に驕り、プラスティヤの息子である富神に挑戦したほどであるのに。（二）あなたはその敵を悩ます勇士が恐怖にかられたと言われた。私はそのわけを聞きたいのだ。私はこの上なく好奇心にかられるから。（三）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

その勇猛な戦士たちが、王仙ヴリシャパルヴァンの隠棲所を去り、驚異に満ちた森に滞在していた時のことである。（四）狼腹（ビーマ）は、弓を持ち刀を身につけて歩いているうちに、たまたま、神々やガンダルヴァの訪れる心地よい森を見た。（五）彼はヒマーラヤの美しい土

地を見た。そこは神々や聖仙やシッダが行き交い、天女の群が訪れる地であった。(六)そこではチャコーラ、チャクラヴァーカ、ジーヴァジーヴァカ、コーキラ、ブリンガラージャなどの鳥があちこちで鳴いていた。(七)常に花と果実をつけ、雪がかぶって美しい、多くの蔭を投げかけ、心と眼を喜ばせる樹々におおわれていた。(八)彼は山の川々を見た。それらの川の水は、瑠璃のような色をし、雪におおわれ、ハンサ鳥やカーランダヴァ鳥に満ちていた。(九)また、雲をおおうかのようなデーヴァダール樹の森や、ハリチャンダナ樹と混じった高いカーリーヤカ樹を見た。(一〇)大力のビーマは、平坦な砂漠で狩猟をして、毒を塗っていない矢で獣を射ながら走りまわった。(一一)

その時、彼は身の毛もよだつ巨大な蛇を見た。その蛇は山路に横たわり、その体で洞窟をおおっていた。(一二)それは山のような巨体で、月輪や日輪のような頸部のふくらみを持ち、種々の色の皮で美しい身体を持ち、うこん色をしていた。(一三)それは輝く四牙を持つ洞窟のような口をして、非常に赤い燃える眼をして、何度も舌舐めずりをしていた。(一四)それはカーラ（破壊神）、アンタカ（死神）、ヤマ（閻魔）のようで、一切の生類を恐れさせ、シューシューと音をたてて息を吐き、威嚇するかのようであった。(一五)そのひどく飢えた大蛇は激しくビーマに襲いかかり、力強くその両腕を捕えた。(一六)ビーマセーナがその蛇に触れられるやいなや、彼の意識は突然なくなった。それはその蛇の受けた恩寵によるものであった。(一七)ビーマセーナの両腕の力は一万頭の象を支えられるほどであり、比類がないものである。(一八)しかしその威光あるビーマが、その蛇に圧倒され、ゆっくりとふるえ、動けなく

なった。(一九)一万頭の象に匹敵する力を持つ、獅子のような肩をしたその勇士は、蛇に捕えられて生気を失った。蛇の受けた恩寵によって朦朧としていたのである。(二〇)勇士は助かろうとして懸命に努力したが、どうしても蛇に対抗することができなかった。(二一)

（第百七十五章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

威光あるビーマは、このように蛇に圧倒されて、その非常に驚異的な大力について考えた。(一)そして大蛇にたずねた。

「蛇よ、どうか答えてくれ。お前は誰か。最高の蛇よ、私をどうしようというのか。(二)私はパーンドゥの息子ビーマセーナだ。ダルマ王の弟である。私は一万頭の象に匹敵する力を持つのに、どうしてお前に圧倒されたのか。(三)私は幾度も獅子や虎や水牛や象に遭遇し、戦ってそれらを殺した。(四)強力な魔物やピシャーチャ鬼や羅刹たちも、私の強烈な腕力に耐えることはできない。最高の蛇よ。(五)私がいくら努力してもお前に圧倒されるのは、お前の術の力か、それとも何かの恩寵によるものか。(六)蛇よ、私の大力がお前に敗れたとは、人間の勇武などは本物でないと私は確信する。(七)」

汚れなき行為の勇士ビーマがこのように告げた時、蛇は大きな体で彼をすっかり取り巻いた。(八)蛇は強力な彼を、その太い両腕を残して、しっかりと拘束して、次のように言った。

（九）

「勇士よ、幸いなことに、今日、お前は飢えた私の餌になるように定められた。幸いなことに、非常に久しぶりで……。まことに生物にとって生命は愛しいものである。（二〇）しかし勇士よ、私が蛇になったいきさつを、今日どうしてもお前に話さなければならない。最高の者よ、聞きなさい。（二一）私は聖者たちの怒りにより、このような状態になったのだ。私は呪詛の終わることを願って、すべてをお前に（異本による）語るであろう。（二二）

ナフシャという王仙のことは、きっとお前の耳に達したであろう。彼はお前自身の先祖であり、アーユの嫡子である。（二三）その彼が私である。私はバラモンたちを軽蔑して、アガスティヤの呪詛により、このような状態になったのである。見よ、これが私の運命である。（二四）お前は殺されるべきでなく、非常に見目麗しいが、今日、私はお前を食うであろう。そのように定められているのだ。（二五）最高の人よ、象であろうと水牛であろうと、第六の時刻に私に捕えられた者は、誰も決して解放されることはないのだ。（二六）お前は畜生である単なる蛇につかまったのではない。クル族の最上者よ。これが私の得た恩寵である。（二七）というのは、私がシャクラ（インドラ）の玉座である最上の天宮から急速に堕ちた時、私は最高の聖者である尊者（アガスティヤ）に、『呪いを終わらせて下さい』と言った。（二八）その威光ある聖者は、哀れみに満ちて、私に告げた。

『王よ、幾らかの時代が過ぎた時、あなたは解放されるであろう。（二九）』

それから、私は地上に堕ちた。しかし、私は記憶を失わなかった。私は昔教えられたまま

に記憶している。（三〇）

『あなたが発する質問に答えることのできる賢者が、あなたを呪詛から解放できる』と聖仙は私に告げた。（三一）

『王よ、より強力で優れた生物でも、あなたに捕えられたら、すべて速やかに活力を失うであろう。（三二）』と、私に哀れみと愛情を抱いた人々の言葉を聞いた。そしてそのバラモンたちは姿を消した。（三三）そこで私は蛇の胎に生まれ、非常に悪い行為をして、時を待ちながら、不浄の地獄に住んでいる。輝きに満ちた者よ。（三四）」

勇士ビーマセーナはその蛇に言った。

「大蛇よ、私はあなたのことを怒らない。また自分のことも非難しない。（三五）というのは、人間は幸不幸の去来に関し、運命の気まぐれに委ねられている。それについて心をわずらわせるべきではない。（三六）何人（なんぴと）が雄々しい努力により運命を変えることができるか。運命のみが最高であると思う。人間の努力は空しい。（三七）この私を見よ。私は腕力を頼りにしていたのに、今や運命のいたずらから、理由もなくこのような状態になった。（三八）しかし今、自分が滅びることは嘆かない。王位から落ちて森に追放された兄弟たちを嘆くほどには。（三九）そしてこのヒマーラヤは非常な難所で、夜叉や羅刹に満ちている。彼らはこのような状態の私を見たら、苦しんで倒れるだろう。（四〇）あるいは、私が死んだと聞いたら、彼らは努力しなくなるであろう。彼らは法（ダルマ）に専念したい（約束を守りたい）のだが、王国を渇望する私に制止されているのだから。（四一）あるいは、一切の武器を知り、神やガンダルヴァや羅刹た

ちにも征服されない、英邁なアルジュナは嘆かないだろうか。(三二) その非常に強力な勇士は、その威力により一人で（異本による）神々の王をもその地位から落とすことができる。(三三) いわんや、すべての人々に憎まれている、欺瞞と貪欲にふける、いかさま賭博師であるドリタラーシトラの息子など……。(三四) 私はまた息子を切望する哀れな母親のことを嘆く。彼女は常に、我々が他に優れて偉大であることを望んでいる。(三五) 蛇よ、私が死んで、身寄りのない彼女が私について抱くすべての願望が空しくなったら、一体どうなるのか。(三六) そして、目上に従順な双子のナクラとサハデーヴァは、私の腕力に支えられて、常に男らしさを誇っている。(三七) 彼ら二人は、私の死を悲しんで、気力をなくし、力と勇武を失うであろう。私は以上のように考える。(三八)」

狼腹（ビーマ）は蛇の体に巻きつかれて動くことができず、このようにひどく嘆いた。(三九)

一方ユディシティラは、不吉で恐ろしい前兆を感じ、不安な気持になった。(四〇) ジャッカルは隠棲所の南（右）側にいて、空が焼けるのに恐れ、恐ろしく不吉に吠えていた。(四一) 一翼、一眼、一足の、恐ろしい姿の鶉が、太陽に向かって忌わしい声で鳴き、血を吐いているのが認められた。(四二) 荒々しく激しい風が、砂利を巻き上げて吹いた。すべての鳥獣の声が左まわりに（聞こえた）。(四三) 黒い鴉が後方から「行け、行け」と叫んだ。彼の右腕が何度も痙攣した。(四四) そして彼の心臓はふるえ、左足が痙攣した。そして彼の左眼に、好ましくない変化（ふるえ）が起こった。(四五) 叡知あるダルマ王は、大きな危険を察知して、ドラウパディーに、「ビーマはどこにいる」とたずねた。(四六) 彼女は「狼腹はずっと前に出かけた」と言った。そこで強力な王は、ダウミヤをともなって出かけた。(四七) その際、アルジュナには「ドラウパディーを守れ」と告げ、ナクラとサハデーヴァにはバラモンたちを守るように命じた。(四八) 王は隠棲所から出て、ビーマの足跡をたどり、ビーマの通った標のついた地面を見た。(四九) そしてあの風のように速い勇士が鹿を求めて走った時、道で彼の腿がたてる風で樹々が折られ倒されているのを見た。(五〇) 彼はこのような標をたどって進んで行くうちに、山の洞窟で、弟が大蛇につかまって動けなくなっているのを見つけた。(五一)

（第百七十六章）

大蛇になっていたナフシャ

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ユディシティラは愛しい弟が蛇の体に巻かれているのを見て、その勇士に次のように言った。(一)

「クンティーの息子よ、お前はどうしてこのような災いに陥ったのか。また、この山のように大きい大蛇は何者か。(二)」

弟は兄のダルマ王を見て、つかまったいきさつなど一部始終を語った。(三)

ユディシティラは言った。

「蛇よ、あなたは神であるか、魔物であるか、蛇であるか、真実を告げなさい。ユディシテ

弟があなたにたずねている。(四) 蛇よ、あなたは何を得たら、何を知ったら満足するのか。どのような食物をさし上げようか。どうしたらあなたは彼を放してくれるのか。(五)」

蛇は言った。

「非の打ち所のない王よ、私はお前の先祖のナフシャという有名な王である。月神から五代目で、アーユの息子である。(六) 私は祭祀、苦行、ヴェーダ学習、自制、勇武により、三界の揺ぎなき王権を得た。(七) 王権を得ると、私は傲慢になった。千人のバラモンが私の輿(こし)を担った。(八) 私は王権に酔い痴れ、バラモンたちを侮辱したので、アガスティヤが私をこのような状態にしたのだ。王よ。(九) しかしパーンダヴァよ、かの偉大なアガスティヤの好意により、今日にいたるまで私は知性を失わないのである。(一〇) お前の弟は、第六の時刻に、私の食物として訪れた。私は彼を解放しない。また、他のものを望まない。(一一) しかし、もしお前が私の発する質問に答えるなら、お前の弟の狼腹を解放してやろう。(一二)」

ユディシティラは言った。

「蛇よ、望むままに問いなさい。私はあなたに答えるでしょう。(一三) 蛇王よ、あなたはこの世でバラモンによって知られるべきことをすべて知っています。私はあなたの言葉を聞いたらお答えするでしょう。(一四)」

蛇はたずねた。

「王よ、いかなる者がバラモンであろうか。また、何が知られるべきことか。ユディシティラよ、語れ。というのは、お前が非常に賢いということを、私はお前の言葉から推察するか

ら。(一五)」

ユディシティラは答えた。

「蛇王よ、真実、布施、忍耐、徳性、柔和、自制、憐憫がその人に認められる場合、彼がバラモンであると伝えられる。(一六) 蛇よ、知られるべきものは最高ブラフマンである。それは苦と楽を離れ、そこに達すれば人々は憂えることはない。あなたの御意見はどのようであるか。(一七)」

蛇は言った。

「真実とブラフマンは四姓にわたる根拠である。シュードラ(従僕の階層)にも真実、布施、怒らぬこと、柔和さ、無傷害、憐憫が存する。ユディシティラよ。(一八) 王よ、知られるべきことは苦楽を離れていると言ったが、苦楽を離れた境地は他に存在しないと私は思う。(一九)」

ユディシティラは言った。

「シュードラに見られる特徴はバラモンには認められない。しかしシュードラが必ずしも真のシュードラであるとは限らず、バラモンが必ずしも真のバラモンであるとは限らない。(二〇) 蛇よ、バラモンにふさわしい行動が認められる場合、彼はバラモンであるとされる。それがない場合は、彼をシュードラと呼ぶべきである。(二一) またあなたは、苦楽を離れた境地は存在しないから、知られるべきことが存在しないと説いた。(二二) 蛇よ、苦楽を離れた境地が存在しないというが、寒暑の間に暑くも寒くもない状態があるであろう。(二三) 同様に、苦楽を離れた境地がどこかにあるのである。蛇よ、これが私の意見である。あなたは

どう思われるか。（二四）」
蛇は言った。
「王よ、もしあなたが行動によってバラモンを判定するなら、行動が知られぬ限り、生まれ（階級）は無意味であるのか。生命力に満ちた者よ。（二五）」
ユディシティラは言った。
「叡知に満ちた大蛇よ、この人間界において、すべての種姓（ヴァルナ）は混交しているから、生まれというものは調べがたい、と私は考える。（二六）すべての男が、あらゆる女に子供を生ませているから。言葉、性交、生、死は人間には共通である。（二七）
『〔我々がいかなる生まれであろうと、〕我々は祭祀を行なう』というのが聖仙の基準である。それ故、真理を見る人々は、よい性行が最も大切なものであると知っている。（二八）臍の緒を切る前に、男子に対して誕生式を行なうよう規定されている。そこにおいて、サーヴィトリー讃歌が彼の母であり、師匠が彼の父であると言われる。（二九）ヴェーダにおいて誕生しないうちは、彼は行動の点でシュードラに等しい。この点について意見の相違があるが、マヌ・スヴァーヤンブヴァは言った。（三〇）『四姓は各自の義務を果たすべきである。もしふさわしい行動をしなければ、大きな種姓の混乱が生ずると考えられる。』竜王よ。（三一）偉大な蛇よ、洗練された行動をする者が真のバラモンであると前に述べたのである。最高の蛇よ。（三二）」
蛇は言った。

「ユディシティラよ、知られるべきことを知ったお前の言葉を聞いた。私はどうしてお前の弟の狼腹（ビーマ）を食べることができるか。（三三）」（第百七十七章）
ユディシティラは言った。
「この世であなたはこの上なくヴェーダとその補助学に通達している。教えて下さい。どのような行為をすれば、最高の帰趣が実現するでしょうか。（一）」
蛇は答えた。
「バーラタよ、ふさわしい人物に布施し、優しい言葉と真実を述べ、無傷害に専念して天界へ行くべきである、というのが私の意見だ。（二）」
ユディシティラはたずねた。
「布施と真実のうち、いずれが重要であるか。無傷害と優しい言葉との軽重を言って下さい。（三）」
蛇は答えた。
「布施に励むこと、真実、無傷害（不殺生）、優しい言葉、これらは結果の重要度に応じて、それぞれの軽重が決まる。（四）というのは、ある場合には布施よりも真実が勝れている。王中の王よ、また真実語よりも、ある場合には布施が勝れている。（五）同様に偉大な戦士である王よ、無傷害が優しい言葉よりも勝れていることもあれば、優しい言葉が勝れていることも

ある。（六）王よ、このように直接的に結果によるのである。他に聞きたいことがあったら言いなさい。私は答えるであろう。（七）」

ユディシティラは言った。

「蛇よ、体を失った者が、どうして天界へ行き、また諸行為の必然的な果報を得ることが認められるのか。それらのことについて私に説明して下さい。（八）」

蛇は言った。

「王よ、自己の行為により三つの道（帰趣）がある。すなわち、人道と天道と畜生道との三種である。（九）人は孜々として、布施などや、無傷害（不殺生）などの行為により、人界を去って天界に達する。（一〇）そして王中の王よ、その反対の行為により人は畜生となる。わが子よ、この点について詳しく説く。（一一）人は欲望と怒りに支配され、加害（殺生）を行ない貪って、人間の状態から堕ち、畜生に生まれる。（一二）畜生における個々の存在は人間になると定められている。同様に、牛や馬が神になることも認められる。（一三）このように生き物は行為の果報をうけ、これらすべての道を往来するが、（賢者は）常住なる偉大な存在において真我[アートマン]を確立する。王よ。（一四）身体を得た真我は力をそなえ、幾度も生まれ変わり、果報を求めそれを享受する。身体を離れても、生類の特徴を発現する。わが子よ。（一五）」

ユディシティラは言った。

「蛇よ、それは音声・接触・色（形）・味・香に、どうして妨げられることなく宿るのか、正しく説いて下さい。（一六）大知者よ、あなたはどうして諸対象を同時に（無区別に）認識しないの

か。以上すべての問いに答えて下さい。最高の蛇よ。（一七）」

蛇は言った。

「生命力に満ちた人よ、真我[アートマン]というものが身体に宿った時、それは諸器官[カラナ]に依存して、適切に諸々の対象を享受する。（一八）バラタの雄牛よ、私の言うことを聞きなさい。この場合、享受の拠り所になる諸器官とは、感覚器官[ジュニャーナ]と根源的思惟機能[ブッディ]と思考器官[マナス]である。バラタの雄牛よ。（一九）わが子よ、身体から出た個我は、感官の対象を拠り所とする思考器官により、これらの対象を順次に経巡る。（二〇）そして人中の虎よ、生類の思考器官はその各々の対象に限定的に向けられるから、対象を同時に（無区別に）認識することはあり得ない。（二一）人中の虎よ、眉間に宿るその真我は、種々のものに対して、高低の思惟を起こす。（二二）賢者らは、思惟の後に感受作用があると認める。王中の虎よ、以上が真我発現の次第である。（二三）」

ユディシティラは言った。

「思考器官と根源的思惟機能との特性を私に示して下さい。それが真我について知る人々がなすべき最高の仕事であると定められています。（二四）」

蛇は言った。

「わが子よ、誕生により、根源的思惟機能が真我に応じて形成される。この意識はそれ（真我）に依存するが、それが（行為を）求める時の条件となる。（二五）根源的思惟機能には（純質などの）要素[グナ]の条件はない。思考器官が要素を有するのであろう。根源的思惟（知性）は結果において生ずる。一方、思考は生じた時に存するものである。（二六）わが子よ、以上、

私は思考器官と根源的思惟機能の相違を説いた。あなたもまたこの点については目覚めている。あなたはどのように考えるか。（二七）」
ユディシティラは言った。
「ああ、知者たちの最上者よ、あなたのこの知性はすばらしい。あなたは知るべきことを知っている。どうして私に質問するのか。（二八）一切知者であり、このように驚異的な行為をするあなたが、天界に住んでいた時、どうして迷妄があなたに入りこんだのか。それが私の大きな疑問です。（二九）」
蛇は言った。
「人が非常な知者で勇者であっても、富貴は人を迷わせる。幸福にある人はすべて思慮を失うというのが私の考えである。（三〇）その時、私は権力に迷って慢心し、天界から堕ちたのである。しかし私は目覚め、あなたを目覚めさせる。（三一）勇猛な大王よ、あなたは私のためになすべきことをした。善人であるあなたと話して、私の非常に辛い呪詛は尽きた。（三二）私は以前、神聖な天車に乗って天空を巡っていた時、自惚れに酔い痴れ、他の誰のことも考えなかった。（三三）梵仙、神々、ガンダルヴァ、夜叉、羅刹、キンナラ、その他、三界に住むすべての者たちは、私に税を払った。（三四）王よ、いかなる生物でも、私がそれを見るや、すぐにそれの威光を奪った。それが私の視線の力であった。（三五）千人の梵仙が私の輿（こし）をかついだ。王よ、この悪業が私を富貴から追い落としたのだ。（三六）私はかついでいる聖者アガスティヤに足で触れてしまった。アガスティヤは怒って私に告げた（異本による）。『蛇よ、滅びるがよい』と。（三七）装身具はとれ、私はその最上の天車から落ちた。まっさかさまに落ちている時、私は自分が大蛇になったのに気づいた。（三八）呪詛の終わりがあるようにと望んで、私はそのバラモンに要請した。
『尊者よ、無知によりかかる行動をした私をお許し下さい。（三九）』
すると彼は哀れんで、落下する私に告げた。
『ダルマ王ユディシティラが、あなたを呪詛から解放するであろう。（四〇）大王よ、高慢と恐ろしい力の果報が尽きた時、あなたは清らかな果報に達するであろう。（四一）』
その苦行の力を見て、私は驚嘆した。そこであなたに、ブラフマンとバラモンの条件についてたずねたのである。（四二）
真実、自制、苦行、ヨーガ、無傷害、常に布施すること、以上がバラモンの資格を成立させる。生まれ（階級）や家柄ではない。（四三）今、あなたの弟である勇士ビーマを、無傷で解放する。御機嫌よう。大王よ、私は再び天界へ行く。（四四）」
ヴァイシャンパーヤナは語った。――
ナフシャ王はそう言ってから、大蛇の体を捨て、神的な体をとって天界へ行った。（四五）法（ダルマ）を性とする、栄光あるユディシティラも、弟のビーマと再会し、ダウミヤとともに、再び隠棲所に帰った。（四六）それからダルマ王ユディシティラは、集まったすべてのバラモン

に、一部始終をありのままに語った。(四七) それを聞いて、すべてのバラモンと三人の弟たちと誉れ高いドラウパディーはすっかり驚いた。(四八) すべての最高のバラモンたちは、パーンダヴァたちの幸せを願い、ビーマの無謀さを非難して、「そのようなことをしてはならぬ」と彼に言った。(四九) パーンダヴァたちは、強力なビーマが危険から解放されたのを見て大喜びして幸福に暮らした。(五〇)

(第百七十八章)

本書は「ちくま学芸文庫」のために新たに訳出されたものである。

ちくま学芸文庫

原典訳マハーバーラタ3

二〇〇二年五月八日　第一刷発行

著　者　上村勝彦（かみむら・かつひこ）

発行者　菊池明郎

発行所　株式会社　筑摩書房

東京都台東区蔵前二―五―三　〒一一一―八七五五

振替〇〇一六〇―八―四一二三

装幀者　安野光雅

印刷所　三松堂印刷株式会社

製本所　株式会社積信堂

ちくま学芸文庫の定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本及びお問い合わせは左記へお願いいたします。

筑摩書房サービスセンター

埼玉県さいたま市櫛引町二―六〇四　〒三三一―八五〇七

電話番号　〇四八―六五一―〇〇五三

ISBN4-480-08603-X C0198